
ACE + リリカルなのはpart 2 ~ 4 人の騎士と2つの翼~

黒仮面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ACE+リリカルなのはpart2 〜4人の騎士と2つの翼〜

【Nコード】

N1199I

【作者名】

黒仮面

【あらすじ】

ACE(AnotherCentury'sEpisode)シリーズとリリカルなのはのクロス小説第二章。新たにあの2人も加わり、闇の書を巡る戦いが始まる… 執筆者は初心者+独自設定ありなので、その手の作品に抵抗のある方は閲覧注意。

第1話（前書き）

というわけでA's編の開始となります。
前作第1話と同じでプロローグ的な話なので短めです。

第1話

5月28日

海鳴市のとある家にて

（ええと…何がどうなつとるんやコレは…!?）
その家のただ1人の住民である少女・八神はやて
彼女は幼い頃に両親を亡くし、足が不自由な為、車椅子で生活して
いる。

で、結論から先に言うと、彼女は今とても混乱していた。

庭先で大きな物音がしたので、気になって見に行ってみたら
長いコートに身を包んだ2人組の男女がうつ伏せに倒れていたのだ。

当然はやては目の前の2人の事など見た事もない
ましてや、もう5月の下旬にもなって
こんな厚着をしている人間など、どう考えたって目立つはずだ。
そんな人間が早朝に、自分の家の庭先に倒れているのだから

混乱するのも無理はない、寧ろ自然な反応と言えるだろう。

（ひょっとして泥棒か…？いや、でもウチには盗むような物あらへんし…）

と、とりあえず警察…いや、でも悪い人とは限らへんから…

先に救急車か…？ええと…）

目の前の状況に混乱しつつも、はやてはあれこれと考えていた。
すると

「ううん…」

「！…」

2人の男女は目を覚まし、立ち上がった。

「……………」

2人は周りをキョロキョロ見たり、コソコソと小声で話したりしていた。

驚きながらも、はやてはあらためて目の前の2人をまじまじと観察する。

（うつ伏せじゃわからへんかったけど…2人共どう見ても日本人やない…）

ううつ…女の人はちよつと怖そうな顔つきやな…

あ、でも男の人はちよつとかつこええかも…

でも…一体何者なんや…？デート中のカップルとかとは違うやろうし…）

「…ちよつといいか？」

「！…はいっ！？」

突然話かけられて、はやては少し飛び上がって驚く。

「ここは何という国の何という場所だ？」

物凄く真面目な表情で男が尋ねてきた。

はやてはその剣幕にちよつと引きながらも答える。

「え、えつと…ここは日本の海鳴市って所なんやけど…」

「日本？東アジアの島国か？何故そのような場所に…」

男は顎に手を置きながら俯いて黙り込んでしまった。

すると今度は、女性の方がはやてに尋ねてきた。

「あなた、私たちと同じような状況の人間や

似たようなニュースとか…そういうのは見たり聞いたりした事はある？」

「ええと…私、そういうのは見た事も聞いた事もあらへん…」

「そう…手がかりにはならないか…」

そう言つて女性の方も同じように黙り込んだ。

そんな2人を見て、はやては言った。

「あの…いつまでもここにいてもしゃあないし…

良かったら、家の中で詳しく話さへんか？」

「えつ…？」

「いいの？」

それを聞いて2人は顔を上げて、意外そうな声をあげる。

はやては少し笑みを浮かべながら続ける。

「正直私も驚いてるけど…それは、そつちも同じなんやろ？」

2人共悪い人には見えへんし…話を聞くだけなら簡単やから。」

はやての言葉を聞いて、戸惑いながらも2人はそれを了承した。

（何ともまあ…随分とポジティブな娘だな…）

ちなみに男の方は内心でそう思っていた。

庭先から部屋の中に入ろうとした段階で、はやては2人に尋ねた。

「そういえば…2人共名前は何て言うんや？」

聞かれて、2人はそれぞれ自分の名前を名乗る。

「俺はタツク…タツク・ケプフォードだ。」

「私はマリナ…マリナ・カーソンよ。」

それが、タツクとマリナの行動を大きく左右する事になる少女
八神はやてとの出会いであった…

第1話（後書き）

ということでタックとマリナがりりカルなのはの世界に登場となります。

この2人の登場を待ちわびていた方々、大変長らくお待たせしました。

サブタイトルでバレバレだと思いますが

2人ははやてサイドで守護騎士達と絡む事になります。

例によって例のごとく、少しの間2人の話が続く事になるのでベルクト達の出番はその間は無いと思って下さい…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第2話（前書き）

異世界にやってきたタツクとマリナ
果たして2人は…？

偶然にもまとまった時間ができたので
たまった分を一気に投稿したいと思います。

第2話

海鳴市、八神はやての家。

タツクとマリナの2人は、ソファに座り

車椅子に座る少女、八神はやてと向かい合っていた。

「自己紹介がまだやったね、私、八神はやてっていうんよ。

2人は…タツクさんとマリナさんで良かったんやよな？」

はやての問いに、2人はやや戸惑いながらも頷いて答える。

それを聞いてはやては、腕を組み、考え込むような仕草をとった。

「えーと…何から話したらええんやろか…」

そんな彼女を見て、マリナが尋ねた。

「じゃあ初めに聞かせて、UCEという名の組織を知ってる？」

はやてはキョトンとした表情になり、首を傾げる

「ゆーしーいー…？何の組織なんやそれは？」

それを聞いてタツクが信じられないという風な顔をする。

「UCEを知らないだって…！？」

そりゃあそつだ。

UCE、地球圏統一政府の事を知らない人間など

世界中どこを探してもいないのが当たり前の前哨である。

目の前の少女の年齢を考えても、やはり不自然だ。

「ええ！？いや…その…」

「タツク、落ち着いて。」

タツクの反応を見て、少し驚くはやて

マリナはタツクを宥め、そして更にはやてに言った。

「申し訳ないんだけど…この家にある辞典とか

新聞記事とかを、出来る限り持ってきてくれないかしら。」

「？…ええけど…」

何故そんな物を見たがるのかと、はやては思ったが
その表情がやはり、あまりにも真剣だったので
言われたとおりの物を持つてくる事にした。

2人ははやてが持ってきた資料1つ1つを真剣に眺めていく。
はやてはその様子を不思議に思いながらも、黙って見ていた。

そして、全てに目を通し終えた後、2人は揃って大きなため息を吐く。

「あ、あの…2人とも…大丈夫か？」

戸惑いながらはやては尋ねる。

マリナは右手で額を押さえながら、俯いて答えた。

「あんまり…というかかなり大丈夫じゃないわ…」

「え、え？あの…その…」

マリナの反応を見て、はやては益々慌ててしまう。

そして、はやてを見て、タツクは真剣な眼差しを向けた。

「はやて…だったよな…？これから俺の言う事を真剣に聞いてほしい。」

「う、うん…」

タツクの目を見て落ち着きを取り戻し、はやては頷く。

「俺達はこことは違う、異世界から来たのかもしれない。」

物凄く真面目な表情でそう言うタツク。

はやてから貰った資料を見る限りでは

この世界ではここ数年、世界規模の戦争など起こっておらず

UCEに関しての記述など一切存在しない。

まして、人類は宇宙には行くだけで精一杯のレベルみたいだし
人型機動兵器など、アニメやゲームの世界の話というレベルらしい
のだ。

それらの事から考えれば、にわかには信じがたいのだが

ここは全くの異世界、という結論しか出てこない。

タツクはそう思っていたのだ。

「…はあ…そ、そうなんか、それは大変やな」

反応の薄いはやてを見て、タツクはやっぱりかという風に答える。

「やはり無理があるよな…そんな突拍子も無い事を…」

「ええ？ いや、私は別に信じないって思っとるわけやないんやけど
…」

慌てて両手を左右に振りながら、はやては否定する。

それを聞いて2人は本当に意外そうな顔になる。

「あなた…信じるの？」

マリナの言葉を聞いて、はやてをちよつとムツとした表情になる。

「言い出したのはそっちゃないか、それに2人の現れ方とか
何よりそない真剣な話し方とか見てたら、嘘とは思えへんよ。」

「は、はあ…」

はやての言葉を聞いてマリナは逆に戸惑ってしまう。

（見た目と違って…なかなか強い娘みたいね。）

マリナはそう思っていた。

しばらくの沈黙を挟んだ後、はやてが口を開いた。

「ところで2人とも、この後はどうするんや？」

異世界の人いうんなら…行くアテも無いやろ？」

「…確かに…」

「一番の問題ね…」

そう言いながら2人は頂垂れる。

何せ全くの異世界、自分達と繋がりのある人物は皆無だろうし
こつちの世界の常識を知らない以上下手に動くとマズイ

下手したら警察の世話にすらなりかねないかもしれないのだ。

そんな2人を見て、はやては笑みを浮かべながら言った。

「どうせ行く所ないんやろ？そんなら家にいればええよ。」

はやての言葉を聞いて、2人は顔を上げて驚く。

「大丈夫なのか？こんなどこの誰ともわからない人間を…」

「だって2人共異世界人なんやろ？」

下手したら警察に送り込まれてまうで？」

「でも…あなたの家族に迷惑をかける事になるし…」

「…私、1人やから心配ないよ。」

「あ、ごめんなさい…」

少し俯き加減になるはやてを見て、マリナは謝罪する。

はやては顔を上げて更に言った。

「せやから、私としては寧ろ1人や無くなって嬉しいくらいなんよ。」

笑顔でそう言うはやてを見て、2人は考え込む。

しばらくした後、マリナと少し話して
そしてタックが口を開いた。

「…わかった、しばらくの間よろしく頼むよ。」

「わかったわ、2人共よろしくなあ」

はやては笑顔を向ける。それにつられて2人も微笑みを浮かべた。

「あ、そやそや。」

そう言いながらはやてはポケットから何かを取り出し

2人の方にそれを見せながら尋ねた。

「これに見覚えあるか？2人が倒れてた近くに
落ちてたもんなんやけど。」

はやてが持ったのは2つの首飾りだ。

片方は白色、もう片方には薄い赤色の翼のオブジェがついている。

2人はそれから、不思議な感覚を感じ取っていた。

（何だ…この不思議な感じは？）

（よくわからないけど…私達にとって大切な物な気がする。）

そう思い、とりあえずはやてからそれを受け取る事にした。

その日の夜、タックとマリナはベランダで話し合っていた。

「タツク…これからどうなるのかしら？」
マリナは不安げにタツクに尋ねていた。

そもそも自分達は軍の任務で動いていたのだ。
バルドナ・ドライブ周辺で多発している失踪事件。

日に日に被害者が増えていくその事件の調査に
今度は自分達が参加する事になったのだ。
そしてタツクとマリナは船で海上を移動中に
突然ここに飛ばされてしまったのだ。

一応寝床は確保できたが、何せここは異世界なのだ。
多少なりとも不安になるのは仕方ない。

だが、タツクは不安を感じさせない口調で答える。

「どうなるかは予想出来ないけど…これはある意味進展じゃないか？」
「？」

「どういう事…？」

「要するに俺達も、原因不明の失踪者になったわけだ。
ひょっとしたら他の人達もここにいないじゃないか？」

「そうかもしれないけど…」

「まあ、後は成り行きに任せるしかないだろう…
闇雲に動き回るよりは確実だと思うが？」

少し呆れを見せながらマリナが答える。

「随分とポジティブな考えね、うらやましいわ。」

「らしくないじゃないかマリナ？俺は寧ろ

状況的には良かったと思ってるくらいだぞ。」

そう言いながら、マリナに近づき

彼女の肩に手を置いて、微笑みながら言った。

「…1人じゃなくて、お前が側にいてくれてさ…」

それを聞いて、マリナは一瞬顔を赤らめるが

やがて微笑みを浮かべながら言った。

「フフ…そうね、私もあなたが側に居てくれて心強いわ…」

ありがとうタツク…少し元気出たわ…」

「ああ…必ず、2人で無事に帰ろうな…」

こうしてしばらくの間、何気ない日常が続いていた。

はやてのかかりつけの医師である石田先生や

その他はやてと関わりのある人間には

タツクとマリナは八神家の遠い親戚で

自分の事を心配して、わざわざ来てくれたと説明してある。

タツクとマリナは主に、彼女の身の回りの世話をしたり

その傍らで、元の世界に帰る足取りを探していたりした。

日々軍人として生活してきた2人にとっては

はやてとの生活は新鮮な体験であった。

このような温かい日常は今まであまり経験しなかったので

最初は少し戸惑いもあったが、悪い気はしなかった。

- 6月3日

夜も大分遅くなった時間帯に、タツクとマリナはリビングにいた。ちなみにはやては、大分前に部屋に行っている。

「しかし、本当にこんな物でいいのか？」

「こういうのは気持ちが大切なのよタツク。」

リボンで巻かれた小さな箱を手に取りながら言うタツクにマリナが少し笑いながら答える。

明日ははやての誕生日、せっかく世話になっているので何かプレゼントでもあげようと思い買ってきたのが、目の前の箱に入ったブレスレットである。

そんな会話をしている時であつた。

・・・ガタツ・・・ガタタツ・・・

「何だ...!!」

「今の...はやての部屋の方からよ!」

妙な物音がして、2人は慌ててはやての部屋に向かった。

扉の前からは、不気味な紫色の光が漏れている。
それにさつきから、妙に胸騒ぎもしている。

だが、そんな事はおかまいなしに2人は扉を開けた。

「はやて！」

タツクがはやての名前を叫ぶ。

そして、部屋に入った2人がそこで見たのは…

「闇の書の起動を、確認しました…」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます…」

「夜天の主の下に集いし雲…」

「ヴォルケンリッター…何なりと命令を…」

はやての前に跪く、黒づくめの4人の男女であった。

（な…何なんだよ一体…！？）

目の前の状況がさっぱり理解できず、

タツクとマリナは呆然とする。

とその時

「お前達、一体何者だ？」

黒づくめ1人である、ピンクの髪の女性が

タツク達に気づいて、こちらを向いて言った。

「…寧ろ、それはこっちが聞きたいくらいなんだけど…」

タツクの後ろで様子を伺っていたマリナが

女性の前に立ちながら、固い表情で言った。

だが女性は怯む事無く、どこから取り出したのか
巨大な剣の切っ先をマリナに向ける。

「何者だと聞いているんだ、リンカーコアとデバイスを
持っているところを見ると魔導師のようだが…闇の書の力が目的か
？」

（魔導師…リンカーコア…デバイス？）

聞き覚えの無い単語を聞いて戸惑うマリナ。

すると、今度はタツクがマリナを押しつけて

コートの裏に隠していた拳銃を女性に向けながら強い口調で言った。

「いきなりそんな物騒な事をしてくる相手に…」

答えるような人間がいると思ってるのか？」

「ほう…いい度胸だな。」

女性は剣の切っ先をタツクに向ける。

「ねえねえ、ちょっとちょっと…」

別の声が聞こえた。タツクとマリナが見ると

はやての前にいる赤髪の少女が発したらしかった。

「黙っている、こっちの問題が先だ。」

それに主の前で無礼は許されん。」

ピンクの髪の女性が振り向かずには答える。

「いや、でもさあ…コイツ、気絶してるみたいなんだけど…」

「何ッ？」

少女の言葉に女性が振り向く。

タツクとマリナも慌ててはやての方を見た。

「きゅ〜〜〜〜……………」

そこには目を回して、倒れこんでいるはやてがいた。

第2話（後書き）

ということで新生活開始＋守護騎士達とご対面です。

書いてて常々思う…

方言の文章化は異常に難しいって…

はやてのセリフが不自然になってないかとても心配です。

後はやての一人称、ウチじゃなくて私だったんだよね
予告書いてる時に完全に見落としてた…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第3話（前書き）

突如現れた守護騎士達。
そして始まる新生活。

第3話

海鳴大学病院

その後、気絶したはやてはここに運び込まれていた。

「はやてちゃん、良かったわ何とも無くて。」

「えっと…すんません。」

はやての無事を確認して、かかりつけの医師である石田は安心した様にはやてに言った。

だが直後に怪訝な表情になり、後ろを指差しながら言った。
「で、誰なのあの人は？」

その指先にはヴォルケンリッターの4人組。

「どういう人達なの？もう6月になるけど、まだ寒いのはやてちゃんに上着もかけずに運び込んできて

変な格好してるし、言ってる事はわけわかんないし…」

「ああゝえっと…その…何と言いましようか…」

石田の言葉を聞いて、心身共に焦りを見せまくるはやて。
だが助け舟は意外な所から出された。

「すみません石田先生、そいつらも親戚なんですよ。」

そう言いながら、タックとマリナが病室に入ってきた。

実は裏でマリナと共にこの状況をどう切り抜けるか考えていたのだ。
「親戚？」

石田は疑いの眼差しを向ける。

だが、タツクは気にせず続けた。

「ええ、俺とマリナと同じではやての事が心配でわざわざ外国から…それで、誕生日も近いって事だったから何かサプライズを仕掛けようって話になりましたね…」

「それで、仮装までして来てくれたんですね…」

何分手が込みすぎて、12時丁度に押しかけたりしたものだからはやてがあまりにビックリしすぎて…とまあそんな感じなんです。途中でマリナも参加して、嘘の言い訳をする。

「そ、そうなの…？」

石田は表情を引きつらせながら尋ねる。

それを見て、タツクとマリナは4人に対して視線で訴えた。それを察したのか

「ええ、そうなんですよ…」

「はい、その通りです。」

金髪の女性と、先程のピンク髪の女性がそう答えるのだった。

特に体に異常も無かったので、はやては即日退院。

そして家に戻った後、闇の書についての説明を受けていた。

ピンク髪の女性が、剣の騎士・シグナム

赤髪の少女が、鉄槌の騎士・ヴィータ

金髪の女性が、湖の騎士・シヤマル
犬耳で屈強な男性が、盾の守護獣・ザフィーラ
と、それぞれ己の名を名乗る。

そしてその後はやては、本棚から何かを取り出しこう言った。

「わかった事が一つある。闇の書の主として

守護騎士皆の衣食住、きっちり面倒見なアカンということや。

幸い住む所はあるし、料理は得意や。

皆のお洋服買ってくるから、サイズ測らせてな？」

メジャーを片手に笑顔でそう言うはやてを見て

守護騎士4人は…いや、タツクとマリナも同様にキョトンとしていた。

（俺達の時もそうだったけど…本当に動じないな、はやては…）

（いい意味でも悪い意味でも…純粋な娘ね…）

2人はそんな事を心内で呟くのであった。

それから、騎士達も加わり7人（正確には6人と一匹か？）での
新しい生活が始まった。

守護騎士達は今までの主とは違う、家族のように接してくる
はやての対応に戸惑いながらも、静かな日々を暮らしていた。

「…で、木星連合との戦いが終わったと思ったら
今度はグラドス軍ってというのが現れて…」

「はあ、何かタツク達のおった地球って偉い物騒なんやね…」

「最初は、私も驚いたわ…異世界なんてのが存在するなんて…」

「なあなあマリナ、巨大なハンマーを使うロボットとかいなかったのか？」

「私も、異世界の機動兵器というのには興味があるな…」

（シグナムもヴィータも、俺達の世界の兵器に興味津津だな…）

「まさか狼になれるなんてね…魔法っていうのは凄いわ。」

「主が犬を飼いたがっていたらしいからな。」

「いや、ザフィーラ…その巨体で犬はちよつと無理がないか？」

「違う違う！シャマル、それ逆よ！」

「ああ…！すみませんマリナさん！」

（塩と砂糖を間違えるなんて、ベタな失敗を…）

そんな生活が3ヶ月も続いた頃であつた。

シグナムはふと、近くにいたマリナに尋ねた。

「マリナ、お前とタツクは異世界の人間だと主から聞いているがその…元の世界が恋しくないのか？」

「どうしたのよ急に？」

「いや、帰る手掛かりを探しているみたいとは言え

そんなに焦ってるわけでもなさそうなのでな…」

言われてマリナは考える。

確かに、はやての家に来てからもう3ヶ月ほど経つ。

だが、帰る手段は足取りすら掴めてないし

他の行方不明者に出会ったりもしていない。

向こうでもきつと自分達を心配している筈である。

なのに何故か、急いで帰ろうという気分がしなかったのだ。

どうしてだろうと思っていた時

タツクがその質問に答えた。

「俺達は軍人として、向こうの世界で戦ってばかりだったからな…

それも、短期間で2回も大規模な戦争も起こっている。

それが治まったとはいえ、未だに世界は安定してなかった。

そんな場所に比べたら、ここはとても平和でいい場所なんだ。」

「……………」

シグナムは真剣な表情で話聞いている。

それを聞いてマリナも気づいて、そして答えた。

「だからね、私も最近思うの…こういう生活も悪くないって…

今まで戦い続けてきた私達にしてみれば、とても温かい生活なのよ…

きつと、それに安らぎを覚えたんだと思うわ。

…向こうの人たちには薄情に思われるかもしれないけどね…」

そう、自分達はこんな平和な世界を目指して戦ってたのかもしれない。

い。

だからこそ、自分を心配してくれる人達に申し訳ない思いながらも

ここでの平和な生活をとてても良く思い

そして、自分達を受け入れてくれたはやてへの感謝の気持ちもあり

不思議と、元の世界への帰還に対する焦りが

薄くなっているのだと思っていた。

「それに焦ったって、元の世界に帰れるのが早まるかはわからない、当然帰らないなんて選択肢を選ぶつもりもないけど…」

焦っても仕方ないかなって…思ってるのよ。」

「そうか…」

しばらくの沈黙の後、今度はタツクがシグナムに尋ねた。

「シグナム、お前達はどんなんだ？」

はやての下での新しい生活は。」

その質問に少し間を空けてシグナムは答える。

「今までの主は私達を道具としてしか扱ってくれなかったからな、このような

家族としての扱いなど初めてで

正直今でも少し戸惑っている。だが」

シグナムは微笑みを浮かべ、続ける。

「お前達と同じで、こんな生活も悪くない…

いや、今が一番幸せなのかもしれないと

最近は思うようになってきている。」

「そうか。」

シグナムの言葉を聞いて、3人は

互いに微笑みあうのであった。

だが…そんな幸せな日常も
そう長くは続かなかった。

タツクとマリナ、そして守護騎士達が
はやての家で生活し始めて、約半年の月日が流れる。
運命の齒車は、ゆっくりと回り始めるのであった…

第3話（後書き）

ということで守護騎士達との日常風景でした。

本編見るたびに思うんだが

石田先生、よく親戚で納得したよな…

（この小説に限ればタツクとマリナもいるのに）

あの人意外に単純なんじゃないか？

俺だったら絶対疑ってるぞ…？

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第4話（前書き）

シグナムから明かされるはやての真実
それを聞いたタツクとマリナは…

第4話

とある日の夜遅く、守護騎士達4人は海岸の近くに集まっていた。

そしてシグナムから語られる衝撃の事実…

はやての足の麻痺は病気では無いという事

その正体は闇の書の呪いであり

生まれた時からはやてと密接に繋がっていた事

抑圧された強大な魔力がはやての体を蝕み

肉体機能は愚か、生命活動さえ阻害していた事

はやてが第一の覚醒を迎えた事でそれが加速した事

そして…

「このまま行けば…主はやては確実に…死ぬ。」

最後の、そして最大の事実をシグナムは呟く。

それを聞いて4人は俯いて黙り込んだ。

「…助けなきゃ…」

暫くした後、ヴィータがポツリと呟き
そして、シャルに詰め寄って叫んだ。

「はやてを…助けなきゃ!!」

なあシャル!シャルは治療系得意なんだから!?

そんな病氣くらい、治せよ!!」

必死の形相で詰め寄るヴィータ

だが、シャルは俯いたまま申し訳なさそうに答える。

「ごめんなさい…私の力じゃどうにも…」

「何でだ…何でなんだよツツ!!」

それを聞いてヴィータはそのまま泣き崩れる。

「シグナム…何か方法は無いのか…」

狼形態のザフィーラがシグナムの方を向いて尋ねる。

シグナムは更に語りだした。

唯一の方法は闇の書を完成させ、

はやてを真の主とする事

完成させるにはリンカーコアの蒐集が必要な事

リンカーコアは生物にしか存在しない事

「つまりそれは…」

「無関係の人間を襲うことになる…」という事ねシグナム?」

別の方向から声が響き、4人は驚いてそちらに振り向く。

そこには固い表情を浮かべたタツクとマリナが立っていた。

2人ははやてから、シグナム達4人の帰りが遅いから

様子を見てきてほしいと頼まれ

そして、たまたまこの場に居合わせたのである。

「だがそれは…はやてとの約束を破る事になる…」
タツクが固い表情のまま呟く。

タツクは、はやてとシグナムが約束を交わすのを聞いていたのだ。

現マスター八神はやては、闇の書には何にも望みが無い
大勢の人達に迷惑をかけてまで望む物など無い
自分がマスターの間はみんなで仲良く暮らすのが仕事だという事を。

「仕方ないだろ…はやてが死んでもいいっていうのかよ!!」
怒りの形相でヴィータが叫んだ。タツクは更に尋ねる。

「リンカーコアの蒐集というのは、一般人に害を及ぼす事なのか？」

「いえ、襲うといっても魔力がある者、魔道師や

異世界の魔法生物だけからです…」

その問いにシャマルが答える。続いてマリナが尋ねた。

「リンカーコアというのを取られると…取られた者はどうなるの？」

「暫くの間身体に異常が出るが、生死には問題はない筈だ。」

その問いにはシグナムが答え、そして付け加える。

「他人を命を奪う…いくらなんでもそれは…主はやてには辛すぎる
…」

しばらくした後、タツクが口を開いた。

「…わかった、俺達も手伝わせて貰おう。」

「…えっ!?」

その言葉を聞いて守護騎士達は驚きの声をあげる。

「一刻を争うんだろう? 戦力は多い方がいい。」

「で、でも… 俺達達は元の世界に…」

シヤマルの呟きを聞いて、マリナが強い口調で答える。

「例え方法が判明しても、この件のケリがつくまで

私もタツクも帰るつもりなんてないわ…」

これまで異世界で無事に生活出来たのも

全てははやてのおかげだと言えるのだ。

それに途中から加わった守護騎士達との

温かくて静かな生活もある。

そこまでしておいてもらって、今その

最大の恩人が命の危機に瀕しているというのに

誰がそれを見捨てて帰るなどと言うか。

自分達には、はやてや4人に対する恩があるのだ。

「方法には正直言つて賛成しかねるんだが…

お前達が考えを変えないのは明白だ。

だったら、俺達が折れるしかないだろう…」

タツクがそう言った後、マリナが更にシグナムに尋ねた。

「シグナム、初対面の時に言ってたわよね

私達はリンカーコアとデバイスを持っているって。」

「ああ…」

「だったら、私達も魔法が使えるって事じゃない?」

初めて会った日に、はやてから貰った薄赤色の

翼の首飾りを手に取りながら、マリナは尋ねた。

言われてシグナムは考える。

確かにマリナの言うとおりではある

それに2人は軍人だとも言っていた

それはつまり、並の人間よりは頑丈だという事だ。

一刻を争う自体なので、戦力は多いに越したことは無い。

だが…目の前の2人も自分達と同様に

はやてにとってかけがえのない大切な人間である。

そして、魔法での戦闘というのは生半可な物ではない

不用意に2人を巻き込んではやてを悲しませるのは

望ましい事では無いのだ。

少し間を置いて、シグナムは答えた。

「…お前達の実力を試したい、場所を移すぞ。」

言われて2人は頷いて答えた。

海鳴市のとあるビルの屋上

タックとマリナの実力を試すため、模擬戦が行なわれる事になった。

「デバイスというのは、どうすれば起動させられるのかしら?」

「デバイスの名を呼べばいい、そうすれば起動する。」

マリナの問いに、人間形態のザフィーラが答える。

言われて2人は考える。

（名前か…白い翼…やっぱりあれだな…）

（薄赤の翼ね…まさかとは思うけど…）

そして2人は互いに翼の首飾りを掴み
かつての自分達の愛機の名前を呟いた。

「ガンアーク!!」

「バスターアーク…!!」

次の瞬間2人の体は光に包まれた。

そして光がおさまった後そこにいたのは

白を基調にし、所々に青紫のラインが入った

コート形のバリアジャケットを身に纏い

両足と背中に大小3つのリングパーツ

両肩に先端に3本の突起のついた

角ばった長いプレートを備え

右手にライフルを持ったタツクと

薄赤色基調で白いラインが入った

コート形のバリアジャケットを纏い

タツクと同じ3つのリングパーツ

そして、先端に4つの翼状のパーツの付いた

楕円形のプレートを両肩に備え
これまた同じく、右手にライフルを持ち
左手に籠手を装着したマリナだった。

それと同時に2人の頭の中に、デバイスの能力が流れ込む。
2人は目を瞑ってそれらの情報を整理した。

「起動したか？では、早速始めようか。」

そう言ってシグナムも己のデバイス・レヴァンティンを起動させ
騎士甲冑を身に纏い、巨大な剣を構えた。

そしてシグナムはマリナと、ザフィーラはタックと向かい合った。

最初に動きを見せたのはタックであった。

タックは右手のアークライフルから青白い魔力弾を連射した。

ザフィーラはそれを横に飛んで避けて、

その勢いでタックに向かって拳を放つ。

「はああああ！！」

タックはそれを、肩部のプレートを前面に出し

そして、そこから白い魔力壁を展開して防ぐ。

「クッ！」

攻撃を防がれたザフィーラは地に降り立ち

そのまま続けて回し蹴りを放った。

タックはそれをリングパーツを展開し

上空に飛び上がる事で回避する。
それを見てザフィーラも、タツクを追って飛び上がる。

ある程度距離をとったところでタツクは叫んだ。

「ホーミングシューター！」

その声と同時に、タツクの周りに4つの白い魔力弾が現れる。

「行け！！」

タツクが左手を前に翳すと、魔力弾はザフィーラに向かって飛んでいく。

ザフィーラはそれらを、難なくかわしてタツクに向かっていく。

「フフッ。」

タツクの口元が微妙に釣りあがる。

すると、魔力弾が急旋回し、背後からザフィーラに襲い掛かった。

「何っ！…誘導だと…」

それに気づいたザフィーラは驚きながらも

振り向いてシールドを展開、魔力弾を防ぎきった。

「…タツクの奴、なかなかやるな。」

その様子を見ていたシグナムが呟く。

そんな彼女を見て、マリナが言った。

「それじゃあ…こつちもそろそろ始めましょうか？」

「ああ…そうだな。」

言われてシグナムは、マリナと向き直った。

少し間を空けた後、マリナは上空に飛び上がる。

シグナムもそれに反応して、マリナの後を追う。

そして、レヴァンティンの刃をマリナに向かって振り下ろす。

「……アーケブレード!!」

マリナは左手の箆手から黄色い魔力刃を展開し

シグナムの斬撃を受け止める。

「ほう…この私に接近戦を挑むか。」

ニヤリと笑うシグナム。

「だが…甘い!!」

そう叫んでシグナムはマリナを切り払う。

「くうっ!!」

シグナムの力に圧倒され、マリナは吹き飛ばされる。

そこにシグナムが次の攻撃を加えんとして、突っ込んできた。

マリナはアーケライフルを構えた。

「ハアアアア!!」

マリナは高速回転しながら、凄まじい勢いで魔力弾を乱射する。

シグナムはそれに驚くが、とっさに下に回避する。

「接近戦は不利ね…遠距離からやらせてもらっわ!!」

乱射の終わった後、距離をとってマリナはそう呟き、続けて叫ぶ。

「ホーミングシューター!!」

そしてタツクと同じように赤い魔力弾を4つ形成し

それをシグナムに向かって放った。

「……………フッ!!」

だが、シグナムは動じることなく

向かってかきた魔力弾全てを、レヴァンティンで斬り捨てた。

「この程度の射撃では、私は捕らえられんぞ。」

剣をマリナの方に向けながら、シグナムは言った。

それを聞いてマリナは、少し笑みを浮かべながら叫んだ。

「なら…防ぎきれない攻撃をするだけよ！」

すると、マリナの周囲に灰色のユニットが6つ現れる。

それを周囲に散りばめた後、マリナは言った。

「トランスユニット！」

マリナは、散りばめたユニットに向かって魔力弾を連射する。

すると、ユニットに当たった弾が反射して、シグナムに襲い掛かった。

「くそ…数が多すぎるな…!!」

避けきれないと感じたシグナムは、パンツァーガイストを唱える。
すると彼女の体が紫色の光に覆われ、

トランスユニットの魔力弾を全て防いでいった。

「お前も…なかなかの腕前だ、マリナ。」

シグナムは少し笑みを浮かべながら呟いた。

「うおおおお!!」

ザフィーラがタックに向かって飛び蹴りを放つ。

タックはそれを横にかわした。

ザフィーラは途中で立ち止まり、再びタックに向かっていく。

「バーストモード！」

タックはザフィーラに向かって、ライフルから

やや大きめの白い魔力弾を発射する。

ザフィーラはそれをかわすが、その直後魔力弾が爆発する。

「な…しまった!!」

爆発とそれによる爆風に巻き込まれ、体勢を崩すザフィーラ。慌てて体勢を立て直そうと構えたが

「…勝負ありだ。」

すぐ横にアークライフルから魔力刃を形成し

その切っ先をザフィーラに向けたタックが立っていた。

「…フッ、お前の勝ちだな。」

ザフィーラは笑いを浮かべ、己の負けを認めた。

「レヴァンティン!!」

シグナムはレヴァンティンをシュランゲフォルムに変形させる。

そしてその刃を振り回し、周囲に展開するユニットを全て撃墜した。

そして、シュベルトフォルムに戻した後、マリナに襲い掛かる。

「チッ!!」

マリナは慌てながらも、肩のプレートから薄赤色の魔力壁を展開し、その斬撃を防御する。

「その程度の防御で…私の剣を防ぎきれるか!!」

シグナムが叫ぶと同時に、魔力壁に徐々にヒビが入る。

マリナは魔力壁を解除、紙一重で斬撃を受け流し

そのままシグナムから距離をとって、ライフルを構える。

「させるか!!」

だがシグナムはそれを見逃さず、マリナに急接近してレヴァンティンを横に振るった。

だがその攻撃はマリナには当たらず

直前にライフルから発射された白い魔力弾に当たる。

「何…！？」

シグナムが気づいた時には、魔力弾は爆発を起こしていた。直後、彼女は左腕を掴まれる。

「デコイモード…やはり近接戦闘ではこれが一番ね。」

そしてすぐ横に自分の腕を掴み

ライフルを首元に向けているマリナが立っていた。

「…見事だ。」

シグナムも同様に、負けを認めるのだった。

模擬戦が終了し、4人はビルの屋上に降り立つ。

「ふ、2人共凄いわ…！」

ずっと様子を伺っていたシャマルが驚きを浮かべて言った。

「でもシグナムもザフィーラも全然本気じゃなかったしよ…」

納得いかないような表情で皮肉を言いながらも

ヴィータも内心では、2人の実力に驚いていた。

そしてタツクはシグナムの方を向いて、真剣な表情で尋ねた。

「シグナム…いいよな？」

シグナムはフツと笑みを浮かべて答えた。

「ああ…お前達の実力を認めよう

主を救うために、共に戦ってくれ。」

そう言ってシグナムは右手を差し出す。

タツクとマリナは真剣な眼差しを向けてその手を握った。

翌日の夜

再び同じビルの屋上に6人はいた。

シグナム、シャマル、ザフィーラ

ヴィータ、タツク、マリナはそれぞれ語る。

「主の体を蝕んでいるのは…闇の書の呪い…」

「はやてちゃんが、闇の書の主としてまことの覚醒を得れば…」

「我らが主の病は消える…少なくとも、進みは止まる…！」

「はやての未来を血で汚したくないから、人殺しはしない…」

「だけど…それ以外なら、何だってする！」

「俺たちがこれからする事は…本来は間違った事だ…」

「だけど、私たちを助けてくれた幼い命が消え行くのを…」

このままただ、黙って見てる事など出来ない…！」

雷鳴が轟く、そしてシグナムは剣を構えて呟く。

「申し訳ありません我が主…ただ1度だけ、あなたとの誓いを破ります。」

6人がそれぞれ、己の甲冑、バリアジャケットを纏っていく
そしてシグナムは叫んだ。

「我らの不義理を…お許し下さい！」

海鳴市の夜空に6つの光が輝き、そして散っていった…

第4話（後書き）

ということでタック、マリナの魔導師化です。

まあ、デバイスの形状から皆さんの予想通りだったと思います。
ホーミングシューターは
ミサイルランチャーの置き換えみたいな物だと思って下さい。

ただ、模擬戦の決着のつき方が
両者似たような感じになってしまったのに後悔気味です…
うーん…もっとバトル描写の腕磨かないと…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第5話（前書き）

アースラ内での平和な一時
そして…

第5話

12月1日 アースラブブリッジにて

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了しました。」

「うん、予定は順調ね。」

オペレーターの報告に、リンディはにこやかに答える。
とそこに、エイミイがやって来る。

「艦長、お茶のおかわりいかがですか？」

「ありがとうエイミイ、頂くわ。」

エイミイが湯呑みにお茶を注いでいく。

そしてリンディはそこに、さも当然のように角砂糖を入れていく。

「本局にドッキングして…私達もやっと一休みね。」

「ですね。」

湯呑みを片手にのほほんと喋るリンディに

エイミイもにこやかに返答する。

ふと、リンディは尋ねる。

「子供達は…どうしてるの？」

「クロノ執務官とフェイトちゃんは戦闘訓練

ユーノ君がその付き添い…バレル君やベルクト君

フェイさん達はデバイスの改造がどうこう行って

歩いているのをさつき見かけましたよ？」

「明日は裁判の最終日なのに…皆マイペースねえ…」

「まあ、勝利確定の裁判ですからね。」

お茶を啜りながらそう洩らすリンディに

エイミイはにこやかな態度を崩さずに答えるのだった。

別の時刻、アースラの食堂にて

フェイト、ユーノ、アルフ、ベルクトの4人は

クロノと向かい合って座り、裁判についての確認をしていた。

「被告席のフェイトは、裁判長の問いに

その紙の内容通りに答える事…」

「うん…」

真剣な眼差しでそういうクロノに

フェイトは頷いて返答する。

「今回はアルフとベルクトにも、被告席に入ってもらってから。」

「わかった。」

「了解だ。」

アルフとベルクトも、同様に頷く。

「で…僕とこのフェレットもどきは証人席…」

質問の回答はそこにある通り。」

「うん、わかった…で、オイ…！」

ユーノは両手で机をバン！と叩き、クロノに対して怒りを向ける。

クロノはそんな彼を見てキョトンとする。

ユーノは怒りの表情のまま続ける。

「誰がフェレットもどきだ！誰が！」

「お前以外に誰がいる？」

横でそのやり取りを聞いていたベルクトが冷やかな視線を向けて、ポツリと呟いた。

ユーノはその言葉にカチンときて、更に怒る。

「あのねベルクト！！確かに動物形態でいる時間は多いけど！僕にはユーノ・スクライアという立派な名前があるんだよ！！」

「……いちいち怒るな、これくらいの軽い冗談で……」

「クロノはともかく！君が言うつと冗談に聞こえないんだよ！！」

悪魔で冷静な態度を崩さないベルクトに対して

ユーノは拳を握りながら、凄まじい形相で叫ぶ。

「ユーノ、まあまあ……」

「クロノ、ベルクトもあんまり意地悪言っちゃダメだよ……」

そんな3人を見て、アルフとフェイトは苦笑いしながらそう言った。

そんなやり取りから少し時間が経った後

再びアースラのブリッジ

「お疲れ様リンディ提督、予定は順調？」

「ええレティ。」

リンディはモニター越しに

時空管理局本局運用部提督・レティ・ロウランと話をしていた。

「そっちは問題ない？」

「ドッキング受け入れと、アースラ整備の準備はね……」

リンディの問いに、やや表情を暗くしながら答えるレディ」

そんな彼女の態度に疑問を持ち、リンディは尋ねる。

「何か…嬉しくない事でも？」

「ええ、ロスト・ロギアよ…」

レディがそう言った時に、クロノがその場に現れる。

レディは続ける。

「一級搜索指定がかかってる、超危険物…」

「…！！」

レディの言葉にクロノがピクリと反応する。

「いくつかの世界で痕跡が発見されて、担当班は大騒ぎ

今は、派遣した捜査員の報告待ちね…」

「そっかあ…」

顎に手を置いて、リンディは表情を暗くした。

アースラ内、フェイトの個室。

フェイトは待機状態のバルディッシュを置いて

ふと、テーブルの方に目を向ける。

その視線の先には、なのは、アリサ、すずかの写真と

なのはから送られてきた数本のビデオメールがある。

（なのは…）

フェイトは顔を赤らめる。

自分に何度も向き合ってくれた。

自分に友達の意味を教えてくれた大切な人…

明日には裁判にもケリがつき、直接会える日も

そう遠くはないだろう。

（早く…会いたいな。）

フェイトがそんな事を考えていると。

「邪魔するぞ、フェイト。」

ベルクトが部屋に入ってきた。

フェイトはベルクトの姿を見て、笑みを浮かべる。

「取り込み中だったか？」

「うん…大丈夫だよ。」

「そうか…ん？」

ベルクトが机の上の写真とビデオメールに気づく。

それを見てベルクトも笑みを浮かべながらフェイトに言った。

「…なのはとも、しばらく会ってないからな。」

「うん…」

「早く、会えるといいなフェイト？」

「うん…私も、会えるのが凄く楽しみ。」

フェイトは満面の笑みを浮かべてそう答える。

そんな彼女をベルクトは微笑ましい気持ちで見ている。

（この半年で随分柔らかくなったものだ…フェイトも…俺も…）

出会った当初のフェイトは、冷徹…とまでは言わないが

それでも今ほど感情の起伏が激しくは無かった。

これはひとえに、プレシアという重荷が無くなったのもあるが

やはり、この写真に映る少女、なのはの影響が大きいだろう。

半年前、友達となつて以来、ずっとビデオメールのやり取りを

するくらい、とても仲がいいのだ。

彼女との繋がりが出来て以来、フェイトは

笑顔でいる時間が日に日に増していった。

そして自分も、そんな彼女に影響されてか

周りの人間との付き合い方が穏やかになっている気がする。

（新しい自分を始めて約半年…こういうのも、全く悪くないな…）

ベルクトがそんな事を考えながらフェイトを見ていると。

「……………ッッ」

2・3秒もしない内にフェイトが顔を真っ赤にして自分の顔から視線をそらす。

そんな彼女を見て、ベルクトはついため息を漏らす。

（…これもか…）

そう、なのはと友達になったあの日

自身に劇的な告白をしたあの日以来

フェイトは面と向かって自分と向き合うと

決まっってこうなるのだ。

それがどうしたというわけでもないが

ベルクトにとつてはちょっとした悩みの種であった。

（そもそも…好きであるのと、大切であるのはどういう…）

荒んだ過去を歩んでいたとはいえ

一応自分にも人並みの感情があるという自信はある。

だが、ベルクトはこれまで異性に対してとの

あのような接触はほぼ皆無であったので

どうにも対応に困っていたのだった。

思い切ってバレルに聞いてみたりもしたのだが

「はあ！？それくらい自分で考えろよ！」

と、こんな感じに盛大に突っぱねられてしまったのだ。

（どうしたものかな…）

ベルクトが悩んでいると、ふとフェイトに声をかけられる。

「あ…あの、ベルクト…？」

「…？」

ベルクトはフェイトに再び顔を向ける。

フェイトは俯いて、顔が真っ赤になっていた。

そりゃあ…放っておいたら沸騰するんじゃないか？ってくらいに。

そんな状態でフェイトはしどろもどろで尋ねる。

「あ、あの…その…ベルクトは、わ、私のこと…」

「……………」

やや間を空けてから、ベルクトは答える。

「…俺の人生を変えてくれた、かけがえの無い大切な人間…だとは思っているが？」

「……………」

その言葉を聞いた途端、真っ赤な顔のままフェイトは仰向けに倒れてしまう。

(……………何か、気に障る事でも言っただか今……?)
そんな彼女を見て、ベルクトは頭を抱えて物凄く真剣に悩みまくるのであった…

だが…そんな平凡な日常も
そう長くは続かない物である…

12月2日の夜遅く 海鳴市市街地にて

その上空に、ヴィータ、ザフィーラ、タックがいた。

「どうだヴィータ…見つかりそうか？」

「いるような…いないような…」

狼形態でそう尋ねるザフィーラに

目を瞑って集中しながらヴィータは答えた。

そして目を開き、グラーフアイゼンを肩の後ろに備えて続ける

「この間から時々、妙にデカイ魔力反応が出て来るんだよね…」

「そいつが見つければ、一気に数十ページは貯まりそうなんだが…」

途中からタックも会話に加わり、答える。

そして、ザフィーラは後ろに振り向きながら言った。

「ここは、別れて捜した方が良さそうだな。」

その言葉にタックが返答する。

「わかった…ヴィータ、闇の書は頼んだぞ。」

「オツケー…ザフィーラもタックもしっかり捜してよ…？」

「ああ…はやての為にもな…」

「心得ている…」

真剣な表情でタックとザフィーラはそう言って

それぞれ違う方向に散っていった。

それを見送った後、ヴィータはグラーフアイゼンを振り下ろす。
すると、彼女の足元に三角形の赤い魔方陣が展開する。

「封鎖領域…展開…」

そう呟いて、グラーフアイゼンを横に振るう。

すると、周辺の世界の色が変わっていった。

結界を張った後、ヴィータは再び目を瞑って魔力の探知を行なう。そして…

「！！…魔力反応…大物見つけ！！」
遂にそれを捕らえる。

ヴィータは目を見開き、己のデバイスを構える。

「行くよ…グラーフアイゼン！！」

そしてヴィータは、対象のいる方向に向かって一直線に飛んでいくのであった…

闇の書を巡る新たな戦いが
今、始まるうとしていた…

第5話（後書き）

ということであろうやくアニメ本編の話に入りました。

ヤバイ…ベルクトのキャラがどんどん変わっていく…
連載初期から考えて

こんなギャグ的なキャラまで演じる事になるとは…
作者自身意外だったりします。

最終回でうまく収集つくようにしないと…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第6話（前書き）

海鳴市上空で繰り広げられる大激戦

第6話

（魔力反応…近くにヴィータもいるな…見つけたのか。）

同じ頃、別の場所を探索していたタツクも

大きな魔力反応を感じ取っていた。

（この感じ…魔力量だけならシグナムやヴィータにも匹敵するかもな…念の為…）

そう思い、タツクは離れた位置にいるマリナに念話を飛ばす。

（マリナ、そっちの状況はどうだ？）

（あまり芳しくないわね…小さい魔力反応すら見つからない状態…）

マリナの沈んだ声が頭に響く。タツクは更に続けた。

（こっちで大物を1つ見つけた。恐らく一悶着あるだろう可能ならお前もこっちに来てくれ。）

（わかったわタツク、近くにシグナムもいるから一緒に。）

（ああ…）

タツクはそこで念話を打ち切って呟く。

「さて…俺も向かうとするか…」

タツクは魔力反応がした方に向かって飛んでいった。

丁度その頃、ヴィータは巨大な魔力反応の持ち主…なのはと戦闘を行っていた。

「フッ！！」

ヴィータは手にした鉄球をハンマーで打ち出す。

なのははそれを、シールドを展開して防御する。

シールドに直撃した鉄球が爆発し、爆風を巻き起こす。

「どらあああああ!!」

すかさずヴィータはその爆風に突っ込み
ハンマーを振り下ろす。

なのはそれを横に飛び上がってかわし、そして叫んだ
「いきなり襲い掛かられる覚えは無いんだけど!」

途中で静止し、ヴィータの方に向き直って続ける。

「どこの子! 一体何でこんな事するの!」

だが、ヴィータは答えず、黙って新たな鉄球を取り出す。

「教えてくれなきゃ、わからないってば!!」

なのはは、予め射出しておいたデイバインシューターを操作し
ヴィータの背後に向かってそれを放った。

「うわあ!!」

すんでのところでヴィータはそれに気づき

初発を避け、二発目をシールドを使って防御する。

「このやるおおお!!」

予想外の反撃にヴィータは怒り、ハンマーを構えて
なのはに向かって突撃していく。

ヴィータの突撃をなのはは、後方に高速移動して回避し
ヴィータに向かってレイジングハートを構える。

「話を、聞いてっばあ!!」

そしてなのはは、デイバインバスターを放つ。

「あっ!!」

直撃は免れたものの、ヴィータは被っていた帽子を落してしまう。
それを見たヴィータは目を見開いて怒り、なのはを睨みつける。
そのあまりの形相に、なのははたじろいでしまう。

「グラーファイゼン! カートリッジロード!」

ヴィータは足下に魔方阵を展開し、カートリッジロードを行なう。
そして、グラーファイゼンをラケーテンフォルムに変化させた。

「あ…ええっ!」

その光景を見たなのはが驚く。

「ラケーテン！！」

ハンマー後部からジェットを噴射し、ヴィータは高速回転する。その勢いを利用して、なのはに向かってハンマーを振り下ろした。なのははシールドを展開するも、いとも簡単に破かれ、レイジングハートに当たる。

「ハンマアアアアア！！」

ヴィータは勢いに任せて、レイジングハートごとなのはを吹き飛ばした。

「あああああー！！」

吹き飛ばされたなのはは、近くのビルに突っ込んだ。煙と埃が舞う中、なのはは何とか立ち上がる。

「でえええええい！！」

ヴィータはすかさず追い討ちをかける。

なのはは再びシールドを張って防御する。

「ぶち抜けえええええ！！！！」

ヴィータが叫ぶと同時に、シールドが破かれ

更になのはの纏うバリアジャケットすらも破壊し再びなのはを後方に吹き飛ばし、壁に叩きつける。

「ハア…ハア…ハア…」

息を荒げながらも、ヴィータはハンマーを構えゆつくりとなのはに近づいていく。

「あ…ああ…うつつ…」

ボロボロになりながらも、なのはは側に落ちた傷だらけのレイジングハートを手に取りそれをヴィータに向けて対抗する。

だが、眼前にはハンマーを振り上げたヴィータが迫る。

（こんなので…終わり？…嫌だ…ユーノ君…クロノ君…バレルさん…ベルクトさん…フェイトちゃん！！）

なのはは固く目を閉じて、心の中で叫ぶ。

その時であつた。

なのはとヴィータの間に魔方陣が現れ

そこから出てきた人物によって、ハンマーが止められる。

そこにいたのは、バルディッシュを構えたフェイトであつた。

「ごめんなのは、遅くなった。」

「ユーノ…君？」

声のした方になのはが振り向くと、そこにはユーノがいた。

「ぐ…仲間か！？」

ヴィータは後方に1回転して、距離をとる。

フェイトはバルディッシュに魔力刃を形成し、静かに呟いた。

「友達だ…！」

相対するヴィータとフェイト

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪では済まない罪だ。」

「なんだデメエ？管理局の魔道師か？」

ヴィータが睨みながら言う。

「時空管理局囑託魔道師…フェイト・テストロッサ。

抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。

同意するなら、武装を解除して。」

「誰がするかよー!!」

そう叫んでヴィータは後方に飛び退き、外へ出る。
それを見たフェイトが言った。

「ユーノ、なのはをお願い!!」

「うん!!」

そしてフェイトもヴィータを追って外へ出た。

なのはに回復魔法を唱えながら、ユーノが事情を説明した。

「フェイトの裁判が終わって、なのはに連絡しようとしたんだ…

そしたら、通信は繋がらないし…広域結界ができてるし…

だから、慌てて僕達が来たんだよ。」

「そっか…ありがとう。」

なのはは申し訳なそうにお礼を言った。

続けてユーノが尋ねる。

「アレは誰?なんでなのはの事を…」

「わかんない…急に、襲ってきたの…」

「でも大丈夫、フェイトやアルフがいるし…

バレルやベルクトも来てくれるから…」

「…みんな来てくれてるの?」

ユーノの方に顔を向けながらなのはは言った。

「バルディツシュ!!」

フェイトはそう叫び、アークセイバーを放つ。

「グラーファイゼン!!」

それを見たヴィータも4つの鉄球を打ち出した。

その後シールドを展開し、アークセイバーを防御する。

「バリアー……!!」

だがその直後、下方向からアルフが飛び上がってくる。

「ブレイク!!」

アルフは拳をヴィータに向かって放ち

彼女が展開していたシールドを打ち砕く。

ヴィータは一旦後方に下がり、アルフに向かってハンマーを振り下ろす。

アルフはそれをシールドで防御しようとするが

ヴィータはシールドごとアルフを下へ吹き飛ばした。

「あ!!」

だがその直後、ヴィータはバインドによって

両手足を拘束されてしまう。

「くっ!!」

ヴィータは歯を食いしばりながら唸る。

そしてフェイトがバルディツシュを向けながら言った。

「終わりだね、名前と出身世界、目的を教えてもらっよ!!」

その時、フェイトに向かって黄色い閃光が飛んできた。

「な……!!」

驚きながらも、フェイトはシールドを張って防御した。

「アークブレード……!!」

だが、体勢を崩されたところに、閃光を放った張本人

・タックが魔力刃による斬撃を放ち、フェイトを吹き飛ばした。

「うおおおお……!!」

更に別方向からザフィーラが現れ、アルフを蹴り飛ばした。

「ああ……!!」

アルフはそのまま下に吹き飛ばされる。

「レヴァンティン、カートリッジロード。」

更に別の場所からシグナムが現れる。

「紫電一閃……!!」

そして剣に炎を纏わせ、フェイトに向かって

その剣を振り下ろした。

フェイトはバルディッシュで防御するも

バルディッシュは真つ二つに折れてしまう。

「はあああ……!!」

シグナムは再び剣を振り下ろす。

フェイトはシールドを使って防御するも、ビルの上まで飛ばされ

てしまった。

タックはヴィータの方を向いて言った。

「らしくないなヴィータ？油断したのか？」

「うるせーよ！こつから逆転するところだったんだ！」

「…相変わらず素直じゃないな。」

呆れたような口調でそう言いながらも

タツクは右手を翳し、ヴィータのバインドを解除する。

「でも無茶はするな、俺達の誰かに何かあれば

その分だけはやてを悲しませる事になる。」

「わーってるよ！もう…」

ヴィータはそっぽを向いてしまう。

「それから落し物だ。破損は直しておいてやったから

今度は気をつけるよ？せつかくはやてに貰ったんだからな…」

そう言いながらタツクは、ヴィータの頭に帽子を乗せ

笑みを浮かべる。

「…ありがと、タツク…」

ヴィータは俯きながらも礼を言った。

バルディッシュを修復したフェイトは

再びシグナムと戦っていた。

互いのデバイスが交わり火花が散る。

「くっ！」

フェイトは一旦後方に下がり、フォトンランサーを放つ。

「レヴァンティン、私の甲冑を…」

それを見たシグナムはパンツァーガイストを纏う。

そして目を瞑って、フォトンランサーの魔力弾を容易く防ぎきってみせた。

「ああっ……！」

「魔道師にしては悪くないセンスだ……だがベルカの騎士に一对一を挑むには、まだ足りん！」

驚くフェイトに向かってそう叫び、斬撃を放つ。

フェイトはシールドで防御するが

シグナムの斬撃はそれを破り、フェイトの体勢を崩す。

「レヴァンティン！叩き切れ！」

すかさずシグナムはカートリッジロードを行い

剣に炎を纏わせ、追い討ちをかける。

そしてフェイトを近くのビルまで吹き飛ばした。

一方ヴィータは、ユーノと戦っていた。

「らああああ……！」

ユーノに向かってハンマーを振り下ろす。

ユーノはそれをシールドで防御する。

ヴィータは後方に下がり、4つの鉄球を打ち出した。

（くそ……このままじゃ……）

先程から防戦一方のユーノは焦り、心内で呟く。

「デイスパーションセイバー……！」

だが、打ち出された鉄球は直後、飛来してきた鉄形の物体から放たれた魔力弾によって撃墜された。

「なにに……！」

またしても予想外の事態に驚くヴィータ。

「今のは……！！」

ユーノは声のした方に振り向いた。

「すまないユーノ！デバイスの最終調整に手間取った！
そこにはバレルが立っていた。」

「なんだあ……テメエも仲間か……！」

ヴィータはバレルを睨みながら叫んだ。

「ああ……その通りだ。」

そう言っただけでバレルは、背中にブースターと翼を出現させ更に右肩に実体剣を出し、それを右手で掴みヴィータの方に向けながら、固い表情で言った。

「バレル・オランダだ、おとなしくしてもらおうか……」

シグナムはフェイトを見下ろしながら呟く。

「終わりか？ならばじっとしている

抵抗しなければ命までは取らん。」

「だ、誰が……！」

フラフラになりながらフェイトは立ち上がる。

「いい気迫だ、だが……ここまでだ！」

シグナムは剣を振り上げ、凄まじいスピードでフェイトに向かって突っ込んでいく。

だが斬撃がフェイトに当たる直前、

シグナムとフェイトの間に魔方陣が現れる。

そこから出現した人物が右手を掲げ、赤褐色のシールドを展開しシグナムの斬撃を防いだ。

「何！？」

「あ……」

シグナムは驚いて一旦後方に下がる。

フェイトは目に涙を浮かべながらも現れた人物を笑顔で見ながら叫んだ。

「ベルクトッ！！」

「遅くなって……悪かった。」

ベルクトはフェイトの方に振り向いて、申し訳なさそうに言う。

そしてシグナムに向き直り、冷たい表情で彼女を睨む。

（この男……！少なくとも只者ではないな……）

ベルクトから異様な気配を感じ取り、

剣を彼に向けてこう言った。

「貴様……一体何者だ？」

ベルクトはそれに答えず、首に下がった

紫色の羽のオブジェを手にとって呟いた。

「……グレイブアーク。」

直後、ベルクトの体が光に包まれる。

そして光がおさまった後、そこにいたのは

両腕を長い袖で覆ったコート形の紫基調の
バリアジャケットを身に纏い

両肩に小型4つ、大型2つ、計6つの砲台のような物
両足と背中に大小4つのリングパーツ

左腕に8つの刃形の物体を備え

右手に巨大な長身砲を持ったベルクトであった。

「ベルクト、それは…？」

見た事無いベルクトの姿にフェイトは呟く。

「これが俺の新たなデバイス…グレイブアークだ。」

ベルクトは振り向かずに答える、

そしてシグナムに向かって言った。

「何者だと聞いたな…？」

俺はベルクト…そこにいるフェイトの…仲間だ。」

そして長身砲をシグナムに向けて更にこう言った。

「覚悟しろ…俺の大切な仲間を傷つけた以上…容赦はしない…！」

第6話（後書き）

ということで戦闘開始＋バレル、ベルクトの登場です。

加えてタツク、更にはマリナも登場予定の大混戦
作者自身うまく描ききれるか不安です…
頑張らないと…

そして新デバイス、グレイブアークの御披露目です。
何か外見描写を見る限りでは凄いゴテゴテかもしれない
絵にしたら凄い事になりそう…

バレルの戦闘描写を見て首を傾げた方
その辺は次の話できちんと説明します。

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第7話（前書き）

バレルの新たな能力
そして相対するベルクトと…

第7話

互いに武器を向けたまま、硬直するベルクトとシグナム。

そして暫くしてベルクトが口を開く。

「グレイブキャノン。」

直後、黄色の閃光がシグナムに向かって放たれた。

「なっ…!？」

咄嗟の攻撃に判断が遅れるものの

シグナムはそれを後方に飛び退いてかわした。

（予備動作無しに、あれ程の砲撃を行なうとは…）

シグナムは驚いていた。

如何に強力な力を持つ魔道師といえど

砲撃系統の魔法を放つ際には

ある程度のタメが必要な筈である。

だが、目の前の男はただ一言呟いただけで

まともに食らえばただではすまないであろう

砲撃を行なったのだ。

（質のいいデバイスか…あの男の素質なのか…いずれにせよ油断出来ない。）

（かわしたか…一筋縄ではいかないようだな…）

長身砲を下に下ろし、ベルクトはフェイトの方に振り向いて言った。

「奴らが何の目的でなのはを襲撃したかは知らないが…

少なくとも、危険な敵であるのは間違いない。」

「うん…」

フェイトに背を向け、ベルクトは続ける。

「戦闘の続行に支障はあるか？」

「少し魔力を消費してるけど…大丈夫、問題無いよ。」

「よし、2人であいつを捕獲するぞ。

いろいろ聞きたいこともあるしな。」

「うん…！」

ベルクトの言葉に、フェイトは力強く頷く。

そして、2人同時にビルの屋上から

上空に向かって飛び上がった。

その直後、8つの光弾が

ベルクトとフェイトに向かって放たれる。

「!!!!」

ベルクトはフェイトの前に立ち、左腕の

8つの刃・スケイルシールドを前に構え

赤褐色のシールドを展開して、それらを防ぐ。

「ぐうつ!!」

光弾を一度に防ぎ、その衝撃でベルクトはよろめく

「ベルクト!!!」

後ろにいたフェイトが心配そうな表情で叫ぶ。

「…驚いたわ、まさか…アナタがここにいるなんて…」

上空から声が響き、2人はその方向に振り向く。

その先にはライフルを構えたマリナが立っていた。

「うおおおおお!!」

ヴィータがバレルに向かって突撃し、ハンマーを振り下ろす。
するとバレルは、左腕にスティールディフェンサーを出現させ
ヴィータの攻撃を防ぐ。

「コイツ…!!」

攻撃を防がれ、悔しそうな表情を浮かべるヴィータ。

バレルは巨大な盾を横に振るい、ヴィータを吹き飛ばす。

「チッ!!」

飛ばされたヴィータは、一旦体勢を立て直し、バレルを睨む。

すかさずバレルは手に持った剣を構えた。

「ツーハンデッドブレイカー!!」

剣を振るい、衝撃波を放つ。

ヴィータはそれを難なく回避する。

「なめるなあああ!!」

ヴィータは叫び、4つの鉄球を取り出して

バレルに向かって打ち放った。

それを見たバレルも、一旦後方に引き下がり

左腕の盾を消し、両肩から砲台を出現させる。

「ラピッドファイヤー!!」

そして砲台から何発もの魔力弾が発射され

ヴィータの鉄球を残らず撃墜した。

(ウソだろ…あいつ、いくつ攻撃手段を持ってるんだよ!?)

バレルの多彩な攻撃手段を前にして

ヴィータはただただ驚いていた。

側で戦闘を見ていたユーノもふと疑問を口にする。

「今の…Bフォームの剣とHフォームの砲台を同時に…」

半年近く一緒の世界にいたので、バレルのデバイスの事も

大体はわかっていた。イクスブラウは

違う武装を使用するには、フォームの切り替えが必要な筈である。

いや、そもそも最初の時点で剣を持ったまま

Gフォームのブースターを装備していたし

その状態でTフォームの遠隔操作兵器も使用していた。

(これは一体…)

と、そんな風にユーノが考えていると

先程の呟きが聞こえたのか、

バレルはユーノの方を向いて、微笑を浮かべて言った。

「そうだよ、これがこの半年の間に

ベルクトのグレイブアークと一緒に開発・改良していた

僕の新しいデバイス…

異なった武装の同時併用…それを可能にして

フォーム変更の隙を無くし、戦術の幅を広げた…」

そこまで言ってヴィータに向き直り、表情を引き締めて一言叫ぶ。

「イクスブラウ・M^{マスター}フォームだ!!」

言い終わった後、どこかご満悦な表情になるバレル。
辺り一帯が微妙な空気に包まれる。
ユーノはそんなバレルを見て引きつった笑いを浮かべていた。

しばらくして、そんな空気を打ち払うかのようにヴィータが呟く。

「マスターだか、何だか知らねえが…」

ヴィータは魔法陣を展開し、カートリッジロードを行なう。

「邪魔するなら誰だろうと…ぶっ潰す!!」

グラーファイゼンをラケーテンフォルムに形態変化

そして後方のジェットを吹かし、回転を始める。

それを見たバレルも表情を再び引き締め、そして呟く。

「プラスマコーティング機動…」

バレルの体が光に包まれる。

そして剣を構え、背中のブースターに火を灯す。

「見せてやるさ…Mフォームだからこそ出来る

新しい攻撃方法を！」

マリナと相対するベルクト、フェイトの2人
マリナは表情が歪み、眉間にしわさえ浮かべている。
そんな彼女を無表情で見返すベルクト。
対象的にどこか困惑した表情で見るフェイト。

しばらくして、マリナが口を開いた。

「あなた…今度は一体何を企んでいるの？」

マリナの声を聞いて、ベルクトはピクリと反応する。

「その声…前にも会ったな…オリジナルの
ガンアークのパイロットか。」

「そうよ、覚えていてくれて光栄だわ。」

全く感情のこもっていない声でマリナはそう返答する。

「それで、企んでいるとはどういう事だ？」

「とぼけないで!!」

強い口調でマリナは叫び、声を強めて続ける。

「あなたが、前にいた世界で何をしようとしてたかは
忘れてないわよ！何故生きているかは知らないけど

普通ならあなたが時空管理局の人間と

共にいたりする筈が無いわ！」

マリナは最初から疑ってかかっていた。

目の前にいるのは、かつてバルドナ・ドライブを用いた
地球衝突事件の黒幕なのだ。

そんな人間がすなりと、時空管理局のような
組織に身を置くはずが無い。

前の世界であれだけの事をしでかしたのに
再び別の世界で混乱を巻き起こすつもりなのかと
そんな風にマリナは考えていたのだ。

「違う…」

「?…フェイト?」

すると、横でそのやり取りを聞いていたフェイトが前に出る。
その表情には冷たい怒りが宿っていた。

マリナはフェイトの方を見ながら言った。

「何故あなたたちがその男を仲間にしてるかは知らないけど…
気をつけなさい…そいつはとても危険な男なのよ。」

「違う!!」

怒りの形相でフェイトは叫ぶ。

そんな彼女を見て、マリナはたじろいだ。

「ベルクトは…もう世界の滅亡なんて望んでない!

ちゃんと過去と向き合って、反省して

新しい道を歩みだしている、私の助けになってくれるって
言ってくれた、私の大切な…大切な仲間なんだ!!」

一息にフェイトは叫ぶ。

マリナの会話内容で、フェイトは目の前にいるこの女性が
恐らくは、ベルクトが前にいた世界の人間なのだろうと察していた。
前の世界でしかした事についてもわかっている。

だが、それをわかっていても彼女の言葉は許せなかった。

確かに、ベルクトは世界滅亡などという

とんでもない目的を掲げていた人間だが、今は違う。

自分達の助けになってくれて
そして、自分に新たな道を歩むきっかけを与えてくれた。
自分が心から愛している…大切な人なのだ。
いくら事情を知らないとはいえ
自分の大切な人を真っ向から否定されるのには
耐え難い苦痛を感じていたのだった。

フエイトの言葉を聞いてマリナは困惑する。

（大切な仲間…この男が…一体どういう事！？）

そんな風に考えている時、今度はベルクトが口を開いた。

「聞いている通りだガンアークのパイロット。」

俺は別にもう、物騒な事など考えていないさ。

それに、理由も言わずに突然襲い掛かってくるような
連中に加担している、今の貴様が言える立場か？」

「……………」

冷たい表情でそう言われ、マリナは顔をしかめる。

「信じられないというなら向こうを見てみる。」

貴様が見知った人物がもう1人いる。」

「え…？」

言われてマリナはベルクトが向いた方に振り向く。

そこにいるのはヴィータと相対する

目の前のこの男と瓜二つの青年。

「…!! バレル!？」

自分がかつて共に戦っていた仲間の姿を目にして、マリナは驚愕する。

この場にいる事もそうだが、ベルクトと一緒にいる
こっちの事実の方が衝撃的だった。

驚くマリナを目にしながら、ベルクトは長身砲を構える。

「さて、いい加減お喋りは終わりにしようか…」

貴様らがしている事は単なる犯罪だ。

捕縛して、詳しい事情を聞かせて…」

「2対1とは、気に食わないな。」

別の方向から声が響く。

ベルクトがその方向に振り向くと

眼前には剣を振り下ろそうとしているシグナムがいた。
とっさにベルクトは長身砲を前に出し、それを防ぐ。

シグナムは攻撃をやめ、一旦マリナの隣に降り立った。

「マリナ、お前がああ男と何があったかは知らないが

我らが主の為に、この場を引く事は出来ない

それはわかっているな？」

「ええ…もとから引くつもりなんてないわ。」

固い表情でそう言うシグナムに対して

マリナも同様の表情で頷く。

そして、目の前の敵に向かって向き直り、武器を構えた。

（状況は一对一か…）

ベルクトはそう考えて、そしてフェイトに尋ねる。

「フェイト、苦しいかもしれないが…

あの剣士の方を抑えられないか？

俺はその間にもう1人の方を何とかする。」

言われてフェイトは少し考えて、こう返答する。

「相手もかなりの実力者だけど…何とかしてみるよ。」

それを聞いて、ベルクトは少し笑みを浮かべて言った。

「わかった…そっちは任せる。

それから…さつきはありがとう…」

「…！！」

ベルクトの言葉に驚き、フェイトは少し頬を赤くする。

ベルクトはすかさずグレイブキャノンをマリナに向かって発射する。
マリナをそれをプレートから発生させたシールドで防ぐ。

「ハアッ！！」

ベルクトはマリナに向かって突撃し、長身砲をそのまま振り下ろす。

マリナはそれを回避して、後方に飛び去っていく。

ベルクトもそれを追って飛んでいった。

再び相対するシグナムとフェイト

「私に一对一を挑む…その気迫は褒めてやろう。」

剣を構えながらシグナムは笑みを浮かべて言う。

そんな彼女を見て、フェイトも表情を固くし
バルディッシュに魔力刃を形成してそれを構えた。

海鳴市上空で繰り広げられる激戦は
まだ終わりを告げそうにない…

第7話（後書き）

ということで海鳴市での戦闘続きです。

その割には会話シーンや心情描写ばかりで話があんまり前に進んでいませんが…

久しぶりの更新なのに、期待していた方本当にすみません…

ユーノの引きつった笑い

これ実は執筆終了後の作者の心境だったりします。

マスターはどうかと思ったんですが…

下手に小難しい中2臭い英単語当てるよりは

ストレートにいった方がいかなと思った結果です。

それでもやっぱり恥ずかしい…自分の発想力の無さが…（泣）

能力に関しては、前作の時に

虚空さんから頂いた意見を参考に思いついた物です。

下手に完全新規のオリジナルの武装を当てはめるよりはわかりやすくかつ強力であるというのをコンセプトに。

想像と違う！

とか思われたら本当にごめんなさい…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第8話

ヴィータはハンマーの回転をどんどん強めていく。

対するバレルも剣を前方に構え、ブースターに魔力を溜めていく。

「食らいやがれエエエエエ！」

そしてヴィータは咆哮と共に、バレルに突撃していく。

「……！」

それを見て、バレルも固い表情のまま

背中中のブースターの魔力を解放、一気に火を吹かす。

「ブースト……！！！」

そしてハンマーを構えるヴィータに向かって突撃した。

「スラッシュ……！！！」

両者が凄まじい勢いで、互いの武器を激突させた。

ガァァン！！

巨大な衝撃音が響き、辺りに突風が舞う。

「ぐぎぎぎぎ……！！！」

「ぐっぐっぐ……！」

歯を食いしばりながら至近距離で退治するヴィータとバレル。
互いの武器がキリキリと音を鳴らしながら揺れる。

だが、徐々にヴィータの方が押されていった。
（クソッ……魔力を使いすぎた……このままじゃ……）
なのは、フェイト、ユード、そしてバレルと
連戦を続けてきたヴィータは大分魔力を消費していた。
普段の彼女ならともかく
今の彼女には、バレルの攻撃を受け切るだけの
力が残っていなかったのだ。

「ハアアアア！！」

自分が押しているのを好機と見たバレルは
ブースターの勢いを更に強める。

そして剣を振り切り、ヴィータを押し返した。

「あっ！」

ヴィータは後方に飛ばされていき、完全な無防備となってしまう。

バレルは一度後方に1回転して体勢を立て直す。

そしてすぐさま両脛に剣を現出させ

再びブースターに火を灯した。

「一撃だけだと思うなっ！！」

そう言いながらバレルは、突っ込みながら足を振り上げ

後方に飛んでいくヴィータに向かって右脛の剣を使い

彼女の体の側面に、思い切り蹴りをかました。

「うああああ！！！」

ブースターによって勢いの増した蹴りの威力は半端ではない。
追撃によって更に勢いを増しながら、ヴィータは落下していく。

すかさずバレルは両脛と手持ちの剣を収納し
左腕に巨大な盾を現出させる。

「ステイルワイヤー!!」

盾の先から大鋏が発射される。

それを見てヴィータは目を見開いた。

だが、鋏がヴィータを捕らえる直前で

それは、黄色い魔力刃によって切り払われる。

「なっ……」

予想外の事態にバレルは驚く。

「大丈夫かヴィータ!!」

「タツ……ク……?」

鋏を切り払ったタツクは、そのまま落下してきたヴィータを受け止める。

ヴィータは既に汗だくで、かなり苦しそうだ。

そんな彼女を見ながらタツクは厳しい表情で言った。

「全く……無茶はするなと言っただろう?」

「……………ごめん。」

少し表情を暗くし、ヴィータは珍しく素直に謝る。

そんな様子に驚きながらも、タツクは近くのビルの上屋上に降り立つ。

「ここで少し休んでいろ、あいつは俺が何とかする。」

「……………」

ヴィータは黙っていたが、頷いて返答した。

それを見たタックも笑みを浮かべて頷く。

そして、バレルのいる方に向かって飛び上がった。

対峙するタックとバレル。

バレルはタックの姿を見て、表情を険しくする。

（あのカラーリング…それにリングパーツ…もしかして…）

「ガン…アーク…？」

心内で思った事がふと声に出る。

だが、それを聞いたタックは目を見開いて驚きを見せる。

「！！…お前、ガンアークを知っているのか！？」

落ち着きの無い表情でそう叫ぶタック。

「ああ…知っている…つまりあなたも。」

「同郷者…というわけか。」

互いに表情を険しくしながら、そう呟いた。

同じ頃、別の場所ではベルクトとマリナが戦っていた。
「フッ……」

長身砲をマリナに向かって振り下ろす。

マリナはそれを上空に飛び上がってかわす。

「ホーミングシューター……」

そして左手を翳し、4つの赤い魔力弾をベルクトに向かって放つ。

「スプリットガイドキャノン……」

それを見たベルクトも、両肩の小型の砲台から

4つの紫色の魔力弾を発射、それを誘導して

多方向から襲い掛かる、赤い魔力弾を全て撃ち落とす。

魔力弾同士がぶつかり合い、辺りに爆煙が舞う。

それを見たマリナが瞬時にベルクトの背後を取る。

「……！！」

「はあああ……！」

マリナは左手の魔力刃、アークブレードを振るう。

ベルクトは驚きながらも、紙一重でそれを下にかわす。

そして距離を取りつつ、グレイブキャノンを発射する。

マリナはそれをシールドで難なく防いだ。

（あの女……強いな。）

ベルクトは驚いていた。

マリナの外見を見て、恐らくは自分と同じ

アークシリーズの機体をデバイス化した物だと思っていた。

だが、ロボットと魔法の戦闘は丸つきり違つと踏まえても彼女の实力は予想以上であつた。

それは、以前バルドナ・ドライブの近くで

彼女がガンアークを駆っていた時にも感じたものだ。

少なくとも周辺にいる他の仲間との实力はほぼ互角だろう。

（ある程度の場合数は踏んでいるという事か…）

別の場所では再びシグナムとフェイトが戦っていた。

「ファイア!!」

フェイトはシグナムに向かってフォトンランサーを放つ。

シグナムはそれを後方に飛び退きながら

シールドを展開してそれを防ぐ。

「ハアッ!!」

剣を構え、フェイトに向かって突撃し

彼女に向かって何度も斬撃を放っていく。

フェイトは押されながらもバルディッシュでそれらを防いでいた。

斬撃を一旦止め、フェイトと距離を取った後、シグナムは言った。

「なかなかやるな…私はベルカの騎士

ヴォルケンリッターが将…シグナムだ。」

そして剣を前方に構えながら続ける。

「そして我が剣、レヴァンティン…お前の名は?」

フェイトもバルディッシュを構えながら固い表情で答えた。

「ミッドチルダの魔道師、時空管理局囑託

フエイト・テストロッサ。この子はバルディッシュ。」

「テストロッサ…それにバルディッシュか。」

どこか楽しそうな笑みをシグナムは浮かべる。

そして直後、2人は再び激突した。

互いに相対したまま静止していたベルクトとマリナ。

ふとベルクトは彼女に尋ねる。

「ガンアークのパイロット。貴様は何が目的だ？」

だが、マリナは険しい表情のまま返答する。

「悪いけど…時空管理局の人間…いや

それ以前にあなたに言う事など出来ないわ。」

その言葉を黙って聞いているベルクト。

そして彼女はライフルを構えて続けた。

「それと…私はガンアークのパイロットなんて名前じゃない

私はマリナ、マリナ・カーソンよ。」

直後ライフルから発射音が3回鳴り響く。

合計24の光が多方向からベルクトに襲い掛かる。

「クッ…」

ベルクトは縦横無尽に飛び回りながらそれらを回避していく。

だが、マリナの攻撃は止まらない。

マリナは更にトランスユニットを展開し

魔力弾を大量に射出していく。

「チィッ…!!」

四方八方から襲い来る魔力弾を回避し続けるのに
業を煮やしたベルクトは

多少の損傷は覚悟の上で、マリナに向かって突っ込んだ。

魔力弾が数発ベルクトに直撃していく。

「ッ…!!」

バリアジャケットがあるとはいえ

やはりダメージはそれなりに来る。

だが、それを気にせずベルクトは

驚いているマリナに向かって長身砲を振り下ろす。

「そう、同じ手を何度も!!」

先程と同じようにマリナは上に跳んでかわす。

それを見たベルクトはすかさず肩の大型の砲台を構える。

「スカーレットキャノン。」

砲台から大きめの紫色の魔力弾が発射される。

マリナはそれをシールドで防ごうとするが…

「甘いな…」

ベルクトが呟く、直後魔力弾は8つに分裂した。

「分裂…!!?クッ…フィールド!!」

分裂した魔力弾が様々な方向から襲い掛かる。

マリナは両肩のプレートの羽パーツを広げ

自分の周囲に防御フィールドを展開し、それらを防いだ。

「迂闊だったわ…けど！」

攻撃を防ぎきったマリナが再びライフルを構えようとする。

だが、いつの間にか彼女の両手足の周りに黒い光が現れていた。

「！…これは…」

気づいた時には既に遅かった。黒い光は

そのままリング状になり、彼女の両手足を拘束した。

「シェイプバインド…フェイトからバインドの

魔法を教えてもらっておいで正解だったな。」

その眼下には、左手を前に翳したベルクトがいた。

「クツ…よくも…」

「じつとしている…話は後でたづねり聞かせてもらう。」

悔しげに歯を食いしばり、自分を睨むマリナを置いて

ベルクトは飛び去っていった。

（ともあれまずはこの結界を何とかせねばな。）

「うおおおおお！！」

タツクがバレルに向かって魔力刃を振り下ろす。

バレルはそれを下方向に飛び退いて回避する。

続けさまにタツクはライフルから魔力弾を連射する。

「クツ！」

バレルは左腕の盾でそれを防ぐ。

だが、更にタツクは背後にまわって、魔力刃を振るう。

バレルは再び盾を構えてそれを防ぐも

反応が遅れたために体勢を崩されてしまう。

「ハッ！」

体勢の崩れたバレルに向かってタツクは蹴りをかます。

「ぐあっ！...」

まともに攻撃を食らい、苦しい表情と声を出すバレル。後方に落下しながらも踏み止まり、再びタツクを見る。

「デイスパーシヨンダガー！！」

そして両肩から小型の剣を現出させ。

それをタツクの周辺に飛ばし、魔力弾を発射させていく。

発射される魔力弾をかわしながら、タツクは叫ぶ。

「この程度で！！」

攻撃を掻い潜りながら的確にライフルを発射し

2つの飛行物体を撃ち落とした。

（この人…並の実力じゃないな…！）

デイスパーシオンを落とされて、バレルはそう思っていた。

自分も魔法戦闘を始めてから半年になる。

ある程度の実力についてはきたつもりだった。

だが、目の前にいるこの男は

自分と同じ世界の人間であるにも関わらず

自分を魔法の戦闘で押している。

下手に意識なんかしたりしたら、すぐにやられるだろう。

（なんてこった…折角見つけた同郷者なのに…）
対するタックも困惑していた。

ようやく自分と同じ世界の人間を見つけたと思ったら
よりにもよって、今の自分達にとっては都合の悪すぎる
時空管理局に所属している魔道師であつた。

しかも、今まで戦ったそんじょそらの雑魚と違い
下手に油断すれば、自分でも負けかねないほどの実力者だ。
（なかなかうまくいかないもんだな…）

ある程度距離を取った状態で、バレルが尋ねる。

「…あなた達は何が目的でこんな…」

「悪いけど…君が管理局の人間である以上、教えられない。」

ライフルを一旦降ろして、タックは答える。

バレルは更に尋ねる。

「あなた以外に、僕達の世界の人はいるんですか？」

「ああ、1人マリナ・カーソンという仲間がな。」

今頃他の奴と戦っていると思う。」

「えっ！マリナさんが！？」

その名前を聞いて驚くバレル。

それを疑問に思い、今度はタックが尋ねた。

「マリナを知っているのか？」

「はい、僕もUCE所属の軍人で

あの人は、先の大戦と一緒に戦ってくれた人なんです。」

「ああ…」

それを聞いてタックは少し引きつった笑いをする。

（俺を無理矢理吊るし上げて、ガンアークを持っていた時か…
道理でガンアークの事を知っているわけだ。）

火星の後継者のマクロス掌握事件の際に
かなり強引な方法で自分にガンアークの使用許可を上に出させ
すぐにいなくなってしまうたのは、まだ記憶に新しい。

真剣な表情に戻し、再びタツクは尋ねる。

「君達は、元の世界に戻る方法を知っているか？」

「いえ、僕も管理局もまだ、何の手掛かりも掴んでいません…」
「そうか…」

少し沈んだ表情でバレルは答える。

タツクもそれを聞いて、同様に表情を曇らせる。

だがすぐに表情を引き締め、

魔力刃を形成したライフルを構えながら言った。

「なら…今この場で引くわけにはいかないな！」

そう、自分達を救ってくれたはやての為に

自分と共に暮らしてきた仲間のためにも

例え、相對するのが同じ世界の人間とはいえ

仲間のために引くことなど出来なかった。

バレルも右肩から剣を出し、それを構えながら言った。

「それは、僕も同じです…」

自分を救ってくれた管理局の人間や

こつちの世界で知り合ったなのはやユーノといった仲間達

そして、自分の愛する人であるフェイや

こつちの世界で再開し、共にいる事が出来るようになったベルクト
沢山の人達の為に、彼もこの場を引くことなど出来ない立場にあ
った。

「…俺はタツク、タツク・ケプフォードだ…君は？」

「バレル・オーランドです…」

互いに己の名を名乗り、武器を構える。

「うおおおおー！」

そして互いに叫びながら、2人は激突した。

激闘が続く海鳴市の上空を見上げながら

なのはは、ユーノの作った結界の中で

苦しげに立ち上がり、前に進む。

「助けなきゃ…私が…みんなを助けなきゃ…！」

そしてレイジングハートを構え、周囲の仲間にな話を飛ばす。

（フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん、バレルさん、ベルクトさん…

私が結界を壊すから…タイミングを合わせて転送を！）

それを聞いていた仲間達が一斉になのはの方に振り向く。

（なのは…！？）

（なのは…大丈夫なのかい？）

（……………）

（なのは、今の君の状態じゃ…）

ユーノ、アルフ、バレルがなのはに向かって念話を飛ばす
フェイトは無言で心配そうな視線をなのはに向けていた。

（大丈夫…スターライト・ブレイカーで…）

（大丈夫なわけないだろう。）

直後なのは頭に別の念話が響く。

驚いたなのはが辺りを見回すと、すぐ隣にベルクトが降り立っていた。

「ベルクトさん…」

「今のお前とレイジングハートには負担が重過ぎる。

ここは俺に任せてもらおう。」

言いながらベルクトは長身砲を上空に構え

足元に赤褐色の巨大な魔法陣を展開し、魔力を集中していく。

（ユーノ、アルフ、聞いての通りだ、俺が結界を壊すと同時に転送できるように構えておけ。）

「なんなんだい…あのデタラメな魔力は…？」

「あれは…なのはのスターライト・ブレイカーに匹敵するじゃないか…」

ベルクトに貯まっていく魔力を見て

ユーノとアルフは驚きを浮かべる。

フェイトとバレルは驚いた様子は無く、冷静にその場を伺っている。

「…よし！」

最大出力で放つ為の魔力が貯まりきり

ベルクトは上空に向かってそれを放とうとした。

「……………」

だが、発射直前でベルクトは目を見開き、動きを止める。

「あ、ああ…ああ…！」

ベルクトの腹部から何者かの手が出ていた。

その手には光の玉が握られている。

「ベルクトツツツ…！」

フェイトが慌ててベルクトの下に駆け寄ろうとする。

だが、その行く手をシグナムが防いだ。

「しまった…外しちゃった…！」

離れた位置で闇の書を宙に浮かせながら

クラールヴィントを構えたシャルマルが呟く。

すぐ隣に居るのは魔力を奪うつもりが

間違えてベルクトのリンカーコアを掴んでしまったのだ。

（でも…この魔道師も、かなりの魔力を…なら！）

表情を引き締め、シャルマルは予定を変更し

ベルクトのリンカーコアを奪いにかかった。

「リンカーコア捕獲…蒐集開始！」

手を翳し、ベルクトのリンカーコアの魔力を

闇の書に注ぎ込んでいく。

「ああ…くっ…！」

シヤマルの腕に掴まれた光が段々と小さくなっていく。

だが、ベルクトは体がふらつかせながらも

苦しげな表情で長身砲を構え、そして叫んだ。

「グレイブ…キャノン……マキシマムシューツッ…！」

上空に向かって巨大な紫の閃光が発射された。

そしてその凄まじい破壊力によって結界が破かれていった。

戦艦アースラ、ブリッジ内

「結界、破れました！！

「映像、来ます…！」

オペレーターが慌てながら叫ぶ。

そしてモニターが砂嵐から変わり、海鳴市上空を映し出す。

「な、何コレ！？どういう状況！？」

椅子から立ち上がりながらエイミィが叫ぶ。

「これは…こいつらは…」

光景を見ていたクロノが驚いた様子で呟く。

そしてモニターに映る、ある1人の女性を見て
フェイも同様に驚きを浮かべながら呟く。

「……！……何で、カーソン少尉……一体何が……」

グレイブキャノンを撃ち終わった後、ベルクトはバツタリと倒れた。

「ベルクトさん……！」

なのはが叫ぶ。

直後、フェイトがベルクトの近くに降り立つ。

「ベルクト！ベルクトッ！しっかりして……！」

ベルクトの体を抱えながら、フェイトは涙声で叫ぶ。

だがベルクトは答えない、どうやら気絶しているようだ。

（結果が抜かれた……離れるぞ！）

（心得た……）

（シャルゴめん……助かった。）

（うん……一旦散って、いつもの場所でまた集合！）

互いにそう会話した後、守護騎士の4人は上空に飛んでいった。

だがタツクとマリナはその場を離れなかった。

ベルクトが倒れた事によって、マリナのバインドは解除されていた。

そして2人はベルクトが倒れているビルの近くの上空まで来て彼の周りに集まっている他の人物達を見つめていた。

「ッ……!!」

涙目のまま、フェイトは上空にいるマリナを睨む。

そんな彼女を見てマリナは思っていた。

（……………やっぱり、間違いではないのかもしれない…）

フェイトの言葉をマリナは最初信用していなかった。

だが、今のベルクトの周りの人間の態度を見ると

そんな考えも薄れてきてしまう。

世界を破滅に導き、他者を平気で利用するような人間がこうも慕われるとは到底考えられない。

（でも…私達は…）

だが、自分達にも譲れない物があるのだ。

マリナは少し寂しげな表情になりながら一言呟く。

「……………ごめんなさい。」

そしてタツクとマリナもその場を離脱していった。

アースラブリッジでは様子を見ていたリンディが局員達に向かって指示を出していた。

「いけないわ…急いで医療班を飛ばして!!」

それから、本局内の医療施設の手配を!!」

局員の1人が叫ぶ。

「ダメです…ロック外れました…」

「ああもうっ!!」

目の前のボードをバンと叩き、エイミィは悔しげに呟く。

「ごめんクロノ君…しくじった…」

「……………」

「……………クロノ君？」

クロノは映像を見つめたまま答えない。
エイミイが顔を上げて首を傾げる。

クロノの視線はシャマルの抱える闇の書に釘付けになっていた。

「第一級搜索指定遺失物、ロスト・ログア…闇の書…」
「クロノ君…知ってるの？」

「ああ…少しばかり…嫌な因縁があるんだ…」
エイミイの質問に固い表情でクロノは答える。
彼の手はギリリと力強く握り締められていた。

「ベルクトさん…」
「ベルクト…ベルクト…」
なのはが心配そうに呟く。
フェイトは気絶したベルクトを抱えながら
涙目で必死に呼びかけ続けていた。

「……どうして、こんな事ばかり、起こっちゃうのかな…」
バレルはタックとマリナが飛び去った夜空を見つめながら

寂しげな表情で呟くのであった…

第8話（後書き）

ということでしょうか。戦闘終了です。

正直今までで一番自信が無いなあ…

やっぱりこれだけある程度の数があると

各人ごとの戦闘描写がちゃんと出来てくるとも不安だ…

あと…私は全国のフェイトファンを敵に回したりしてないですよ？

バレルの新技その1

Gの機動力を活かしたBの突撃攻撃

グイータのラケーテンハンマーを見ていて、ふと思いついて…

単純明解すぎましたかね…？

リンカーコアを奪われたのはなのではなくベルクト

…実はちゃんと意味があったり無かったり…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第9話（前書き）

アースラ内で語られる今回の事件の詳細

第9話

戦いが終わった後、ベルクトは時空管理局本局に搬送された。検査の結果、魔力源であるリンカーコアの異様な縮小以外目立った外傷も特に無いので、すぐに良くなるとの事だ。

現在、医務室にはベットの端に座るベルクト

そして、彼を取り囲むように、なのは、フェイト、バレル、そしてフェイがいた。

「ベルクト…本当に大丈夫なの？」

「問題は無い、しばらくは魔法が使えないそうだが

リンカーコアの回復も始まっていると担当医も言っていたしな。」

心配そうな表情で尋ねるフェイに

ベルクトは冷静な口調で答える。

次になのはが、暗い表情で言った。

「あ、あの…ごめんなさい、折角の再開がこんな…」

「そんな…全然平気だよ…それより

なのはやベルクトの方こそ…」

なのはの言葉を聞いて、フェイトが申し訳無さそうに呟く。

「私は平気、フェイトちゃん達のおかげだよ。」

「敵があのような手段を用いてくるなど

想定外だったんだ。お前1人が気に病む必要はないさ。」

フェイトに笑顔を向けながらなのはとベルクトは言う。

だが、フェイトの表情は暗いままだ。

そんな彼女を見て、バレルが歩み寄り

彼女の肩に手を置いてこう言った。

「フェイト、確かになのはやベルクトは君にとって大切な人かもしれない。

でも、それは僕達も同じだ。

みんななのはを助けたかったから

僕もベルクトも現場にかけつけたんだ。

いや、寧ろ君達より遅れてしまった僕達の方こそすまなかったと思ってるくらいさ。」

「……………」

バレルは微笑を浮かべながら続ける。

「だから、君ばかりが抱え込む必要はない。

なのはもベルクトも、命に別状は無いんだからもつと前向きに考えないと…」

「……………うん。」

バレルの言葉を聞いて、フェイトは気持ちりが軽くなり表情を少し和らげた。

そして、バレルが険しい顔になりながら更に口を開く。

「しかし…あいつらは一体何だったんだ？」

いきなりなのはに襲い掛かったと思ったら

ベルクトの魔力を奪って逃走…

それに、俺達と同じ世界の人まで…」

「カーソン少尉と、それともう1人…

一体何が目的であんな…」

「いずれにせよ、今後はその件を含めて管理局で詳しく調査する事になるだろう。

これだけの大事だからな。」

真剣な表情で悩むバレルとフェイに対して
冷静な口調を崩さぬまま、ベルクトは答えるのだった。

しばらくした後ベルクト達は此度の戦いで破損した
レイジングハートとバルディッシュの修理が行なわれている部屋に
いた。

そこには先程のメンバーに加えて、ユーノ、アルフ、クロノもいる。
ユーノは両方のデバイスの破損状況はあまり良くない事を話す。
それを聞いて、なのはとフェイトは表情を暗くする。

しばらく沈黙が続いた後、アルフが尻尾を揺らしながら言った。
「そういえばさあ、あの連中の魔法って何か変じゃなかった？」

「あれは多分、ベルカ式だ。」

アルフの疑問にクロノが答える。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ。」
目の前のモニターから目を離して、ユーノが続ける。

その後クロノが更に説明をする。

「遠距離や広範囲攻撃がある程度度外視して
対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は騎士と呼ばれる。」
それを聞いて、今度はフェイトが口を開く。

「確かに、あの人ベルカの騎士って言うてた。」

「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装だ。」

儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に爆発的な破壊力を得る、物騒な代物だな……」

「なるほどね……」

クロノの一通りの説明を聞いて、アルフが険しい表情で呟く。

再びの沈黙、そして今度はベルクトが疑問を口にした。

「そもそも、今回の件と、闇の書というのは

一体どういう関係があるんだ？」

それを聞いて、クロノは少し表情が強張ったがベルクトの疑問に答えた。

「ロスト・ロギア、闇の書の最大の特徴はエネルギー源にある。

闇の書は魔道師の魔力と魔法資質を奪う為にリンカーコアを食うんだ。」

「つまり、彼らは最初、なのはの魔力が目的で

彼女を襲撃し、最終的にベルクトのリンカーコアを奪ってそれで逃亡したって事？」

「ああ、恐らくそれで間違いない……最近地球で起こっている魔道師襲撃事件も、恐らくは彼らの仕業だ。」

途中でバレルも質問し、クロノは的確に答えるそして更に説明を続けた。

「闇の書はリンカーコアを食うと

蒐集した魔力の量や資質に応じてページが増える。

最終ページまで埋める事で闇の書は真に完成するんだ。」

「完成すると……どうなるんですか？」

「少なくともロクな事にはならない…」

不安げに尋ねるフェイトに、険しい表情でクロノは答える。

「だが、それより疑問なのは…そんな危険な代物に君達と同郷者が関わっているという事だ。」

クロノはベルクト達の方を見てこう言った。

だが、ベルクトは冷静な口調で切り返す。

「魔法と全く関わりが無い世界の人間が

関与している以上、何か裏があると考えた方が妥当だな。」

「そうね…カーソン少尉が、そんな危険な物の完成を真に望んでいるとは到底思えないし…」

顎に手を置きながらフェイトが呟く。

「あの2人…最後に何か、思いつめてるような表情をしてた…」

きつと、同じなんだと思う、前のフェイトちゃんやベルクトさんと同じで

きつと、人に話せないような事情が…」

続いてなのはが真剣な表情で言った。

「だから…無理矢理にでも捕まえて、聞きだすしかないな。折角見つけた同じ世界の人間なんだから…」

争いあうなんて、そんな悲しい事は避けたいからね。」

なのはの言葉を聞いて、バレルも真剣な表情で言った。

その後、クロノがフェイトに近づいて言う。

「フェイト、そろそろ面接の時間だ。

後、ベルクト、君もついてきてくれないか？」

「ああ。」

クロノに連れられて、フェイトとベルクトは部屋を出た。

「失礼します。」

フェイトとベルクトを連れて、クロノは部屋に入った。

部屋の中には管理局の制服を着た、温和な感じの老人と襟の長いコートに顔を埋め、帽子を目深に被った男がいた。

「クロノ、久しぶりだな。」

柔らかい笑みを浮かべて、温和そうな老人

・時空管理局顧問官、ギル・グレアムは答えた。

「あの、失礼ですが…提督、そちらの方は？」

クロノは見覚えの無い、コートの男を見てグレアムに尋ねた。

フェイトは困惑しながら、ベルクトは胡散臭い物を見るような目でコートの男を見つめていた。

まあ、確かにこの男の風貌を考えれば無理もないが…

「ああ、すまない…もう面接の時間でしたね。

ではグレアム提督、また後ほど…」

そう呟いて、コートの男は足早に部屋を出て行った。

その後、グレアムが疑問に答える。

「クロノにはまだ紹介していなかったね。

彼はデイル・クルーシブル君だ。

私の古い友人でね、デバイスの開発、改良を

主に行っている優秀な研究者だよ。」

一通りの説明をして、グレアムは笑顔を浮かべた。

フェイト、クロノ、ベルクトはソファに座り
グレアムと対談していた。

「保護監察官と言っても、まあ形だけだよ
リンディ提督から先の事件や、君の人柄は聞いているからね。
とても、優しい子だと…」

「…ありがとうございます。」

笑顔でそう言われて、フェイトはお礼を言う。

「ベルクト君は、地球の人間だったね…」

何でも、フェイト君を助ける為に

一生懸命に戦ってくれたと…」

「ええ…その通りです。」

腕と足を組みながら、どこか素っ気無い感じでベルクトは答える。

「ベルクト…！もつと礼儀正しくだな…」

「いや、いいんだよクロノ。」

ベルクトの態度を見てクロノが怒鳴る。

グレアムはそれを気にしていない風に制した。

対談はしばらく続いたが、グレアムの言葉に
真剣に受け答えしていたフェイトに対して
ベルクトは終始、素っ気無かった。

そんな彼をチラチラと横目で見やりながら
フェイトは対談中、ベルクトの態度に困惑しっぱなしであった。

同時刻の八神家

はやてはリビングでヴィータやザフィーラと一緒にテレビを見ながらくつろいでいた。

「はやてちゃん、お風呂の準備出来ましたよ。」

「うん、ありがとう。」

部屋に入ってきたシャマルに対して、

はやては笑顔で返答する。

「ヴィータちゃんも、一緒に入っちゃいなさいね。」

「はい。」

ヴィータも同様に返事をする。

「明日は朝から病院だからな

あまり夜更かしはするなよ。」

「はい。」

ソファに座って雑誌を眺めていたタックが、はやてに忠告した。

はやて達がリビングからいなくなった後

シグナムの隣に座っていたマリナが切り出す。

「今日の戦闘？」

「聡いな、その通りだ。」

読んでいた新聞を置き、シグナムは服をめくり上げ、腹部の傷を見せる。「お前の鎧を打ち抜いたか…」

ザフィーラが少し驚いた感じで呟く。

「澄んだ太刀筋だった。良い師に学んだのだろうな。」

武器の差が無ければ、少々苦戦したかもしれん。」

「あなたが苦戦する程の相手とはね…」

険しい表情でマリナはそう呟く。

今度はザフィーラが尋ねる。

「お前とタツクは、同じ世界の人間と戦っていたみたいだが…」

「ええ…少しばかり因縁があったのよ。結果はああったけどね…」

先の戦闘で、ベルクトのバインドに捕まってしまったのを思い出しマリナは苦々しい表情になる。

「いずれにせよ、悔りは禁物というのは確かだな。」

タツクが真剣な表情でそう語る。

すると、シグナムが少し表情を暗くして言った。

「2人共すまないな…ようやく見つけた同じ世界の人間を…」

「あなたが謝る必要なんてないわよシグナム。」

マリナがフツと息を漏らしながら言った。

「こんな形になってしまったとはいえ

今の私たちの優先順位ははやての事なんだから

同郷者が敵だというなら、私は戦うわ。

細かい事は、この件が片付いてから考える。」

「何より、今更お前達との関係から距離を置くななんて出来ないさ。

言うなれば、俺とマリナも今は、はやてを守る騎士なんだからな。」

「…タツク、それはちよつと臭くない？」

「そ、そうか？」

柔らかい口調で言ったタツクに対して

呆れた口調でマリナは返す。

「そんな事はないさ、寧ろ主はやての為に

そんな風に考えていてくれて、私も光栄だよ。」

2人のやり取りを見て、笑みを浮かべながらシグナムが言った。

タツクとマリナもそんな彼女を見て笑いかける。

そして4人は立ち上がって窓際に立つ。

「我らヴォルケンリッター、騎士の誇りにかけて……」
窓から映る夜空を見上げながら

シグナムは真剣な表情でそう呟くのであった。

第9話（後書き）

ということでアースラと八神家でのシーンでした

うーん…

前作と違って2側と3側で二つ描写しないといけないから
やはり話を考えるのに時間がかかる…

これは思ったよりも長引きそうだ…

如何にも怪しい新キャラ、ディール・クルーシブルが登場
今後どのような形で物語に関わってくるのか？

…まあ、賢い人はちょっと調べれば
すぐにわかると思います…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第10話（前書き）

海鳴市へと移動するアーススタッフ
一方八神家では…

第10話

翌日の早朝

目が覚めたはやては、朝食の準備をする為にキッチンへと向かう。

その途中、廊下で自室から出てくるタツクと出会う。

「おはようはやて。」

「おはよう。」

まだ眠たそうな顔で挨拶するタツクに

はやては笑顔で答えた。

「毎日毎日、本当にすまないな。」

俺達全員の食事の用意をしてくれるなんて…」

「ええよ、私は元々1人やっだし

作る量が増えたところで大して変わらへんし。」

実の所を言うと、タツクとマリナも最初の内は

食事を作るのを手伝っていたのだが

守護騎士4人がこの家に来てからしばらくして

「はやての料理の方が遥かに美味しい」

と、雁首揃えて言われてしまった以降

結局元の通りにはやてが食事を作ることになったのである。

「こんな小さいうちからこれだけの器量があるんだ

はやてはきつと将来いいお嫁さんになれるな。」

「そ、そんな…お嫁さんやなんて、そんな先の事…」

タツクの言葉に両手を頬に当ててはやては照れる。

そんな彼女の姿を微笑ましい気持ちでタツクは見ていた。

リビングに着くと、シグナムとマリナとザフィーラが眠りついているのを見つける。そんな3人を見て、はやては毛布をかけてやりその後キッチンに向かって、朝食の支度を始めた。

しばらくした後、食事を作る物音でシグナム達3人は目が覚める。

「ごめんな、起こした？」

「あ、いえ…」

振り向きながら笑顔で言うはやてにシグナムが立ち上がりながら答える。

「ちゃんとベットで寝やなアカンよ？」

風邪ひいてまう。」

「ごめんなさい、昨日はちよつと遅くまでシグナムと話し込んで…」

かけられた毛布を畳みながらマリナは答えた。

- 昨日の深夜に話は遡る。

タックが部屋に戻って寝入った後、

マリナとシグナムは2人で話しをしていた。

「…それで、タックの為に自分が犠牲になろうとしてたのか…」

「ええ…それしか方法は無いと思ってたから。」

話していたのはかつての戦いの事。

ガーディアン最終モードを使って

己が地球の未来の為に犠牲になろうとしていた時の事。

「私は、私自身の手でタックや地球の未来を救えれば

それでかまわないと思ってたの…

自分1人の命で済むなら安い物だってね…」

共にいた人間から聞かされた、地球外知的生命体の脅威

それを救うために作られた不完全な兵器、アークシリーズ

その犠牲になる道をマリナは選んだのだ。だが

「でもね、戦いの終盤でタックに言われたの…

どんな犠牲も厭わずに何が何でも生き延びようとするだけじゃ

血に飢えた闘争本能に負ける事になるだけだって…

人間が長い間培ってきた、心という物を捨てることになるって…」

最後の戦いの直前、全てに決着をつけるために

タック達アルビオン隊に挑み、そして敗れた時

全ての真実を話した後に、去ろうとした時

タックが自分に対して言った言葉。

その言葉に触れて、マリナは考えを改めたのだ

心を守るために戦う…

孤独な戦いを続けていた自分にとって

あの時のタックは一筋の光明だった。

そして、タックもまた、自分の事を真剣に

考えてくれているのだと再認識したのだ。

黙って話を聞き続けていたシグナムが真剣な表情で口を開く。

「私は個人的には、どちらも間違っているとは思わないぞ。大切な者の為に命を賭けるというのは

決して間違っている事ではない。

タツクがお前を止めようとしたのも

お前がタツクや世界の為に戦っていたのもな……」

今の自分もそうなのだから。

闇の書の呪いに蝕まれているはやてを救う為に

自分達守護騎士を道具ではなく

家族として迎え入れてくれたはやてを守る為に

全力で動き続けているのだ。

暫くの沈黙を挟み、マリナも真剣な表情でシグナムの顔を見ながら言った。

「シグナム……私が言いたいのは1つだけよ

決して無茶はしないほしいという事。

あなた達が本気ではやてを心配してるのはわかるけど

はやてもまた、私達の事を本気で心配してくれているの。

はやてを救う事は勿論だけど、その為に

私達の誰かが犠牲になったりしたら

それは本当の意味での救いにはならないわ。」

「……………」

「だから、この先何が起きようとも
自分達だけ犠牲になろうなんて思わないで
必ず、6人全員が無事なままで、はやてを救いましょう。」

シグナムは考える。

自分達守護騎士は、主の為に戦ってきた。
その為ならどんな犠牲も厭わなかった。

でも、今は違う。はやての笑顔を守るためにも
自分達は決して無茶はしてはいけないのだ。

それはこの戦いを始めた時から思っていた事なのだが。

（…無茶をしてはいけない理由が増えたな。）

マリナの言葉を聞いて、彼女もまた

自分達の事を本気で心配してくれているのに気づく。
ならば、その心遣いを無下にするわけにはいかない。

（主はやてと他の守護騎士の仲間…そして、タックとマリナ…
皆の為に、必ず無事にやり遂げねばな。）

そしてシグナムは右手を差し伸べながらこう言った。

「ああ…そうだな、必ず6人全員で…」

そしてその後も、他愛の無い雑談を続けているうちにそのまま寝入ってしまい、朝を迎える事になったのだ。

少しした後、シャマルが慌しい様子でリビングに入ってきた。

「すみません、寝坊しましたっ！」

「おはよう、シャマル。」

「ああもう…ごめんなさいはやてちゃん！」

エプロンをつけながら、バタバタと走り回るシャマル。

「おふあよう…」

「全く…もっと朝はシャキツとしろよ。」

ヴィータとタックがリビングに入ってくる。

ヴィータは髪がボサボサで、服装もだらけている。

「うわあ…めっちゃ眠そうやな。」

「こいつ…俺が起こしに行った時

ベットから落ちて床で寝てたんだぞ。」

「眠い…」

呆れた口調でタックは呟く。

ヴィータはそんな彼の言葉などお構いなしに

目をこすりながら呟いた。

そんな彼女を見て、はやてもつゝい笑みを浮かべる。

八神家のいつも通りの日常が始まろうとしていた。

・その頃管理局の人間達は地球に赴いていた。
今回の闇の書事件も、前回同様、リンディ率いる
アースラのメンバーが担当する事になった。
ただ、アースラの整備がまだ完了していないので
事件発生時の近隣、つまり地球に臨時作戦本部を置く事になった。
で、その位置というのが、なのはの家のすぐ近くのマンションであ
った。

これは、本来は地球側の人間である
なのはを氣遣った上での決定事項である。

「うわあすごい！凄い近所だ！」
「本当？」

「うん。ほらあそこが私の家！」

なのはとフェイトは仲良くベランダから街の風景を見ている。

「しかし、いいんですか？私達3人まで？」

「いいのよ、どうせ部屋は余ってるんだし

近くに居る方が、何かあった時に安心でしょ。」

リビングで部屋の整理を手伝いながらフェイは呟く。

それを聞いたリンディがにこやかに言った。

実際、この部屋だけで、フェイトやクロノ、リンディ達に加え

ベルクト達3人も一緒に住むのだからかなりの大所帯である。

「それに、ベルクト君と一緒に住みたいって

フェイトさんも言ってたしね。」

「あら〜そうなんですか〜。」

リンディの言葉を聞いて、フェイはニヤニヤ笑いながら
後ろでバレルと一緒に大きい荷物を運んでいたベルクトを見た。

「ははは、良かったじゃないかベルクト
本気で慕われているみたいで。」

「…そんな顔で言われても、本心なのか
馬鹿にしているのか判断に困るだけだ。」

荷物を降ろして、ニヤニヤ顔で言うバレルを見ながら
苦々しい表情でベルクトは呟く。

ふと、エイミイはフレット姿のユーノと
何やら随分小柄になったアルフを見つける。

「ユーノとアルフは、こっちではその姿か。」

「新形態子犬フォーム！」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと…」
「君らもいろいろと大変だねえ…」

「わあ…アルフちっちゃい、どうしたの？」

「ユーノ君もフレットモード久しぶり〜！」

なのはとフェイトは互いに嬉しそうにユーノとアルフを抱きかかえ
る。

「可愛いだろ♪」

「うん！」

アルフがフェイトの頬を舐める。

ユーノはなのはに頬擦りされて苦笑を浮かべる。

そんな光景を見ていて、ベルクト達3人は
少し微妙な心境になっていた。

「魔法って…本当に魔法って何でもアリね…」

「…君もいい加減慣れるよ、フェイ…」
子犬姿のアルフを見て。引きつった笑みを浮かべるフェイ
そんな彼女を見て、ポンと肩を叩いて呟くバレル。
（人間の女性に、狼、そして今度は子犬か…）
ベルクトはアルフの変身の多彩さに感心を覚えると同時に
3つの姿のギャップが激しすぎるのを感じ
何とも言えない心境に陥っていた。

その時玄関のチャイムが鳴った。

「誰だろう？」

「俺が見てこよう。」

そう言つてベルクトは玄関に向かう。

「こんにちわ」

「来たよー！」

来訪者はアリサとすずかであった。

だが2人はベルクトが現れると、少し戸惑う。

「なのはとフェイトの友人の、アリサ・バニングスと
月村すずかだな？」

「は、はい…」

「今2人を呼んでくるから。少し待っていてくれ。」

見知らぬ男にフルネームで呼ばれて

2人は更に戸惑いを見せる。

だが、なのはとフェイトの姿を見ると

すぐにそんな気持ちも吹き飛んだ。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

「はじめまして、っていうのも何か変かな？」

「ビデオメールでは、何度も会ってるもんね。」

「うん、でも会えて嬉しいよ、アリサ、すずか。」

2人にそう言つて、フェイトは笑顔になる。

アリサとすずかも嬉しそうに笑う。

そして、アリサとすずかはふと尋ねた。

「ところで、さっきのあの怖そうな人は誰なの？」

「フェイトちゃんのお兄さん？」

「えっ……！」

意外な答えにフェイトは困惑する。

（ベルクトが……私の……兄さん……）

頭の中でその光景を想像する。

やがて、フェイトは両手で顔を押さえて真っ赤になってしまった。

そんな彼女をアリサとすずかはキョトンとした表情で眺めていた。

その後、リンディがなのはの両親に挨拶に行くという事で

一行は喫茶翠屋にやってきていた。

なのは達はテラスの席で談笑していた。

「ユーノ君久しぶりだね」

「キュ、キュ。」

すずかに笑顔で頭を撫でられ、ユーノは少し照れる。

「ん……何かアンタの事どこかで見た気がするんだけど……」

「クウ……」

アリサに抱きかかえられながらそう言われて、アルフは戸惑う。

「へえ、それじゃあ、リンディさんとは遠い親戚で…」

「ええまあ、いろいろ複雑な事情はあるんですけどね…」

「僕もフエイも、リンディさんには随分前からお世話になっていて…」

店の中では、なのはの母親の高町桃子と

バレルとフエイが親しげに会話をしていた。

（これは……なかなか美味しいな……）

窓際の席で紅茶を啜りながら、ベルクトは一息ついていた。

「そんなわけで、これからしばらくご近所になります。よろしく願います。」

「いえいえ、こちらこそ、どうぞご贔屓に……」

リンディはなのはの父親の高町士郎に挨拶をしている。

その時、フエイト達が店の中に入ってくる。

「リンディていと……リンディさん。」

「はい、なーに？」

「あの……これ……これって……」

フエイトが持ってきた小包に入っているのは一着の制服。

「転校手続き取っておいたから、週明けから

なのはさん達のクラスメイトね。」

にこやかな笑みを浮かべてリンディは言った。

「あら、素敵！」

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。な？なのは「うん！」

「良かったわねフエイトちゃん。」

「あの…えと…はい…ありがとうございます。」

顔を赤らめながらも、フェイトは制服の入った小包をギョツと抱きかかえる。

「良かったな、フェイト。」

「これから、もっとたくさん友達を作れるわね。」

「なのは達とも、一緒にいられるしね。」

ベルクト、フェイ、バレルの3人も笑顔でこう言った。すると、リンディがふと口を開く。

「実は、もう1つ、というかお願いがあるんですけど…」

そういうリンディの視線の先に立っているのはフェイ。

「私にですか？」

「ええ、実は…」

首を傾げるフェイに対して、にこやかな笑みを浮かべるリンディ。

(……………)

だが何故だろうか、近くでそれを見ていたベルクトとバレルはよくわからない、何か嫌な予感を感じていた。

そして数日後、フェイトが転校する日がやってきた。なのは達のクラスはざわついている。

「さて皆さん、実は先週急に決まったんですが

今日から新しいお友達が、このクラスにやってきます。

海外からの留学生さんです、フェイトさん、どうぞ。」

「失礼します……」

フェイトが教室の中に入ってくる。

それと同時にクラス中に飛び交う「かわい〜」の声。

顔を赤らめ緊張し、ぎこちない動きで教卓の前に立ち

フェイトは自己紹介をする。

「あの…フェイト・テストロッサと言います。よろしくお願いします」

ペコリとお辞儀をする。クラスの皆は拍手をして

フェイトを迎え入れる。それを見てフェイトは笑顔になる。

フェイトが席に座った後、先生が再び口を開いた。

「もう1つお知らせがあります。実は今日からしばらくの間

私に代わって臨時の先生が皆さんの担任をやってくれます

何とその人も海外からやってきた先生です。」

その言葉にクラスが再びざわつく。

「それではどうぞ。」

「はい。」

明るい返事と共に、教室に入ってきたのは

丸メガネを顔にかけたフェイであった。

「今日から皆さんと一緒に授業をする事になりました

フェイ・ロシユナテです、よろしくね」

ニコニコ笑いながらフェイは自己紹介をする。

クラスのざわめきが強くなる

一方、なのはとフェイトは呆然とフェイを眺めていた。

マンションのリビングでソファに座り
ベルクトとバレルは語り合う。

「…なあ、バレル。」

「何だい…」

「アイツは今いくつなんだ…？」

「この間こっちで誕生日を迎えて、丁度二十歳になったんだよ…」
「そうか…」

少しの沈黙を挟み、会話は続く。

「リンディ提督は何を考えている…」

「2人だけで、何かあったら困るから念の為って言ってたけど…」
「まあ…アレは大分前に完成している…戦闘訓練も何回かこなして
るからな…」

そう言つてベルクトは、翠屋で買ってきた紅茶を啜る。

「しかし…アイツもアイツだ。何であんなにノリノリだったんだ…」
「ベルクト…フェイと本格的に付き合い始めてから少しした時の話
なんだけど」

アイツ…年下の子供が好きとか言ってたんだ…」

「…それは純粋な意味で捉えていいんだよな…？」

「まあ…俺が見る限りでは、他意は無いと思うよ？」
「そうか…」

再びの沈黙、そして

「ハア…」

2人は揃つて大きな溜め息を吐くのであった。

同日の深夜

とあるビルの屋上に、タツクとマリナ

守護騎士の4人が集まっていた。

「管理局の動きも本格化してくるだろうから…
今までのようにはいかないわね…」

「少し遠出をする事になるな…なるべく離れた世界での収集を…」
シヤマルとシグナムが真剣な表情で語る。

「今、何ページまで埋まったんだ？」

眼下に映る街の風景を眺めながらタツクが尋ねる。
シヤマルは手にしていた闇の書をパラパラと捲る。

「335ページ…この間の紫の魔導師で、かなり稼いだわ。」
それを聞いて、ヴィータがグツと拳を握る。

「おっし、半分は越えたんだな。」

ズバツと集めてさっさと完成させよう！

そして…ずっと静かに暮らすんだ…はやてと一緒に…」

その言葉を聞いて、他の者は無言で頷く。

そして狼形態のザフィーラが言った。

「行くか…もうあまり時間も無い。」

「ああ…」

ザフィーラ以外の5人はそれぞれ己のデバイスを構える。

「行くぞ、レヴァンティン！」

「導いてね…クラールヴィント！」

「やるよ！グラーファイゼン！」

「起動しろ、ガンアーク！」

「頼むわよ、バスターアーク！」

そして、甲冑を身に纏っていく。

「それじゃ、夜明け時までにはまたここで…」

「ヴィータ、あまり熱くなるなよ。」

「わーってるよ！」

シグナムの言葉に、ヴィータはつつけんどんに言い返す。

「心配するな、突っ走りそうになったら俺が止めてやるさ。」

「う、うるせえよ！」

微笑を浮かべながら言うタツクの方を向いて

ヴィータは怒鳴った。

「じゃあ…行きましょう。」

「ああ…！」

マリナの言葉にシグナムが力強く答える。

そして6人は、それぞれの方向へ散って行った。

第10話（後書き）

タツク側とベルクト側の空気が違いすぎるな…
シリ阿斯とほのぼのに完全に分かれている…

まあ、本編もこんな感じだし大丈夫ですよ？

まさかのフェイ・ロシュナンテ先生…

実は最初はベルクト先生の予定だったのですが
年齢的に無理があるので予定変更。

（それでもまだ無理あるけど…）

ベルクトはまだ17若しくは18ですからね…
バレルの年齢的に考えれば。

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第11話（前書き）

闇の書の更なる実態、思いを語るフェイト
そして、レイジングハートとバルディッシュの修理中に…

第11話

「ダメだ…やっぱエラーのまま…」

時空管理局、デバイスのメンテナンスルームにて
メンテナンススタッフのマリエル・アテンザは困惑していた。

彼女は今回レイジングハートとバルディッシュの

修理を担当されていた。それで部品交換と

修理を終えた筈なのに、何故かエラーコードが消えないのだ。

その内容は必要部品の欠落、しかもそのデータの内容が…

「CVK-792…ベルカ式カートリッジシステムだなんて…

一体何の考えがあつてこの二機は…」

本来はミッド式である筈のこの2つのデバイスが

ベルカ式のパーツを求めるなど

どう考えてもおかしいのだ。

マリエルは最初、何かの間違いだと思い

あれこれ解決の糸口を探していたのだが

何度やってもエラーのまま

2つのデバイスはコマンドを全く受け付けないのだ。

「とにかく…エイミィ先輩に連絡を…」

マリエルがエイミィに通信を入れようとしたその時
「失礼しますよ。」

コートを纏い、帽子を目深に被った1人の男が入ってくる。

「あ、あなたは…クルーシブル博士ではないですか！」

入り口の方に体を向け、マリエルは驚いた様に言う。

「おや、私も随分有名になったものですね…」

「いえ、この1年間での博士のご活躍は

私達の様なメンテスタッフの間では

寧ろ知らない人の方が珍しいくらいですよ！」

「そうですか…それはどうも…」

どこか興奮したように言うマリエルに対して

穏やかな口調でディールは言った。

実際、目の前にいる男、ディール・クルーシブルの活躍は

管理局に属する、魔法に関する研究者や

マリエルの様なメンテナンス関係者などに限れば、幅広く知られている。

1年前、突如としてグラム提督が連れてきた研究者

デバイスの開発・改造を主とし、他にも多数の分野で功績をおさめそのどれもが、管理局の間で有効活用されてきた。

まさに、天才と呼ぶべき人物として知れ渡っていたのだ。

ただ、本人的には表向きの名前の露出は避けたいと思っているらしく自分が携わった研究には、極力名前を出さないようにしているらしい。

その為、同じ立場である研究者やメンテスタッフ等に比べて主に前線で活躍する執務官、捜査官などには

それほど顔は知られていないんだとか。

「でも…一体どのような都合でここに？」

「いやなに…グレアム提督とちよつと個人的な

仕事の話があつたんで、それも済んで時間があつたから

ちよつと顔を出してみようと…おや、コレは…」

ディールはマリエル目の前にあつたモニターを覗き込む

その様子を見て、マリエルが口を開いた。

「博士も、おかしいと思いますよね？こんな内容のエラー…」

「いや、これは…フムフム…成る程…」

「あ、あの…博士？」

目の前のモニターとパネルを操作しながら

ディールはブツブツと何かを呟いている。

そんな彼の様子を少し戸惑いながらマリエルは見ていた。

しばらくした後、ディールがマリエルを見ながら言った。

「この2つのデバイス…ええと君は…」

「あ、えと…マリエル・アテンザといいます。」

「フム…マリエル君、もし良かったらこのデバイスの修理…

私に任せてみてはくれないかね？」

予想外の言葉にマリエルは驚く。

「ええっ！？でも、大丈夫なんですか？」

「ああ、いや…無理にとは言わないよ…」

ただ、私も魔法の研究に携わる者として

このようなケースは非常に珍しくてね…

出来たら詳しく調べても見たかったものだから…」

ディールは両手を左右に振りながらやんわりと言った。

（でも…あのクルーシブル博士が見るなら…）

少し考えた後、マリエルは答えた。

「わかりました、この2つのデバイスの修理

よろしく願いしますね。」

「ありがとうございます。」

マリエルの返答にディールは満足したように言った。

アースラストップ本部のマンション

その一室でクロノは、魔法陣越しに

レティ提督と話をしていた。

「ご依頼の武装局員一個中隊は

グレアム提督の口利きのおかげで指揮権を貰えたわよ。」

「ありがとうございます、レティ提督。」

クロノは頭を下げて礼を言う。

「それから、グレアム提督の使い魔さん達も会いたがつてたわよ。」

「リーゼ達ですか…適当にあしらっておいてくれますか？」

苦笑いを浮かべながらクロノは答えた。

自室からリビングにやってきたクロノを見かけて
バレルが声をかけた。

「クロノ、そっちの様子はどうだい？」

「武装局員の中隊を借りられたよ

捜査を手伝ってもらえる。そっちは？」

「良くないねえ…タベもまたやられてるよ…」

同じくリビングにいたエイミイが

少し沈んだ口調でクロノに答えた。

リビングのソファにクロノ、エイミイ、バレルが座る。

エイミイはモニターを操作しながら報告する。

「今までより少し遠くの世界で、魔導師が十数人…

野生動物が約4体…」

「野生動物？」

クロノが首を傾げる。

「魔力の高い大型生物、リンカーコアさえあれば
人間でなくてもいいみたい…」

「正に形振り構わず…ってやつだね。」

バレルが肩をすくめながら口を開く。

それを聞いた後、エイミイは続ける。

「闇の書か…魔力蓄積型のロスト・ロギア

魔導師の魔力の根源となるリンカー・コアを食って

そのページを増やしていく…」

エイミイの言葉を聞いて、クロノが更に続ける。

「全頁である、666頁が埋まるとその魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの強大な力をね…」

しかも、本体が破壊されるか、所有者が死ぬかすると白紙に戻って別の世界で再生する…」

それを聞いて、バレルが尋ねる。

「それじゃあ…闇の書を本当の意味で

完全に破壊するのは不可能って事なのか？」

「ああ…そういう事になる…」

少し表情が険しくなりながらクロノは答える。

「様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護者に守られ魔力を食って永遠を生きる、停止不可能な危険な魔導書…」

それが、闇の書なんだ…」

それを聞いて、今度はエイミイが同様に険しい表情で尋ねる。

「私達に出来るのは…闇の書の完成前の捕獲？」

「そう…あの守護騎士達と、バレル…君の同郷者である

2人の魔導師を捕獲して、更に主を引きずり出さないといけない…」
真剣な表情でそう言うクロノに対して

エイミイとバレルは力強く頷いて答える。

（主か…ひょっとしてマリナさんとあのタックって人はその主と何か…）

バレルは内心でこう思うのであった。

その日の夕刻、学校が終わったのはとフェイトはアリサ、ずずかと別れた後、なのはの家に來ていた。

2人はなのはの部屋で今回の事件について話し合っていた。

「ねえ…なのはは、あの人達の事、どう思う？」

「あの人達って…闇の書の？」

ペタンと床に座り込みながら、フェイトは

ベッドの端に座っているなのはに尋ねる。

「うん…闇の書の守護騎士と…あの2人の魔導師の事…」

「えと…私は急に襲われてすぐに倒されちゃったから

よくわかんなかったんだけど…フェイトちゃんは

あの剣士の人や、赤い魔導師の人と何か話してたよね？」

左手の人差し指で頬をかきながら、なのはが言った。

「うん…あの時はベルクトの事で酷いことを言われちゃって…

ちよつと感情的になっちゃったんだけど…」

でも、いま考えてみると…不思議な感じだった…」

悪意みたいな物を、全然感じなかったんだ…」

「そっか…闇の書完成を目指してる目的とか

教えてもらえたらいいんだけど…」

それを聞いて、フェイトは少し俯きながら答える。

「強い意志で自分を固めちゃうと、周りの言葉って

なかなか入ってこないから…私も、そうだったしね…」

それを聞いて、なのはは少し不安げになる。

それを見たフェイトは少し慌てた感じで言った。

「あ、でも…言葉をかけるのは、思いを伝えるのは

絶対無駄じゃないよ…私も、なのはやベルクトの言葉で

何度も揺れたから…」

それを聞いてなのはは少し笑顔になる。

フェイトは続ける。

「言葉を伝えるのに、戦って勝つことが必要なら

私は、迷わずに戦える気がするんだ…

それに…自分の大切な人を守るためには…

自分が助けたいって思った人を助ける為なら

戦う事に、迷う必要なんてないから…」

「フェイトちゃん…」

笑顔のまま、なのはは少し涙ぐむ。

それを見たフェイトも笑顔を浮かべる。

「だから、強くなるよ…思いを貫くためにも…

自分自身で決めた、自分の道を進む為にも…」

「そうだね…私ももっと強くなる…一緒に頑張ろうフェイトちゃん。」

「

うん…頑張ろう、なのは…」

互いに笑顔を浮かべながら、2人は固く手を取り合うのであった。

・とある次元世界

「うおりゃアアアアア！」

雷鳴轟く薄暗い渓谷で、ヴィータは目の前のドラゴンに向かってハンマーを振り下ろす。

「グオオオオオオオ！！！」

強烈な打撃を浴びて咆哮するドラゴン。

その上空では、タックがライフルを構えていた。

「チャージモード！！！」

タツクの叫びと共に、縦に割れたライフルの銃口から黄色い閃光が放たれ、ドラゴンに直撃する。

別の方向では、狼形態のザフィーラが

闇の書を構えていた。

「闇の書…蒐集…」

ザフィーラが呟くと、ドラゴンからリンカーコアが現れその魔力が闇の書に蓄積されていた。

蒐集が終った後、降り立ったタツクとヴィータを見ながらザフィーラは呟く。

「今ので3ページか。」

「クソ…デカイ図体の割には、リンカーコアの質は低いんだよね…」
グラーファイゼンにカートリッジを補充しながらヴィータは苦々しげに言う。

「でも、下手に魔導師を襲撃するよりはよっぽど能率がいいのも確かだ…」

険しい表情でタツクが呟く。

そして、ヴィータは後ろに振り向いて歩き始める。

「次行くよ、タツク、ザフィーラ。」

「ヴィータ…休まなくて平気か？」

ザフィーラが心配そうに尋ねる。

それを聞いて、ヴィータは振り向かずに戻る。

「平気だよ、私だって騎士だ」

この程度で疲れるほどヤワじゃない……」
そう言っただけでスタスタと歩いていくヴィータ
タツクとザフィーラもそれに続いた。

数日後

ベルクト達は管理局本局に再び赴いていた。

ベルクトは検査を終えた後、廊下でフェイト達と合流した。

「ベルクト、検査結果はどうだった？」

「無事に完治したそうだが、魔法の使用も問題ないらしい。」

「そう、良かった……」

フェイトは笑顔を浮かべて、嬉しそうに言う。

そして、待機状態のバルディッシュを見せた。

「こっちも、無事に完治したよ。」

「バルディッシュの修理も終わったのか。」

バルディッシュを見つめるベルクト。

そんな彼を見ながらバレルが口を開く。

「何でも、レイジングハートとバルディッシュに
新しい機能がついたらいいんだってさ。」

「ほう。」

続いてフェイが口を開く。

「それが元で、修理が難航してたみたいだけど…」

メンテナンスの人の話によると、デイル・クルーシブルっていう優秀な研究者が手伝ってくれたおかげで意外に早く何とかなったそうよ。」

「デイル…あの男が？」

コートの男の事を思い出し、ベルクトは少し表情を歪める。
そんな彼を見て、フェイトは首を傾げる。

「ベルクト…どうかしたの？」

「いや、何でもない…」

ベルクトがそう答えた時であった。

「大変だ！みんな急いでくれ！」

ユーノが叫びながら、自分達の方に駆けてきた。

そんな彼を見ながら、険しい表情ながらも、冷静にベルクトは尋ねる。

「奴らか？」

「ああ…海鳴市の上空で3人発見された…」

今は、武装局員とクロノで応戦している。」

「全く…タイミングがいいのか、悪いのか…」

固い表情でバレルが言う。

「ベルクト…」

「ああ…わかっている。」

フェイトに対して、ベルクトは頷いて答える。

そして、首に下がった待機状態のグレイブアークを掴む。

「行くぞ…」

管理局と守護騎士達との二度目の戦いが始まるつとじていた…

第11話（後書き）

とまあ、今回は原作に沿った展開がほとんどだったので
目新しい部分はそんなに無かったと思います。

.....冒頭を除いて。

意外と一部に有名だった新キャラのディール・クルーシブル
まあ、見ず知らずの人間がいきなり他人の
デバイスを勝手に修理したりするのもアレですしね…

次回から久しぶりのバトルパート

予告編の順序で予想してる方もいると思いますが
次の戦いでは、遂に彼女も参戦します。

デバイスはまあ…そんなに意外性は無いので期待しない方向で…（
オイ）

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第12話（前書き）

海鳴市上空、守護騎士達との二度目の戦い。

予想より大分長くなったので、話数を分けて投稿。

第12話

海鳴市上空

そこでヴィータ、ザフィーラ、タツクの3人は管理局の魔導師達に取り囲まれていた。

「管理局か…」

「でも、チャライよコイツら…返り討ちだ!」

ヴィータがグラーファイゼンを構える。

その直後、魔導師達が上空に飛び上がる。

「え?」

予想外の相手の行動にヴィータは驚く。

「上だ!」

上空を見上げてザフィーラが叫ぶ。

その視線の先には、大量の魔力刃を展開するクロノノがいた。

「ステインガールブレイド! エクスキュションシフト!」

クロノが杖を振り下ろす。それと同時に

魔力刃が一斉にヴィータ達に向かって降り注いでいく。

それを見たザフィーラが前に出てシールドを展開する。

魔力刃がシールドに突き刺さり、爆発を起こす。

「少しは…通ったか?」

爆煙を見つめながらクロノが呟く。

そして、煙が晴れた先には

腕に数本の魔力刃が刺さったザフィーラと

これといった外傷は見られないヴィータとタツク。

「ザフィーラ! 大丈夫か!」

タツクが叫ぶ。

「気にするな…この程度でどうにかなるほど…」

ヤワじゃないッ…!!」

腕に力を込めて、刺さった魔力刃を破壊する。

「上等！」

それを見たヴィータは笑みを浮かべ
そして、上空にいるヴィータを睨む。
(ダメージにはなかったか…！)
クロノが悔しげな表情を浮かべる。

その時、エイミィから通信が入った。

「武装局員配置終了！オツケークロノ君？」

「了解！」

「それから今、現場に助っ人を転送したよ！」

「え！？」

それを聞いてクロノは目の前の敵から視線を外し
辺りを見渡す。

するとあるビルの屋上に、なのは、フェイト
バレル、ベルクト、フェイがいた。

別の場所にはユーノとアルフもいる。

「あいつら！？」

ヴィータ達もなのは達の姿を捕らえる。

そして、なのはとフェイトは待機状態のデバイスを構え
新たに生まれ変わったデバイスの名を呼ぶ。

「レイジングハート・エクセリオン!!」

「バルディッシュ・アサルト!!」

「セーリットアップ!!」

2人の体が光に包まれる。そして新しいバリアジャケットと
新たなデバイスを構える。

それを見たベルクトが呟く。

「さて…俺達も行くぞ、バレル、フェイ。」

ベルクトは待機状態のデバイスを手に取る。

と、その時バレルがフェイの方を向いて言った。

「フェイ…本当に大丈夫なの？」

それを聞いたフェイが笑みを浮かべながら答える。

「何言ってるのよ…元々最初に戦ってたのは私なのよ？」

それに、いつまでもバレルばかりに

戦わせるわけにはいかないもの！」

「フェイ…」

「あなたが私を守ってくれるように…」

私も、あなたを守りたいから!!」

それを聞いてバレルは表情を固くし、力強く頷く。

「ああ…わかった！」

そしてバレルとフェイも互いのデバイスを手に取る。

「起動しろ、グレイブアーク。」

「やるぞ!イクスブラウM!!」^{マスター}

「頼んだわよ…イクスブラウP…」^{ブルーム}

3人の体が光に包まれる。

ベルクトは紫のジャケットと長身砲を構えた何時もの姿に
バレルも青白色のジャケット、濃紺のマントと
ライフル、シールドを構えた魔導師姿に。

そしてフェイは、バレルと同じ色のジャケットとマントを纏い
両肩に白いシールド、背部にスカイブルーと白の
二色で彩られた翼のパーツを備え
腰と左肩のシールドに3つの柄パーツを装備し
右腕に小型の銃を持った姿となった。

「あいつらのデバイス…アレってまさか!？」
ヴィータはなのはとフェイトのデバイスを見て
驚いたように叫ぶ。

「しかも…前より1人増えているな…」
タックが険しい表情で呟く。

(…よりもよってまた同郷者かもしれないとは…
全く…本当に儘ならない事ばかりだな。)

同じ頃、別の場所で

管理局の魔導師が貼った結界の外側に

シグナムとマリナが浮かんでいた。

「強層型の捕獲結果…ヴィータ達は閉じ込められたか…」

シグナムが呟くと、レヴァンティンは行動の選択を求める。

そんなレヴァンティンを見ながら

マリナがからかうような笑みを浮かべて言った。

「レヴァンティン、あなたの主はこういう状況で

仲間を見捨てて引くような騎士なのかしら？」

レヴァンティンは答える『否！』と

そしてシグナムは、レヴァンティンを上に掲げる。

「そうだレヴァンティン、私達は

今までもずっとそうしてきた！」

足下に魔法陣を展開し、カートリッジロードを行なう

すると、剣は炎に包まれた。

「行くぞ！マリナ！」

「オーケーー！！」

シグナムとマリナは、結界に向かって突っ込んでいった。

なのは達がヴィータ達の近くに降り立つ。

「私達はあなた達と戦いにきたわけじゃない…
まずは話を聞かせて…」

「闇の書の完成を目指してる理由を！」

フェイトとなのはの言葉を聞いて

腕を組みながら、気だるげな声でヴィータが言う。

「あのさあ…ベルカの諺にこうというのがあんだよ…」

両隣に立っているタツクとザフィーラがヴィータの方を見る。

「和平の使者なら槍は持たない…」

それを聞いたなのはとフェイトが

互いの顔を見ながら首を傾げる。

ベルクト達も何の事だ？という風な顔をする。

それを見たヴィータがハンマーを振り下ろし

口調を荒げながら言った。

「話し合いをしようつてのに、武器を持って

やって来る奴がいるか馬鹿って意味だよ、バーカ！」

それを聞いたなのはが一瞬マヌケ顔を浮かべ

すぐにヴィータの方を見て反論する。

「なあっ…！？いきなり有無を言わずに

襲い掛かってきた子がそれを言う？」

すると黙っていたザフィーラがヴィータにツッコむ

「それにそれは諺ではなく、小話のオチだ。」

「うつせー！いいんだよ細かい事は！」

ヴィータはそっぽを向く。

その時、結界の上部で爆発が起こる。

そして近くのビルの屋上にシグナムとマリナが降り立つ。

「シグナム！」

「マリナさん…！」

2人の姿を確認したフェイトとバレルが声をあげる。

なのはは杖を構え、ヴィータを見ながら強い口調で言った。

「ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね。私あの子と一対一だから！」

「何だと…」

その言葉が気に食わず、ヴィータは表情を歪める。

（ベルクト…）

（ん…？）

フェイトはシグナムの方を向きながら

固い表情でベルクトに念話を飛ばす。

（私も…彼女と…！！）

目を瞑り、ベルクトは念話を返す。

（了解した…そっちは任せる。）

そしてベルクトも、長身砲を構え、

マリナの方に向きながら冷静な表情で呟く。

「この前は少々予想外の展開になったからな…」

今度はちゃんと話を聞かせてもらおうとしようか…」

「どうかしら…そう何度も上手くいくとは思わないほうがいいわよ…!!」

マリナは表情を歪めながら、ベルクトに答える。今度はバレルがタツクの方を見ながら呟く。

「なら…僕はあいつの相手をしよう…」

「わかったわ…それじゃあ私があっち側ね…」

ザフィーラの方を見ながらフェイが答える。

「……………」

タツクもザフィーラも無言のまま身構える。

別の場所でその様子を見ていたクロノが隣にいるユーノを見やりながら言った。

「ユーノ、それなら丁度いい…」

僕と君とアルフで、闇の書の主を捜そう。」

「闇の書の…主？」

アルフがクロノの方を向いて尋ねる。

「連中は持つていない…恐らくはもう1人の仲間か

主がどこかにいる筈だ…僕は結界の外を捜す

君とユーノで中を捜してくれ。」

「わかった。」

「うん…」

アルフとユーノが頷いて答えた。

そして、海鳴市上空に何条もの光が飛び交っていき
2度目の戦いが幕を開けるのであった。

第13話（前書き）

10/27

タックとバレルの戦闘描写のミスを修正

こんなデカい間違いに何故気づかなかった…

本当にすいません…以後気をつけます…

第13話

「なのはVSヴィータ

「フン…結局やんじゃねーかよ!!」

後方から追跡してくるなのはを見やりながらヴィータは叫ぶ。

「私が勝つたら、話を聞かせてもらおうよ!!」

高速で追跡しながらなのはが叫ぶ。

それを聞いたヴィータは立ち止まり

なのはの方に振り向いて叫ぶ。

「やれるもんなら…やってみろよ!!」

足下に魔法陣を展開し、4つの鉄球を取り出す。

それを見たなのはも立ち止まり、レイジングハートを構える。

「アクセルシューター…シューート!!」

合計12の桃色の魔力弾がヴィータの周囲を飛び交う。

「アホか…こんな大量の弾、全部制御出来るわけが…!!」

険しい表情をしながらも、ヴィータは鉄球を構え

ハンマーでそれをなのはに向かって打ち飛ばす。

「……………」

なのはは目を瞑って、魔力弾の制御に集中する。

そして、飛んできた鉄球全てを、正確に撃ち砕いた。

「……………」

その光景を見て、目を見開き、ヴィータは驚く。

「約束だよ…私達が勝ったら事情を聞かせてもらって!!」

なのはは右手を上空に掲げる。

それを見たヴィータは、周辺に赤い防御壁を展開する。

「アクセル…シューート!!」

右手を振り下ろす。それと同時に魔力弾が

ヴィータに向かって何度も撃ちかかっていく。

「こんのお……………」

防御壁の内側で、ヴィータは悔しげな表情を浮かべた。

「バレルVSタック

「ハアッ!!」

バレルがタックに向かって剣を振り下ろす。

タックはそれを飛び上がったかわし、

バレルに向けてライフルから魔力弾を放つ。

それを見たバレルが剣を構える。

「ツーハンデッドストーム!!」

周囲に衝撃波が舞い、魔力弾を全て叩き落とす。

「やるな…だが!」

それを見たタックが周囲に白い4つの魔力弾を現出させる。

「行け!ホーミングシューター!」

タックが左手を振り下ろすと、魔力弾が

バレルに向かって飛んでいく。

「クッ!」

バレルは縦横無尽に飛び回りにがら、それらを回避する。

そして飛び回りながら、銃型のパーツを召喚する。

「デイスパーシヨンダガー!!」

2つの銃が周りを飛び交い、ホーミングシューターの

魔力弾を撃墜していく。

だがバレルが気づいた時、タツクはライフルを構え足下に魔法陣を展開していた。

「チャージモード!!」

タツクの叫びと同時に黄色い閃光が放たれる。

それを見たバレルも、両肩に砲台を現出させ、魔法陣を展開する。

「ペネトレイトキャノン!!」

両肩から二条の閃光が放たれ、そして激突し、爆発する。

爆風が晴れる前にタツクはライフルに魔力刃を形成。

バレルに向かって突っ込んでいった。

「例え同郷者だとしても…譲れない物がある!」

固い表情で叫びながら、タツクはバレルに向かって魔力刃を振り下ろす。

バレルは下に高速移動してそれを回避する。

「俺だって…大切な人達の為に戦っているんだ!」

そう叫び右手を前に出す。

すると、いつの間にか出したのか、

4つのデイスパーションセイバーが

タツクの背後に現れた。

「何!?!」

タツクは驚きながらも、セイバーから放たれる

魔力弾をシールドを展開して防御する。

そして、すぐさまバレルの方に振り向く。

バレルはHフォームの火器全てを装備し

周辺に残り4つ全部のデイスパーションを浮かばせていた。

「少し手荒になるけど…落とさせて貰う…!!」

タツクの方に飛ばしていたデイスパーションセイバーも

自分の周辺に呼び戻し、そして叫んだ。

「喰らえ!フルファイヤーキャノン!!」

両腕のライフル、各所に装備した砲台

そして8つのデイスパーションから

大量の魔力弾と閃光が放たれ、タツクに襲い掛かる。

「クッ…ツインシールド!!」

タツクは両肩のプレートを前方に展開し

巨大な白いシールドを貼って身構えた。

展開された巨大なシールドは、バレルが放った

いくつもの攻撃を防いでいくが

やがてシールドにヒビが入り、穴が開き、

タツクに向かっていくつかの魔力弾が直撃する。

「ぐあ……!!」

何発か攻撃を喰らい、タツクは苦しい声上げる。

だが、すぐに表情を引き締めなおし、身構える。

そして、攻撃を終えたバレルは、険しい表情で呟く。

「全く…今のを防ぎきれるとはな…」

・フェイVSザフィーラ

「うおおおお!!」

ザフィーラがフェイに向かって拳を振り下ろす。

フェイは右肩のシールドから魔力壁を出してそれを防ぐ。

そして一旦後方に下がった後、左肩の柄パーツ・

レーザーエッジを持ち、構える。

「ええいつ!!」

ザファイラに向かって魔力刃を振り下ろす。

ザファイラはそれを両腕をクロスして防いだ。

「あなた達は何者!? 何の為に戦うのよ!!」

ギリギリと魔力刃を軋ませながらファイは叫ぶ。

それを聞いて、攻撃を防ぎながらザファイラも叫ぶ。

「我はザファイラ…主の牙…そして盾となる…守護獣だアアアア
!!」

ファイの攻撃を強引に押しのけようとする。

押されていると察したファイは攻撃を止め

一旦後方に下がる。

「逃さんツ!!」

後退していくファイをザファイラは追う。

それを見たファイは、背部の翼パーツから

2つの丸いユニットを分離させ、ザファイラに向かって飛ばす。

「シールドユニット!!」

ユニットは巨大な魔力壁となり、ザファイラの行く手を阻む。

「なっ…!!」

ザファイラはまともに魔力壁に突っ込んでしまう。

ぶつかった直後魔力壁は爆発を起こす。

「クソッ…」

爆風によって、ザファイラは相手の居場所を見失ってしまう

「ステイルワイヤー・デュミニス!」

ファイの声が聞こえたかと思うと、

直後、ザファイラは両腕を小型の鋏で拘束される。

そして煙が晴れた先には、右肩のシールドの先端から

光る鎖で繋がれた鋏を構えるファイがいた。

「さあ、おとなしくしなさい!!」

ファイが叫ぶ。だが、ザファイラは表情を歪ませ

全身に力を入れながら叫んだ。

「この程度のバインドで…捕らえられると思うなアアア!!」
拘束された両腕の鉄を、ザフィーラは強引に破壊する。

それを見たフェイは、険しい表情で呟いた。

「流石…一筋縄ではいかないという事ね…」

・シグナムVSフェイト

「はああああああ!!」

「うおおおおお!!」

上空を飛び交いながら、何度も互いの武器を交わらせる。

フェイトは一旦距離を取り、魔法陣を展開し

周囲に槍型の魔力弾を形成していく。

「プラズマランサー、ファイア!!」

フェイトが杖を振るうと同時に、魔力弾が

シグナムに向かって襲い掛かる。

シグナムはそれを、炎を纏った剣でなぎ払う。

「ターン!!」

フェイトが左腕を振るう、すると魔力弾は急旋回し

再びシグナムに向かって襲い掛かる。

シグナム上空に飛び上がってそれをかわし、距離を取る。

「レヴァンティン!!」

飛び上がりながらシグナムはカートリッジロードを行う

「えええええい!!」

再び剣に炎を纏わせ、魔力弾を焼き尽くす。
直後横に振り向くと、バルディッシュを振り上げている
フェイトが眼前に迫っていた。
フェイトはカートリッジロードを行い
バルディッシュに魔力刃を形成させる。
それを見たシグナムも、同様にロードを行い
レヴァンティンをシュランゲフォルムに変形
分裂した刃を振るって応戦する。
そして互いのデバイスが交わり、爆発を起こした。

2人は互いに一旦距離を取る。

「強いな、テストロッサ…それにバルディッシュも…」

「あなたと、レヴァンティンも…シグナム…」

距離を取り合ったまま、固い表情で2人は
相手の強さに賛辞を述べる。

「この身に、成さねばならぬ事が無ければ
心躍る戦いだった筈だか…仲間達と我が主の為…」

今はそうも言つてられん…」

シグナムは剣を構え、魔法陣を展開する。

「殺さずに済ます自信は無い…」

この身の未熟を許してくれるか？」

それを聞いて、フェイトはバルディッシュを構えて答える。

「構いません…勝つのは私ですから…」

・ベルクトVSマリナ

ベルクトが長身砲から黄色い閃光を放つ。

マリナはそれを横に飛び退いて回避する。

「遠距離は不利ね……」

そう呟いてマリナは、左手の籠手にアークブレードを形成しベルクトに向かって突っ込んでいく。

「それくらいは承知している……」

ベルクトも長身砲を構え、マリナに向かっていった。

そして、互いの武器が交わり、火花を散らす。

直後、ベルクトが呟く。

「エナジーシェイブ……」

ベルクトの周囲に黒いフィールドが展開する。

「しまっ……」

それが何なのかマリナにはわかっていたが。

回避は適わず、動きを止められてしまう。

その隙を利用してベルクトは思い切り距離を取り

左腕のスケイルシールドを構える。

「スケイルブーメラン……!!」

シールドを形作っていた刃が、計8つに分離し

マリナに向かって飛んでいく。

「フィールド……!!」

マリナは両肩のプレートの先端の羽を広げ
周辺に防御壁を展開する。

それを見たベルクトが冷静な表情で呟く。

「無駄だ……スカーレットキャノンと違い……」

そいつらは一回きりで消えるような物じゃない……」

言葉の通り、スケイルブーメランは

何度も繰り返し、マリナの防御壁を攻撃する。

徐々にヒビが入っていく魔力壁を見てマリナは焦る。
(このままじゃやられる…なら、いつその事…)

マリナは防御壁を解除し、上空に飛び上がる。

「逃れられると思うな！」

ベルクトはブーメランを操作し、多方向から

マリナに向かって襲い掛からせる。

それを見たマリナは立ち止まり、ライフルを構える。

「ハアアアアア！！！」

咆哮と同時に高速回転し、ライフルから

大量の魔力弾を周囲に乱射する。

そして、飛んできたブーメランを残らず撃ち落した。

「…流石にやるな。」

微妙に表情を歪ませながら、ベルクトは呟く。

マリナはすぐさまライフルから8条の魔力弾を発射する。

それを回避しながらベルクトは呟いた。

「未だに俺を疑っているのか？」

アークブレードを構え、マリナは答える。

「いいえ…前の戦いでなんとなくわかったわ…

あなたにも、いろいろあったってね…」

ベルクトに向かって、魔力刃を振り下ろす。

ベルクトはそれを下にかわし、後方に飛び退く。

マリナは周辺にホーミングシューターを浮かばせる。

「でも、それだけで信用するほど…」

私も単純な人間ではないのよ！！」

ホーミングシューターをベルクトに向かって飛ばす。

「結構だ…寧ろ、軍人だったならそれくらい

疑ってかかるのが当然だろう…」

小型の砲台からスプリットガイドキャノンを射出し

ホーミングシューターを撃墜する。

「だが…今の俺には、守るべき者が出来たんで…
そいつの為にも、引くわけにはいかない…」

長身砲から再び閃光を発射する。

それをシールドで難なく防いだ後、マリナは言った。

「なるほど…お互い様って事ね…!!」

- 戦況を見渡しながら、ザフィーラは

結界の外にいるシャマルに念話を飛ばす。

（状況はあまり良くはないな…シグナム達が負けるとは思えんが

ここは引くべきだ。シャマル、何とかできるか？）

（何とかしたいけど、局員が外から結界を維持しているの、私の魔力じゃ破れない…

シグナムのファルケンか、ヴィータのギガント級の魔力が出せなきゃ…）

（2人とも手が離せん、やむをえん、あれを使うしか…）

（わかってるけど…でも…）

直後、背後に誰かの気配を感じてシャマルは硬直する。

「搜索指定ロスト・ログアの所持、使用の疑いで

あなたを逮捕します。」

デバイスを構えたクロノが、シャマルに向かって言い放つ。

「抵抗しなければ弁護の機会があなたにはある

同意するなら武装の解除を…!!」

シャルは呆然と立ち尽くし、動くことが出来ない。

「フッ!!」

だが、その時何者かによつて、クロノは蹴り飛ばされる。
驚いたシャルが横に振り向くと、

そこには仮面をつけた怪しい男が立っていた。

「あ、あなたは…?」

困惑しながらシャルは尋ねる。

「使え…」

「えっ?」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ…」

「でもあれは…!」

戸惑いを浮かべながらシャルは言う。

だが、仮面の男は淡々と続ける。

「使用して減ったページはまた増やせばいい…」

仲間がやられてからでは遅かろう…」

それを聞いて、シャルは目を瞑り

少し考えた後、決心した様に念話を飛ばす。

（みんな!今から闇の書を使って結界を破壊するわ!
うまくかわして撤退を!）

それを聞いたタツクは慌てて念話を送り返す。

（ちよつと待てシャル！闇の書の力を使つたら折角集めたページが…！）

ただでさえ、自分達は一刻を争うというのに闇の書ページを減らすなど元も子もない話だ。だが、シャルは困惑した声色で話す。

（そうだけど…でも、このままじゃ皆が…！）

（クッ…）

タツクは苦々しい表情を浮かべる。

戦況は正直言つてあまり良くない。

しかも前回と違って、今回はこちら側が

結界の中に閉じ込められている側なのだ。

このままうまく敵を打ち倒したとしても

更に増援を呼ばれて追い込まれる可能性もある。

タツクもマリナと同様の考えを持っている。

はやてを救うのは勿論のことだが

それは、仲間全員が生き延びて達成するべき事であると。

軍人の頃からタツクは、仲間の命を最優先に考える男だった。

（仕方ない…）

しばらく考えた後、タツクは固い表情で念話を飛ばす。

（シャル、闇の書は使うな。）

（えっ！）

（結界は俺が何とかする…皆は脱出の準備だけを考えてくれ！）

タツクの会話内容に、他の皆が驚く。

だが、マリナだけは違う驚きを浮かべていた。

（タツク…あなたまさか…！！）

（魔導師デバイスで使うのは初めてだから…

どという結果になるかはわからない…

でも、ここで仲間を失うわけにもいかないだろう？）

（まさか…アレを…）

（そうだ…アレを使って結界を無理矢理破壊する…！）

遠くでそれを聞いていたマリナは困惑を浮かべる。

（……大丈夫なの？）

（心配するな、結界を破壊するだけなら

増幅射撃を行なう必要は無い。

体の負担といっても、恐らくは魔力の大量消費くらいだ。

それくらいでこの場を切り抜けられるなら…）

タツクの言葉を聞いて、マリナは固い表情で返答した。

（…わかったわ。けど…危険だと思ったらすぐにやめるのよ…）

（ああ…）

タツクは目の前のバレルに向き直り、ライフルを構える。

「バーストモード！！」

ライフルから発射された魔力弾は

バレルの眼前で爆発し、強烈な爆風を巻き起こす。

「ッ！…目くらまし！？」

爆煙で視界が閉ざされ、バレルが叫ぶ。

直後、彼の体は巨大な白いリングで拘束される。

「しまった…バインド…！」

バレルが悔しげな表情で叫ぶ。

煙が晴れた先には、右手を前に出したタツクがいた。

（即席で作ったバインド魔法だから…長くは持たない…

だけど…撃つまでの時間くらいなら…）

タツクは上空に高く飛び上がる。

そして、両肩のプレートを広げ、両手の拳を握り、魔力を集中する。

すると、タツクの丁度胸の上あたりに、光球が出現し更に結界の上空に巨大な白い魔法陣が現れる。

「何だ…あの莫大な魔力は…！？」

「ム、ムチャクチャだ！こんなの…」

「タツク…何をするつもりだ…？」

その巨大な魔力を感知し、シグナム、ヴィータザフィーラは三者三様に驚きを浮かべる。

上空の魔法陣に光が収束していく。

そしてタツクは上に向かって叫んだ。

「ガーディアン…！！！」

その叫びと同時に、魔法陣からとてつもなく

巨大な白い閃光が降り注ぎ、結界をいとも容易く破壊した。

その光景を見ていた仮面の男が

信じられないという風な声色で呟いた。

「馬鹿な…あれを1人の魔導師が起こしたのか…？」

「ぐっ……！！！」

ガーディアンを撃ち終わった後、
タツクは前に倒れこむ。

（やはり…消費が凄まじいな…そう何度も使えないな…）
そんな事を考えていると、ふと誰かに体を支えられる。

「…無事？」

タツクを抱えながら、マリナは険しい表情で尋ねる。

「あんまり…無事とは言えないかもしれないけどな…」

「……………全く、もう…」

直後、バレルとベルクトが2人の方に飛んてくる。

「マリナさん！！！」

バレルがマリナの名を呼ぶ、

タツクを抱えたまま、マリナは振り向いた。

ベルクトは冷静な表情でマリナに尋ねる。

「今の光…ガーディアンか？」

マリナは固い表情のまま呟いた。

「悪いけど…今は話している時間は無いの…」

そう言つてマリナは後ろに振り向き。

凄まじいスピードで撤退していった。

フェイトと相対していたシグナムが呟く。

「すまん、テストロツサ…この勝負預ける…！」

「シグナム…！」

そう言った後、シグナムも撤退した。

別の場所ではヴィータがなのはに向かって強い口調で言った。

「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士、ヴィータ…」

アンタの名前は…？」

「なのは…高町なのは…！」

「高町なぬっ…な…えーい、呼びにくい…！」

「逆ギレ…！」

あまりに横暴なヴィータの言動に、なのははズッコける。

そしてヴィータはなのはを指差しながら続ける。

「ともあれ勝負は預けた！次は殺すかな！ぜってーだ！」

「あ、えっと…ヴィータちゃん！」

ヴィータもその場を撤退していった。

「…この勝負はお預けだ…我も撤退する。」

「……………」

ザフィーラも同様にフェイに向かって一言言った後

他のメンバーと同じように撤退して行った。

「あの光は何だ… スターライトブレーカーすら越えてるじゃないか…」

「無茶苦茶だよ… 魔導士1人が扱えるレベルじゃあ…」
ユーノとクロノは空を見上げながらそう呟く。

「フェイ… あれって…」

「…………… 資料でしか見た事なかったけど… あれはやっぱ…」
フェイの隣に降り立ったバレルが尋ねる。
フェイは空を見上げたまま、呟いた。

ベルクトはフェイトの隣に降り立って尋ねる。

「フェイト、無事か？」

「大丈夫… 何ともないよ。」

「そうか。」

微笑みながら返答するフェイトを見て

ベルクトは安堵の表情を浮かべる。

そして、今度はフェイトがベルクトに尋ねた。

「ベルクト… あれは何だったんだろう…」

あんな凄い砲撃… 普通なら…」

そう呟くフェイトを見ながら、固い表情でベルクトは呟く。

「俺の予想通りなら… アレはとんでもない能力だ…」

「ベルクト… 知ってるの？」

「ああ…」

意外そうな声を上げるフェイトに対して

ベルクトは固い表情を崩さずに答えるのであった。

- とある場所の薄暗い部屋

そこで仮面の男が何者かと話していた。

「ほほう…それは本当ですか？」

何者かが意外だという風に呟く。

「ああ…にわかには信じ難いが…」

たった1人の魔導師がそれだけの力を所有していたのだ…

今は守護騎士側に協力しているとはいえ…

あの力が我々に向けられたら…」

そこまで言って、仮面の男はふと目の前の人物を見る。

目の前の男はクククククと怪しげな笑いを浮かべていた。

「…何がおかしい…？」

「いやいや、失礼…個人的な事です…気にしないで下さい…」

右手を上げて謝罪の意を示し、そして続ける。

「ともあれ…現段階では我々は協力する側ですから

その力を脅威に思う必要はありません…

最終段階の時の段取りは私が考えておきますから…

私達は計画通りに事を運びましょう。」

「わかった…お前には期待している…

いざという時は頼むから…」

仮面の男が目の前の人物を見ながら呟く。

その視線の先には、仮面の男と瓜二つの

もう1人の仮面の男が立っていた。

（まさか…本当にそんな事が起こるとは…

人生とはわからないものです…)
もう1人の仮面の男は、心内でそう呟くのであった…

第13話（後書き）

ということとで戦闘終了。

フエイのデバイス、イクスブラウ^{ブルーム}P

コンセプト的には守備特化のデバイスです。

これに関しては、近々設定集を書き

他のデバイス共々解説する予定なので

わかりにくいという方は少しお待ち下さいまし…

放たれた閃光ガーディアン。

勘の鋭い方は、予告編のアレの時点でもすぐにわかったと思います。

威力がチートなので消費が激しいという制約は設けていますが…

でもこれ使えるの2人いるわけだしなあ…

今後はその辺に注意しながら書いていこうと考えています…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第14話（前書き）

アースラメンバー達による疑問の説明のしあい。
守護騎士とは、ガーディアンとは何なのか？

第14話

「さて…説明して貰おうか、タツク、マリナ。」

同日の夜遅く、八神家のリビングにて

シグナム達守護騎士は

タツクとマリナに真剣な表情を向けていた。

その理由は勿論、ガーディアンについてである。

あれ程の威力が出せる魔法は、守護騎士達はおろか

あらゆる世界の魔導師を捜してもそうそう見つからない

そんな代物を魔法とは全く縁の無い世界から来た

タツクが使用したのであれば、ある意味当然の流れだ。

暫しの沈黙を挟んだ後、マリナが語り始める。

「…皆には言ってなかったけど、私達のデバイス

ガンアークとバスターアークは、かつて私達が

軍に居た頃乗っていたロボットの名なのよ。」

その言葉を聞いて、守護騎士達は少し驚く。

2人が語っていた自分達の世界の話

軍人達は巨大なロボットを駆り

地球上に限らず、宇宙に無数に存在する

敵対勢力と泥沼の争いを繰り広げていたという世界…

ただ、1人の例外を除き、守護騎士達はタックとマリナがどんなロボットに乗っていたかは聞いていなかったのだ。

「では…あれは、お前の言っていた
ガーディアンという奴なのか…？」

「ええ…その通りよシグナム。」

シグナムの言葉に、真剣な表情でマリナは返答する。
事態の流れがよくわからない他の3人は首を傾げる。
そして、ソファに座りながら、タックは顔を
マリナの方に向けて言う。

「…いつの間に話したんだ？」

「少し前にね…全部を…」

「そうか…」

互いに暗い表情で2人は語り合う。

そんな光景に痺れを切らして、ヴィータが荒々しく言った。

「ああもう…！とにかく！アタシ達を知りたいのは
アレがどういう物なのかって事なんだよ！」

そんなヴィータを見て、タックは一瞬キョトンとするが
すぐに真剣な表情になる。

「わかった…一から説明しよう…」

そもそもガーディアンとは…俺達が使っている
デバイス…つまりはアークシリーズの…」

「衛星砲？」

「ああ…単純に言えばそういう事になる。」

同じ頃、アースラメンバーも本部のマンションにて

此度のあの魔法の正体について、ベルクト達から説明を受けていた。

「そもそも、俺達が使っているデバイスというのは
かつて己が駆っていたロボットの能力を

そのまま、魔法デバイスとして変換したような物だ。」

「バレルさんの、イクスブラウみたいにですか？」

冷静な口調で説明するベルクトに対して、なのはが言う。

「そういう事だ。フェイのイクスブラウを除いて

俺のグレイブアーク、バレルのイクスブラウ

そして…あの2人が使っているとされる…

ガンアークとバスターアーク…そのどれもが

俺達の世界に実在した機動兵器だ…」

説明を続けるベルクトに対して、腕を組みながらアルフが尋ねる。

「それはわかったけど…じゃあアイツが使った魔法と

その件について、一体どういう関係があるんだい？」

その疑問に対して、今度はフェイが口を開く。

「彼らのデバイスは、アークシリーズと呼ばれる

機動兵器…さっき言った衛星砲という物を

制御する為に製作された物なの。」

険しい表情を浮かべながら続ける。

「この世界にも衛星という物はあるでしょう？」

あれを高エネルギーを発射する為の巨大な砲台へと改造し
宇宙空間からの超長距離砲撃を行なう

それが…ガーディアンと呼ばれる兵器なの。」

それを聞いた漂流組以外のメンバー、

特にリンディやクロノの正式な管理局員は特に驚いていた。

「む、無茶苦茶すぎる…」

「アルカンシエルにも匹敵するわ…」

クロノは想像が追いつかず、疲れたような顔になり

リンディは険しい表情で呟いていた。

だが、更に追い討ちがかけられる事になる。

「そんな衛星砲が、俺達の地球には100以上存在していた。」

「なあっ!？」

あまりに規格外すぎるベルクトの説明に

クロノは心底驚いたように叫んだ。

「そして、E2コアと呼ばれる動力源と

極一部のパイロットとの適正が一致した際に、衛星砲…ガーディア
ンを

操作する為の機能が覚醒し、それを用いて

超長距離からの強力な砲撃を行なう機動兵器

それがアークシリーズだ。」

皆が驚いている中で、ベルクトは説明を続ける

「その衛星砲の力を、そのまま魔法による

攻撃として置き換えればいい。そう考えれば

結界を破るなど容易いことだろう…」

目を瞑り、静かに呟くベルクト。

皆はそれを聞いて不安な表情を浮かべる。

宇宙から地上へ直接攻撃可能な破壊力…

実物と差異はあるだろうけれど、それ程の力が敵のデバイスに備わっているのだから恐れるのも無理はない話であろう。

しばらくした後、今度はリンディが口を開く。

「だけど、やっぱり腑に落ちないのは彼らの目的よね…」

「ええ…バレル達と同郷者の2人はともかくとして…」

守護騎士達も、自分の意思で闇の書の完成を目指しているようにも感じますし…」

「それって何かおかしいの？」

クロノの言葉に対して、アルフが疑問を投げかける。

それを聞いてクロノとリンディが互いを見やり

そしてクロノが答える。

「あの騎士達…闇の守護者達は人間でも使い魔でもない…魔法技術で作られた擬似人格、主の命令を受けて行動するただ、それだけの為のプログラムに過ぎない筈なんだ…」

それを聞いて、その場にいる全員が驚く。

すると、フェイトが少し暗い表情で呟いた。

「使い魔でも人間でもない擬似生命って…」

私みたいな…（フェイト）

フェイトの言葉を遮るようにベルクトが口を開く。

ベルクトは真剣な表情フェイトを見ながら言った。

「自分で選んだらう？お前はフェイト・テストロッサという1人の人間として生きるとな、お前は誰のコピーでもない。そんな事…軽々しく口にするな…！」

静かな怒りを見せながら、ベルクトは呟く。

「…ごめん、ベルクト…」

俯きながらフェイトは謝る。

その後、エイミイがモニターを展開し

クロノが更に詳しく説明を始める。

「守護者達は、闇の書に内蔵されたプログラムが人の形を取った物、この4人はずっと闇の書と共に様々な主の下を渡り歩いている。」

意思疎通の対話能力は、過去の事件でも確認されているが感情を見せたという例は今までには存在しない…」

それを聞いて、なのはとフェイトが口を開く。

「でも、あの帽子の子…ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてたし…」

「シグナムからも、はっきり人格を感じました…」

仲間と主の為に、成すべき事があるって…」

「主の為ね…」

顎に手を当てて、フェイは考え込む。

「俺達と同じ世界の人間、タック・ケプフォードとマリナ・カーソンの存在…そして、闇の書の力は単純な破壊にしか使えないという事…」

これらから考えれば、また何か厄介事があると考えるのが妥当かもな…」

「ああ…あのタックって人の事はまだよくわからないけど…少なくともマリナさんが、そんな事に手を貸すとは思えない…」

それに、あの守護騎士達も感情があるというなら尚更自分の主に破壊にしか使えない力を与えたいなんてそんな事を考えている風には到底見えないしね……」
ベルクトとバレルが真剣な表情で呟く。

そしてモニターが消えた後、再びクロノが口を開く。

「転移頻度から見ても、主がこの付近にいるのは確實だし
案外、主が先に捕まるかもしれない……」

「完成前なら、持ち主も普通の魔導師だろうしね……」
エイミイの言葉を聞いて

ふとベルクトが笑みを浮かべながら言った。

「案外……フェイトやなのはと同じような
10歳前後の少女だったりしてな……」

「いやいやいや……ベルクト
流石にそれは無理があるでしょ……」

「……冗談だ。」

呆れた口調のフェイのツツコミに対して
ベルクトは冷静に答える。

普段のベルクトからは考えられない言動に
周りの人間は面食らったような顔をしていた。

－ 八神家

深夜、部屋の扉をノックする音が聞こえて、タツクは目が覚める。

「タツク…起きてる…？」

扉が開いた先には、不安げな表情を浮かべたヴィータがいた。

そんな彼女を見てタツクは体を起こし、首を傾げる。

「どうしたんだ？こんな夜中に…」

「いや…その…」

扉を閉めた後、どこかモジモジした態度をヴィータは見せる。

そんな彼女の姿を見て、タツクは笑みを浮かべながら言った。

「…心配しに来てくれたのか？」

「なっ…！別にそんなんじゃないって…」

凶星だったのだろうか、ヴィータは慌てまくる。

そんな彼女に歩み寄り、穏やかな口調でタツクは言う。

「大丈夫だ…俺だってそんなに馬鹿じゃないさ」

ガーディアンはよほどの事がない限り多用はしないさ。

俺だって、お前や他の皆の事が大切だ…

死に急ぐような真似はしないさ…」

「ほ、ホントだな！、本当にそうするな！」

「ああ…」

慌しい口調で言うヴィータに対して

やはり穏やかな口調でタツクは返答した。

すると、突如ヴィータは顔を俯かせ、泣き出してしまう。
そんな彼女を見て、今度はタツクが慌てる。

「お、おいおい…どうしたんだよ…？」

「心配…だったんだ…すっげえ心配だったんだっ…！」

マリナやタツクから聞かされた話の内容…

デバイスによるガーディアンの使用には膨大な魔力が必要であり一度に多用したり、消耗している時に使用すると危険が及ぶという事。

事実、今日帰ってきた後、タツクはすぐに横になって暫くの間寝込んでいたのである。

そんな彼の姿を見て、ヴィータは不安になっていたのである。

「はやてを…救いたいのは勿論だけど…

アタシは…タツクやマリナも大切なんだっ…！

いつも…アタシに無理すんなって言うておいて…！」

はやてが闇の書の主になってからの温かい生活。

その傍らにはタツクとマリナもいた。

そして、ヴィータは自分達をはやてと同じで

家族の一員の様に接してくれる2人に対して

非常に強い信頼を寄せていたのだ。

タツクにはよく、無茶はするなという風な言葉を

聞かされて、素直になれない彼女は

つついつつけんどんな態度を取ってしまうのだが

本当は嬉しかったのだ。今までは只の道具にすぎなかった

自分を心配してくれる人物がいることが…

それだけ好感を抱いている人物が消えてしまう…
それは、ヴィータにとっては、主であるはやてがいなくなってしまうのと同じくらい辛い事だったのだ。

タツクはヴィータの両肩に手を置き

また穏やかな口調で言った。

「…ありがとう、ヴィータ…そこまで俺達を信頼してくれていて…俺も嬉しいよだから、約束する…俺も、無茶はしないって…必ず…みんな一緒に、はやてを助けよう…」
「……うん……」

涙を浮かべながら、ヴィータは少し顔を赤らめどこか嬉しそうな感じで呟くのであった。

第14話（後書き）

うーん…話の至る所にデジャヴを感じるなあ…
自分の引き出しの少なさを痛感します…

マリナはシグナムと積極的に絡んでいたので
タックはヴィータと、という風になりました。

後、ベルクトがいろんな意味で変わりまくり
無印編第1話から彼は活躍していますが

最早、ACE本編時の冷酷キャラは、完全に消滅しておりますな…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第15話（前書き）

それぞれが語る、それぞれの思い。
そして、思いがけない対面

今回は後書きはなしです。

第15話

翌日、アースラ本部のマンションにて、ベルクトとフェイトは玄関にいた。

「それでは行って来る…」

「はい、2人共気をつけてね」

玄関で靴をはいて、そう言うベルクトに対してリンデイがにこやかに答える。

ベルクトの隣にいるフェイトは顔を赤らめて黙って突っ立っていた。

「昨日の夜に遡る、明日は日曜日だし

こここの所働き詰めだったので、今までの休息ついでに食料や日用品などの買出しに行こうという話しになり「なら、俺が行って来よう。」

と、ベルクトが言い出したのが始まりである。

基本的に闇の書関連以外では、マンションの自室にこもって特に何かをするわけでもない彼らしからぬ発言に、周囲がザワツいたり

「…何故意外そうな顔をする？」

軍人時代でも休息中は買い物ぐらいはしたぞ？」

と、ムスツとした表情でこんな反論をしたり。

「じゃあ折角だし… フェイトさんも一緒に行ったらどうかしら？」
と、リンディが唐突に発言したり

突然話を振られてフェイトが驚いたり

「あ、いいですねそれ。最近忙しくて

フェイトちゃんも、ベルクトさんと

一緒に居る機会がありませんでしたし。」

たまたまその場にいたなのはが、こんな事を言ったり

「あらあら、ベルクトとフェイトさんの

初デートってやつかしら？」

からかうようにフェイがこんな事を言ったり

フェイトがそれを聞いて顔を真っ赤にして気絶したり

それを見たベルクトが盛大にため息を吐いたり…

・そして現在に至る。

人がたくさん行き交う街中を並んで2人は歩いている。

ベルクトはいつものすまし顔であるが

フェイトは相変わらず顔を赤らめたままだ。

（…デート…！違う違う…これはただの買い物…

でも…でも…ベルクトと…）

頭の中でフェイトはあれこれ考えている。

実際、昨日なのはが言ったように
ベルクトと2人きりという機会があまり無かったので
このようなシチュエーションは久々なのだ。
加えて、フエイのからかい発言を真に受けてしまい
落ち着こうたつて、落ち着けないような状態なのである。

そんな彼女の心境を知ってか知らずか
ふとベルクトは立ち止まり、フエイトの方を向いて言った。
「フエイト…気持ちはわからんでもないが…
その…変に意識されると、俺も対応に困る…
だから普段通りにしてくれないか…？」

「あ…ご、ごめん…」

言われて、フエイトはハツとした表情を浮かべた後
少し落ち込んだような表情に変わる。

そんな彼女を見て、ベルクトは更に複雑な心境になる。

（大切な存在ではある…かと言ってな…）

以前にも似たような事に触れたが

経歴が複雑とはいえ、ベルクトにも人並みの感情はある。

そしてこの半年で、他人との付き合い方というのも

改めて、いろいろと学んできたつもりだ。

フエイトからキスをされて、自分に対して

好きだと言ってきた。これは所謂

異性に対する恋愛感情だとベルクトは察していた。

ただ、ベルクトはその手の事を考えるのは
どうにも苦手な面があった。

ベルクトにはそもそも異性に対して

何か特別めいた物を感じるという事がなかった。

フェイトに対しても、大切な存在と感ずることはあれど
1人の女性として、という風な見方はしていない。

それにベルクトも、この半年で学んだ事だが

周囲の印象とかそんな事が気になり始めていた。

男女が付き合うというのは、多数の例外はあれど
基本的に年齢が近い人間同士である事が多いと思っていた。
その最もたる例が彼の身近にも存在している。

ベルクトはこちらで誕生日を迎え、現在18歳である。
対してフェイトは、過去の経歴が複雑とはいえ
肉体年齢的には10歳前後の少女である。

（どう考えても…何か不釣り合いだろう…）

とまあ、そんな風に考えていたベルクトは
どうしても、踏み切った行動に出れないでいたのだった。

・同時刻の八神家

リビングでシグナムソファに座りながら

腕を組み、目を瞑りながら、黙って下を向いていた。

その隣にはヴィータが座っており

側では狼形態のザフィーラが眠っていた。

リビングの扉が開き、シャルが部屋に入ってきた。

「はやてちゃん、もうじき帰ってくるそうよ。」

「そうか…」

シャルの言葉に対して下を向いたままシグナムは答える。

「はやてには、寂しい思いをさせちまったからな…」

少し表情を曇らせながらヴィータが呟く。

「タックさんとマリナさんは？」

「かなり遠出らしい、夕方には戻るそうだ…」

シャルの問いに対して、彼女に近寄りながらシグナムは答える。

そんなシグナムの顔を覗き込んだ後、再びシャルは口を開く。

「シグナムもヴィータも大丈夫…？」

大分魔力が消耗してるみたいだし…」

「お前達の将は、そう軟弱には出来ていない…大丈夫だ。」

「自分の事くらい自分でわかってる…」

タツクにも散々言われてっからな…無茶すんなって。」

心配そうに尋ねるシヤマルに対して

シグナムとヴィータは笑みを浮かべながら答えた。

シグナムは冷蔵庫から飲み物を数本取り出す。

それをシヤマルとヴィータに手渡した後、再びソファに座る。

「私達みんな…随分変わったわ…」

みんな、タツクさんやマリナさん、何より

はやてちゃんと会った日からよね…」

「ああ…そうだな。」

「そういや、はやて達とはもう、半年以上一緒にいんだよな…」

3人はしみじみとした表情でそう呟く

暫くした後、ヴィータがふと口を開く。

「なあ、タツク達はさあ…異世界の人間なんだよな…」

「?…それは前から承知の事だろう?」

どこか暗い感じで言うヴィータに疑問を抱き

シグナムは首を傾げる。

「2人とも…はやてを助けるって…一緒に頑張ってくれてっけど…
その…はやてが助かった後は…どうすんだろって…」
言われてシグナムとシャルはハッとなる。

この半年間、家族同然のようにタックとマリナは接してきた。
その事でついつい忘れていたのだが

2人は本来は異世界人、いわゆる次元漂流者であり
帰るべき場所が存在するという事だ。

闇の書の呪いが発覚した日、主との誓いを破った時

マリナは、はやての事が片付くまで帰るつもりは無いと言った。

ただ、その少し前には、帰らないという

選択肢を選ぶつもりはないとも言っていた。

その事から考えれば、はやてが無事に呪いから解放された後
いずれはタックとマリナと別れる日がやってくるのだ。

家族同然に接してきた大切な人間との別れ…

いつになるかはわからないと言えど

それは避けられない事である。

「やはり…いずれは別れなければならぬだろう…」
そう呟いた後シグナムは目を瞑り、過去の事を思い返す。

この半年、マリナとはよく彼女の世界の話や

逆にシグナム達守護騎士や、闇の書の事でよく話しをしていた。
暇を見て、何度か模擬戦をした事もあった。

（それについてはマリナは少々困っていたみたいだが…）
蒐集を行なう際にも、共に戦うことが多い。
守護騎士達の中では、自分が最も一緒にいる時間が多い。

そして己の過去、タツクの為に命を賭して戦い、
彼の為に犠牲になる道を選び、でもそれは間違っていた事
はやてや彼女達も自分達を本気で心配していると伝えられた事…
シグナムにとってはそのどれもが、大切な思い出である。

「……………」
暗い表情のまま、ヴィータも俯き、過去を思い返す。

家に居る時には、シグナム以上に興味津々で
タツクに、彼の世界の事を何度も聞かせて貰っていた。
戦闘の際は、暴走しがちな自分を宥める

ブレーキ的な存在であつた。

止められるたびに天邪鬼な態度を取ってしまうとはいえ自分を心配してくれるタツクに対する信頼は守護騎士の中でも彼女が一番大きいと言える。

昨日、ガーディアンの事でタツクが心配になり涙ながらに彼に自分の気持ちを

自分にとつてもタツク達は大切な存在だと伝えたのだ。タツクもまた、決して無茶はしないと云ってくれた。

そんなタツクと、大切な人間と別れるのはやはり辛いものである。

しんみりした空気が広がり、3人は俯いたまま黙り込む。

「…今、そんな事を言つても仕方なかるう。」

ふと、そんな声が響き3人は一斉に顔を上げる
声の主はザフィーラであつた。

「…聞いていたのか。」

「ああ…」

シグナムの言葉に答えた後、顔を上げてザフィーラは続ける。

「あの2人も、主の為に共に戦い…」

そして、我らと同じ大切な家族の一員だろう？

今はそれで十分だ…別れの事などいつになるかはわからん…

そんな事を考えてしまえば…主やあの2人に

いらぬ心配をかける事になる…

だから、今は別れの事など考えなくてもいい…

そういう事は主の呪いを解いてから考えても

遅くは無かるう…」

ザフィーラの言葉を聞いて、3人は少し気持ちが和らいだ気がした。

「そう…ね、きつとそうよね！」

シヤマルは立ち上がりながら、明るい声を発する。

「ああ…そうだな、今は主を救う為に頑張ればいい…

マリナ達も、その為に元の世界のことを後回しにして

私達と共にいてくれるのだからな。」

シグナムも和らいだ表情になり、そう呟く。

「…うん、そうだな！今は、はやての為に

タック達と一緒に頑張ればいいんだ！

余計なことは、その後も遅くねえ…！」

ヴィータも先程の暗い表情が嘘のように

両手でグツと拳を握って、元氣よくそう言った。

そんな様子を見て、ザフィーラも笑みを浮かべる。

「すまないなザフィーラ…」

「気にするな…我らが悲しんでいては

主も悲しむからな…」

「そうだな…」

シグナムとザフィーラを互いに穏やかな口調で

そう言い合つのであった。

・とある次元世界

「蒐集…」

ただっ広い草原に倒れ付す巨大な翼竜から
タツクはリンカーコアの蒐集を行なう。

「今ので5ページ…まずまずの収穫ね…」

「ああ…」

すぐ後ろに降り立ったマリナに対して

タツクは振り向かず、険しい表情で答える。

「ねえ、タツク…はやてを救うのは勿論だけど…

本当にこの方法でいいのかしら？」

「？…どうしたんだよ急に？」

暗い表情でそう呟いたマリナに対してタツクは首を傾げる。

「闇の書の完成と同時に、はやては大いなる力を得る…

でも、はやてはそれを望んでいるのかしらって…

もつと他に方法が…」

「……………」

「あ、ゴメン！、何言ってるのかしら私…

つついこんな弱気な事…」

タツクに黙ったまま真剣な眼差しを向けられ

慌ててマリナはするように言った。

「マリナ…」

そんな彼女に真剣な眼差しを向けたまま、タツクは語る。

「俺達は確かに、はやての意志を聞かないまま行動している…でも、俺達と違って彼女は単なる1人の少女なんだ」

こんな重い運命…聞かせるだけでもかなりの苦痛だろう…」

声量が段々大きくなりながらも、タツクは続ける。

「俺だって、これ以外の方法があるというなら」

それはそれで望ましいさ…でも、今の俺達には

それを探す時間も、方法も限られている。

それに、闇の書に関してはあの4人が一番知っているんだ。

だから、今はこれが正しいと信じて戦うしかない。

闇の書の完成であれ、万一他の方法が見つかった場合であれ俺達が優先しなきゃいけないのは、はやてを…いやはやてや守護騎士みんなを救う事だからな…」

「……そうね。」

そんなタツクの言葉を聞き終わった後

マリナは穏やかな笑みを浮かべながら言った。

「……ありがとう、タツク…」

またあなたに助けられちゃった…」

そんな彼女の言葉を聞いて、タツクも笑みを浮かべる。

「言っただろ…守るってな…」

お前は…大切なパートナーなんだから…」

2人は近づいて、体を寄せ合う。

「…久しぶりね、2人きりでこんな事するのも…」

「ああ…あれから随分といろんな事があったしな…」

タツクに体を寄せて、マリナは心地良さそうな表情を浮かべる。そんな彼女を微笑ましい気持ちでタツクは見つめていた。

そんな甘い空気が漂っていた時であった。

「ピギヤアアアアア！！！」

上空から咆哮が聞こえて、2人はその方向に顔を向ける。

その先には先程倒したのとは別の翼竜が

こちらに向かって襲い掛かろうとしていた。

「全く…空気の読めない奴だな。」

「同感ね…私もそう思うわ。」

残念そうな口調なのに、どこか晴れやかな表情で2人はそう言う。

そして2人はそれぞれの武器を構えた。

「いいな、マリナ！」

「いつでもどうぞ！」

そして2人は翼竜に向かって突っ込んでいった。

・昼時、買い物を終えたベルクトとフェイトは
近くの喫茶店に入ってくつろいでいた。

（……………翠屋の方が美味かったな……………）

そんな事を考えつつ、紅茶のカップをテーブルに置く。

「フェイト、そういうえば養子縁組の話はどうなった？」

「え、えつと…まだ決めてない……………」

「そうか。」

唐突にそんな話題を振られて、フェイトは慌てて返答する。

P.T事件の終結後、外面的には天涯孤独となってしまうた
フェイトに対して、リンディが家の子にならないかと
持ちかけてきていた。ただ、フェイト自身も
母の事を含めて、いろいろ思い悩む事もあり
気持ちの整理がつかない状態にあったのだ。

暫くの沈黙を挟み、フェイトが少し頬を赤らめながら言った。

「その、ベルクトは…どう、思うの…？」

「ん…？」

「私と…リンディ提督が…その…」

膝に手を置いてモジモジと語るフェイトに対してベルクトは穏やかな口調で返答する。

「お前が…例えリンディ提督と親子になってもそれはそれで、いい事だと思うぞ。

血の繋がりで、親子の情が生まれるわけじゃないしな…

俺達2人はそれを誰よりも知っている…」

「……………」

そう言った後、2人は少し表情を暗くする。

プレシア・テストロッサ…

ジル・バルドナ…

どちらも、自分の子供を紛い物と呼び

道具の様に扱ってきた人物…

そんな者が果たして、本当に親と呼べるのだろうか？

今度は真剣な表情で、腕を組みながらベルクトは続ける。

「血の繋がりで親と呼ぶ事など…

俺にとっては反吐が出るような話だ…

リンディ提督のように、血は繋がっていなくとも

親身に接してくれるような人間こそが

自分にとって大切だと感じられると、俺は思うんだけどな…」

「うん…」

「フェイト、お前もいろいろ思う事はあるだろうが

お前はまだ、俺と違ってまだ幼い。

もっと、周りに甘えてもいい年頃だ…

俺個人としては、養子縁組の話

受け入れる方がお前にとっていいと思うぞ…？」

「うん…ありがとう。」

大切な、最も信頼している人間にそう言われて

フェイトは少し気持ちが楽になった。

「ただまあ…」

ベルクトは組んでいた両腕をテーブルに置き

表情を和らげた後、再び口を開く。

「どんな選択をしようとか、言える事は1つだ。

お前がどんな道を進もうと、俺はその為の手助けをする。

どんな事が起きようとも、俺はお前の側にいる…

お前は…俺にとって最も大切な人間だからな…」

「………」

もう何度言われたかわからない言葉だが

やはり、何度言われても心の奥底に沁みこむ。

最近互いに忙しくて、2人で会話する時間があまり無かったが
やっぱり、この目の前に居る男性は

自分にとって掛け替えの無い人なんだと改めて再認識する。

「ありがとう…ベルクト…」
フェイトは俯き、顔を真つ赤にしながら呟く。
ベルクトはそんな彼女の姿を、穏やかな笑みを
浮かべながら見ているのであった。

・数日後、時空管理局本局
ユーノ、クロノ、エイミィは
ある人物達に会う為に通路を歩いていた。
「闇の書について、調査をすればいいんだよね？」
「ああ、これから会う2人はその辺に顔がきくから。」
歩きながらユーノとクロノがそうやり取りする。

クロノが部屋の扉を開ける。

「リーゼ、久しぶりだ、クロ……？」

部屋の中に居たのは、猫耳と長い尻尾を持った2人の女性
そして、コートと帽子を纏った男性・ディール・クルーシブル。

「……… いうわけで、複製と改良はあと少しで完了しますよ。」

「助かるわ……あなたの仕事は確実に

それでいてスピーディだって、父様も言ってるしね……」

何やら真剣な雰囲気ですんな事を言い合っている。

が、猫耳女性の片方が、部屋の入り口に來た人物を見ると

「わぁお！クロすけ！お久しぶりぶりっ」

満面の笑みを浮かべながら、クロノの方に

（文字通り）飛んでいき、彼を抱きしめる。

「ロツテ！？……おわっ……ちょ、離せコラ！」

「何だところら……久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよぉ」

クロノは抱きついてくる女性・リーゼ・ロツテに対して

必死の抵抗を試みるも、ロツテは更にきつく抱きしめてくる。

「ア、アリア！これを何とかしてくれ！」

「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない……」

それに……まあなんだ、満更でも無かるう？」

クロノはもう1人の女性、リーゼ・アリアに助けを求めたが

アリアはそれをあつさりと見捨てる。

「そんな訳ないだ……」

「ニヤアアアア……！」

「うわっ！アアアアアアアア……！」

クロノが言い切る前に、ロツテは彼を押し倒し

彼に向かって……まあ、いろいろし始めた。

「ハハハ……若いというのはいいものですな……」

ハラオウン執務官……？」

ディールはそんな事を呟きながら、そそくさと部屋を立ち去った。

ユーノはそんな3人のやり取りを呆然と見つめており

エイミイは、今部屋を出て行った男性が
かの有名なデイル博士だと気づき
話す機会を逃したことを悔しがった。
（ああ…どうしてこんなのが僕の師匠なんだ…）
ロツテにいいように玩具にされながら
クロノは心内でそう呟くのであった。

騒ぎが一段落した後、ようやく真面目な会話がされる。
ユーノはエイミイに2人の事について尋ねる。

髪の長い、落ち着いた物腰の方の女性が
クロノの魔法教育の師匠、リーゼ・アリア
髪が短い方の、どこか無邪気な感じの女性が
近接戦闘教育担当の師匠、リーゼ・ロツテ
グレアム提督の双子の使い魔で、素体は猫

と、こんな感じに一通りの説明をする。

クロノが申し出たのは、無限書庫での
闇の書についての調査

- 管理局の管理を受けている、世界の書籍、データが
全て納められた、超巨大データベース
いくつかの歴史が丸ごと詰まった、世界の記憶の保管庫

『無限書庫』

そこでの情報収集を行なう、ユーノの手伝いを頼めないか、というものであった。リーゼ達は可愛い教え子の為ならとその申し出を快く承諾するのであった。

同じ頃、海鳴市の図書館にて

フェイは1人で本を手にとつて、読んでいた。

（こつちの世界でも、あんまり変わりはないか…）

臨時教師の仕事の帰り道、ふと図書館が目に入り異世界の地球の書物に何となく興味が沸いたのでちよつと立ち寄つてみる事にしたのだ。

「あ、フェイ先生！！」

「あら、すずかさん。」

フェイが本棚に本を戻したその時

すずかが明るい笑みを浮かべながらフェイの方にやってきた。
「先生も、本好きなんですか？」

「ええ、こつちの国の本はどんなのかなって
ちよつと気になったのよ。」

「そうなんですか。」

2人がそんな他愛のない会話をしていると

別の方向から車椅子を押す音が聞こえてきた。

「はやてちゃん！」

「あつ、すずかちゃん！」

すずかが声をかけたその先にいたは

車椅子に乗ったはやてと、それを押すマリナ。

「あつ…！フエイ…！？」

「カーソン…！少尉…！？」

思いがけない場所での対面に
マリナとフエイは驚いた顔を浮かべるのであった。

第16話（前書き）

意外な対面を果たすフェイとマリナ
そして始まる新たな戦い

第16話

図書館内の長椅子に、フェイとマリナは隣同士で腰掛けていた。

ずかとはやては離れた位置で楽しげにお喋りしている。

「あの…カーソン少尉…」

フェイは暗い表情で呟く。

流石にこのような形で再開してしまうと

どう切り出したらいいのやらと、困惑していた。

だが、マリナは対称的に穏やかな表情で

フェイの顔を見つめながら言った。

「…心配しないで、こんな場所でドンパチやろうとか考える程、私も馬鹿じゃないわ。それに…」

そう言ってフェイの方に手を差し伸べる。

「やっと…落ち着いて話が出る機会が

出来て、良かったくらいよ…」

「カーソン少尉…」

「ここでは、そんな堅苦しい呼び方じゃなくていいわよ…」

そんなやり取りの後、フェイも穏やかな表情になり

差し伸べられた手を握った。

暫くした後、握った手を離してフェイは言った。

「マリナさん、一体どんな経緯でこの世界に？」

「私とタツクが来たのは半年前…あなたと同じで

バルドナ・ドライブの探索任務の最中に

あそこにいる車椅子の子、はやての家の庭先に飛ばされたの。」

「半年前…私とバレルが来たのとほぼ同じ…」

「あの子が私達を受け入れてくれたから

私達は今日まで無事に生きてこれたと言っても過言じゃないわ…」

「私とバレルも似たような感じでした。

管理局の艦に転移されて…その艦長がとてもいい人で、

その人のおかげでこっちで生活できてる感じですし。」

「成る程…お互い幸せ者ね。」

そんな感じで、互いに穏やかな感じで会話をしていたが

突然マリナが真剣な表情になり、フェイをじっと見つめる。

「フェイ…これから言う事、他の誰にも言わないって約束してくれる？」

「えっ…？」

「闇の書の事についての話よ…」

マリナは考えていた。

闇の書の呪いを解くには、闇の書を完成させる事。

だが、それ以外の道があるならそれに越した事は無い。

それはパートナーのタツクも言っていた事だ。

今の自分達には、他の方法を模索する時間が無い
かと言って、不用意に見知らぬ管理局の人間に話したりしたら
はやての身の安全が保障できない。巨大な組織というのは
どこに情報が流れ、どんな人間が関わるかわからないからだ。

だが…自分の同郷者だったら、あるいは…

信頼もおけるし、管理局側の情報も少なからず入手できる。

それに、たった1人の大切な人間を救いたいという

自分達の気持ちを理解してくれるだろうと思ったのだ。

望みは薄いかもしれないが、リスクも小さいし

ひよっとしたら他の解決法が見つかるかもしれない。

そう思って、全てを話す事にしたのだ。

しばらくした後、フエイも真剣な表情で

マリナを見返しながら返答した。

「…わかりました、約束します。」

「…ありがとう、フエイ…」

そしてマリナは全てを語り始める…

全てを話し終えた後、マリナは一息ついた後俯く。

そんな彼女を悲痛な面持ちで見つめながらフェイが言った。
「じゃあ…マリナさんは、あのはやてつて子の為に…」
「そうよ…は yet は私とタツクの恩人だもの…」
でなければ、こんな物騒な事に手を貸したりはしないわ。」
俯いたままマリナは答える。

（マリナさんも、ベルクトと同じ…）
話を聞いたフェイはそう思っていた。

背景の違いはあれど、彼女もまた大切な人を救う為に
自らの手を汚してでも、それを達成するという覚悟があると。

俯いたまま寂しげな雰囲気を漂わせるマリナが
いたたまれなくなり、フェイは言った。

「闇の書についての調査は、こちらでも進めています。

今日も、管理局の執務官が詳しい情報の確保の為に
本局とも取り合っています。ひよっとしたら…」

完成以外の方法が見つかるかもしれません…

だから、その…元氣出してください。

私も、マリナさん達の為に出来る限りの協力はしますから。」

その言葉を聞いて、マリナは顔を上げて
フェイの方を見ながら言った。

「ありがとう、会えたのがあなたで良かったわ…」

そう言っ てマリナは笑みを浮かべる。

そして、椅子から立ち上がってこう言った。

「そろそろ時間ね、私も帰らないと…」

「はい、じゃあ私も…」

そう言つてフェイも立ち上がる。そして歩き始めようとしたところでマリナはハツと思い出したようにフェイを呼び止める。

「そうだフェイ、これを持っていつて。」

そう言つて差し出されたのは、番号が書いてある一枚の紙切れ。

「通信傍受されないように設定された

私の電話の番号よ、何か新しい情報が入ったら

出来る限りの範囲でいいからこれに連絡して。」

「えっ、でもいいんですか？」

少し困惑したようにフェイは言う。

確かに、マリナの事は自分達の世界で

共に戦つた仲間としてよく知っているが

今の自分は管理局に身を置く民間協力者

自分がマリナの情報をバラすつもりも

バラさせるつもりも毛頭無いが

流石に少し信用しすぎなのではないかと。

だがマリナは気にして無いように言う。

「元より、リスクは覚悟の上よ…それに

あなたならヘマはしないでしょ？」

「マリナさん…」

「蒐集の妨害をしないでくれとまでは流石に言わないわ…

けどわかつてほしいの、私はただ

たった1人の人を救いたいだけだつて。」

それを聞いて、真剣な眼差しでフェイは答える。

「わかりました…必ず、そちらのお役に立てるように

私も出来る限りの調査をしてみます。」

「ありがとう、それじゃ……」

再び礼を言った後、マリナははやてを連れて図書館を後にした。フェイはそんな彼女の後姿を

どこか寂しげな表情で見つめるのであった。

数日後、ベルクト、バレル、フェイの3人は

ユーノやクロノと共に、管理局本局へと赴いていた。

デバイスのメンテに加えて

自分達も無限書庫での情報収集に協力する為である。

因みに無限書庫での手伝いはフェイが言い出した事なのだが

「リーゼさん達もなかなか忙しいらしいし……」

闇の書の情報は出来る限り早く集めるべきだわ

なら、私達が協力すれば能率が上がるんじゃない？」

という、彼女の言葉に同意して

バレルとベルクトが追随するという形になった。

今はアリアがロツテと、フェイがバレル、ベルクトと交代してユーノと一緒に大量の書物を漁っている。

「しかし、器用な物だなユーノ？」

「うん、過去の歴史の調査は、僕らの一族の本業だしその為の検索魔法も沢山あるしね……」

一冊の書物を手に取り、傍らに大量の本の山を魔力で浮遊させながらベルクトは呟く。

それに対してユーノは、魔法陣を展開し

自分を取り囲むように書物を浮かばせながら答える。

本人曰くこれで全ての書物を一度に解読できるんだとか。

別の場所でベルクトと同じように書物を

操作していたバレルが、ふとロツテに尋ねる。

「リーゼさん達は、前の闇の書事件について

間近で目撃していたって聞いたんですが……？」

それを聞いて、表情を曇らせながらロツテが答える。

「うん……ほんの１１年前の事だからね……」

私とアリアは父様と一緒にだったから……近くで見てた……

封印した筈の闇の書を護送中だったクライド君が……

クロノのお父さんが……護送艦と一緒に沈んでく……」

それを聞いてバレルは意外そうな表情を浮かべる。

「クロノの父親が？」

「うん……クライド・ハラオウン……」

管理局内でも注目されてた優秀な人だったんだよ……」

「成る程……クロノが闇の書の事件に対して

随分と熱心なのはそういう事だったのか…」

顎に手を置いて、固い表情でバレルはそう呟く。

その後、今度はベルクトがロットに尋ねる。

「封印した闇の書と一緒に護送艦が沈んだというが…」

一体何が原因でそうなったんだ？」

「えっと…封印した筈だったんだけどね…」

闇の書の力は膨大だったって事よ…

暴走した闇の書がエステアを取り込んだじゃったんだ…」

ベルクトの質問に、表情を曇らせたままロットは答える。

「それで…闇の書をエステアとクライド君ごと

父様が撃墜した…父様はその事を今でも悔やんでる…

だから、私達も闇の書の事なら、出来る限り

協力してあげようって思ってるの。」

「そうか…」

そう言っただけでも表情を固くする。

そして、内心でこんな事を呟くのであった。

（闇の書が原因か…以前感じたあの感覚はもしかすると…）

・アースラススタッフの本部マンション

「たっただいまー！」

食材の買出しに出かけていたエイミィが帰ってきた。

「艦長、もう本局に出かけちゃった？」

「うん、アースラの武装追加が済んだから試験航行だっ…」
買ってきた食材を手に取りながらフェイトが答える

それを聞いてエイミイが人差し指で頬を触りながら言った。
「武装っていうと…アルカンシエルか…」

ふう…あんな物騒な物最後まで使わずに済めばいいんだけど…」
エイミイため息を吐く。

「バレルさん達もクロノ君もいないですし…」

みんなが戻るまでは、エイミイさんが指揮代行だそうですよ？」
食材の整理を手伝いながらなのはが言う。

（責任重大！）

子犬形態のアルフが、床に寝そべりながら
からかうような口調で念話を飛ばす。

それを聞いて、エイミイはどこか得意げに答える。

「それもまた物騒な…まあ、とはいえそうそう

非常事態なんて起こるわけが…」

言い切る前に緊急のアラームが鳴り響く。

エイミイは手にしていた南瓜をボトリと床に落としてしまう。

…口は災いの元とは正にこの事であろう…

・マンション内の司令室

モニターに映し出されているのはとある次元世界に
佇んでいるマリナとザフィーラの2人。

「文化レベル0…人間は住んでない砂漠の世界だね。

結界を張れる局員の集合まで最速で45分…ああ、まずいなあ…」
目の前のパネルを慌しく操作しながら

エイミイは困ったようにそう呟く。

それを聞いたフェイトとアルフが互いの顔を見た後頷いて

そしてエイミイに対して言った。

「エイミイ、私が行く。」

「アタシもだ。」

「うん、お願い。」

エイミイはそれを了承する。そしてなのはの方を向いて言った。

「なのはちゃんはバックス、ここで待機して。」

「はい。」

なのはは頷いて答えた。

…とある次元世界の砂漠にて

マリナは巨大な蛇型の生物と戦闘中であつた。

「全く…隠れたり現れたり、厄介な相手だわ…」

マリナは苦虫を噛み潰した様な表情でそう呟く。

そして、武器を構えようとした時、背後から蛇の尻尾が現れる。

「なっ…!!」

マリナは巨大蛇の尻尾についている触手に捕縛されてしまう。

「クッ…マズいわね…」

身動きが取れなくなり、マリナは焦りを見せる。

蛇は先の尖った尻尾でマリナを突き刺そうとする。

だがその時、何本もの黄色い魔力刃が蛇に突き刺さる。
マリナが驚いて上空を見上げると

そこには魔法陣を展開したフェイトが浮かんでいた。

「ブレイク!!」

フェイトがそう叫ぶと同時に魔力刃が爆発を起こした。

離れた場所でザフィーラはマリナのいる方を見つめていた。

「お仲間の事が気になるかい？」

ふと背後から声が聞こえて、ザフィーラは後ろに振り向く
そこにはアルフがいた。

「お前か……」

「あんたのお仲間も一対一、こっちも同じだ。」

そう言つて2人は睨みあい、身構えた。

・司令室で再び警報が鳴り響く。

モニターに映し出されたのは闇の書を抱えたタックであった。

「本命はこっち…！なのはちゃん！」
「はい！」

エイミイの言葉に対して、なのはが頷いて答える。

蛇が消滅した後、空中で相對するフェイトとマリナ。

「フェイトちゃん！助けてどうすんの！？捕まえるんだよ！」

「あ、ごめんなさい…つい…」

通信から聞こえるエイミイの怒鳴り声を聞いて、フェイトは謝る。

「礼は言わないわよ、テストロッサさん…？」

「お邪魔でしたか…？」

「獲物を潰されてしまったのは、ちょっと残念だけどね…」

「まあ…悪い人の邪魔が、私の仕事ですから…」

それを聞いて、マリナは自嘲気味に呟く。

「そうね…今の私は悪人だものね…あの時と同じで。」

- 別の次元世界

眼下に森林と山脈が見える世界の上空を飛びながら
タツクはシャマルと通信を取っていた。

（マリナ達が？）

（うん…砂漠で交戦してるの…

テスタロツサちゃんと、その守護獣の子と…）

（シグナムと戦っていた子か…長引くと面倒になるし

俺もそっちに向かうと……ッ！）

そこまで言ってタツクは急停止する。

タツクが視線を向ける少し先に

固い表情を浮かべたのはが浮かんでいた。

・地上に降り立った後、フェイトとマリナは再び相對する。

「始める前に1つ聞かせてもらえる？」

「何でしょうか？」

マリナの言葉に対して険しい表情でフェイトは言う。

「あなたにとって、ベルクトは何者？」

どうして彼と一緒に戦っているの？」

「！…！」

その質問に、フェイトは一瞬驚いたように反応するが
すぐに表情を引き締めなおして答える。

「ベルクトは…私の人生を変えてくれた…」

私に新たな生き方を教えてくれた…」

掛け替えの無い…大切な人です。」

「…彼の過去を知ってても、そう言えるの？」

かすかに首を傾げながらマリナは更に尋ねる。

だが、フェイトは何の躊躇いもなく答える。

「言えます…ベルクトはもう、世界の滅亡なんて望んでない…
確かに許される事じゃないかもしれないけど…

でも、彼もまた新しい生き方を見つけたんです…

ベルクトは私を助けるために…

私はベルクトを助けるために…自分の道を歩んでいる…」

そこまで言ってフェイトもバルディッシュを構える。

(…どうやら…真実みたいね…)

少し笑みを浮かべながら、マリナは心内で呟く。

これまでの戦闘や、以前のフェイトとの接触で

ベルクトの事に関しては何度も聞いていたが

どうやら、彼が大幅に人格を変え

目の前のこの少女を救う為に奔走していたという話は

今のフェイトの独白で、間違いではないと確信した。

「…わかったわ、だけど…残念ながらその事と、

今の私の事は別の話…引くことは出来ないわ…」

そう言った後、マリナも左腕から魔力刃を形成する。

「聞いているわよシグナムから…スピードなら

自分をも凌駕するってね…？」

「そうですか…」

「そんな強敵相手に…手加減なんか出来ないわよ？」

互いに身構えながらそうやり取りする

そして、暫くの静寂を挟んだ後

「ハアアアアア！」

2人は咆哮をあげながら、同時に飛び上がった。

急に通信が途絶え、シャルはタックを呼ぶ。

（タックさん？）

（こつちにも来た…ヴィータと戦っていた、確か…）

そこまで言った後、自らの口でタックは呟く。

「…なのはって言ったか？」

「あ、はい…」

急に名前を呼ばれて、なのはは困惑しながら答える。

そして、表情を少し和らげて更に言った

「えっと…あなたは…」

「…タック、タック・ケプフォードだ。」

目の前の男の名前をど忘れしてしていたなのはに対して
タックは律儀に己の名を名乗る。

「タックさん…その、話を聞かせて貰うわけには
いきませんか…？もしかしたら、手伝える事とか…
あるかもしれませんし…」

そう言って笑みを浮かべ、なのはは可愛げに首を傾ける。

(クッ……………)

タツクはたじろぐが、すぐに固い表情になって言い返す。

「申し訳ないが…管理局の人間に

こっちの情報を渡すわけにはいかないんだ。」

「私、管理局の人間じゃないですよ…民間協力者。」

そう言ってなのは両腕を広げる。

「民間だろうと何だろうと…情報が漏れる可能性がある。

そう言われてもだな…」

「些細なことでもいいんです…言っても支障がでない

ホントに些細な情報だけでも…バレルさんも言っていました

自分と同じ世界の人が、あんな物騒な物と関わるのには

きつと理由がある筈だろうって。」

「ぬう……………」

タツクはつい唸り声をあげてしまう。

(やりづらいな…)

純粹な笑みを浮かべているなのはに対して

タツクは心内でそう呟く。

そもそも以前、彼女はヴィータから

有無を言わさない襲撃を喰らって負傷してるいるし

今も民間協力者とはいえ、自分は管理局にとっては

敵であるはずなのだ、なのにこうやって話を聞かせてほしいと

自分に対して持ちかけている。

タツクにとっては全く理解できない行動であつた。

(リンカーコアの蒐集は魔導師1人につき1回…)

この子からはまだ蒐集していない…だが
何の敵意も持っていない相手に対して行なうなど…)

流石にここまで無防備な相手から蒐集するのは
さしものタツクも良心が痛んでしまう。

はやての為に一刻を争うとはいえ

どうしても蒐集するという選択に踏み切れない。

(あの子の实力はヴィータにも匹敵する…このまま
すんなり逃げ切れる可能性も低い…

仕方ない…多少時間はかかるが、戦闘で消耗させて
頃合を見計らって、上手く逃げるしかないな…)

そう判断したタツクはライフルを構え、

足下に魔法陣を展開する。

「…チャージモード!!」

アークライフルから黄色い閃光が発射される。

「あっ!!…タツクさん!」

なのはは突然のタツクの行動に慌てながらも
シールドを構えて閃光を防ぐ。

「悪いが…俺達の事を管理局のような

巨大な組織に知られるわけにはいかないんだ…」

静かにそう呟いて、タツクはライフルの先に魔力刃を形成する。

そしてなのはの方に向かって突っ込んでいった。

第16話（後書き）

ということでマリナ対フェイトと、タック対なのはの開始です。

…正直言いますと予告書いた時点でのプロットと結構な数の違いが出てきていたりします。

自分の計画性の無さに憤りを感じる今日この頃…

（いや、今回の引きのACEキャラ対なのはキャラについてはプロット内にはあったんですけどね）

ようやくA's編も本編の後半部分に入ってきたって感じですが
ダラダラと続いておりますが

応援してくれている方は

どうか最後まで見てくれれば幸いです。

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第17話（前書き）

次元世界によるマリナとフェイト
タックとなのなの戦い

第17話

砂漠世界にて、フェイトとマリナは戦いを続けていた。

空中でマリナの魔力刃とバルディッシュが交わる。

直後、マリナは攻撃をやめて一旦後方に下がる。

それを見たフェイトは瞬時にマリナの背後に移動する。

「ハアッ！」

すかさずマリナに向かってバルディッシュを振り下ろす。

マリナはそれを紙一重でシールドを展開し、攻撃を防ぐ。

そして、攻撃を防ぎながら、自身の周辺に魔力弾を4つ生み出す。

マリナはそれを操作し、フェイトに向かって襲い掛からせる。

フェイトは一旦攻撃を止め、後方に下がってそれをかわす。

（ベルクトとは思いつきり真逆のようね…）

固い表情でそんな事を考えつつ、マリナは周辺にユニットを展開
それをフェイトの方に向けて飛ばす。

「避けきれるかしら…トランスユニット…！」

マリナは魔力弾を多数発射し、ユニットに反射させ

全方位からフェイトに向けて攻撃を行なう。

「ッー！」

フェイトはそれらを縦横無尽に飛び回りながらかわしていく。

だが、マリナはユニットに加えて、更にライフルによる攻撃を行な
う。

それにより魔力弾による攻撃の勢いは更に激しさを増していく。

（避けきれない…！）

そう判断したフェイトは、シールドを張りつつ後退し、マリナから

距離を取る。

そして地上に降り立ち、カートリッジロードを行なう。

「ハーケンセイバー……」

バルディッシュから巨大な刃型の魔力弾が放たれ

飛び交うマリナの魔力弾を掻い潜りながら、

一直線にマリナ向かって飛んでいく。

マリナはそれを上空に飛び上がって回避する。

「はあああ……」

だが、すぐ上にバルディッシュに魔力刃を形成し

それを振り下ろさんとするフェイトがいた。

「チツ……デコイツ……」

瞬時に頭を切り替え、マリナはライフルから白い魔力弾を発射する。

フェイトの斬撃はその魔力弾に命中し、そして爆発を起こす。

「なっ……咄……?」

爆発に巻き込まれながら、フェイトは目を見開いて驚きを浮かべる。

「落ちろっ……!」

マリナは更に、背後に回ってフェイトに蹴りを放つ。

「クッ……」

蹴り飛ばされ、落下していくフェイト。

だが、その途中でマリナに向かってプラズマランサーを放つ。

「……!」

予想外の攻撃にマリナは驚く。そしてプラズマランサーは

彼女に直撃し、爆発を起こす。

（少しは通ったかな……）

地上に降り立ち固い表情を浮かべながら、フェイトは心内で呟く。

・別の次元世界では、タツクはなのはと戦闘を行っていた。

タツクはアークブレードをなのはに向かって振り下ろす。

なのははそれをシールドを展開して防ぐ。

「ッ！…どうして！！」

攻撃を防ぎつつ、苦しい表情でなのはは叫ぶ。

そんななのはを見やりながら、タツクは固い表情で口を開く。

「…言っておくがな、俺もマリナも

闇の書の主に命令されて、蒐集を行なってるわけじゃあない。」

「え！？」

その言葉になのはは驚く。

（破れないか…ヴィータの攻撃を防いだだけのことはあるな…）
なのはのシールドを攻撃しながら、火花を散らすアークブレード。

タックは一旦攻撃を止めて距離を取り、更に続ける。

「俺も、守護騎士達も、蒐集を行なっているのは自分達の意志だ…そして、俺達の主は蒐集については何も知らない…」

「…！…そんな、でもどうして！？」

理解できないという風になのはは叫ぶ。

- 闇の書の力は純粋な破壊にしか使えない。

つまり、蒐集を行なう事はすなわち、破壊そのものが望みと言えるのだ。

しかも、主に強制されてそうしているのならまだしも

タックは、蒐集は自分達の意志だと言い切ったのだ。

おまけに、肝心の主が蒐集について何も知らされていない。

ここまで知りえている情報だけで考えるなら

タック達は、主に破壊の為の力を持たせる事を望んでいる事になる。

だが同時に、そんな筈が無いとなのはは考える。

以前戦ったヴィータや、今日の前にいるタック達の雰囲気からは

そんな危険な事を考えるような気配が感じられないからだ。

前にアースメンバーでも話し合ったことなのだが

守護騎士達からはつきりと感情が感じられる。

自分の主に破壊にしか仕えない力を持たせたいなどと考えている様には見えない。

ましてや、さっき自分が言ったようにタックは元々

バレルやベルクトと同じ異邦人である。

本来は全く無関係な世界で、破壊を望む意味が全く見当たらないのだ。

だからこそ蒐集を行なう理由が見出せず、なのはは余計に混乱してしまう。

「…さっきも言った筈だ、それを管理局に知らせる訳にはいかないとな…」

そう呟いてタツクは足下に魔法陣を展開し、ライフルから閃光を放つ。

なのはは、とつさに下に飛んでそれをかわし、表情を引き締める。

「なら…無理矢理にでも、聞かせてもらいます！」

そう叫んでレイジングハートを構え、魔法陣を展開する。

それを見たタツクも離れた位置で呟く。

「ホーミングシューター…」

だが、タツクが魔力弾を放つ前に、なのはが先に攻撃を仕掛けた。

「アクセルシューター…シューートッ!!」

いくつもの桃色の魔力弾が、高速でタツクに向かっていく。

「速い…!!」

そのスピードに驚きつつも、タツクはホーミングシューターを周囲に散らし

向かってくる桃色の魔力弾を縦横無尽に飛び交いながら回避する。

しかし、そのあまりの量とスピード故に、回避も一苦労だ。

（このまま避け切るのは恐らく無理だ…）

そう思ったタツクは距離を取りつつ一旦停止する。

遠方ではなのはが目を瞑りながら、アクセルシューターの操作に集中していた。

タツクは固い表情のまま、右手のライフルを構えながら体勢を取る。
（実戦でやるのは初めてだが…行けるか…？）

そんな風に思った次の瞬間。

「シューート！！」

なのはが目を開き、魔力弾を一斉にタツクに向かわせる。

それを見て、タツクはカツと目を見開き、そして叫ぶ。

「せえええい！！！」

咆哮と同時にタツクは高速回転しながら、ライフルを乱射する。

そして、向かってきた魔力弾の多数を撃ち落した。

「ええっ！！」

予想外の展開になのはは驚きを浮かべる。

驚いて集中力が途切れ、操作が乱れた撃ちもらしのなのはの魔力弾を
タツクはホーミングシューターの半分でライフルの魔力弾で撃墜す
る。

「フウ… なんとかあったか。」

右手で額をこすりながら、ホッとしたようにタツクは呟く。

こっちの世界に来てから思っていた事なのだが、

ガンアークはバスターアークに比べると

どうしても攻撃の手数で劣っているとタツクは感じていたのだ。

加えて彼女のデフェンスフィールドの様な

全方位からに対する防御能力も持ち合わせていなかったのだ。

手数の多い多方向からの攻撃に対する防御に難点があったのだ。

その埋め合わせの為に、密かにマリナの必殺技とも言えた

高速回転によるライフル乱射を練習していたのである。

（マリナなら、撃ち漏らしなんかしなかったろうな…）

心内でそんな事を呟いた後、タツクは表情を固くし未だに驚いている、なのはに向かって呟く。

「…何時までも余所見をしていると危ないぞ？」

「えっ？」

その言葉を聞いて、なのはは我を取り戻しハッとなったように瞬時に背後に振り向く。

その眼前には、タツクが事前にコントロールしていたホーミングシューターの残り半分が迫っていた。

「……！」

とっさになのはは手を翳し、シールドを展開してそれを防ぐ。タツクはその隙をついて、更になのはの周囲に向かって

ライフルから魔力弾を3発発射する。

3つの魔力弾は、なのはの周囲で爆発し、爆風を巻き起こす。

「ああっ！！！」

度重なる攻撃を防ぎきれず、なのはは吹き飛ばされてしまう。

その隙を見計らって、タツクはなのはから遠く離れるように飛び去っていった。

「よし…これだけ離れば攻撃も届かないだろう…」

距離を取ったタツクはそう呟き、足下に魔法陣を展開する。

そして次元転送を行なう為に魔力を集中しようとしたが…

「なッ…あれは！」

遠方にいるなのはを見て、驚いた声を上げる。

自分に向けてレイジングハートを向けて、魔力を溜めているのだ。

「馬鹿な…この距離から狙い撃つつもりか!？」

足下に魔法陣を展開しながら、なのはは力強く言う。

「いくよ！久しぶりの長距離砲撃!!」

カートリッジロードを2度行い、魔力を増幅させ
タツクに向けて正確に狙いを絞り込む。

「デイベイン……バスター……!!」

レイジングハートから桃色の閃光が放たれ

一直線にタツクに向かって飛んでいき、爆発を起こした。

「ちょっとやりすぎたかな…？」

爆風を見つめながらなのはは呟く。だが爆風が晴れた瞬間、なのは
は再び驚きを浮かべた。

その視線の先にはタツクと、シールドを展開した仮面の男がいた。

「お前は…」

なのはと同様に驚きを浮かべたタツクが呟く。

仮面の男は振り向かず静かに言った。

「行きなさい…」

「え？」

「あの少女から蒐集をしないのなら…ここにいる意味は
もう無いでしょう…早く闇の書を完成させるのです。」

その言葉にどこか釈然としない物を感じたが、言っている事は間違っていない

そう思つてタツクは再び転移の準備を始める。

「デイベイン………」

なのは再びデイベインバスターを放とうと、杖を構える。それを見た仮面の男は一枚のカードを投げる。

すると次の瞬間、なのはの体は青白い紐で拘束された。

「バインドッ！……そんな……あんな距離から一瞬で……」

苦しい表情でなのはは呟く。

「残念ですが……今日は急いでいますからね……」

また会いましょう、レイジングハートのマスターさん……」

仮面の男はそう呟いた後、タツクと共に姿を消した。

（流石……シグナムが言うだけあるわね。）

間一髪、シールドを展開しプラズマランサーを防ぎ
地上に落下した後、体勢を整えながらマリナは思う。
敵はベルクトとは真逆の近接戦闘型。

だが、何より恐ろしいのはそのスピードだ。

トランスユニットとアーケライフルによる全方位攻撃

それを避けつつ、更に自分に対して攻撃を行なってくるなど
並のスピードと回避能力は到底出来ない事である。

遠距離での攻撃の手数はこちらが上回っているとはいえ
それを避けられてしまうのでは意味が無い。

かといって、近接戦を挑むのはそれ以上に危険な話だ。

（分が悪いわね…）

マリナ苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべつつ、武器を構え
直す。

一方のフェイトも、大してダメージを受けていない風のマリナを見
て表情を固くする。

（生半可な攻撃じゃ防がれる…！）

確かにスピードでこちらが翻弄してはいるが

それに対応しているマリナの反射神経には驚かされる。

フェイトは自分の持てる最高速度で攻撃しているのだが

攻撃のほとんどが、当たる直前で間一髪防がれている。

近接戦で敵に攻撃を加えるには更なるスピードが必要になる。

下手に距離を取って砲撃魔法を行なおうとすれば

敵の全方位攻撃の餌食になってしまうのがオチだ。

（ソニックフォームで…いっきに畳み掛けるしかないかな…）

フェイトも固い表情のまま、バルディッシュを構え直した。

互いに身構えたまま、暫しの静寂が流れる。

そして、2人が互いに相手に向かっていこうとしたその時

「!!!!!!」

フェイトの背後に仮面の男が現れ、彼女の体から手を突き出させる。

「あなた、一体何を!!」

仮面の男を睨みつけながらマリナは叫ぶ。

だが、仮面の男を気にせずにフェイトに突き刺さった拳を開く。

その手の中にはフェイトのリンカーコアが握られていた。

「さあ…奪え」

だがマリナは躊躇ってしまふ。

確かにリンカーコアは必要だが、かといってこんな形で…

「何を躊躇う…一刻を争うのだろう…?」

「ッ…」

その言葉を聞いて、マリナは表情を歪める。だが次の瞬間

「ゲファ!!!!」

突如仮面の男は、鈍い音と共に大きく吹き飛ぶ。

仮面の男から離れて、フェイトは気を失って倒れこむ。

マリナは慌てて駆け寄ってフェイトを抱きかかえる。

(ッ…油断した、一体誰だ!?)

仮面の男は慌てて立ち上がって右手で頭を抱える。

「急いで戻ってきてみれば…こんな事になっているとはな…」

そして少し離れた位置には、バリアジャケットを纏い
冷たい表情を浮かべたベルクトが立っていた。

仮面の男は真っ直ぐベルクトを見つめるが、
その瞬間に背筋に冷たいものが走る。

（この男…何て冷酷な目をしている…）

そんな事を思っている内に、ベルクトは長身砲を構え
仮面の男に向かって閃光を放つ。

「グッ…!!」

仮面の男は咄嗟にシールドを展開してそれを防ぐ。

だが、更にベルクトは肩の大小2つの砲台から魔力弾を放つ。

「死ね」

たった一言、されど本当に冷たい口調でベルクトは呟く。

スプリットガイドキャノンとスカーレットキャノン

いくつもの魔力弾が仮面の男に襲い掛かる。

（なんて攻撃量だ…!!）

仮面の男はそれを飛び上がってかわすが

背後からいつの間に接近したのか、ベルクトが待ち構えていた。

「なっ…!!」

「エナジーシエイブ」

ベルクトの周囲に黒いフィールドが展開する。

仮面の男はそれに巻き込まれ、動きを止めてしまふ。

と、同時にどういいうわけか彼の体が点滅し始める。

（まずい…!! 変身魔法が…）

「何だ…？」

その光景を見てベルクトは疑問を浮かべる。

その一瞬の隙を突いて仮面の男は地面に魔力弾を放ち、砂を巻き上げる。

「しまった…！」
ベルクトが気づいた時には、仮面の男は既にその場からいなくなっていた。

しばらく空中で佇んでいた後、ベルクトは地上に降り立ってフェイトを抱えたマリナの方に慌てて駆け寄っていく。

「フェイト…！」

「大丈夫よ…気を失っているだけだわ。」

ベルクトに対してマリナは静かに言った。

「…一体何のつもりだ…？」

ベルクトはフェイトが無事な事に安心しつつも敵であるマリナがフェイトを庇っている事に疑問を浮かべる。

「…私にとっても予想外だったということよ…」

「あの仮面の男は貴様らの味方じゃないのか…？」

「違うわ…私達にも彼が何なのかはわからない…」

ただ、彼も闇の書の完成を望んでいるという事だけ…」

「……………」

そこまでやり取りした後、2人は黙り込む

そして、少し間を空けた後ベルクトは黙ってフェイトをマリナから受け取る。

「…本来なら貴様を捕まえなければならぬんだがな…」

「ッ…」

「…フェイトの事を管理局に運ばなければならない…」

それに、貴様は予想外とは言えフェイトを庇った。

…それに免じて今日は見逃してやる。」

「え？」

あまりに予想外な言葉に、マリナはつい声を漏らす。
ベルクトはフェイトを抱えたまま背を向けて続ける。
「…貴様らが何故に闇の書の完成を目指すのか…
それは、再び敵対して時にまた聞かせて貰うでしょう…
今日はもうさっさと立ち去れ…」
そう呟いた後に、ベルクトは姿を消した。

1人砂漠世界で佇むマリナ、暫くした後表情を和らげて呟く。
「…驚いたわ…人間あそこまで変わるものなのね…」
かつて世界の破滅を望んでいた男の今の姿を見て
そのあまりの変わり様に改めてマリナは驚くのであった。
（でも、急がないと…フェイに頼んであるとはいえ…そこから
解決方が見つからない可能性も0じゃない…）
心の中でそう言った後、マリナも砂漠世界を後にするのであった。

第17話（後書き）

ということで次元世界戦終了です。

…最近なかなか筆が進まなくて辛いです。
こんな駄文でも待つてくれている方もいるのに…
更新遅れて申し訳ありません…

まさかのタツクによるライフフル乱射
タツクの技量的にはアリかなって思ってたやりました。

ただ書いてて思ったけど
あれって凄い気分が悪くなりそう。
ロボットにしても魔法デバイスにしても…
マリナなんか乗り物に酔いやすいって設定があるのに
あんなんやったら逆にヤバいんじゃないか…？
とか思ってたります。

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第18話（前書き）

闇の書の真実、刻々と進むはやての呪い、飛び交う沢山の人間の思惑…

タイムリミットは近い…

第18話

戦艦アースラ内の会議室

アースラメンバーはリーゼ達も含めて、今回の件について話し合っていた。

「幸い、ベルクト君が早くに駆けつけてくれたおかげで

フェイトさんには特に被害は無いわ。」

「そうか…」

リンディからの報告を聞いて、ベルクトは腕を組みながら安心した様に呟くが

内心では少し自分自身に苛立っていた。

現場から離れた位置にいたとはいえ、フェイトが危機に瀕したのは紛れもない事実である。今回はギリギリで何とかだったが

後少し遅れていたら、フェイトのリンカーコアが奪われていた可能性があるのだ。

そんな風に考えると、仕方ないとはいえやはり苛立ってしまう。

と、そんな風に考えていた時、バレルが申し訳無さそうに皆に言う。

「すみません…僕達がもつと早く来てれば…」

「いいのよ、幸いみんな無事だったんだし、闇の書の情報収集も今回の事件には必要不可欠だね。バレル君達が気にする事はないわよ。」

沈んだ表情のバレルに対して、リンディが慰めるように言う。

それを聞いてバレルは幾分気持ちが楽になり、表情を少し明るくさせる。

「そうだよ！それに、今回は私にも過失があるし…」

続いてエイミイが口を開く。

「なのはちゃん達が出動してしばらくして、駐屯所の管制システムがあらかたダウンしちゃって…」

それで、指揮や連絡が取れなくて…私の責任だ…」
俯いて目を瞑りエイミイは皆に謝る。

「んなこたあないよ、エイミイがすぐにシステムを復帰させたからアースラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だつてちゃんと残せた。」

パネルを操作しながらロッテがエイミイを慰める。

「でもおかしいわね…向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに、

それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら…」

「そうなんですよ！防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて…」

「ちよつと…ありえないですよね…」

「ユニットの組み替えはしてるけど…もっと強力なブロックを考えなきゃ…」

今回のクラッキングの件について各々が意見を言い合う。

「それだけ…凄い技術者がいるって事ですか？」

「もしかして…組織立ってやってんのかもね…」

なのはの疑問に、ロッテが真剣な表情で答える。

「あるいは…内部からの干渉という線もあるな。」

固い表情でベルクトが呟き、皆が一斉にベルクトに視線を向ける。

「だけど、管理局の人間がそうするメリットが…」

「…闇の書の力の横取りか、法を度外視した事件の解決…
考えられる線はそのくらいだろうな…」

顎に手を置きながらクロノが呟き、それにベルクトが答える。
そんな中で、フェイが念話を使ってベルクトに尋ねる。

（ベルクト…何か心当たりでもあるの？）

（…ある事にはあるんだが…大部分が憶測だ
この場で話したところでどうにもならない。）
ベルクトも同じく念話で答えを返した。

しばらくした後、腕を組んでクロノが口を開く。

「なのはやベルクトから聞いた話も、状況や関係がよくわからない
な…」

「うん…確かにはつきり言ってたの…タックさん達は
自分の意志で蒐集しているだけで、誰かに言われているわけじゃな
いって…」

「マリナ・カーソンはあの時フェイトを抱き抱えていた…」

本来なら、あそこでリンカーコアを奪って逃げる事も出来たはずな
んだが…」

固い表情を浮かべながら、なのはとベルクトが

自分が遭遇した状況について説明する。

「一番腑に落ちないのは闇の書の主が蒐集について知らないという
話だ…」

もし、タックさんの言うとおりなら、一体何が目的で…」

真剣な表情でバレルが呟く。

タックとマリナの行動目的の不可解さについては

こちらの世界に来てから何度も言っていた事なのだが
今回の件でそれが余計に難解になってしまったのだ。

「……………」

そんな中、唯一真実を知りえているフェイは
複雑な心境で皆の話を聞いていた。

そして、リンディが立ち上がって言った。

「では、予定より少し早いですが、これより司令部を
アースラに戻します。各員は所定の位置に。」

「はい！」

その場にいた全員が応えた。

・八神家のリビングにて

守護騎士達と、タック、マリナも同様に今回の事について話し合っていた。

「助けてもらったって事で…いいのよね？」

「少なくとも…彼が闇の書の完成を望んでいるのは確かね…」
ソファに座りながら、固い表情でシャルとマリナが言う。

「完成した闇の書を利用して…いるのかもしれないが…」

「ありえねえ！」

床に座りながら呟く狼形態のザフィーラの言葉に対して

ヴィータが反論し、立ち上がる。

「だって完成した闇の書を奪ったって、

マスター以外には使えないじゃんかー！」

「完成した時点で、主は絶対的な力を得る…」

脅迫や洗脳に効果がある筈もないしな…」

ヴィータの言葉を聞いて、腕を組みながらシグナムが付け加える。

「まあ…家の周りには嚴重なセキュリティを張ってるし…
万が一にも、はやてちゃんに危害が及ぶことは無いと思うけど…」
「念の為、シャマルはなるべくはやての側にいる方がいいかも…」
不安げに呟くシャマルの言葉に対して、近くで立っていたタックが
言う。

「ねえ…闇の書を完成させてさ…はやてが本当のマスターになつて
さ…」

それではやては幸せになれるんだよね…」
突然不安げな声で言い出したヴィータに、他の皆が一斉に視線を向
ける。

「なんだいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る…守護者である私達は
それを誰より知ってるはずでしょ？」

シグナムとシャマルがヴィータに対して答える。

「そうなんだけどさ…あたしは何か…何か大事な事を忘れている気
がするんだ…」

「大事な事？」

顔を俯かせ呟き続けるヴィータの話を聞いて、マリナが首を傾げる。

「だがいずれにしても…」

今度はタックが口を開く。

「俺達には、あまり時間も方法も残されてはいない…」

呪いの解除が蒐集による真の覚醒しかないというなら…

それを信じて続けるしかないだろう…」

「そうなんだけど…」

未だに不安げな表情を浮かべるヴィータに対して

タツクは表情を和らげ、彼女の肩に手を置きながら続ける。

「…はやては恐らく、闇の書の力なんか望んでないだろう…」

でも、力は使いようなんだ。俺のガーディアンと同じで

使わないと決めれば使わずに済ませることが出来る…

呪いの解除に望まぬ力がついてくるというなら

それを何とかする為に、俺達のはやての側にいて守ってやればいい…

闇の書の完成後にははやてが幸せになれるかは、俺達の心が次第だ。

「

「……………うん、ありがと…タツク…」

タツクの言葉を聞いて、ヴィータは少しを顔を赤らめながらそう言った。

ガシャン！！

その時、はやての部屋から不自然な物音が響いた。

6人は急いではやての部屋へと向かう。

部屋の中で、はやては苦しそうに胸を押さえて倒れこんでいた。

「はやてー！！」

「はやてちゃんー！！」

ヴィータとシャルがはやてに駆け寄って叫ぶ。

「おい、急いで救急車を！」

「ええ！」

タツクとマリナが慌てながらそう叫んだ。

・その後、はやてはすぐに病院に運ばれた。

幸い命に別状は無く、本人もいたって元気そうに振舞っていたが念の為、詳しい検査などもおきたいという石田先生の勧めによりはやてはしばらくの間入院することになった。

・アースラ内の病室

「ん……うつ……」

フェイトが目を覚ますと、目の前には自分を覗き込むリンディが視界に入る。

「フェイトさん、目は覚めた？」

「リンディ……提督……？」

リンディがフェイトの体を支えて彼女を起こしてあげた。

「フェイト…無事で何よりだ…」

「ベルクト…？」

声がした方向に振り向くと、近くの壁にベルクトが寄りかかっていた。

そしてふとベッドの端の方に目を向けると

ベッドに体をもたれさせながら、眠っているアルフがいた。

「アルフ…？」

「アルフもベルクト君も、タベからずっとあなたの側についてたから…」

「あれ…私？」

自分の状況を把握しきれず、フェイトは戸惑いながら辺りを見回す。

「ここはアースラの艦内、あなたは砂漠での戦闘中に背後から襲われて気を失ってたの…」

「あつ…！」

リンディの言葉を聞いて、思い出したという風にフェイトは声をあげる。

「私…やられちゃったんですね…」

「管理局のサーチャーでも追いきれなかった不意打ちよ、仕方ないわ。」

そう言いながらリンディはフェイトの手を握る。

それを見てフェイトは気恥ずかしいのか、つい顔を赤らめる。

「あ、ごめんなさい！…嫌だった？」

「いえ…嫌とかでは…その…」

「少しうなされてたみたいだから…でも良かったわ、あなたが無事で。」

「すみません…ありがとうございます…」

安心したように微笑みながらそう言うリンディに対してフェイトは穏やかな表情で礼を言う。

その後、リンディが病室を出て行った後

フェイトはリンディに握られていた自分の手を見つめていた。

「…恥ずかしかったのか？」

「うん…その…こういうの、初めてだったから…」

ベルクトがフェイトの方に近寄って、姿勢を低くする。

「たが…悪い気にはならなかったろう？」

「うん…」

「なら、いいんじゃないか…？お前にとつても

リンディ提督はそれだけ特別な人間だという事だ…」

穏やかな表情でそう言った後、急に表情を暗くさせてベルクトは続ける。

「寧ろ…俺の方こそ申し訳なく思っている…」

お前をこんな目に会わせてしまうとはな…」

「そんな！ベルクトは悪くないよ！…悪いのは、私の至らなさで…」

「…すまないな」

慌ててそう言ってくるフェイトに対して、

ベルクトは再び穏やかな表情に戻って答える。

しばらくした後、ベルクトは立ち上がって呟く。

「養子縁組の話が進めば…リンディ提督がお前の母親になるわけだ

…」

「どうしたの急に？」

ベルクトの言葉にフェイトは首をかける。

「いや、何でも…なくはないか…」

そう言ってベルクトはフェイトから背を向ける。

「俺には…家族というのがどんな物かよくわからないから…
今でこそ、お前やバレルの様な大切な仲間がいるが…」

俺もお前と同じで…血の通った親がああだったからな…」

「ベルクト…」

「……ああ、すまないな、お前の前でこんな事を言つて。」

フェイトの寂しげに自分の名を呼ぶのを聞いて

ベルクトは慌てて振り向きながら答える。

フェイトは考える。

ベルクトは自分にとって誰よりも掛け替えのない大切な人間

その事は今後何があっても変わらないだろう。

半年前、それだけではなく、自分の特別な思いも伝えたが

不本意ながらそっちの方向での進展はあまりないと自分でもわかる。

先程、家族の事について語るベルクトの背中妙に寂しげに見えた。
自分と同じで、家族との安らぎというのが皆無だからであろう。

だが自分は決断さえすれば、いずれリンディやクロノに家族の一員
として迎えられる。

血は繋がっていないとはいえ、自分も「ハラオウン家」の一員となるのだ。

なら…今のベルクトとの年の差やら、今の関係を考えるなら…

「ねえ、ベルクト…」

「どうした？」

そんな事を考えながらフェイトはついベルクトに声をかけるが

「…ううん何でもない…」

「?…そうか…」

彼の気持ちも考えずに安易にそんな事を言うわけにもいかないだろう…

それに、リンディやクロノの事を無視して言うのも失礼だし

自分の決断もまだなのだから、この事は一旦置いておこう

フェイトはそう思って、尋ねるのをやめた。

- 数日後、フェイトの体調も無事に回復し

再びなのはと一緒に学校に通えるようになった。

当面、2人は呼び出しがあるまで、海鳴市で静かに暮らす事になった。

現状のスタンスとしては、武装局員による追跡調査をメインにする事となった。

・アースラ司令室

司令室にてクロノ、エイミィ、ロツテが

ユーノから闇の書の調査についての報告を聞いていた。

「ここまででわかった事を報告しとく

まず、闇の書つてのは本来の名前じゃない…古い資料によれば正式名称は夜天の魔導書。

本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた

主と共に旅する魔導書…破壊の力を振るうようになったのは歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う」

「ロストロギアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする人が…今も昔もいるってことね」

周囲に大量の書物を浮遊させながら、ユーノとアリアが言う。

「その改変の所為で、旅をする機能と、破損したデータを自動修復するデータが暴走しているんだ。」

「転生と無限再生はそれが原因か…」

「古代魔法ならそれくらいはありかもね…」

報告を聞きながら、クロノとロツテが真剣な表情で呟く。

「一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化、一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる、無差別破壊のために…だから、これまでの主はみんな完成してすぐに……」

「ああ…停止や封印方法についての資料は？」

「それは今調べてる…だけど、完成前の停止は難しい…
闇の書が真の主として認識した人間でないと

システムへの管理者権限が使用できない…つまり
プログラムの改変や停止が出来ないんだ、かといって
無理に外部からの操作をしようとすれば…主を吸収して
転生しちゃうシステムも入ってる。」

「だから、闇の書の永久封印は不可能って言われてる…」

「元は健全な資料本が…何と言うかまあ…」

「闇の書…夜天の魔導書もかわいそうにね…」

報告を聞いたロットとエイミイがそう呟くのであった。

・同時刻、とある次元世界にて

「何？テストロッサ達がどうしたって？」

マリナと共に蒐集を行っていたシグナムが、シャルと通信を行
なっていた。

「だから…テストロッサちゃんとなのはちゃん…管理局の魔導師の
2人が

はやてちゃんに会いに来ちゃうの！すずかちゃんのお友達だから…

ああ、どうしよう…！」

首を左右に振りながら、シャルはシグナム達に伝える。

「落ち着いてシャル。要は私達とはち会わなければいいだけよ。」

「それに、主はやての魔法資質はほとんど闇の書の中だ詳しく検査されなければバレはしない……」

「顔を見られたのは失敗だったかも……変身魔法でも使えばよかった……」

・結局、お見舞いの際は自分達は席を外しはやてと石田先生に自分達の名を出さない事に対応する事にした。

「……まさか、こんな形で接近されるとはね……」

「今更悔いても仕方あるまい……」

通信が終わった後、マリナとシグナムが真剣な表情でそうやり取りする。

「どんな形であれ……管理局の人間に主はやての事を知られるわけにはいかないからな……」

「……………」

「どうした、マリナ？」

急に黙りこくってしまったマリナにシグナムは尋ねる。

「ああ、いや！何でもないわ……」

「？……ならいいが」

慌てて答えるマリナにどこか釈然としないものを感じつつもシグナムは話をそこで切り上げて、そして続ける。

「あともう少し……もう少しで主は救われる。」

「ええ……」

固い表情でマリナは答える。

「お前達には本当に感謝している……己の危険を顧みずに

主のためにここまで戦ってくれた…だから、あともう少し…」

「…今更ね、言ったでしょ、全員ではやてを救おうって。」

「ああ…そうだったな…」

そう言ってシグナムとマリナは互いに笑みを浮かべた。

・翌日、海鳴市のとある公園

夕焼け空の下、そこにマリナとフェイがいた。

「はやてさんが…?」

「ええ…闇の書の呪いは確実に進行しているわ…」

ベンチに腰掛けながら互いに悲痛な面持ちで会話をする。

「もって後一月…もしかしたらもっと短いかもしれない…」

「そんな…」

あまりに残酷な現実にはフェイは驚き、そして慌てて言葉をかける。

「や、闇の書の調査について、あと少しで報告書が届きます

何か手掛かりが出てくるかもしれません…」

だから、きつと…その…」

それを聞いて、マリナは表情を少し和らげて、フェイの方を向く。

「…ありがとう、何か有益な情報が出てくる事を期待してるわ。」

「マリナさん…」

「…そんな顔しないでよ、まだ助からないと決まったわけじゃない
闇の書もあと少しで完成するんだから。」

いたたまれないというような表情のフェイに対して
穏やかな口調でマリナは言う。

「だから…私はあきらめないわ、必ずはやてを救ってみせる…
あなたには迷惑をかけてしまう事になるけど…」

「いえ、そんな事…」

周囲の人間にこの事を隠しているのは自分も同じだ

フェイはそう思いつつも、掛ける言葉が見つからないでいた。

「じゃあそろそろ…こんな状況、見つかったりでもしたら大変だから…」

あなたも気をつけてね…ゴールが近ければ近いほど

人は時に油断をして、足下をすくわれるものだから…」

そう言つてマリナは公園を後にするのであった。

(…私も、急がないと…)

1人残されて、しばらくぼうつと佇んでいたフェイであったが

もう日がほとんど落ちかかっているのに気づいて、彼女も公園を後にした。

だが…更に残酷な現実が待ち受けているという事を
今の2人には知る由も無かったのであった…

・管理局本局のとある一室

そこに、グレアムとディールがいた。

「父様…あんまり根を詰めると体に毒ですよ…？」

「そつだよ。」

そう言いながら、心配そうな表情でリーゼたちが部屋に入ってくる。

「どうだい様子は？」

「まあぼちぼちですね。」

「クロノ達も頑張ってますけど、闇の書が相手では一筋縄では…」

「まあ…相手は強大な力を持ったロストロギアです

ハラウン執務官が優秀とはいえ、簡単にはいかないでしょう…」

グレアムの言葉にリーゼ達が答え、更にディールが付け加える。

「すまん…お前達までつきあわせてしまって…」

グレアムは申し訳無さそうに呟く。

「なーに言ってるんの父様！」

「私達は父様の使い魔、父様の願いは私達の願いですよ…」

グレアムの顔を真っ直ぐ見据えながら、優しい表情でリーゼ達は言う。

「大丈夫だよ父様、デュランダルも完成してるし…」

いざとなったら、ディールが作ったアレもあるんだから！」

「闇の書の封印、きつと今度こそ大丈夫ですよ！」

そう言ってるリーゼ達は笑顔で頷く。

「…いい使い魔をお持ちですね、グレアム提督。」

「ああ…」

ディールがグレアムの方に顔を向けながらそう呟き

グレアムも少し気分が軽くなったのか、微笑を浮かべて頷く。

「皆さんの大願もあと少しで達成されます…」

途中参加の私が言うのも難ですが…最後まで油断せずに…」

「そんな事言わないの！」

ディールに近寄ってロツテがそう言う。

「ディールだってこの1年、父様や私達と一緒に頑張ってきたじゃん！」

「確かに共にいた時間は短いかもしれないけど…」

あなたも私達にとっては大切な仲間よ。」

「…ありがとうございます、そう言ってもらえて私も嬉しいですよ…」

リーゼ達の言葉に対して礼を言い、ディールは皆から背を向ける。

（そう…あと少しなのです…我々の…私のやってきた事が
成就する…実りの瞬間を見届けるのは…）

帽子とコートの襟に隠れるディールの眼光が

誰に見られる事も無く、ギラリと鈍い光を放つのであった…

第18話（後書き）

終盤に向けて、緊迫感が漂ってきた感じですよ。

管理局は、守護騎士達はどうなるのか？

唯一真実を共有するマリナとフェイ

暗躍するグレアムとリーゼ達、そしてディールはどう動くか？

あと、何やら違う方向のフラグをたてちゃった

ベルクトとフェイトの行方もうなるやら…

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第19話

12月23日の夜

フェイトとアルフ、ベルクトは高町家に招待されていた。クリスマスも近いし、一緒に食事でもしないかと持ちかけられたのだ。

当初はフェイトとアルフで行く予定だったのだが
フェイトの希望により、ベルクトもついていくことになったのだ。

ご馳走が並ぶ机の周りで、和気藹々な空気が流れている。
そんな中、士郎がフェイトに尋ねる。

「フェイトちゃんは、今年のクリスマスイブは
やっぱりご家族とご一緒なのかい？」

「はい、えと…一応は。」

少し困ったようにフェイトは答える。

そして、今度は桃子がベルクトに尋ねる。

「ベルクト君はどうなの？やっぱりイブは自分のご家族と？」

「……いえ、私の家族はその…イブも多忙らしくて…」

桃子の質問に、先程からどこか浮かない顔をしていたベルクトが
どこか冷めた口調で答える。

「あら、そうなの…ごめんなさい。」

「ああ、いえ気にしないで下さい…いつもの事ですから…」

申し訳無さそうに言ってくる桃子に対して、少し慌てながらベルクトは言う。

（ベルクト…やっぱり、そうなのかな…）
そんなベルクトの様子を、寂しげな表情でフェイトは見つめていた。

しばらくした後、再び士郎が口を開く。

「家は今年のイブも、地獄の忙しさだからな。」

「私、今夜の内に値札とポップ作っておくから！」

「私達は今夜しっかり寝ておかないとね。」

高町家のそんなやり取りをキョトンとした表情でフェイトは聞いている。

すると、なのはがフェイトの方に顔を向けて嬉しそうに語る。

「翠屋のクリスマスケーキ、人気商品だから

イブの日はお客さんいっぱいなの！」

「それにね、イブを過ごす恋人同士とか、友達同士の為に

深夜まで営業してるんだよ。」

なのはの姉・高町美由希のその言葉に、ベルクトがピクリと反応する。

（恋人同士…か…）

そんな風に心内で呟きながらベルクトは
なのはと楽しげに会話をしているフェイトの方を見つめる。

前回、一緒に買い物に行った時はいろいろと悩んでしまったが
かといって、彼女の気持ちをこのまま無碍にするのも
自分にとっては心苦しい事ではあった。

クリスマスイブがどういう日なのか

前の世界の知識でも、それくらいある程度はわかっている。

ならいつそのこと丁度いいからこの機会に…と、そんな風な事を考えるのであった。

(…後でフェイトに持ちかけてみるかな…)

翌日の12月24日

アースラの一室にてベルクト、バレル、フェイの3人は

これまでの調査をまとめた、ユーノの報告書を読んでいた。「しかし…凄いのだな、俺達も手伝ったとはいえ

あの大量の書物の山から、これだけの情報を引き出せるとは…」

「というか、俺達が手伝わなくてもよかったかも…」

感心したような表情で報告書に目を通しながらそう言うベルクトにバレルが苦笑いを浮かべながらそう呟く。

「しかし…闇の書…いや、夜天の魔導書が破損していたってのは意外だったな…」

「プログラム操作が可能なのは主だけで外部の操作はほぼ不可能…これではますます主が見つからないと手の出しようがないな…」

「いつの時代でも…身勝手な理由で力を求める奴はどの世界にもいるものなんだね…」

「夜天の魔導書か…本来の目的を知らずに内に変えられてしまうと…はな…」

真剣な表情でベルクトとバレルは報告書片手に椅子に座りながら、そうやり取りする。

そんな中、フェイは報告書のとある一文に目を釘付けにしたまま黙り込んでいた。

「どうしたんだフェイ？さっきから黙ったままだけど…」

そんな彼女の姿に疑問を抱き、バレルが尋ねる。

すると、彼女は突然報告書を投げ捨てて立ち上がる。

「ごめん…バレル、ちょっと私…出かけてくる…」

「えっ…どうしたんだよフェイ？」

あまりに不自然な様子に、心配そうに声をかけるバレルを無視してフェイは部屋から急いで出て行ってしまった。

「何なんだよ…」

その態度に流石のバレルも、少しイラついてしまい不満げに呟く。

「…そういえば、最近フェイは何も言わずに外出する事が多いが…」

「うん…でも、俺もよくは知らないんだ…こっちの世界で

俺とベルクト、それから管理局の人達との用なら事前に必ず俺に言うていくのに…」

「かといって、それ以外に出会う人物など…」

そこまで呟いてベルクトはハツとしたように顔を上げて立ち上がる。

「どうしたんだベルクト？」

「…行くぞ、バレル。」

「えっ…行くって？ておい！ちょっと待ってっ…！」

部屋から出て行くベルクトをバレルは慌てて追いかけていった。

- 同時刻の八神家

守護騎士達ははやての病院に行くために準備をしていた。管理局の追跡を振り切る為に、極力帰還を避けていたのだがはやてをあんまり心配させるのもいけないだろうという事で今日は皆でお見舞いに行こうという事になっていのだ。

そんな中、ヴィータは周りを見渡してふと口を開く。

「そういやさ、タックとマリナはどうしたんだ？」

「2人とも、少し私用があるとか言ってマリナは大分前にタックはついさつき出て行った。」

「ふーん…珍しいなあ、はやてのお見舞いだつてのに…」

シグナムの答えを聞いて、ヴィータはそう呟く。

大切なはやてのお見舞いに行く日だと言うのに。

「でも、2人ともそんなに長くはかからないって言ってたから…」

はやてちゃんのお見舞いに来れないことはないって。」

「そっか…なら大丈夫だな…」

「皆が顔を合わせるのも久しぶりだからな…タックとマリナがいなのでは」

主はやても寂しいだろうからな…」

シヤマルの言葉を聞いて、ヴィータとシグナムはそう言った。

マリナとフェイはそこで再び話をしていた。
「そんな…！じゃあ私達のはしてきた事は…」

フェイからの情報を聞いて、ワナワナと震えながらマリナは言う。

『……完成したら持ち主の魔力を無差別破壊のために際限なく使わせる…』

そしてこれまでの主はみんな完成してすぐに……』

報告書でその一文を見たフェイはいてもたってもいられずにアースラを飛び出し

マリナにその事を伝える為に連絡を取ったのだった。

「……ごめんなさい…まさか…こんな事になるなんて…」
俯きながら、本当に申し訳無さそうにフェイは呟く。

せっかく彼女を助ける為にここまでやってきたというのに
自分が発見した情報は、彼女達を逆に追い詰めるものだったからだ。

一方のマリナもどうすればいいのかわらなくなっていた。
フェイは悪くない、寧ろ完成させていたら逆に危なかったというのを
事前に知る事が出来たのは本来は収穫と言える筈だ。
だが…問題はそれ以外の解決方法がまだ見つかっていないという事だ
もつ、時間はほとんど残されていないというのに

唯一の解決方法が間違いだと言われてしまうのは、流石の彼女もキツかった。

「…ッ！そこにいるのは誰！？」

沈んだ表情で俯いていたマリナが、突然顔を上げて叫ぶ。
フエイも慌ててその方向に顔を向けると

「…やはり、そういう事だったのか…」

「フエイ…これは一体？…」

その先には固い表情を浮かべたバレルとベルクトが立っていた。

「バレル！？それに、どうしてベルクトも…！」

「あのような不自然な飛び出し方をすれば、誰でも疑う…
もう少し慎重に行動すべきだったな…」

心底驚いたような表情で言うフエイに対して

ベルクトが冷静な口調で淡々と答える。

「クッ………」

マリナは苦々しい顔をしながら身構える。

まさか…こんな状況で見つかるとは最悪のパターンだ
この場をどうやって切り抜けるかだけを考えていた。

だが、ベルクトはそんな彼女を見ながら再び口を開く。

「…別に、今更こんな場所で貴様と争うつもりはない…」

それに…どうやらもう1人いるらしいしな。」

「え…？」

その言葉を聞いてマリナは、ベルクトが視線を向ける背後に振り向

く。

「マリナ…」

「タツ……ク…?」

マリナは目を見開いて呟く。その視線の先には
固い表情を浮かべたタツクがこちらに向かって歩いてきていた。

意外な形で対面する事となった5人。

マリナとフェイは、自分達の事とこれまでの経緯を全て話した。

「……成る程、その恩人である少女を救う為に奴らと共に居たと…」

「ああ、そういうことだ…」

ベルクトの言葉にタツクが答える。

「水臭いじゃないかフェイ…俺達にも言ってくれたら力になったのに…」

「…ごめんなさいバレル。」

バレルの言葉に対して、フェイが謝罪する。

「でもどうしてシグナム達は…そんな事一言も…」

俯きながらマリナが呟く。

自分達の目的ははやてを助ける事だ、なのにこのまま完成させれば
逆にはやては…

「夜天の魔導書自体が故障しているというなら…

その一部とも言えるあの4人の記憶が混乱していても、何らおかしくはない……」

「……ヴィータが言っていた大事な事ってこういう事だったのか……」

冷静な口調で呟くベルクトの言葉を聞いて、タックが思い出したように言う。

「でも、本当にどうしたら……」

「……単純に彼女を救いたいなら、契約を解除するしかないだろうな。」

「だがそれはダメだ……それではヴィータ達が……」

ベルクトの言葉を聞いて、タックがそう言う。

それを聞いた後、ベルクトはふうつとため息を吐き、冷たい口調で呟く。

「……所詮、奴らはプログラムにすぎん……八神はやての命を救うためなら

それくらい目を瞑れるはずだろう?」

「お、おい……ベルクト……」

その言葉を聞いて慌ててバレルは止めようとするが

「ッ……!」

マリナが怒りの形相を浮かべてベルクトの胸倉を掴む。

「……あなたに何がわかるっていうの……シグナム達は……」

「……貴様らはどっちなんだ?」

「何の事……?」

胸倉を掴まれながらも、ベルクトは冷静な表情を崩さない。

「八神はやてを救いたいのか、あの4人を救いたいのか……」

「……どっちもよ。」

「……やはり、わかっていないらしいな。」

そう呟いてベルクトは自分を掴んでいるマリナの手を無理矢理払いのける。

「……何が……何がわかっていないっていうのよ!!」

「本当の意味での救いになっていないという事だ。」

怒りの形相で叫ぶマリナに対して、やはりベルクトは冷たい口調で
呟く。

「…たとえば、完成によってその八神はやてが救われたとしても

その後彼女は、夜天の魔導書の強大な力を得たと時に

貴様達が行なってきた事を嫌でも知る事になる…

それで…八神はやてが喜ぶと思っっているのか…？」

「…でも、はやてはまだ10歳前後の少女なんだぞ？」

彼女にそんな重すぎる事実を…放っておいたら死ぬなんて事を伝える
なんて…」

タツクが齒を食いしぼりながら呟く。

「確かにその通りだ…だが、彼女は何も知らされていない…

そして強大な力を得れば、自然とそれを狙う輩に追われる事となる。

貴様達が側に居るとはいえ、そんな事にその少女が耐えられると思
うか？」

「それは…」

「貴様達は勝手に押し付けているだけだ…

こうすればはやては幸せになれるはずだと…

彼女自身の言葉も聞かずに、自分達の中だけで解決しようとして

周りの言葉も聞かずに、ただ決め付けて定められたプログラムの様

に動くだけだ…

貴様達自身が…八神はやての道を勝手に決め付けながらな…」

淡々とした口調でベルクトは呟き続ける。

「じゃあ…どうしろって言うのよっ…！こうしなきゃ…

はやては助からないって言うのに…それすら間違いでっ…！

今までやってきた事すら否定されるなんて…！！」

目に涙を浮かべながらマリナはそう言う。

すると突然、今まで黙っていたバレルが口を開いた。

「…伝えるべきなんじゃないかな…はやってって子だけじゃなくて、周りの人全てに…」

「え…？」

マリナがバレルの方に顔を向ける。

「…ベルクトは少し言いすぎだよ…マリナさんやタツクさんだってそのはやってって子を助ける為に頑張ってきたんだから…」

それが間違っていたとは俺は思わない。」

「……………」

「でも、いずれにしたってこのままじゃその子が助からないのも事実だ…」

だったら全部事情を話して、みんなで最善の選択を考えるべきなんじゃないかな…？」

「だが…管理局がそう簡単に応じるかどうか…」

「それに…シグナム達だって…」

バレルの言葉を聞いて、タツクとマリナは俯きながらそう呟く。

「大丈夫、管理局側については俺達が何とかする自身がある…」

きちんと話せば、きっとリンディ提督やクロノにもわかってもらえると思うし…」

それに、ベルクトの時だって何とかなっただから…」

最悪、わかってもらえなくても、俺達は必ず協力するから。」

「バレル…」

「後は、その守護騎士達やはやて自身の事だ。

確かに辛い現実だけど…だからこそ、彼女自身がどうしたいのかを

聞くのが一番大事じゃないかって俺は思う。

はやてと守護騎士達、タツクさんとマリナさんがちゃんと話し合って全員が納得できる道を選ぶのが、今すべき一番大事な事じゃないかな…？」

真剣な表情でバレルはそう言った。

日がほとんど落ちかかっている夕闇の中、重苦しい空気で沈黙が続く。

しばらくした後、タツクが口を開いた。

「…わかった、君達を信じてみよう…」

「タツク？」

マリナはタツクに顔を向ける。

「俺だって正直、完全には納得しきれない…でも、このままじゃ助からないって事実から目を背けるわけにも行かない…」

だったら、皆でもう一度考え直すのがいいのかもしれない…

こんな形とはいえ、同じ世界の人間とこうして会えて

そして、俺達に協力してくれるとも言ってくれている。

それなら、彼等の言う事を信じてみるべきなのかもしれない…」

少し暗い表情ながらも、タツクはそう言った。

「でも約束してほしい…何があっても、はやての無事だけは…」

「わかってます…その子を救う為に動いているのに」

管理局の人間が介入して、何か過剰な対応をされたりしたら

俺達がこうやって持ちかけたのがかえって仇になっちゃいますから

…」

タツクの言葉に対してバレルがそう返答する。

すると、マリナがバレル達3人の前に出て頭を下げる。

「ごめんなさい…今まで迷惑ばかりかけてしまったのに…」

それでも私達に協力してくれるなんて…」

「…気にしないで下さい、どんな形ではあれ、誰かの為に

必死に戦っている人の気持ちを無視する事なんて出来ませんから…」

「私も、マリナさん達の気持ちはよくわかります…それに

最初に協力し始めたのは私なんですから、ここで投げ出すわけには
いきませんよ…」

マリナに対して、バレルとフェイが微笑を浮かべながら言った。

そして彼女は頭を上げて、ベルクトの方を見る。

「……そういう事なら、急いだ方がいいだろう…時間もあまり残っ

てないしな…」

「ベルクト…」

「…それから、さっきは、その…すまなかった…」

確かにバレルの言うとおり、少々言葉がキツかったかもしれん…」

「…いいわ、気にしないで。あなたの言っていた事もある程度は当
たってたから…」

腕を組みながら、居まずそうに呟くベルクトに対して

マリナはフツと笑いを浮かべながらそう言った。

「…決まりだな、じゃあ早速はやての所に…」

タックがそう言った時、突如彼の頭の中に念話が響く。

(……ック、タック！聞こえるか！！)

念話の主はザフィーラだった。しかも、何か落ち着かない声色である。

それに疑問を抱いたタツクが同じく念話で尋ね返す。

（どうした、ザフィーラ？）

（シグナム達はお前の側にいないのか？）

（シグナム達なら、今の時間帯ならはやての病院にお見舞いに行っていると思う）

俺とマリナもこれから向かおうと思っていたんだが…

（……もしそうならマズい……）

（……何かあったのか？）

ザフィーラの言葉を聞いて、タツクは何か嫌な予感がしてくる。

（シグナム達に通信が入らない……もしかしたら通信妨害が張っているのかもしれない……）

それが……主の病院で起こっている事だとしたら……

（……わかった、俺達もすぐに向かう。）

（頼む……）

そこで念話を打ち切る。

マリナはそんなタツクの様子に疑問を抱き、彼に尋ねる。

「どうしたの？」

「ザフィーラからだ……どうやら、はやての病院で何かあったらしい

……」

「……」

その言葉を聞いてマリナは目を見開いて驚く。

そんな2人の様子を見やりながらベルクトは前に出ながら呟く。

「……急ぐぞ、せっかく決断した事を無駄にしない為に……」

そう言って待機状態のグレイブアークを起動させ、バリアジャケツトを纏う。

他の4人もその言葉に力強く頷き、各自のデバイスを起動していく。そして、はやての下へと一直線に飛んでいくのであった。

第19話（後書き）

くおまけく

恭也「…おい黒仮面、父さんや母さん、美由希にまで台詞があったのに、何で俺だけ出番なしなんだ？」

話の流れ的に必要ないから、それだけですが何か？

恭也「…お前を殺す」

ちよ待つ…それ違う世界のキャラ…ってああああ！！！！

下らなすぎる小ネタによるお目汚し失礼しました…

というところでついにACEキャラたちが面と向かってご対面です

ただ、こういう会話シーンの描写は苦手な部類なので
流れがちゃんとうまくいつてるか心配です…

何気にベルクトが少し昔に戻ってたり…

次回、怒涛の展開に加え
遂にあの男の正体が判明します。

ご意見、感想、指摘など、お待ちしております。

第20話（前書き）

はやてが主であると遂にバレてしまう
敵対するなのは達と守護騎士達
そして仮面の男達とあの人物が…

第20話

ベルクト達5人が病院に向かっている頃
なのはとフェイトはビルの屋上で、シグナム、シャマル、ヴィータと対峙していた。

クリスマススイブという事で、アリサやすずかと共に
サプライズと称して事前連絡無しで
はやての所にプレゼントを持っていったのだが
それが原因で、同じくお見舞いに来ていたシグナム達と鉢合わせて
しまったのだ。

「はやてちゃんが…闇の書の主…」
暗い表情でなのはがそう呟く。

「悲願は後僅かで叶う…」

「邪魔をするなら…はやてちゃんのお友達でも…！」
今までとは比較にならない敵意を放ちながらシグナムとシャマルが
そう言う。

そんな彼女達の言葉を聞いて、なのはが前に出ながら必死な表情で
訴える。

「ちよつと待つて、話を聞いてください！ダメなんです！
闇の書が完成したら…はやてちゃんは…！」
だが言い切る前になのはは、上空に顔を向ける。

「らああー!!」

上空からヴィータがグラーファイゼンを構え、なのはに向かって襲い掛かる。

なのはは咄嗟に防御するも、近くのフェンスに叩きつけられてしまう。

「なのは!」

「くそおおおおー!!」

フェイトがなのはの方を向いて叫ぶが

その瞬間にシグナムがレヴァンティンをフェイトに向かって振り下ろす。

フェイトは後方に飛び退いて回避し、バルディッシュを現出させる。

「管理局に我らが主の事を伝えられては…困るんだ…!」

「私の通信防御範囲から…出すわけには…いかない…!」

ユラリと立ち上がり、俯きながらシグナムは呟き

その後方でシャマルが拳を握り締めながら悲痛な声で言う。

「ヴィータ…ちゃん…」

フェンスに叩きつけられ、倒れこむなのは

自分に近づいてくるヴィータを見上げながら、寂しげな表情で呟く。

ヴィータは甲冑を纏い、一言一言静かに言葉を紡いでいく。

「邪魔をすんなよ…もうあとちょっとで助けられるんだ…」

はやてが元気になって…あたし達の所に帰ってくるんだ…」

ヴィータの目から涙が溢れる、右手に握られたハンマーがカタカタと震える。

「必死に頑張ってきたんだ…もうあとちょっとなんだから…だから…」

そこまで言ってハンマーを思い切り振り上げ、涙を散らしながら叫ぶ。

「邪魔すんなアアアアアアア！！！」

咆哮と同時にカートリッジロードを行い、ハンマーを振り下ろす。なのははそれを見て表情を引き締める。

そしてビルの上で凄まじい爆発が起こり、炎が舞い上がった。

「ハア…ハア…ハア…」

ヴィータは息を荒げる、そして目の前の炎を見つめる。

その先からバリアジャケットを纏い、冷たい…

本当に冷たい表情を浮かべたなのはが現れる。その姿はまるで…

「悪魔め…！！」

大きく目を見開き、悔しげになのはを睨みながらヴィータは呟く。

「悪魔で…いいよ…」

なのはは静かに呟き、レイジングハートを現出させ、それを構えて更に言った。

「悪魔らしいやり方で…話を聞いてもらおうから！！」

対峙するフェイトとシグナム、シャマル。

「シャマル…お前は離れて、通信妨害に集中している…」

「うん…」

言われたとおりシャマルは後方に下がり、甲冑を纏う。

それを見た後フェイトは、バルディッシュを前に構え

新たなバリアジャケット、ソニックフォームを起動させる。

そしてカートリッジロードを行い、バルディッシュに魔力刃を形成する。

「…薄い装甲を更に薄くしたか…」

「その分、早く動けます…」

「緩い攻撃でも…当たれば死ぬぞ…正気か、テストロッサ…？」

「勝つためです…あなたやマリナの様な強い相手に立ち向かうには

…これしかないと思ったから…！」

真剣な表情でフェイトはそう呟く。

「……………」

それを聞いてシグナムは少し顔を上げて、

禍々しいとも言えるほどのオーラを出しながら甲冑を纏っていく。

「こんな出会いをしていなければ…一体どれ程の友になれただろうか…」

「まだ…間に合います…！」

悲痛な声で呟くシグナムにフェイトが答える

そしてシグナムはレヴァンティンを両手で構える。

「止まれん…我ら守護騎士、主の笑顔のためならば…騎士の誇りさえ捨てると決めた…」

カートリッジロードを行い、魔法陣を展開する。

そして、目に涙を浮かべながら必死の表情で叫んだ。

「もっ…止まれんのだ…！」

「止めます…私とバルディッシュが…！！」

フェイトも同様に魔法陣を展開する。

するとその時、空中でヴィータと対峙していたのはが、突如バインドで拘束される。

「……バインドッ……また!？」

そして、それを見たフェイトが一旦シグナムから距離を取り、辺りを見渡す。

「ッ!……そこっ!！」

何もない空間に魔力弾を放つ、すると途中で魔力弾は何かに直撃する。

すかさずその空間に向かって、フェイトは飛んで行き斬撃を放つ。

「クッ……!！」

斬撃を放った空間が歪み、そこから仮面の男が現れた。

「この間みたいにはいかない!！」

フェイトが仮面の男を真っ直ぐ見据えながら、バルディッシュを構えなおす。

だが次の瞬間

「フッ！！！」

フェイトは何者かによって蹴り飛ばされ、落下していつてしまう。そこにいたのはもう1人の仮面の男であった。

そして2人目の仮面の男はカードを一枚投げて、フェイトをバインドで拘束する。

すると更に、1人目の仮面の男が数枚のカードを宙に浮かばせる。

そしてどういうわけか、シグナムとシャマル、ヴィータ達すらもバインドで捕らえる。

「この人数だと、バインドも通信防御もあまり持たない…早く頼む」

「ああ…」

そうやり取りした後、2人目が右手を上げた。

だがその瞬間、今度は仮面の男達が鎖に繋がれた鉄によって拘束される。

「なっ…！！」

「これは…！」

突如の事態に仮面の男達は声を上げる。

そして、なのは達を拘束していたバインドが解除された。

なのは慌てて辺りを見渡す、そして仮面の男から少し離れた位置にバリアジャケットを纏ったバレルとフェイの姿を見つける。

「バレルさん！フェイさん！」

「…間一髪間に合ったみたいね…」

「お前達はやっぱり…最初からそれが目的だったんだな…」

仮面の男達を拘束しながら、固い表情でフェイとバレルが呟く。
更に別の位置からベルクトが現れる。

「ベルクト！」

「……さて、確証を得させてもらおうでしょう……」

自分の名を叫ぶフェイトの方に一瞬顔を向けた後

仮面の男達の方に向き直り右手を前に掲げる。

すると、右手から黒い靄の様な物が広がっていき、仮面の男達を包み込んでいく。

「「うああああああ！！」」

すると仮面の男達の体が2、3度点滅した後、服装が変化し長い耳と尻尾が現れる、そしてつけている仮面が落ちた。

「リーゼさん！？」

その正体に驚き、なのはが叫ぶ。

仮面の男達はグレアムの双子の使い魔、ロットとアリアだった。

「クッ！……一体どうして！？」

「……生憎、何か企んでいる人間の臭いを嗅ぎ分けるのは得意なのでな……」

グレアムとその周辺は最初から疑っていたんだよ……」

悔しげな表情で呟くロットに対して、淡々とベルクトが答える。

その一連の光景を呆然とシグナム達は見つめていたが

「……マリナ！？」

別の位置からタツクとマリナが飛んできたのを見て、驚いたように声をあげる。

「……ありがとう、一時はどうなるかと思ったわ。」

「気にするな…こいつらは管理局側の人間だ…寧ろ過失はこっち側にある。」

マリナとベルクトがやり取りをする。

それを見たシグナムが表情を歪ませながら叫んだ。

「マリナ、これは一体どういう事だ!!」

あれほど管理局の人間には知られてはならないと何度も言っていたのに

その管理局の人間とどういうわけか一緒に居るのだ。

「ごめんなさい…シグナム…でも、聞いてほしいの…」

「うるせえ!!何でなんだよ!!」

申し訳無さそうに呟くマリナの声を聞いて、

怒りの形相を浮かべながらヴィータは叫んだ。

「何でお前らが管理局の奴らと一緒にいんだよ!!あたし達を裏切ったのか!!」

それとも…最初から!!」

「黙っている!!」

涙を浮かべながら叫び続けるヴィータの言葉をタツクが遮る。

「タツク…?」

ヴィータは一旦落착着き、寂しげな表情でタツクを見つめる。

そしてタツクは固い表情を浮かべたまま語り始める。

「聞いてほしいんだ…このまま闇の書を完成させても…はやては…」

「そこから先を言われては困りますね…」

突如、この場の誰でもない何者かの声が響く。

すると次の瞬間、リーゼ達以外の全ての者が再びバインドで拘束される。

そして空間の一部が歪み、そこから現れたのは…

「もう1人!？」

フエイが叫ぶ。その視線の先には3人目の仮面の男がいた。

「しまった…まさか奴も魔法が使えたとは…!」

ベルクトが悔しげにそう言う。

「ロツテ君、アリア君…あなた方は先にお帰りなさい…

こうなった以上…あなた方が居るとかえって迷惑です…」

そう言いながら3人目の仮面の男は、リーゼ達に向かって二枚のカードを投げる。

「えっ!ちよつと待つてディー…」

アリアが何か叫ぼうとしたが、言い切る前に2人の姿はカードから放たれた光に包まれて消滅した。

「では…始めるとしましょうか…」

仮面の男が右手を上げる、すると、闇の書が現れた。

「いつの間に!？」

闇の書を見てシャルマルが驚く。

そして闇の書のページが開かれると同時に、シグナム達の体からリシカーコアが現れる。

「最後のページは不要となった守護者自らが差し出す…

これまで幾度となく繰り返してきた筈です…」

仮面の男はそう呟き、蒐集を始めていく。

「ああ…!ああああ…!」

シャルマルが蒐集され、その姿を消していった。

「壊れて…目的を見失い暴走を続けるロストログア…

そんな物で誰かを救おうとする事など…出来るはずありません…」
そう呟きながら、次にシグナムの蒐集を行なう。

「うっ…うああ…！！…マ…マリナ…あ、主を…」

「シグナム！！！」

マリナは必死にバインドを解こうとするが抜け出させない。

そして、シグナムの姿も消滅した。

「シャマル！シグナム！…何なんだ…何なんだよテメーは！？」

目に涙を浮かべてヴィータは必死に叫ぶ。だが

「うああああ！！！」

「残念ですが…あなたにそれを教える義理はありません…」

仮面の男が手を翳す、するとヴィータが苦しげに呻きだす。

「ヴィータ！！」

それを見たタツクが必死に叫ぶ。

「でやあああああ！！！」

すると、仮面の男の左上空からザフィーラが現れる。

「そうか…もう1人いたのですね…」

ザフィーラの攻撃を容易く防ぎ、そして彼のリンカーコアを出現させる。

「奪いなさい…！！」

仮面の男の呟きに闇の書が答える。

「ぐっ…あああああ！！！」

ザフィーラは必死に叫びながら再び拳を振り上げるが
後一步のところで蒐集され、そして姿を消した。

その後仮面の男は、周りの魔導師全てに追加のバインドを施し更にクリスタルケージで包み込んだ後、ヴィータの傍らに立つ
「さて…それでは始めるとしましょうか…闇の書の因縁の終焉…
いいや…私のやってきた全ての実りの瞬間を…」
そう言っただけの男は変身を解除する。
そしてそこに立っていたのは、いつものコートと帽子姿の
ディール・クルーシブルであった。

そしてディールは両手を翳す、するとディールの傍らに拘束されている本人とは別の、なのはとフェイトが現れる。
更にビルの屋上に水色の魔法陣が展開し、その中央からはやてが現れた。

「なのはちゃん…フェイトちゃん…？…ディールおじさんまで…？
なんなん…なんなんやコレ…？」

辺りを見渡しながら、不安げにはやては呟く。

「君は病気なんだよ…闇の書の呪いって病気…」

「もうね…治らないんだ…」

「闇の書が完成しても…助からない…」

「君が救われることは…無いんだ…」

偽のなのはとフェイトが淡々と語る。

「それにね…この女の子ももう、壊れちゃってるの…」

「とつくの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えんと思っただけ…無駄な努力を続けてたんだ…」

それを聞いてはやては泣きながら訴える。

「そんな…無駄ってなんや！…シグナムは…シャルは…」

フエイトが視線で促す、はやてがその方向に振り向くと
シグナムとシヤマルが着ていたコートがむ虚しく置いてあった。

それを見てはやては目を見開く。

「壊れた機械は役に立たないよね…だから、壊しちゃおう…」

不気味に笑みを浮かべながら、なのはとフエイトがヴィータに近寄る。

「なんでや…！なんでなんや！だってそんな…！！」

すると、はやてはその場にいたもう1人の顔見知り必死に訴える。

「デイルおじさん！！止めて！！なのはちゃんたちを止めて！！」

しかし、デイルははやてを見下ろしながら冷たく言い放つ。

「はやてちゃん…この世界にはヒーローとか、正義の味方とか…」

そんな物は存在しないのです…全ては運命という…残酷な現実だけ…

そして…これから起こる事もまた…」

そう言ってデイルは手を翳し、ヴィータを闇の書に蒐集した。

その後パチンと指を鳴らし、偽のなのはとフエイトを消滅させる。

それを見たはやては茫然自失し、頂垂れる。

そんな彼女の周りに紫色の魔法陣と闇の書が現れる。

「はやて…！！」

「はやてちゃん…！！」

バインドを解除したなのは達がはやてに近寄ろうとするが

「うああああああああああ！！！！！！」

思い切り目を見開き、遙か上空を見上げてはやては叫ぶ。

その直後巨大な爆発が起こり、禍々しいオーラがはやてを包み込んでいく。

それを見たなのは達は一旦距離を取る。

オーラの中央ではやては闇の書を片手に、その姿を変貌させていく。長い銀髪、黒を基調とした服装、漆黒の翼を持つ女性へと姿を変えた。

「はやて……!!」

「まさか…こんな事になるなんて…」

近くでその光景を見つめていたタツクとマリナが悔しげに呟く。

「また…全てが終ってしまった…一体幾度こんな悲しみを繰り返せばいい…」

天を見上げながらはやて…闇の書はそう語る。

「なんてこった…これじゃあ闇の書が…」

「この魔力量…いくらなんでも規格外だぞ…!!」

別の場所でバレルは苦々しい表情で呟き

ベルクトは闇の書の凄まじい力を直感で感じ取り、焦りを見せていた。

「我は闇の書…我が力の全ては…主の願いのそのままに…」

闇の書が右手を掲げて黒い球体を出現させる。

「……みんな!すぐ私の側に近寄って!!」

それを見たフェイが他の者達に叫ぶ。

その場にいた全員がフェイの側に近寄っていく。

「闇に染まれ…デアボリック・エミッション…」

黒い球体が収縮した後、凄まじい範囲で広がっていく。

それを見たフェイが背中の翼パーツを広げる。

「ブルームフィールド!!」

その言葉と同時に、フェイ達を包み込むように青白色のフィールドが出現した。

闇の書から離れたビルの屋上、そこにディールが立っていた。

「デュランダルは確かに優秀なデバイスです… だけど

それだけではあれ程の力を永久に凍結させるのにはほど遠い…」

そう呟きながら一枚のカードを取り出す。

「それを成就させられるのは… このデュランダル・ツヴァイと…」

ディールはコートの裏側から緑色の羽のオブジェを取り出す。

そして緑色を基調にし、所々に黄色いラインの入ったバリアジャケツトを纏い

両腕に籠手、両肩に砲台を備えた姿となった。

「私のデバイス… フェザーアークだけです。」

言いながらディールは帽子を脱ぎ捨てる。

「タック君… マリナ君… あなた方には申し訳なく思いますが…

全ては運命… この世界を闇の書から救うにはこうするしかないのですよ…」

闇の書と戦っているタックやマリナを固い表情で見つめながら

ディール・クルーシブル… いや、フィーデル・バルクホルツはそう

呟くのであった…

第20話（後書き）

な、なんとディールの正体はバルクホルツ博士だったのだ（棒）

… 大多数が気づいてましたよね…？

だが、それ以上に（遥かに）凄いのは彼の活躍

1人だけでリーゼ達の仕事をほとんどこなしてしまいました

あまりのチート振りに書いてるこっちも何か乾いた笑いが出てたりします

だってあの冴えないバルクホルツ博士がこんなになっちゃってんだから…

覚醒した闇の書、バルクホルツの行動目的

そしてフェザーアークとデュランダル・ツヴァイの能力とは何なのか？

終盤に向けて作者もテンションが上がりが味です

応援してくれている方々、最後までよろしく願います。

意見、感想、指摘、簡単な一言応援など、まだまだお待ちしております。

（頑張ってくださいとかの一言だけでも作者にとってはかなりの励みになりますから…）

第21話（前書き）

バルクホルツの目的とは何なのか？
そして、闇の書はどうなってしまうのか？

第21話

デアボリックエミッションの波動が消えた後
暗い空を見上げながらバルクホルツは呟く。

「さて、ようやく…ようやく全てが成就する…実りの瞬間を見届けられる…」

そう言って手にしたカードからデュランダル・ツヴァイを取り出そうとしたが

ふと何かの気配を感じて後方に振り向いた。

「まさか、もう一度あなた達と会う事になるとは…」

これもまた、運命の巡り合わせというやつなのでしょかね…」

後ろにいた人物を見つめて、どこか寂しげにバルクホルツは言う。

「バルクホルツさん…」

「……………今更、何故生きてるかなんて聞かないわ…」

タツクとマリナが険しい表情を浮かべながら、バルクホルツの後方に浮かんでいた。

「けど教えて、バルクホルツ…あなたは何が目的でこんな事をしてるの？」

険しい表情を更に歪ませながらマリナは言った。

そんな彼女を見て、寂しげな表情を崩さぬままバルクホルツは語りだす。

「いいでしょう…タツク君、マリナ君…折角だから教えてあげますよ…」

この世界に来てから、私のした事の全てを…」

- 管理局本局の一室

そこでクロノはグラム、ロッテ、アリアと相対していた。

事件の流れや過去の経歴から、グラムが怪しいと疑いを持ったクロノは

独自の調査を進めた上で、グラムを問い詰める為に彼の下を訪れていた。

そして更に偶然が重なり、丁度その時に、バルクホルツの転移魔法によって

クロノとグラムがいた部屋に、ロッテとアリアが転送されてきたのだ。

突然現れた2人を見てクロノは驚いたが、対象的にグラムは非常に落ち着いていた。

「…… 11年前の事件から、提督は独自に闇の書の転生先を探していた……」

そして、それを見つけた、八神はやたと闇の書の在り処を……」

「…… 両親に死なれ、体を悪くしたあの子を見て心は痛んだが…… 運命だとも思った。」

孤独な子であればそれだけ悲しむ人は少なくなる……」

互いに椅子に座りながら、固い表情を浮かべたクロノの問いに、グ

レアムは答えていく。

「あの子の父親の友人を騙り…表向きはそれを彼…

ディール・クルーシブルに演じさせ、密かに生活の援助を行なっていたのも提督ですね…」

「永遠の眠りにつく前くらい…心を寄せることが出来る人物が1人くらいいた方がいいだろうと…彼が時折彼女に会いに行っていた…

最も…闇の書の守護者と、あの異邦人の2人が現れてからは…その必要が無くなった…」

目を瞑り、グレアムは顔を背ける。

「私と彼が出会ったのが、丁度2年前の事だった…ディール君もベルクト君達と同じ、次元漂流者だった…」

2人の間に浮いているモニターに、バルクホルツの姿が映し出される。

「目的を失い、何もする事が無くなってしまったという彼を私は受け入れた…」

以前の世界では軍に務める科学者をやっていたと聞いてね…

魔法を見せた時は心底驚いていたよ、世界にはこのような未知の技術が存在していたのかと…

その日から彼は魔法について様々な知識を取り入れていった。」

「ディールは…本当の天才だったんだ…父様が私達に紹介してくれた頃には

もう既に名科学者と呼べるほどに、魔法に関するたくさんの知識を蓄えていた…」

「魔導師としての才も持ち合わせていた…リンカーコアはそれほど大きくなかったけど

私達の使用していたバインドや転移魔法も、彼は一目見ただけで

持ち合わせていた魔法知識で自分が扱いやすいように改良して、少ない魔力で使えるようにして見せてた…

そうして研究を続けて、私達と互角…いや、それ以上の力を身につけていった…」

途中でロツテとアリアも加わり、バルクホルツの事が語られていく。
「そして1年程経った後に父様と私達は、闇の書の研究にディールを参加させた。

今まで滞っていた永久封印の方法の模索とその実現も彼の協力のおかげでいっきに進んでいった…」

「話を聞いてディールは真剣な表情で返したんだ…」

『管理局の下らない柵など気にする必要は無い、あなた方は先の危機に対して

立派に対策を取ろうとしている、そんな方達だと知れて幸せだ』つて…」

アリアとロツテが暗い表情でそう呟く。それを聞いてクロノが顔を顰める。

「そして発見した方法が、提督が用意したデバイス…」

氷結の杖、デュランダルの力によって闇の書を主ごと凍結させる事…」

「ああ…それなら、闇の書の転生機能は働かない…」

すると、リーゼ達が声を荒げて言った。

「これまでの闇の書の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わらない！」

「クロノ、今からでも遅くない、私達を解放して！凍結がかけられるのは、暴走が始まる数分だけなんだ…」

いくらディールが優秀でも、彼1人で封印を行なうのは無茶だ！」

「その時点ではまだ、八神はやては永久凍結をされるような犯罪者じゃない…違法だ…」

「そのせいで！ディールが言っただように悲劇が繰り返されてんだ

「あんたの父親だって！」

それを聞いてクロノも声を荒げる。

「提督やリーゼ達が行うとしているのはただの個人的な復讐だ！
そんな自分勝手な復讐心に、何の関係も無い人間を巻き込む権利は
無い！！」

ロツテとアリアは何も言い返せずにたじろぐ、グレアムは俯いたまま
クロノの言葉を聞いていた。

そしてクロノは立ち上がり、3人に背を向ける。

「法以外にも、提督のプランには問題がある…デュランダルが…そして、

ディール・クルーシブルが持つデュランダル・ツヴァイがいかに強力な
デバイスだとしても…

それによつてどんなに強力な封印を施しても…いずれは誰かが嗅ぎ
つけて使おうとする…

怒りや悲しみ…欲望や絶望といった感情が導いてしまう…」

そこまで言つて3人に向き直り、続ける。

「現場が心配なので一旦失礼します。それに、ディール・クルーシ
ブルを止めなくてはいいけません…」

「クロノ、少し待つてくれ…」

グレアムはクロノを呼びとめ、彼に近寄り一枚のカードを差し出す。

「どう使うかは君に任せる…氷結の杖、デュランダルだ…」

クロノは固い表情を浮かべたまま黙つてそれを受け取る。

その後グレアムは更に言つた。

「だが急いだ方がいい…私が言うのは非常におかしな話だが…

闇の書の封印に対して一番躍起になっていたのは彼だ…放っておけば
どんな無茶をするか…」

「言われなくともわかっています…それを止めるのが僕の仕事です
…」

そう言つてクロノは部屋を後にした。

・同じ頃、タツクとマリナもバルクホルツから全ての真実を聞かされていた。

「…本当の危機から目をそらし、目の前の事しか…いや、目の前の事すら見れず

闇の書に対する対処を後手後手に回していた…そんな愚かな管理局には任せられません…」

だから、私とグレアム提督は動いていたのですよ…」

「その為にアンタはそんな回りくどい方法ではやての事を…！」

淡々と語るバルクホルツに対して、タツクが表情を歪ませながら怒りを見せる。

「準備が必要だったので…あの時と同じように…」

そう言って、カードからデュランダル・ツヴァイを現出させる。

「このデュランダル・ツヴァイには、かつてのガーディアンと同じシステム…」

遠距離からエネルギーを受け取って増幅させる機能がついています

…この意味がわかりますか？」

「どういう事だよ…？」

「簡単です…私のフェザーアークにはあなた方と同じように、魔法によるガーディアンが組み込まれている…」

それによって放たれるエネルギーを受信し、増幅させる事によってオリジナルの数十倍の凍結能力を実現させたのがデュランダル・ツ

ヴァイなのです。」

「!!!!」

その言葉に2人は驚く。

彼がかつての世界で天才と謳われた科学者、アルバート・ライネン
の実子であるのは知っている。

もちろん彼自身も、ガンアークやバスターアークといった兵器を生
み出した優秀な人物だ。

だがそれを踏まえても、何の予備知識も無かった魔法という技術に
おいて

ガーディアン機構をほんの2年弱で再現できるとは思っても見な
かったのだ。

そんな2人の様子を見やりながら、バルクホルツは更に続ける。

「…あなた方がこちらに来たのも完全な想定外でしたが…」

闇の書が覚醒した今ではそれももう、どうでもいいことです…」

ふとバルクホルツはマリナの方に視線を向ける。

「マリナ君、あなたにならわかんと思うんですがね…私のやろつと
している事が…」

かつて、私と共に戦ってくれたあなたになら…」

それを聞いてマリナは少し俯ぐが、すぐに顔を上げて呟く。

「…くだらないわ」

そう言つてバルクホルツにライフルを向ける、バルクホルツは表情を歪ませる。

「あの時から言っていたでしょう？あなたのやる事に興味は無いって…」

私はただ仲間を…タツクをゼントラーディの恐怖から逃したくてあなたに協力してただけ…

そして今、私達から大切な人達を奪おうとしているあなたの考えなんて、理解したくもないわ…！」

それを聞いてバルクホルツはがつくりと肩を落としたため息を吐く。

「そうですか…残念なことです…」

それを見たタツクが固い表情で口を開く。

「バルクホルツさん…何も敵対する必要は無いはずだ…あの時と違って、ここにUCEは無い…」

アンタの尊敬していた父親を追放した人間なんていないんだ…だから…」

だがバルクホルツはタツクが言い切る前に、両肩の砲台から魔力弾を放つ。

あまりに突然の攻撃に、2人は驚きながらも左右に飛び退いてそれをかわす。

「バルクホルツさん…！」

「言つたはずです、管理局には任せられないと…それに…」

自分の名を叫ぶタツクに対して、冷たい視線を向けながらバルクホルツは呟く。

「今度こそ…今度こそ私は見届けたいのです…自分の研究の成果の実りの瞬間を…！」

それをまた否定し、邪魔をしようというあなた方と協力する事など出来ませんよ…！」

そう言つてバルクホルツは2人に対して戦闘を仕掛けるのであった。

・海鳴市のある海上、そこでベルクト達は闇の書と戦っていた。
フェイのブルームフィールドによってデアボリックエミッションを
防ぎきり
タックとマリナにディールの追跡を任せた後、闇の書をここに誘い
出していた。
市街地で戦闘を行うといろいろと不都合が生じるからである。

闇の書とフェイトが飛び回りながら刃を交える。

その隙を狙ってベルクトが、長身砲から閃光を放つ。

「断て……」

闇の書は一言呟いて右手を翳し、閃光を容易く防ぐ。

だが、直後にユーノとアルフがそれぞれバインド魔法を唱え
光の鎖とリングによって闇の書を拘束する。

「……」

身動きが取れなくなり闇の書は一瞬慌てるも、すぐに次の対処を取
る。

「碎け……」

闇の書が一言呟くと、バインド魔法が瞬時に消滅する。

「うおおおおお……!!!」

一息つく間もなく、今度はバレルがブーストスラッシュを放つ。

闇の書は右手を挙げて魔力壁を生み出し、バレルの刃を止める。

（コイツ……！涼しい顔していても簡単に……！！）

ギリギリと火花が散る中で、バレルは悔しげな表情を浮かべる。

全力で放った攻撃を、こんなにも簡単に止められてしまったからだ。

「刃を撃て…血に染めよ」

バレルの攻撃を防ぎながら、闇の書が次の魔法を唱える。

それを聞いたバレルは一旦攻撃を中断し、闇の書から距離を取る。

「穿て…ブラッディダガー」

闇の書が周りの者全てに対して紅い刃を放つ。各々方はそれぞれシールドを張ってそれを防いだ。

ブラッディダガーを防ぎ、全員で闇の書を取り囲んだ後、なのはが叫んだ。

「闇の書さん！止まって下さい！こんな事を…はやてちゃんが望んでると思うの！？」

「我が主は、この世界が…自分の愛する者達を奪った世界が…悪い夢であってほしいと願った…」

我はただ…それを叶えるのみ…」

闇の書の言葉を聞いて、今度はフェイが叫ぶ。

「だからといって…それではやてさんが喜ぶと、あなたは本当に思ってるの！」

自分から主を取り込んでおいて、彼女の知らぬ間に全てを破壊して…

それがはやてさんの意志だと言っの!？」

「そうだ…主が望んだのは、この世界が夢であること……我は…それを叶えるの為の道具に過ぎない…」

「融通のきかない奴め…お前がそういう風に泣いて悲しんでいるくらいなら

もう一度主に聞いてみる！お前の主は本当はこんな事を望んでなんかない筈だ！」

「この涙は主の涙…私は道具だ…悲しみなど無い…」

バレルの叫びに対して、右手で涙を拭いながら闇の書は答える。

「…そんな表情で、そんな事を言われても…納得する奴がいると思うか？」

今度はベルクトが闇の書に言葉を投げかける。

「貴様がそうやって涙を流し…俺達の問いかけに答えている…

ただの破壊の道具がそんな事をすると思っのか？」

「……………」

「思い出してみろ、貴様の本来の目的を…貴様は本当に破壊の為に存在しているのか？」

主の願いは本当にこの世界を壊す事か？それが…本当に貴様のしたい事なのか？」

「……………おかしいな…何故お前がそんな事を言っ？」

突然、黙って話を聞き続けていた闇の書がベルクトの方に振り向く。

「墓場の名を持つ紫紺の魔導師よ…お前もまた、そうではないのか？」

「どういう意味だ…？」

「我の中に流れるお前の血がそう言っている…お前もまた我と同じ道具に過ぎないと…」

「ツツ…!!」

それを聞いてベルクトは表情を強張らせる。

「自分の居る世界が…全て壊れてしまえばいいと…お前もそれを望んだはずだ…」

絶望から…破壊を繰り返したお前にも…今の主の事はわかるはずだ…」

「チツ……」

闇の書の言葉を聞いてベルクトは苦々しい表情になる。

すると、今まで黙ってやり取りを見ていたフェイトが、ベルクトと闇の書の間に立つ。

「フェイト…？」

ベルクトはフェイトの背中に対して視線を向ける。

フェイトは振り向かず、闇の書を真っ直ぐ見据えて呟く。

「…確かに、ベルクトもかつては世界を壊そうとしていた…」

けど、今はもう違う……！私達と一緒に戦って、笑ったり悲しんだりしてくれる大切な仲間だ……！

ベルクトは…誰かの出来損ないなんかじゃ…世界を壊すだけの道具なんかじゃない……！」

段々と口調を荒げながら、フェイトは言葉を紡いでいく。

「それはあなただって同じ筈……！悲しみなど無いだなんて…世界を破壊するだけの」

ただの道具にすぎないなんて…そんな悲しい顔で言っただって…誰が信じるもんか……！」

フェイトが必死に闇の書に向かって叫ぶ、その目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「あなたにだって心はある筈…悲しいって、辛いって言っていていいんだよ……」

フェイトがそう言った後、ベルクトが先程とは違う穏やかな表情で、闇の書に言う。

「お前は前の俺とは違う…1人じゃない…こうやってお前に呼びかける者達や…
何より、側には主がいる…かつての俺のように…自分の心を閉ざす必要など無い…
孤独の絶望を味わう必要も無い…お前が自分自身の意志で望めば、主はそれに答えるはずだ…
夜天の魔導書…お前は孤独な道具なんかじゃない…感情を持った1人の人間だ…!!」

(ベルクト………)

バレルはベルクトの言葉を聞いて、少し驚きを浮かべていた。

こちらの世界で共に暮らすようになって大分経つ。

彼がかつての冷酷な感情を潜め、フェイトを守るために変わった事は勿論知っている。

それを踏まえたとしても、彼の本質は冷静沈着で、基本的にフェイト以外の

他人の感情に対して、とやかく言ったりするような人間ではないと思っていた。

だが今こうして、闇の書に対してお前は道具ではなく人間であると言った。
昔の自分を重ね、今の闇の書の行動を面と向かって否定しているのだ。
いくらベルクトが変わったとはいえ、ここまでの事を言うようになっているのは意外だった。

闇の書は黙ったままベルクトとフェイトの言葉を聞いていたが突然、右手を上空に掲げて魔力を集中し始めた。

「無駄だ…もう崩壊が始まっている…私も直に意識を無くし、暴走が始まる…」

だから…意識のあるうちに…主の願いを叶えたい…」
すると、ベルクトとフェイトを取り囲むように、紅い刃が現れる。

「！！！！！！」

2人はそれを瞬時に飛び退いて回避する。紅い刃が互いに衝突を起こし、爆発を巻き起こす。

「この…駄々っ子！！」

自分たちの言葉を一切聞き入れない闇の書に対して、フェイトは遂に攻撃を仕掛ける。

「言うことを…聞けえええ！！」

バルディッシュを振り上げ、一直線に闇の書に向かって突撃してい

く。

闇の書は右手を掲げて防御壁を展開し、それを防ぐ。

「お前も…我が内で眠るといい…」

闇の書がそう呟くと、彼女の持っていた魔導書が光を放つ。

「あつ……！」

そしてフェイトを光の粒に変えて、魔導書の中に収集した。

「フェイトちゃん……！」

「フェイト……！」

「なっ……！！！」

なのはとアルフが叫ぶ。

ベルクトは目を見開いて声をあげる。

「全ては…主の願いを叶える為…」

闇の書は目を瞑りながら静かに呟き魔導書を閉じる。

しばらくの間、周りの者達は目の前の現実を処理しきれずに呆然となる。「……………貴様……………フェイトを……………どうした……………？」

そんな中で、顔を俯かせたベルクトがポツリと呟いた。

闇の書はそれに対してどうという事はないといった感じに答える。

「あの少女もまた…主と同じ…永久の眠りについたの…生と死の狭間の夢の中で…」

「黙れッ……………！！！」

凄まじい怒気を込めてベルクトは呟く。

その言葉を聞いて、闇の書の心が震える。

（何だ…この感覚は…？）

今まで体感した事の無い感覚に闇の書は戸惑いを見せる。

「…アーマーパージ…ファントムモード起動…」

ベルクトがそう呟くと、足下に赤褐色の魔法陣が展開する。

そしてベルクトを包んでいたコート形のバリアジャケットは

袖のない簡易な服装に変わり、新たに紫のマントが装着される。

両肩の砲台が消滅し、長身砲は小型のライフルへと変形した。

その光景を見たバレルが叫んだ。

「ベルクトよせ！ファントムモードはまだ調整が不完全だ！今使ったらお前が…」

だがベルクトはバレルの言葉などお構いなしに、ライフルに魔力刃を形成する。

そして次の瞬間、ベルクトの姿が消滅した。

「……どこに……？」

闇の書が辺りを見渡すが更にその直後、

「ぐうつ……！」

背後に凄まじい衝撃を感じ、闇の書は吹き飛ぶ。

慌てて闇の書が体勢を立て直して背後に振り向くとそこにはベルクトが立っていた。

（我が…全く気づけなかったというのか…）

ベルクトのあまりのスピードに闇の書は驚きを浮かべる。

「返せ……フェイトを返せ……俺の仲間を……掛け替えの無い大切な人間を……」

目を大きく見開き、凄まじい殺気を放ちながらベルクトは呟く。
そんな彼の姿を見て、闇の書は寒気を感じていた

（これは……恐怖……？ 怯えているというのか…我がこの男に……？）

今まで感じる事の無かった恐怖という物に対して、闇の書は更なる戸惑いを見せる。

「フェイトを……返せエエエエエエエエエエ……！！！」

心の底からの叫びと共に、ベルクトはとてつもないスピードで闇の書に一直線に突っ込んでいく。

（速い……！）

闇の書は魔力壁を展開し、すんでのところでベルクトの魔力刃を防ぐ。

だがベルクトは止まる事なく、闇の書に向かって何度も刃を振り下ろしていく。

「うがああああああああああ……！！！！！」

狂鷹のように叫び、目に大粒の涙を浮かべながらベルクトは攻撃を続けていく。

フェイトを目の前で失ってしまった今の彼は錯乱状態にあった。ベルクトの攻撃を受け続け、闇の書は後ずさっていく。

「グッ……！！！」

だが急にベルクトが攻撃を止め、左手で苦しそくに胸を押さえる。

（クソ…やはり負担が重すぎる……………）

バレルの言ったように、ファントムモードの調整は不完全であり先程の無茶な使用が重なって、体かなりの負担がかかっていたのだ。

（恐怖が消えた…？）

感じていた寒気がなくなつて、闇の書は少し違和感を感じるもすぐに余計な感情を捨てて呟く。

「紫紺の魔導師よ…お前もまた…あの少女と共に…眠りにつくがい…」

闇の書が魔導書のページを開く。

「マズい……！！」

離れた位置で戦いを見つめていたバレルとフェイが、ベルクトの方に近寄っていく。

ベルクトは苦しげに胸を押さえ、息を荒げたまま動かない。

そして魔導書に光が収束していく。

「ベルクト！避けて！」

必死に彼に近寄りながらフェイが叫ぶ。だが彼は動く素振りを見せない。

「くそっ…デイスパーションセイバー……！！」

バレルはベルクトに近寄りながらもデイスパーションセイバーを飛ばし、闇の書に攻撃しようとする。

「無駄だ……」

だがそれも闇の書の眩きと共に消滅してしまう。

そして2人が辿りつく前に、ベルクトは光となって闇の書に収集されてしまった。

「あ…ああ……………」

その場に立ち尽くし、フェイは震えた声をあげる。

「ベルクトオオオオ！！」

バレルも同様に立ち尽くし、両腕の拳を握りしめて、空に向かって叫んだ。

魔導書のページを閉じて闇の書は呟く。

「紫紺の魔導師よ…我一撃を加えた…その強さに敬意を評して…お前の願いもまた…叶えよう…」

そう言つて右手を掲げ、魔力を集中していく。すると、上空にドス黒い小さな渦が現れる。

「な、何…！何なのあれは！？」

渦から発せられる膨大な魔力を感じ取り、なのはが驚きながら言う。上空の渦から風が巻き起こり、周りにいる者達を引き寄せていく。

「これは…僕らを吸い込んでいる…！」

右腕をあげ、吹き荒れる風を防ぎながらユーノが呟く。

「開け…異界の扉…」

闇の書は更に魔力を注ぎ込み、上空の渦を巨大化させる。

そして、そこから吹き荒れる風も更に強まっていった。

「うわああああ…！！」

「きゃああああ…！！」

周辺にいたバレルやなのは達は、その渦にまとめて吸い込まれていった。

・同じ頃、宇宙で待機していたアースラにも異変が起きていた。

「ぜ、前方に膨大な魔力反応！吸い込まれていきます！！」
スタッフの1人が叫ぶ。

「すぐに退避をー！！」

「だ、ダメです！間に合いませんー！！」

リンディとスタッフがそう叫んだ後、アースラの目の前に巨大な黒い渦が現れ、アースラを飲み込んだ。

「うつつ……………」

しばらくした後なのは目を覚まし、辺りを見渡す。

周りにはユーノやアルフ、バレル、フェイが同じように浮かんでいた。
た。

「ユーノ君…私たちは一体…」

「わからない…だけど、ここは多分…僕達がさっきまでいた場所じゃない…」

自分に近寄りながら不安げに聞いてきたのはに対して
ユーノが下を見ながら険しい表情で呟く。

一見するとさっきまで戦っていた海上に見えたが

目の前には先程まで無かったある物があった。

「何なんだい…アレは…？」

アルフが目の前のソレを見て呟く。

海上に浮かんでいたのは巨大な円形の装置と、それを取り囲むように立つ4本の柱。

そしてその装置の上空には、先程自分達を吸い込んだ黒い渦が浮かんでいた。

すると、渦の中から闇の書が現れる。

「全ては…永久の闇の中へと…消え失せる。」

そう呟いて闇の書は周囲に結界を張っていく。

それを見たなのは達は表情を引き締め直し、戦闘体勢を取った。

そんな中、バレルとフェイは眼下に映る円形の装置を呆然と見つめていた。

「フェイ……あ、あれはまさか……」

震える声で信じられないという風にバレルは尋ねる。

「間違いないわ……アレは………バルドナ・ドライブ……」

……」

フェイもまた、目の前に映るそれ……

本来はある筈の無い物を前にして動揺していた。

「じゃ……じゃあ……今俺たちがいるここは……」

フェイの言葉を聞いて、バレルは見開いていた目を更に大きく広げ、
眩くのであった。

「俺たちの……地球……」

第22話（前書き）

バルクホルツ対タック、マリナの戦い

第22話

・バレル達の地球、地球上空の宙域にて。

「な、何だっただんだ…今は…？」

「わからん…レーダーには何の反応も…」

付近を巡回中だったUCEの2名のMSパイロットは
目の前の現実を未だに理解しきれず、ただただ驚いていた。

突如、レーダーに高エネルギー体の反応があったと思いきや

その直後に、見た事も無い巨大な戦艦のような物が姿を現したのだ。

その時点で彼らは混乱してしまったのだが、更にその直後

その旨を付近の基地ににいる上官に知らせようとしたら

再び目の前の艦が妖しく歪み、付近の世界がグレーになっていく

そんな感じがしたかと思えば、その艦の姿がきれいさっぱり消えて
しまったのだ。

あまりに非常識な事態に、彼らはどうすればいいかわからず
しばらくの間その場に佇んでいたのであった。

・なのは達の地球、海鳴市の街中にて

ビルの屋上でバルクホルツとタツク、マリナが対峙する。

「封鎖領域展開…」

バルクホルツが腰の左側についた小箱から、1枚のカードを取り出しそれを上空に向かって投げる。

すると、辺りの世界の色が急速に色あせていった。

「闇の書がいなくなった以上、結界は消滅してしまいましたからね…

これで、市民の被害などを気にする必要も無くなる…」

不気味なくらい落ち着いた口調でバルクホルツは呟く。

そして更に右側の小箱から数枚のカードを取り出し、両腕で構えた。

「さて…お2人とも…大人しくしてもらいますよ…」

そう言つて2人に向かって1枚ずつカードを投げつける。

すると、カードから青白い紐の様な物が現れ、2人を取り囲もうとする。

「バインド…！マリナ…！」

「ええ…！」

タツクの声にマリナも反応し、2人は瞬時に拘束で飛び退いてそのバインドから逃げる。

「流石…ですね…」

褒めつつも、全く感情のこもってない口調でバルクホルツは言った。

「バルクホルツさん…アンタがそういうつもりなら…」

固い表情で言いながら、タツクはライフルを構え、魔法陣を展開する。

「俺は再び…アンタを止める!!」

ライフルから黄色い閃光がバルクホルツに向かって放たれる。

だが、バルクホルツはそれを避ける素振りも防ぐ様子すらも見せない。

「フフフ………」

バルクホルツは不気味な笑みを浮かべつつカードを1枚、目の前に浮かばせる。

すると、そのカードに桃色の光が収束していく。

「デイベインバスター…エクステンション…」

バルクホルツがそう呟くと、カードから桃色の閃光が放たれタツクの放ったアークライフルチャージの閃光を打ち消しながら一直線にタツクに向かって飛んでいった。

「!!…この魔法は!!」

見覚えのあるそれに驚きながらも、タツクはプレートを前に構えシールドを展開して桃色の閃光を防ぐ。

「ぐうつ………」

だが、予想以上の威力があつたようだ。タツクは攻撃を防ぎきつた後苦しげな表情を浮かべながら後方によるめいた。

「防ぎましたか…」

落ち着いた口調で呟くバルクホルツ。

「はああああ！！」

すると、バルクホルツ後方の上空からマリナがアークブレードをバルクホルツに向かって振り下ろそうとしていた。だがバルクホルツはやはり、大して慌てるような素振りも見せずに後方に振り向きつつカードを構え、そして呟く。

「現出せよ……」

ガキーン！！

澄んだ音が周囲に響き渡る。

マリナの斬撃は、バルクホルツの手に持つ物で止められていた。

「それは……！！」

バルクホルツの持っているそれを見て、マリナは驚嘆の表情を浮かべる。

バルクホルツは魔力刃を形成した、本来はフェイトのデバイスである筈のそれ

・バルディッシュによってマリナの刃を止めたのだ。

「……マリエル君に修理を代わってもらって正解でしたよ。」

バルクホルツが呟く。

マリナは一旦後方に飛び退いて距離を取り、落ち着かない口調で言った。

「どういうこと…それは確かに…あのシグナムと戦っていた子の…！」

「…私は管理局の研究者として働いていたのです…」

彼女達のデバイスを修理する際に…彼女達の魔法データを盗み取るなど簡単な事…」

なんてことないという風にバルクホルツは言った。

（簡単な事…？データだけで魔法を同じ再現するだなんて…！）
別の、少し離れた位置で聞いていたタツクは冷や汗を浮かべる。

魔法と言っても様々なのだ。それをサポートするデバイスにも沢山の種類があるし

その使用魔法も砲撃、近接、防御、捕縛など用途も多数存在する。他人と同じ魔法を使うと言っても、見よう見まねですぐに出来るような事じゃない。

魔法に関する知識が浅いタツクでも、それくらいはなんとなくわかる。

だが…バルクホルツは見よう見まねは愚か、データを取っただけでオリジナルと同等と思われるの魔法デバイスや砲撃魔法を使つて見せたのだ。

本来は自分達と同じ、魔法と全く関わりの無い人間であるにも関わらず。

タツクはそんな彼の才能に驚くと同時に、そして1つ理解出来ない面も感じた。

「どうしてだ…どうしてアンタはそれ程の知識がありながら…」

歯を食いしばり、険しい表情でタツクは言う。

そしてライフルに魔力刃を形成し、バルクホルツに向かって行く。

バルクホルツはバルディッシュでそれを容易く防ぐ。

タツクは一旦下がり、マリナの近くに降り立って、バルクホルツに向かって怒鳴った。

「何故なんだ！それだけの力があれば…闇の書の封印なんかに関わらなくてたつて！」

彼程の力があれば、こちらの世界で認められ、そして生きていくのは難しくないはずだ。

ましてや、バルクホルツの近くに居たのは管理局の上の人間である。

いくら自分の事を助けてくれた人間であるとは言え
闇の書の違法な封印に関わるという、そこまで危険な事に手を貸す
筋合いなど無いはずなのだ。

タツクの言葉を聞いたバルクホルツはバルディッシュをしまい、無
表情のまま呟く。

「あなた方と同じですよ…私を助けてくれたグレアム提督が苦悩し
ている…」

命の恩人に少しでも恩返しがしたかったから…」

そこまで言ってバルクホルツはカードを取り出し、そして続ける。

「……などという愚論を振りかざすつもりはありませんよ。」

「えっ？」

「なっ…」

突如自分の意見を捻じ曲げたバルクホルツのその言葉に

タツクとマリナは驚き、声を上げる。

「私はね…自分自身の力で成し遂げたいですよ…誰も成し遂げら
れない…」

そんな偉大な功績を残したい…それこそ私の父、ライネンすら超え
る研究者として

どんな世界でもいい…自分の存在を認めさせたい…ただそれだけで
す…」

僅かに笑みを浮かべつつ語っていくバルクホルツ。

すると、それを聞いていたマリナが左手の拳を握り締め、表情を歪
ませる。

「ふざけないで…そんな…そんな自己満足の為に…？」

はやても…シグナム達も…みんなあなたの為に…？」

「…私の気持ちは今も、あの頃もかわっていませんよ…」

はやてちゃんも…グレアム提督も…リーゼ君達も…そしてマリナ君…君も

全ては皆、私の偉大な研究を成就する為に共に居たにすぎないのです。」

その瞬間、カツと目を見開きマリナは叫ぶ。

「ふざけるなああああ！！！」

アークブレードを構え、凄まじい勢いでバルクホルツに突撃していく。

バルクホルツはそれを後方に飛び退いてかわし、先程取り出したカードを自分の前で光らせる。

「短絡的な行動は命を落とすのを早めますよ…」

直後、バルクホルツは高速で後方に移動して2人から距離を取り更にもう1枚カードを取り出して呟く。

「スターライトブレイカー…！」

カードから巨大な桃色の閃光が放たれ、地面に着弾しそれが巨大な波動となって周辺に広がっていく。

「！！…マリナッ！！！」

タックは瞬時にマリナの前に立ち、ツインシールドを展開して波動を防いだ。

波動が収まった後、額に汗を浮かばせながら、タックは後ろに振り向き

真剣な表情でマリナに尋ねた。

「マリナ、大丈夫か！」

「ええ…なんとか……ッッ!!」

突如マリナは、タックを思いっきり押しのける。

「マリナ……？」

その突然の行動にタックはキョトンとした表情を浮かべる。

直後、上空から薄緑の巨大な閃光が降り注ぎ、マリナに直撃する。それをまともに喰らったマリナは、意識を失い落下していった。

「ああ……マリナアアアア!!!!」

ようやく理解が追いついたタックは、必死の表情で叫びながら落下していくマリナの方に飛んでいき、彼女を受け止めた。

マリナは自分の身代わりとなって撃墜された……

それに気づけなかった自分に対して後悔の念が浮かび、
タツクは気絶したマリナの顔を見ながら涙を浮かべる。

「……やはり…あなた方のオリジナルと比べると…威力は半分程度
ですか…」

上空から声が響き、タツクはそちらに顔を向ける。

やや離れた位置に自分に対してカードを光らせ、冷たい表情を浮か
べたバルクホルツが浮かんでいた。

「さてタツク君…いい加減理解してくれましたかね…？
私の實力…私の成そうとしている事が…？」

感情のこもっていない口調でバルクホルツはタツクに向かって言っ
た。

タツクはそれに答えず、近くのビルの屋上にマリナを横たわらせ
そしてバルクホルツの前まで飛んでいく。

「タツク君…？」

バルクホルツが呟く。するとタツクは俯いたままひしひしと呟く。

「確かにわかったよ…アンタは凄い研究者だよ…そして、理解もし
た…」

そこまで言って顔を上げ、怒りの表情で叫んだ。

「アンタを止めなきゃ…大変な事になるってな…！」

直後、ライフルからバースト弾を放つ。それが爆発し爆煙が巻き起
こる。

「うおおおお…！」

すかさずタツクは魔力刃を形成して、バルクホルツに向かってそれ
を振り下ろす。

バルクホルツはそれを横に飛び退いてかわし、呆れた感じの口調で

言う。

「やっぱり…わかつてはくれませんか…なら仕方ありませんね…」
そう言いながらバルクホルツはカードを取り出す。

「フォトランサーファランクスシフト…」

直後、彼の周りに大量の黄色い魔力弾が現れ、タツクに向かって飛んでいく。

タツクはそれを縦横無尽に飛びながら回避していくが、如何せん量が多い。

「くっ…負けるかああああ…!!」

だがタツクは、シールドを前面に展開しながら魔力弾の雨に突っ込みバルクホルツの方にに向かっていく。

「な…なんという無茶を…」

予想外の敵の動きに慌てつつも、バルクホルツはまたカードを取り出す。

すると、カードから大量の煙が吹き出した。

煙で視界が閉ざされ、タツクは立ち止まって辺りを見渡す。

「!!!!!!」

すると、上空で先程の物と同じような感じがして

タツクは両腕を下に降ろし、胸の前に光球を出現させる。

「させるかあああ!!」

タツクの左横に魔法陣が現れ、巨大な白い閃光が上空に向かって放たれる。

そしてそれは、爆煙を突き破りながら降り注いだ黄緑の閃光をかき消しながら空へと消えていった。

「やはり…同じ手は…2度は通じませんか…」

苦しげな口調でバルクホルツはそう言って、カードを使って魔力を回復させる。

（彼は私と違って回復の術を持たない…今のガーディアンで魔力を殆ど使った筈…）

そう考えたバルクホルツは、白い閃光が飛んできた方向へと飛んでいく。

だがその直後

「なっ…バインド！」

バルクホルツの体は巨大な白いリングで拘束されてしまった。

「どう…やら…油断して…いたようだな…」

バルクホルツは慌てて声のした方に振り向く。

すると自分が向かっていたのとは別の方向の離れた位置に額に大量の汗を浮かべ、苦しげな表情を浮かべたタックが立っていた。

「これで…最後だ…！！」

タックは再び身構え、魔力を集中していく。

その光景にバルクホルツは信じられないという感じに言った。

「まさか…まだ撃てるというのか…！！」

バルクホルツの上空に巨大な白い魔法陣が現れる。

それを見てバルクホルツは必死にバインドから逃れようとするが、

抜けられない。

「ガーディアン……！！！」

そしてタツクの叫びと共に巨大な白い閃光が降り注ぎ、バルクホルツに直撃した。

「ぐわああああああアアアアアア……！！！」

巨大な叫びと共にバルクホルツは落下していき、近くのビルの屋上に叩きつけられた。

「ぐうつ………ああつ………」

体に凄まじい激痛を感じ、タツクはバルクホルツの落下したビルの屋上に降りた後

左腕で胸を抑え込みながら、両膝をついて倒れ込んだ。

（……すまないな……ヴィータ……約束……破って……）

激痛の中視界が揺らぎ、下を向きながらタツクは心内で呟く。

「ハア……ハア……あ、あなたに対して……ぐ……使いたくは……ハア……なかった……のですが……」

近くで声が響き、タツクは顔を上げる。

彼の前でバルクホルツがガクガクと震えながらも立ち上がって

右手にデュランダル・ツヴァイを握りしめていた。

（マ、マズい……）

タツクは何とかしようとするも、体の激痛と疲労感で動くことがで

きない。

「せめて……ここで……おとなしくっ……！」

歯を食いしばりながら、必死の表情でバルクホルツは言い、デュランダル・ツヴァイを振り上げた。

だが次の瞬間、バルクホルツの握っていたデュランダル・ツヴァイが凍りついた。

「なあっ！……これは……」

「何だ……？」

あまりに予想外の事態にバルクホルツは目を見開いて驚きタツクも視界が朦朧としている中で、何が起きたのか理解できないでいた。

「……本当は、こんな形で使いたくは無かったんだけど……」

そして2人がいるビルから少し離れた位置に

デュランダルを握り締め、固い表情を浮かべたクロノが浮かんでいた。

クロノはその後デュランダルをしまい、更に己の本来のデバイスS2Uを取り出して呟く。

「デイル・クルーシブル……あなたの力は、あなた自身が開発した魔力と魔法をインプットする特殊なカードに依存している……」

フェザーアークはガーディアンを使うための物で、

その他には基本的な魔法しか記憶されてない……故に……」

S2Uを振り下ろし、ステインガースナイプを放つ。

そしてその閃光は、バルクホルツの両腰についていた小箱を貫き、

それを爆散させる。

「そのカードの束を失ってしまえば…あなたの能力は奪ったも同然だ…！」

そう言いながら表情を歪めつつ、クロノは2人がいたビルに降り立った。

クロノはタツクに近づいてS2Uから光を放ち、その光で彼を包む。すると、タツクは体の激痛が和らぎ、どうにか立ち上げられる状態になった。

「…クルーシブル程じゃないけど、これで少しは動けるかい？」

「お前は…？」

「…時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。」

「…！！…！」

時空管理局、という単語を聞き取りタツクは反射的にクロノから距離を取る。

クロノはそんな彼を見て穏やかな口調で言った。

「そう身構えなくていい、すぐにどうこうしようというつもりはない君たちの…八神はやてや守護騎士達、闇の書に関する事情は全て知っている…」

「……………信用していいんだな？」

「ああ…僕はそこにいる彼を止めに来た。君たちを捕まえるために来たわけじゃない…」

そう言つてクロノはデバイスをしまふ。そんな彼を見てタツクはその言葉に嘘偽りは無いと感じ、敵意を向けるのをやめて彼に近寄つていく。

それを見たクロノはタツクから背を向けて更に呟く。

「…君の仲間、マリナ・カーソンの応急処置をしておかないといけない…」

カードは破壊したし…君のガーディアンをまともに喰らつたから多分何も出来ないと思うけど…念の為、彼を見張っておいてくれ…」

「あ…ああ…」

勝手に話を進めていくクロノに対して、少し困惑するが

タツクはそれを了承する。そしてクロノはマリナのいる方へと飛んでいった。

「ハラオウン執務官……デュランダルを……ははは……そうですか……
グレアム提督……結局あなたは……」

仰向けに倒れ、涙を流して笑いながらバルクホルツは震えた声で呟く。

その様子を見ていたタツクは、バルクホルツに対して哀れみさえ感じていた。

「バルクホルツさん…アンタは……」

寂しげな表情で言うタツクの声聞いて、バルクホルツは右手涙が溢れ出る両目を押さえ

歯を食いしばりながら悔しげな表情で呟く。

「わかってましたよ……あの時も……今も……自分がやっている事が……」

本来は間違っている……でも……あきらめきれなかった……どうしても……

……父や……私自身の正しさ……能力を……どんな形でもいい……認めさせたかった……」

幼い頃から研究者としての教育を受けてきたバルクホルツにとって自分の父、アルバート・ライネンは、親としても一研究者としてもどんなに敬っても尚足りない、眩しく輝く憧れの存在だったのだ。

だが父は、その溢れ出る才能を恐れ、妬んだUCEの俗物にハメられ己の一大プロジェクト、ガーディアンを否定されながら殺された。

その日以来バルクホルツも、大手を振って歩むことが出来なくなつた。

ガーディアンという過剰な力を使った危険思想の持ち主の息子という目で見られた。

自分は愚か、心から尊敬していた父親にまで言われの無い非難を浴びせられる…
それによってバルクホルツは心が張り裂けんばかりの毎日を過ごす事になったのだ。

「父は危険思想の持ち主などではない……私はそんな教えは受けていない……
私も……私の父も……本当はきちんとした科学者だと……多くの人々に貢献する為に努力してたと……
誰でもいい……どの世界のどんな人間でもいい……認めさせたかった……」

ガーディアンを封印し、外宇宙の脅威から目をそらし続けるUCEに対して
バルクホルツはこれ以上ないくらいの怒りを覚えていたのだ。
そして決心した。自分の、自分の父の正しさを認めさせる。
その為に舞台を着々と整えていった。

だが…結局それは叶わず、志半ばで自分は討たれて自分は死んだ……

……だが自分は生き延びた、そして魔法という新たな研究対象と、闇の書に関する情報を聞いた。
そしてバルクホルツ再び自分の中の野心を燃え上がらせたのだ。
UCEと同じ、下らない柵に囚われている管理局の人間に対し……
自分の……尊敬する父の志を引き継いだ自分の正しさをこの世界の人間に認めさせてやると……

しかし……それすらもまた、止められてしまったのだ……
しかも利用する目的だったとはいえ、今まで一緒にやってきたグレアムの力添えによって……
そのあまりにも重過ぎる事実を前にして、バルクホルツはただただ悔しさで一杯だった。

「……アンタは馬鹿だよ……バルクホルツ……」
悔しげに自分の心内を語るバルクホルツに対し
タツクは目を固く閉じ、拳を握り締めて静かに言った。
「ガーディアンとか闇の書とか……そんな大それた物なんかに関わらなくたって……
アンタは十分凄い研究者じゃないか……大勢の人に認めてもらうとか……
そんな事考えなくても……アンタ自身が気付く事が出来れば……
アンタを理解してくれる人は……少なからずいた筈なのに……」

事実自分もそうだったのだから

自身がフェザーアークのパイロットの時から、バルクホルツは優秀な研究者であり

その才能を鼻にかける事のない温和な人柄で

機械オんチの自分に対しても、アークシリーズの事を丁寧に教えてくれた。

自分にとっては少なくとも、バルクホルツは立派な研究者だったのだ。

「研究者としての気持ちとか…そういうことは……俺にはわからない…けど…」

多くの犠牲とか、偉大な研究とか…そんな物必要ない…

どんな些細なことでも…自分から心を開けば、自分を認めてくれる人なんて

いくらでも出来た筈だ…どんなに凄い事を成し遂げたって…それをたった1人で成し遂げたって…

その時……隣で笑ってくれる人がいなきゃ…ただ虚しいだけじゃないのか…」

どこか寂しげな声でひしひしと言うタツクの言葉を

バルクホルツは目を押さえながら黙って聞き続けていた。

と、その時

「タックー!!」

クロノとマリナが2人のいるビルの屋上に降り立った。

マリナはそのままタックに駆け寄り、涙を流しながら彼に抱きつく。

「馬鹿…… ガーディアンを多用するなんて…… 無茶なことを……」

「マリナ…… すまない…… お前までこんな目に……」

「もう……」

タックの胸板に顔を埋め、マリナは涙を流し続ける。

タックはそんな彼女の背中に両腕を回し、静かに抱いた。

そんな2人を見やった後、クロノは倒れているバルクホルツに近づいていく。

「デイル・クルーシブル…… 本来ならこのまま、あなたを連行したいんだが……」

アースラとの連絡が取れない……それに、闇の書の事もある。」

そう言いながらクロノはデバイスを構え、バルクホルツをバインドで拘束する。

「事が全て終わるまで、あなたにはここで大人しくしてもらいます。」

そしてクロノはちょうど互いの体を離れたところの、タックとマリナの方を向いて言った。

「…… 君たちにとっても、八神はやては大事な人間のはずだ……
だったら……その彼女の暴走を止めなくてはいけない…… 今し方で魔力をほとんど使ってしまったって

大分苦しい状況かもしれないけど……どうか協力してほしい……」
そう言ってクロノは2人に対して頭を下げる。

「……言われなくなつて、やってやるさ……！」

「そうよ……世界を滅ぼすなんて……はやてはそんな事……絶対に望んでないもの……」

クロノに対して力強い口調で2人は答える。

それを聞いてクロノは頭を上げ、安心したように微笑んで更に言った。

「よし……ならば早い……早く現場に向かおう……」

それを聞いて2人は力強く頷く。そしてクロノと共に闇の書や、他の仲間が飛んでいったほうへと向かった。

（待っているはやて……お前は絶対俺達が助けるからな……）

（だから……はやて……どうか無事でいて……）

(……………私は……………)

雪が降り始めた空を見上げながら、バルクホルツは左手をゴソゴソと動かす。

すると、彼の左手の手袋の裏側から淡い光が漏れ始めるのであった。

第22話（後書き）

という事でバルクホルツ戦は終了

うゝ… またしても更新が遅れて申し訳ない…

ここぞとばかりに大暴れなバルクホルツ。
マリエルに修理をやらせてくれと頼んだのには
こういう伏線もあつたわけなんです。

… 今更見直すとちょっとやりすぎたかなって感じがしますが…

アンケートの回答もありがとうございます。
予想以上に多くの人が答えてくれて私も感動しております…
皆さんの期待を裏切らない為に
今後も一生懸命やらせて頂きますので
どうかよろしく願います。

次回、闇の書に取り込まれたフェイトとベルクトのパートになります。

（前回の引きを見て先にこっちを期待してた方はすみませんでした
…）

第23話（前書き）

闇の書と激戦を繰り広げるなのは達
そして、闇の書に取り込まれたフェイトとベルクトは…

予想以上に調子が出たので、一気に2話投稿します。

今回と24話は場面がコロコロ変わって
少し読みにくいので気をつけて下さい。

第23話

戦艦アースラのブリッジ

「うつつ…何だったの今は？」

先程の衝撃で艦長席から吹っ飛ばされてしまい
よろよろと立ち上がりながらリンディは呟く。

「本艦の周囲に超広域の封鎖型結界を確認、完全に閉じ込められています！」

「アースラの損傷は軽微、今のところ航行および戦闘に支障はありません。」

報告が飛び交う中、スタッフの1人が驚いたように言った。

「か、艦長！…ここは…第97管理外世界ではありません！」

その言葉にリンディが驚き、エイミイも同様に驚いて立ち上がりながら言った。

「どういう事！？だってあれは、どう見ても地球じゃない！」

エイミイの言うとおり、目の前のメインモニターに映っているのは間違いなく地球である。

だが、報告したスタッフは更に困ったような口調で続ける。

「し、しかし…先程まで待機していた次元座標とは…全く数値が異なるのです…」

第97管理外世界から…遙か遠くに位置する…全く未知の空間を示しています…」

「何よそれ…一体何が起きてるの…」

口を開けたまま、わけがわからないという風な顔になるエイミイ。

そんな中、リンディは席に座り、顎に手をあてて考えていた。

（異なる世界…でもあれは地球…まさかとは思っけど……）

*

「ううん……………」

窓から差し込む光を受け、フェイトは目覚める。

「ええっ…！」

そして体を起こし、隣に眠っている人物を見て驚愕する。

そこにいたのは自分と瓜二つの金髪の少女。

「ここは……………」

フェイトは辺りを見渡す、自分が眠っていたのは豪華なダブルベット。

青い天井の小奇麗なつくりをした部屋の中に自分は居た。

「フェイト、アリシア、アルフ、朝ですよ。」

ふとそんな声が聞こえ、それと同時に部屋の扉が開く。

その声と共に、隣で眠っていた人物も目覚める。

「おはよう、フェイト。」

「みんな、ちゃんと起きてますか？」

小間使いの服に身を包んだ茶髪の女性が、自分達に近づいてきた。フェイトは信じられない物を見るような目で、その女性に対して呟く。

「あの……リニス……？」

「はい、何ですかフェイト？」

自分の魔法の師、かつての自分の母、プレシアの使い魔で

今はもう役目を終えていなくなったはずの女性・リニスは優しくフェイトに微笑みかける。

そんな彼女を見やった後、隣に居る人物に顔を向ける。

「アリシア……？」

「ん？」

プレシアの本当の娘、自分が生まれた理由の1つ、今はもうこの世に存在せず

その肉体を培養液の中に保管されていた少女・アリシアは可愛らしく首を傾げる。

その側には、子犬形態のアルフが座っていた。

その後2人はリニスに連れられて、食事の場にやってきた。だが、フェイトは近くの柱に身を潜めたまま動かない。

「ほら、フェイト。」

リニスが自分を呼んでいる、フェイトは恐る恐る前に出てきた。その視線の先にいたのはリニスとアリシアとアルフ、そして…

（母さん……………）

自分を見捨て、何処かへと消え去ったはずの、かつての自分の母・プレシア・テストロッサが優しい表情をしながら自分を見つめていた。

「フェイト…どうしたの？」

「どうも怖い夢でも見たらしくて…今が、夢か幻か何かだと思ってるみたいですよ？」

「フェイト…勉強のしすぎとか？」

「ありえる！」

和気藹々とした空気の中で、フェイト以外の4人はそんなやり取りをする。

「フェイト、いらつしゃい…」

プレシアが優しく手招きする。それを見てフェイトはおずおずと彼女に近づいていく。

そしてプレシアはフェイトが自分の前に来ると、フェイトの頬に手を当てる。

「……………！」

反射的にフェイトは目を見開き顔を引つ込める。かつての苦い記憶が蘇る。

母がこのように優しい素振りを見せてきた時はいつだって……

だがプレシアはそんなフェイトに優しく微笑みながら言った。

「怖い夢を見たのね…でも大丈夫よ…母さんもりニスもアリシアも

アルフも…皆あなたの側に居るわ…」

その言葉を聞いてフェイトは、目の前の現実が信じられずキョトンとしてしまう。

しかし、その後すぐに自分の今までの経緯を思い出し、顔を俯かせる。

（違う…これは夢だ…母さんは…私にこんな風に笑いかけてくれたことは…一度も…）

それに…アリシアもリニスも…今はもう…でも、これは…）

夢、その一言で片付けるにはあまりにも現実味がありすぎるその状況に

フェイトは困惑し、どうすればいいかわからなくなってきた。

*

「ここは………」

辺り一面が闇、そんな世界にベルクトは佇んでいた。

「俺は一体………」

辺りをキョロキョロと眺めながら、ベルクトは今までの事を思い返

す。

自分は確か、目の前でフェイトが取り込まれたのを見て我を失い
ファントムモードを使って闇の書に攻撃し、そしてその後自分も……

「つまりここは……」

「そう、ここは闇の書の中……そして、お前が真の目的を思い出すた
めの居場所……」

後方で突然声が響いてベルクトは振り向く。

すると、やや離れた位置から1人の男が地面から這い出るように現
れた。

その姿を見て、ベルクトは動揺する。

「お前は……」

「そう……お前だよ……」

かつての自分自身が被っていた……顔を隠すための大きなメットを被
った

自分自身……もう1人のベルクトがそこに立っていた。

*

薄暗い闇の中、はやては車椅子に座って、目の前に居る銀髪の女性

・闇の書と対峙していた。

「私は…何を望んでたんやっけ…」

「夢を見る事…悲しい現実は全て夢となる…健康な体と…愛する者達と

ずっと続いていく暮らし…」

闇の書は、はやてに対して優しく語り掛ける。

「眠ってください…そうすれば、夢の中であなたはずっと…そんな世界にいられます…」

しかしはやては首を横に振ってそれに否定の意を示す。

そして拳を固く握り締め、闇の書を真っ直ぐ見据えて真剣な表情で言った。

「せやけど…それはただの夢や！」

*

・バレル達の地球、バルドナ・ドライブ近辺の海上
闇の書となのは、バレル達の激闘が続いていた。

「くっ!!」

高速で突撃してきた闇の書の拳を、なのははシールドを展開して防御する。

だが闇の書の拳はそれをいとも容易く破壊した。

直後、闇の書はもう片方の拳を振り下ろし、なのはを吹っ飛ばす。

「あああああ!!」

「なのは!!」

悲鳴を上げつつなのはは落下していく。それをユーノが海面に叩きつけられる前に受け止める。

「おらあああああ!!」

直後、バレルが実体剣を構えそれを振り下ろす。

闇の書はさして慌てる様子もなく、右手で防御壁を展開してそれを防ぐ。

実体剣と防御壁がぶつかり合い、大量の火花が散る。

「行け!!」

背後から声が響き、闇の書は防御を続けたまま後ろを向く。すると、自分向かって2本の魔力刃が一直線に飛んできた。

「……………朽ちよ…………」

闇の書が一言呟くと、その2本の魔力刃は消滅する。

「ハアアアア!!」

だが更にその後、レーザーエッジを構えたフェイが闇の書に突っ込んできた。

闇の書はもう片方の手を掲げ、それを防御する。

2人の攻撃を防御しながら、闇の書は一言呟く。

「撃て……」

闇の書の両手の平に黒い光が収束していく。それを見たバレルとフエイは

直感的にヤバイ感じがして、攻撃を止めて後方に下がる。

直後、闇の書の両手から黒い閃光が放たれた。

閃光を回避した後、バレルがフェイトに尋ねる。
「フエイ、大丈夫か！」

「当たり前でしょ…こんなところで弱音は吐いてられないもの…それに…」

そこまで言ってフェイは、バルドナ・ドライブの方に顔を向けながら続ける。

「このままじゃ…私達の世界まで危ないんだもの…」

「ああ…その通りだ…!!」

バレルもその言葉に頷いて答え、そして2人は闇の書の方へと向かっていく。

なのは、バレル、ユーノ、フェイ、アルフの5人が闇の書と対峙する。

「お前達も…もう眠るといい……」

「いつかはそうさせてもらうさ…だがな…」

闇の書の言葉に固い表情でバレルが答える。

「その前に、返してもらうぞ…はやてと…フェイトと…そしてベルクトを!!」

そう言っただけバレルは実体剣を構える。そして今度はなのはが前に出ながら言った。

「そして闇の書さん…あなたも…助ける…!!」

なのはもまたレイジングハートを構える。

そして、バレルが後ろに居るフェイ達を見やりながら言った。

「フェイ、あいつに生半可な攻撃は通じない…だから、俺となのはで一気に決める。」

君は下がっててくれ。」

「バレル……」

心配そうな顔をしてフェイはバレルを見つめる。

だが、そんな彼女に対してバレルは得意気に微笑みながら言った。

「大丈夫だ…絶対に、アイツを止めて見せるさ!!」

そう言っバレルは闇の書の方に向き直る。

なのはも、ユーノとアルフの方を向きながら言った。

「ユーノ君…アルフさん…ごめん…少し下がってってくれるかな…」

「でも…なのは…」

なのははに対して心配そうにアルフは言う。

そんな彼女に対して真剣な口調でユーノが言う。

「行こう…アルフ…」

「でもさあ!」

「そうよ!いくらなんでも、2人だけに任せるなんて…」

途中からフェイも一緒になってユーノに食い下がる。

だがユーノは真剣な表情を向けて2人に言った。

「気がかりがあると、2人が思い切り戦えない…」

それに悔しいけど…僕達の魔法じゃあ…闇の書を倒すだけの力は…」

「……………」

ユーノのその言葉を聞いて、フェイとアルフは悔しげに顔を俯かせ
るも

黙って頷き、それに了承の意を示す。そして3人はその場から離れ
ていった。

3人が離れていったのを確認した後、バレルは真剣な表情を浮かべ、強い口調で言った。

「じゃあ…行くぞ、なのは!!」

「はい!!」

なのはもそれに対して力強く答える。

「ブースター現出…プラズマコーティング起動…」

バレルは背中にブースターを出現させ、それに魔力を注ぎ込んでいき、実体剣を構える。

「レイジングハート、エクセリオンモード!!ドライブ!!」

そしてなのはも、レイジングハートをエクセリオンモードに変形させ、それを構えた。

*

- 闇の中で2人のベルクトが対峙する。

「真の目的…それはどういう意味だ?」

「どういう意味…?それはお前がわかっているはずではないか?」

目の前に居るメットは被ったもう1人のベルクトに、ベルクトが尋

ねる。

もう1人のベルクトは冷たい口調でそれに返答する。

「お前は…何故に今の自分を認められる…？」

「何だと…」

「私は…お前はバルドナ・ドライブの鍵として生まれ…その真実を否定するために…」

全てを壊すために生まれてきた筈…だが今のお前は何だ…己の否定すべき者達や…

何の恐れも嘆きも知らない…あんな生ぬるい連中とぬくぬくと暮らす…

それが私の…お前の目的なんかではないだろう…」

両腕を広げて、大げさな手振りでもう1人のベルクトは語っていく。そんなもう1人に対し、舌打ちをして苦々しい表情を向けながらベルクトは言う。

「愚問だな…俺は変わったんだ…俺はバレルではない…俺はベルクトという1人の人間…」

そして仲間の為に戦うと誓ったんだ…」

「無理しなくていい…私は…お前はそんな生ぬるい人間ではないはずだ…」

貴様の敵は世界の全てだ…破壊者のお前の居場所など何処にも無い…大切な人間も…血の繋がった家族も…今のお前には…」

「黙れッッッ！！！」

聞くだけでも苦痛なもう1人の言葉に耐え切れず、否定するかのようにベルクトは怒鳴る。

「俺は…俺はもう昔の俺じゃない…俺はベルクトという1人の人間だ…」

その為に俺は…あいつを…フェイトを助ける為に…！！」

「……………例えばお前がそう言っても、真実はお前から離れはしない…お前はバレル・バルドナ…それは変わらない事実だ…それに…………」

そこまで言ってもう1人は右手を上空に掲げる。

「あの少女の隣に…お前の居場所など…無いんだよ……」

突如、辺りの場面がガラリと変わる。

「何だ……？」

ベルクトは、突然変わった周りの風景を再び見渡す。

「……！！……あれは……」

そしてとある人物達を見つけて、目を見開く。そこに居たのは……
「フェイト……ト……それにあれは……プレシア・テストロッサ……？」

優しい微笑みを浮かべるプレシアやその他の人間と、食事をしているフェイトの姿だった。

（何故だ…プレシアはフェイトの事を……それにあれは……アリシア・テストロッサ……？）

何だ…何だこの震えは…何がどうなっている……（

目の前の光景が理解できず、ベルクトは両手で頭を抱え込んで震えだす。

ありえない…

ありえない…

だって、あの時プレシア・テストロッサは確かに消えた筈だ…
そしてフェイトは…自分の本当の道を歩み始めたはずなのだ…

プレシアはフェイトの事を娘扱いなどしていなかった筈…
なのに…なのにこれは一体……………

そんな事を考えていると、再びもう1人のベルクトが現れる。

「そう…これがフェイト・テストロッサの真に望んでいたこと…
家族との温かい暮らし…そして彼女は…ここに来てそれを思い出し…
それを手に入れたんだ……………」

辺りが再び真つ暗闇に戻る。もう1人の言葉を聞いて、ベルクトは
震えた声を上げる。

「違う…！そんな筈は………… フェイトが…フェイトは俺を…俺は…フ
エ…フェイトを……………」

「まだわからんのか…思い出してみろ…時の庭園で、彼女は最初何
を望んでいた…？」

（フェイトが………… 最初に望んでいたこと…………）

ベルクトは思い返す、半年前での時の庭園でのやり取りを。

「もし、あなたが再び望むなら…私はあなたの力になる…………」

私があなたの娘だからじゃない…あなたが…私の母さんだから！

（プレシアに…自分を受け入れてもらうこと…）

頭を抱えながら、ベルクトは視界がぼやけてくる。

どういうわけなのか涙さえ溢れてくる。

「わかつたろう…彼女は本当は…プレシアに受け入れてもらう事を望んでいたんだ…」

そして、ここに来た事でそれを手に入れた…つまり…」

そこまで言ってもう1人はメットを取る。その下に浮かんでいたのは不気味な笑みを浮かべたベルクトの顔。

「お前はもう…彼女の隣に居る必要など無いんだよ…」

「!!!!!!!!!!」

それを聞いた瞬間ベルクトは目を見開き、両膝について倒れこむ。

そんな彼の足下に黒い魔法陣が展開していた。

「さあ…何も怖がることはない…お前が望めば…この世界は闇の書によって破壊される…」

フェイトも…家族と一緒に過ごせる…全てが上手くいくんだ…」

もう1人が笑みを浮かべたままネットリとした口調で言い、ベルクトに近寄っていく。

「さあ…私を受け入れるんだ…」

・雨が降りしきる草原、その中央に立つ大木に腰掛けてフェイトとアリシアが話し合っていた。

「ねえ…アリシア…これは夢なんだよね…」

「……………」

寂しげな声でフェイトは尋ねる。アリシアは黙ったまま答えない。

「私とあなたは同じ世界にはいない…あなたが生きてたら私は生まれていない…」

「……………そう……………だね……………」

アリシアもまた、寂しげな声でフェイトに答える。

「母さんも…私にはあんなに優しくは…」

「優しい人だったんだよ…優しくったから壊れたんだ……………」

そこまで言ってアリシアはフェイトの方を向いて、優しい表情で言った。

「ねえフェイト…夢でもいいじゃない？ここに居よう…ずっと一緒に……………」

私、ここでなら生きていられる…フェイトのお姉さんでいられる……………」

母さんとリニスとアルフと…皆と一緒にいられるんだよ！

フェイトが欲しかった幸せ……………みんなあげるよ……………」

アリシアの言葉を聞いて、俯いたままフェイトは考える。

ここは闇の書が作り出した夢の世界、おぼろげでもそれはわかる。
だが、今日の前にあるこれは…自分が望んでも、決して手に入らな
かった物…
温かい家族…優しい母親との…大切な暮らし…
かつての自分が望んでいた…何度も夢に見た…欲しかった時間その
物なのだ…

（私は……………）

アリシアが言っていたように、例え夢でも、自分が欲しかった物が
ここにはある…
でも…それが本当に自分が望んだ道なんだろうか…
自分は一体…どうすればよいのだろうか…

フェイトがそんな事を考えていると

（俺は……………）

「……………今の……………!!」

フェイトは反射的に目を見開いて立ち上がる。
脳内に直接響いた今の声、間違えなく彼の者だ、自分の最も大切な…
そしてフェイトは思い出す。

（違う…私が欲しい幸せはこんなものじゃない……
だったら…だったら何で…ここにベルクトがいないんだ……）

目の前にある幸せは所詮夢でしかない……自分は…ベルクトの側に
いるのを望んだはず…
いや…ベルクトだけじゃない…なのはも、ユーノも、クロノも、バ
レルも、フェイも…
自分の大切な仲間が誰一人いないこんな世界など……
ここにある全ては…闇の書が作り出した…ただの……

「フェイト………」

そんなフェイトを寂しげに見上げながら、アリシアは呟いた。

第24話

バレルとなのはがそれぞれの武器を構える。

「アクセルチャージャー起動…ストライクフレイム!!」

なのはの足下に魔法陣が展開し、レイジングハートに6枚の翼が生える。

「チャージ完了…行くぞ、イクスブラウム……」

それを見た後バレルがそう呟き、そして実体剣を構えて闇の書に突っ込んでいった。

なのはも、レイジングハートを闇の書に向けて叫ぶ。

「エクセリオンバスターACS!ドライブ!!」

なのはもレイジングハートを構えながら闇の書に突撃する。

それを見た闇の書は両腕を出して防御壁を展開し、それを防ぐ。

防御壁を攻撃しながら、なのはとバレルは必死の表情で叫ぶ。

「届いて!!」

「貫徹ええええ!!」

バレルはブースターに更に魔力を大量に流し、なのはも大量のカートリッジロードを行なう。

すると実体剣とレイジングハートが徐々に防御壁に食い込んでいった。

「!!まさか……!!」

珍しく闇の書が動揺を見せる、それを見たなのはとバレルは更に力を込める。

そして実体剣とレイジングハートは防御壁を貫き、爆発を起こした。

「ハア…ハア…ハア…」

右手で左肩を押さえながら、苦しげになのはは息を荒げる。

側にいるバレルも、実体剣を下におろしながら荒く呼吸をしていた。
（ゼロ距離からのブーストスラッシュとエクセリオンバスターの直撃…

これでダメなら…本当に…）

バレルが心内でそう呟いていると

「……………墓場に眠りし怨恨の力よ…光となりて…敵を撃て……………」

上空の爆煙から声が響き、2人はそちらに顔を向ける。

「グレイブキャノン…マキシマムシユート……………」

そして爆煙の中から闇の書は2条の紫の閃光を2人に向かって放つ。

「……………」

あまりに予想外の事態に2人は対応しきれず、閃光をまともに食らって落下していく。

「なのは……」

「バレル……」

離れた位置で戦いを見守っていたユーノがなのはを、フェイがバレルを受け止める。

「なのは…しっかり…」

「……ははは……もう少し…頑張らないとだね…」

ユーノに抱えられながら、擦れた声でなのはは言った。

「なんなんだいアイツは…あれだけの攻撃を喰らったのに…」
アルフが拳を握り締め、悔しげな声で言う。

「万事………休すか………」

フェイに受け止めてもらった後側に降り立って、バレルが苦しげな声でそう呟いた。

*

フェイトはアリシアと真っ直ぐ向き合って呟く。

「ごめんね…アリシア…だけど、私は行かなくちゃ………」

アリシアはそれを聞いて黙って手を差し出す、その掌の上には待機状態のバルディッシュが乗せられていた。

それを見たフェイトは涙を流しながらそれを受け取る。

そしてアリシアはフェイトに優しく抱きつく。

「ありがとう…ごめんね…アリシア…」

「いいよ……私は、フェイトのお姉さんだもの………」

行ってあげて…フェイトにとって…一番大切な人の所に……

あの人もまた……きっと苦しんでると思うから………」

「うん……」

アリシアは少し顔を離し、再びフェイトに優しい表情で言った。

「じゃあ……いつてらっしゃい……フェイト……」

「うん……」

涙を流し続け、震える声でフェイトは答える。

そして、アリシアの姿は光となって消え去っていた。

（現実でも……こんな風にいたかったな……）

*

はやては闇の書に対して訴え続けていた。

「私……こんな望んでない……あなたも同じはずや……違うか？」

「私の感情は、騎士達と深くリンクしています……だから、私もあなたを愛しく思います……」

そう言つて闇の書は右手を胸の前に持つてきて俯く。

「だからこそ……あなたを殺してしまう自分自身が許せない……」

あなたを侵食する事も……暴走してあなたを喰らい尽くしてしまう事も……止められない……」

ひしひしと語る闇の書に対して、はやては少し寂しげな表情を浮かべ、そして口を開く。

「……望むように生きられへん悲しさ……私にも少しはわかる……ずっと寂しい思いしてきた……」

そこまで言つてはやては立ち上がり、闇の書の頬に手を当てる。

その行動に闇の書は驚き、目を見開く。

「せやけど、忘れたらあかん！あなたのマスターは今は私や！マスターの言う事は、ちゃんと聞かなあかん！」

はやてがそう呟くのと同時に、白い魔法陣が展開した。

*

「俺は……………」

跪いたまま頭を抱え、震える声でベルクトは呟く。

「そうだ…それでいい…お前の目的を思い出せ……………」

もう1人がベルクトの前に腰を下ろし、その手でベルクトに触れようとする。

ザシュッ！！

だがその手がベルクトに触れる前に、もう1人は大きく吹き飛ばされる。

「……………」

ベルクトは驚いて顔を上げる。そこにはバルディッシュを構えたフェイトが立っていた。

フェイトは更にバルディッシュを前に構え、光を収束させる。

「プラズマスマッシャー!!」

そしてそこから放たれた閃光がもう1人のベルクトを飲み込む、

「やれやれ……………あと少し……………だったの……………」

もう1人は擦れた声でそう呟きながらその姿を完全に消滅させた。

「フェ……………イト……………?」

涙でぐじゃぐじゃな顔で、ベルクトはフェイトの背中を見つめる。

フェイトは黙って後ろに振り向き、ベルクトをきつく抱きしめる。

「大丈夫……………私は大丈夫だから……………ずっと側に居る……………ベルクトと一緒にいるから……………」

「……………だが、お前は家族と一緒に……………」

「違うよベルクト……………あれはただの夢だよ……………私は現実を生きたい……………」

ベルクトやなのは達と一緒に……………現実の世界を生きたい……………」

「だが……………だが俺は……………」

フェイトは抱きしめている力を少し緩め、優しい表情でベルクトを

見つめる。

「関係ないよ……ベルクトはベルクトだよ……他の誰でもない……昔は大変な事をしたかもしれないけど……それを咎める人は……ここにはいないよ……」

「フェイト……」

「私だけじゃない……なのはもうノモアルフもクロノもリンディ提督もエイミイも……」

それにバレルやフェイだって……他の大勢の人だって……ベルクトの事を仲間だっと思ってくれてる……

ベルクトの居場所が無いわけ……ないじゃない……」

「……」

「私は……私はベルクトや……他の皆を助きたい……それが……私の道だから……」

目を見開いてベルクトは大量の涙を流し続ける。

ああ、自分は何てバカな事を考えたのだろう……

この世界に来てから、他人を助ける為に生きてみたい

そう考えて自分は変わった筈なのだ、ただの復讐者だった

自分とは別れを告げたはずなのだ……

なのに自分は……また勝手に決め付けて道を踏み外しそうになった。自分を認めてくれてるのは何も、フェイトだけでは無かった筈だ。それなのに自分は……フェイトの隣に居場所がないなどと……それだ

けで……

涙を流しながらベルクトはフェイトを抱き返し、震える声で言った。
「フェイトッ……ありがとう……本当にありがとう……」

突然のベルクトの行動にフェイトは顔を赤らめつつも、優しい表情で答える。

「……いいんだよ……私は……」

フェイトはベルクトを抱き続ける。

ベルクトもフェイトを抱きながら、幼子のように泣き続けるのであった。

*

白い魔法陣が展開する闇の中、はやては闇の書の頬を優しく撫でながら言っていた。

「名前をあげる……闇の書とか……呪いの魔導書とか言わせへん……私が呼ばせへん……」

私は管理者や……私にはそれが出来る……」

「無理です……！自動防御プログラムが止まりません……管理局の魔導師が戦っています……それも……」

涙を流しながら必死に闇の書は訴える。だがはやては気にせず目を閉じる。

「止まって……」

はやてが呟く。すると魔法陣の輝きが強まった。

*

なのは達と戦っていた闇の書の動きが突然鈍くなった。

「どういう事だ……？」

それを見ていたバレルが疑問に思い呟く。

「これは……俺達の地球？」

「信じられないわ……」

「まさか……これがその……バルドナ・ドライブ……」

丁度その時、タツクとマリナ、クロノが黒い渦を通って現場に到着した。

「タツクさん！マリナさん！」

「クロノ……！」

バレルとユーノが嬉しそうに振り向いて名前を呼ぶ。

3人はバレル達の方へと近づいてゆき、

そしてタツクがバレルに尋ねた。

「状況は…はやてはどうなっている……」

「はい、それが……」

そう言つて闇の書の方に顔を向ける。

だがその時

（外の方！えと…管理局の方！そこにいる子の保護者、八神はやてです！）

はやての念話が辺りに響いた。

「はやて！？無事なのか！！」

（！！……その声、タツクか！？ホンマに！？）

タツクが驚いたように声を出し、はやてもそれに対して驚く。

「ああ……いろいろ込み入った事情はあるんだが…今はマリナやお前の友達と一緒に戦っている……」

どこか申し訳なさそうな声でタツクははやてに答える。

（ごめんタツク…何とかその子を止めたげてくれる？

魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど…

その子が走つてると管理者権限が使えへん……

今そっちに出ているのは、自動行動の防御プログラムだけやから！）

はやてのその言葉を、周りの者達は困惑しながら聞いていた。

「闇の書完成後に、管理者が目覚めている……」

つまり、目の前の防御プログラムを莫大な魔力ダメージで破壊すれば…

はやてちゃんもフェイトもベルクトも外に出られる…だけど…」
そう呟きつつ、固い表情でユーノは周りを見渡す。

なのはとバレルは先程の攻撃で多大なダメージを受けた上に
強力な魔法を使った所為で魔力も殆ど残っていない。

自分やアルフ、フェイやクロノには、闇の書を破壊するだけの強力
な魔法が無い。

側に居るタツクとマリナも、クロノのおかげで少しは回復したとは
いえ

ガーディアンを放つだけの余力は残されていない。

「……………広がれ……………」

と、その時何者かの声が響いたかと思うと、その場にいた者達全て
がバインドで拘束される。

そして黒い渦の中から、バルクホルツが姿を現した。

「なっ……………！バカな……………あの状態でどうやって……………」

クロノが信じられないという風に声を上げる。

するとバルクホルツは右手の手袋を外し、その裏に仕込んでおいた
カードを見せる。

「……………もしものの時の為の非常用というやつです…ツメが甘かったで
すね……………」

そう言ってバルクホルツは闇の書の方へと近づいていった。

（一枚のカードしか使っていないから長くは持たない…それまでに…）

バルクホルツは闇の書と真っ直ぐ向き合い、真剣な表情で語る。

「はやてちゃん…聞こえてますか…？」

（その声…ディールおじさんか？）

「そうです…この騒ぎの元凶…あなたをこんな目に会わせた張本人ですよ…」

困惑した声で言うはやてに対し、バルクホルツは目を閉じながら静かに答える。

「はやてちゃん…私があなたにした事…どんなに謝っても…償いきれないことです…」

（…覚醒の時に…そういう事はなんとなくわかったんよ…でも、もうええんよ…）

私はこうやって生きている…シグナム達にした事は流石にあれやけど…

それも、管理者になった今なら何とかなる…ディールおじさんやって…

たくさんの人を助けたいからって…そういう思いでやってきたんやろ？）

「……………」

沈黙しながらバルクホルツは後悔する…
自分は人のためだなんて思っていなかった…
すべて自分の存在を示すというエゴの為にやってきたのだ…
それなのにこの少女は、自分が他人の為に動いていたと信じ
それを仕方のない事だと言っている。

（こんな純粋な子を……私は……）

右腕で目をさすり、そしてバルクホルツは続けて語る。

「はやてちゃん……防御プログラムさえ破壊できれば……後はあなたが望むままに出来る……」

わたしがあなたから奪った……愛しい守護騎士達も蘇らせる事が出来る……だから……」

そう言つてバルクホルツは両腕を下ろして身構える。

「せめてもの償いです……私にその手伝いをさせてください……」

バルクホルツの上空に魔法陣が現れる、だが何時もと魔力の感じが違う。

その正体に気づいたタツクが叫ぶ。

「バルクホルツさん……！アンタまさか……！！」

「タツク君……私は……君の言うとおり……大馬鹿者でしたよ……」

タツクの方に顔を向けて、微笑みながらバルクホルツは呟く。

「……はやてちゃんを……頼みます……」

そして上空の魔法陣から降り注いだ光を受け取り、バルクホルツは咆哮する。

「ぐおおおおおお……！！！！」

その咆哮と同時にバルクホルツの目の前に巨大な魔法陣が現れそこから放たれた巨大な黄緑の閃光が闇の書を飲み込んでいった。

*

（デイルおじさん……）

外で何が起きているかは完全にはやては認知できない。

だがデイルもまた、自分の為に残つてくれているのは何となくわかった。

そう考えつつはやては闇の書を通つ直ぐ見据え、そして呟く。

「夜天の主の名において…汝に新たな名を贈る…

強く支える者…幸運の追い風…祝福のエアール…」

そこまで言つてはやては微笑を浮かべ、新たな名前を闇の書に授ける。

「リインフォース…」

同時に、足下の魔法陣が強く輝き始めた。

*

闇の書の空間内のプレシアの屋敷の広間、そこにベルクトとフェイトが並んで立っていた。

「フェイト……ここから脱出するぞ……いけるな？」

「もちろんだよ……」

ベルクトがフェイトの方を向いて尋ね、フェイトは微笑みながらそれに答える。

それを見てベルクトも微笑を浮かべる。

そしてベルクトはバリアジャケットを纏い、足下に魔法陣を展開して長身砲の上に構えて魔力を集中していく。

フェイトも同様にバリアジャケットを纏って魔法陣を展開。

バルディッシュをザンバーフォームに変形させ、巨大な魔力刃を形成する。

「グレイブキャノン！！マキシマム！！」

「スプライトザンバー！！」

ベルクトは長身砲から巨大な紫の閃光を放ち、フェイトが剣を振り下ろす。

すると周囲の世界がひび割れて、消滅していった。

「ごはぁー!!……」

ガーディアンが増幅射撃を行なった後、バルクホルツは激しく血を吐いて落下していく。

それと同時に、周りの者達を拘束していたバインドが解除される。

「バルクホルツ!!」

それを見たマリナが叫ぶ。そして落下していったバルクホルツをクロノが魔法で作りあげた光る床で受け止めた。

「バルクホルツさん……アンタって人は……」

その様子を見ていたタツクが目を閉じて顔をそらしながら呟く。

「……丁度、アースラとの連絡も取れた……このままじゃ危険だ……

申し訳ないけど彼を一度搬送する……僕が戻ってくるまで……少し待っていてくれ……」

クロノのその言葉に周りの者たちが頷いて答える。

とその時、激しい衝撃音と共に海に黒い球体が、その上空に白い球体が現れる。

そして更にその上空にフェイトとベルクトの姿が現れた。

「フェイト……！ベルクト……！」

2人の姿を確認して、アルフが嬉しそうに名前を呼ぶ。

それを聞いて2人も、アルフに向けて優しい表情を向けた。

優しい光の中で、はやては浮かんでいた。

「…新名称、リインフォース認識…管理者権限の使用が可能になります…」

「うん……」

「ですが…防御プログラムの暴走は止まりません…

管理から切り離された膨大な力が…直に暴れだします…」

「うん…まあ、何とかしよ。」

はやての前に一冊の魔導書が現れる。

「行こか…リインフォース…」

「はい…我が主…」

はやては魔導書を抱き抱え、微笑を浮かべた。

第24話（後書き）

ふう…久しぶりに調子が出ました…

闇の書内でのフェイトとベルクトとのやり取り。

ベルクトが今更こんな風に取り込まれそうになるのも

どうかとは思ったのですが

無印編ラストのフェイトのセリフ

「ベルクトの助けになりたい」というのを強調したくて

こんな流れになりました。はい…

そんな中、美味しい役所をかつさうバルクホルツ。

心変わりが唐突すぎる！とか思われるかもしれませんが

アンジェみたいにまた過去話↓退場じゃ

前と同じ流れになってしまっているのでこうなりました

（元々、最初のプロットの時点で、最終的に

バルクホルツがはやてを助ける予定はありましたしね…）

次回、暴走する闇の書防御プログラムとの戦いとなります。

（守護騎士達を書くのも久しぶりになるな…）

ご意見、感想、指摘アンケートの回答等、まだまだお待ちしております。

第25話（前書き）

闇の書の防衛プログラムとの戦い。
長きに渡った闇の書事件に遂に終止符が打たれる

今回は後書きは無しです。

第25話

「……にわかには信じ難い話だけど、やっぱりそういう事になるのかしらね……」

「はい……僕もそう思うんですが……やはりここは、バレル達の世界としか……」

戦艦アースラブリッジにて、負傷したバルクホルツを送り届けたクロノと

リンディが険しい表情を浮かべながらそんな会話をしていた。

バレルから聞かされていたバルドナ・ドライブなる物の存在……

メインモニターに映る、どう考えても地球としか思えない青い惑星……

第97管理外世界と全く異なる次元座標……

これらの事を総合すれば、今自分達がいるこの世界は

バレル達のいた世界、という結論以外浮かびようがなかった。

そんな2人の会話にエイミィが割ってはいいる。

「でも……何でそんな突然……闇の書とバレル君達の世界に接点なんて

…」

それを聞いて、クロノがエイミィの方に顔を向けて、真剣な口調で話す。

「これもまた憶測でしかないんだが…以前バレルから聞いた話によれば

彼とベルクトは、バルドナ・ドライブの起動キーの権限を持つ

同一の人間として、別々の世界に生まれ落ちたという話だ。つまり

…」

「ベルクト君のリンカーコアが闇の書に吸収された際に…何らかの形で

バルドナ・ドライブの力が、闇の書に宿ってしまった…という事がしら…」

クロノの説明に途中からリンディも加わる。クロノはそれに対して頷いて答える。

すると、エイミィはある重大な事を思い出して、慌てて立ち上がった。落ちて着かない口調で言う。

「じゃ、じゃあそれが本当ならマズいんじゃないですか!？」

つまり、目の前にある黒い渦からなのはちゃん達の地球が…」

メインモニターに映る地球と、なのは達の地球とつながっていると思われる

巨大な黒い渦を指差しながらそんな事を言った。

バルドナ・ドライブの本来の用途についての話はエイミィも聞いていた。

完全稼働に至ると、互いの地球がぶつかり合い、世界が滅亡する…つまり、闇の書が発動させたのがバルドナ・ドライブのソレと同一だというなら

第97管理外世界の、つまりなのは達の地球とバレル達の地球が衝突する可能性があるのだ。

だが、クロノはそれに対して冷静な口調で答える。

「その心配は無い。あの黒い渦を観測してはみたが、惑星規模の物体を運べる程の

次元的な繋がりは持っていないのが確認されている。互いの地球がぶつかり合う

なんていう大惨事は発生しないよ。」

「そ、そうなの…」

その言葉にホツとして、エイミィは安心したようにもう一度席に座る。

「それにあの黒い渦…バレル達の聞いていた物とは大分違っている。

」

「どういう事？」

再び険しい表情で語り始めたクロノに対して、首をかしげながらエイミィは尋ねる。

「バレル達から聞いたバルドナ・ドライブによる別世界との接続と
いうのは

巨大な通路的な物、ワームホールによる繋がりだという事だったんだが…」

エイミィの方を向きながらそこまで言っつて、モニターの方に向き直りながらクロノは続けた。

「あれは、今見える黒い渦はどちらかというと…」

優しい光の中、はやては目の前の魔導書・リインフォースと共に居た。

「管理者権限発動……」

「防衛プログラムの進行に割り込みをかけました……数分程度ですが、暴走開始の遅延が出来ます。」

「うん……それだけあつたら十分や……」

リインフォースの言葉に答えながら、はやては続ける。

「守護騎士システム破損修復……さあ、おいで……私の騎士達……」

はやてがそう呟くと同時に、彼女の周りに4つの光が浮かび上がる。

それと同時になのは達の目の前の白い球体の輝きがいつそう強くなり、白い魔法陣が展開する。

そして、それを取り囲むようにして、守護騎士達が現れた。

「シグナム……!!」

「ヴィータ……!!」

守護騎士達の姿を確認して、タックとマリナが嬉しそうに名を呼んだ。

シグナムは語る。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士……」

シヤマルは語る。

「主在る限り……我らの魂、尽きること無し……」

ザフィーラは語る。

「この身に命在る限り……我らは御身の下に在り……」

ヴィータは語る。

「我らが主……夜天の王……八神はやての名の下に……！」

「リインフォース……私の杖と甲冑を……」

「はい……」

はやては黒い甲冑を身に纏い、目の前に現れた杖を握る。

それと同時に白い球体が弾け飛び、中からはやての姿が現れる。

はやては更に杖を高く掲げ、そして言った。

「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風、リインフォース、セーツトアップ……！」

その言葉と同時に甲冑が形を変え、背中に6枚の黒い翼を生やし、髪の色が銀に変わった。

「はやて…」

「すみません…」

「あの…はやてちゃん…私達…」

守護騎士の4人は申し訳なさそうな表情を浮かべてそんな事を呟いていく。

だが、はやては優しい表情で守護騎士達を見やりながら言った。

「ええよ…みんなわかってる、リインフォースが教えてくれた…そやけど、細かい事は後や、今は…」

そこまで言って目を閉じ、はやては微笑む。

「おかえり、みんな…」

「う……うわあああああん……！」

その言葉を聞いてヴィータは泣きながらはやてに抱きつく。

「はやて！はやてっ！！はやてええええ！！………」

はやてはヴィータを抱き返し、優しく頭を撫でてやる。

するとその時、タツクとマリナがはやての下に飛んでくる。

2人もまた、守護騎士達と同じように申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「はやて…」

「ごめんなさい…私達、ずっとあなたに黙って…」

「ええよ…タツクとマリナも、私を助ける為に仕方なくやったんやろ…？」

私は…みんなが無事ならそれで十分や…」

そう言つてはやては2人に向かつて微笑む。

「はやて……!!」

「……良かった…本当に良かった…あなたが無事で……」

その言葉を聞いてタツクも笑みを浮かべ、マリナは涙を流す。
そして2人は守護騎士達の方に顔を向ける。

「シグナム…あなた達も無事で、本当に良かったわ……」

「ああ……お前も無事で何よりだ……これも皆、主はやてのおかげだ……」

マリナとシグナムが互いに笑みを浮かべながらそう言い合う。

「ヴィータ……お前もまた、無事で本当に……」

「タツク………タツクウウウウ!!」

「おわっ!?!………ちょ、ヴィータ………」

タツクの言葉を聞いて、ヴィータは今度はタツクに抱きつく。
タツクはいきなり抱きつかれて、困惑したように声をあげる。

そんな2人を他の者達は微笑ましげに見ていた。

そんな中で、今度はなのは達がはやて達の下にやつてくる。

「なのはちゃん達もゴメンな。うちの子達がいろいろ迷惑かけても
うて。」

「うつん……」

「平気……」

はやての言葉に、なのはとフェイトは笑顔で答えた。

「タツクさん、本当に良かったです……」

「ああ…お前達の協力があったからこそだ、バレル……」

「そ、そんな…僕達はただ…」

タツクに礼を言われて、バレルはテレながら右頬をかいた。

「マリナさん…」

「ええ…予想外の事態の連続だったけど…皆とまた会えて、本当に嬉しいわ…」

優しい表情で名を呼ぶフェイに対して、マリナが満足げに答えた。

そんな穏やかな空気が流れる中、固い表情を浮かべたクロノが現れる。

「すまないな、水を差してしまうんだが…時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ…」

時間が無いので簡潔に説明する…」

視線を黒い球体に向けて、クロノは続ける。

「あそこの黒い淀み…闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。」

僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。」

そう言ってクロノは待機状態のデュランダルを取り出す。

「停止のプランは現在二つある。まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。」

二つ、軌道上に待機しているアースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる。」

そしてクロノは周りの者に顔を向けながら尋ねた。

「これ以外に、他にいい手は無いか？」

すると、シャルが拳手をして答える。

「えーと…最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから…」

「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらん…」

途中からシグナムも険しい表情で意見を言った。

次に、フェイが拳手をして答える。

「アルカンシエルの使用も…ちよつと抵抗があります…」

百数十キロ範囲の空間を歪曲させて、反応消滅を起こさせる魔導砲…そんな物使ったりしたら、バルドナ・ドライブやセシリア諸島に被害が及びますし…」

何より、私達の世界の人間に感知でもされたら後々面倒に…」

それを聞いてクロノ以外のなのは側の世界のメンバーと、ベルクトが驚きを浮かべる。

「こ、ここってバレルさん達の世界だったんですか!？」

「あれ…言つてなかったっけ？」

心底驚いたように言うのはに対して、バレルがキョトンとした感じに答える。

「いや、聞いてねえーよ!？そんな重要な事全然!!」

「ああ…その、すまない…」

「いや、ヴィータ…何故お前が怒る必要がある?そしてタツク、何故お前が謝る?」

怒るヴィータに対して、タツクが申し訳無さそうに言い、ザフィーラがそれにツツコンだ。

「……何やら俺達に取り込まれている間に、いろいろな事があったらしいな…」

「そう……みたいだね……」

ベルクトとフェイトが互いの顔を見ながらそうやり取りする。

「クロノ…悪いけど僕も賛成し難い…フェイの言う様に、いろいろリスクがありすぎる…」

「僕も艦長も使いたくないよ…でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそんな事より、遥に大きくなる…」

険しい表情で言うバレルに対して、クロノも同様の表情で答える。

「はい皆！暴走臨界点まで後15分だよ！！」

パネルを慌しく操作しながらエイミィが通信を入れる。

「何かないか？」

「すまない、あまり役に立てそうもない……」

「暴走に立ち会った経験は、我等にも殆どないのだ……」

再び尋ねてきたクロノに対して、シグナムとザフィーラが申し訳無さそうに答えた。

「ああ……！なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ！みんなでズバツとぶつ飛ばしちゃうわけにはいかないの？」

進展しない話し合いを聞いていて、痺れを切らしたアルフがそんな事を言う。

「……アルフ、ズバツとぶつ飛ばすとか、そんな単純な話じゃあな……」
呆れたようにそんな事を言うベルクト。だが、途中で真剣な表情になり、顎に手を当てて俯く。

（ぶつ飛ばす……ここでの使用はリスクの問題で不可能……ならここ以外の何処か……！！）

そこまで考えてベルクトは何かを思いついたように目を見開き、顔を上げてクロノに尋ねる。

「クロノ、アルカンシエルというのは宇宙空間でも使用可能か？」

「えっ？」

全く想定していなかった質問に、クロノは声を上げる。

「管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなあ……撃てますよあ、宇宙だろうがどこだろうが！」

得意げに親指を立てながら、エイミィは通信でそう答える。

「オイ！ちよつと待てベルクト！ま……まさか……！！」

ベルクトの考えている事に察しがつき、クロノが驚いて言った。

ベルクトのプランを説明すると
防衛プログラムの複合式バリアを全て破壊した上で、本体に一斉攻撃を行いコアを露出
露出したコアを転移魔法によりアースラの前に転送、アルカンシエルで蒸発…

「なんともまあ…物凄いというか何と言うか…」

右手で頭を押さえながら、リンディが呆れた感じに言った。

「計算上では実現可能というのがまた恐いですね…クロノ君！

こっちのスタンバイはオーケー、暴走臨界点まであと10分！」

パネルを慌しく操作しながらエイミィが通信を入れる。

「実に個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが…まあ、やってみる価値はある」

真剣な表情でクロノがそう言う。

「うーん…でも、こっちの宇宙はいろいろあるしなあ…」

アルカンシエルの砲撃や、何より今この時でも、アースラの姿を見られたりしたら…」

「あ、その事は心配なさそうなんや。」

腕を組みながらそんな事を言うバレルに対して、はやてが答える。

「どうしてだい？」

「リインフォースが言うてたんやけど、この海域からアースラいう戦艦のいる宙域にかけて

さっき防衛プログラムが周りの人には感知されんようにした超広域の結界を張ったそうなんや、

だから、アースラやアルカンシエルを見られる心配はあらへんらしいよ？」

「ああ…そう…」

大した事ないという風に答えるはやてに対して、拍子抜けというよ

うな表情をバレルは見せる。

「……………おい作者、ちよつと都合主義じゃないかそれって？」
……………ごめんなさい……………それくらいしか案が浮かばなかったんです
です……………

そんなやり取りの後、クロノが皆を見ながら真剣な表情で語る。

「闇の書は呪われた魔導書…それに関わった多くの人の人生を狂わ
せてきた…

僕も母さんも…八神はやて、君も…他の多くの被害者遺族も…グレ
アム提督もリーゼ達も…

ある意味では彼…デイル・クルーシブルも…守護騎士やタツク、
マリナ…君達もだ…」

クロノの話を周りの者は同じように真剣な表情で聞いている。

「無くしてしまった…過ぎ去った過去の事は変える事は出来ない…」
そしてデュランダルを現出させ、笑みを浮かべて力強く言った。

「だから…今を戦って、未来を切り開こう!!」

高らかに言うクロノに対して、皆が力強く頷いて答えた。

「と、その前に…シャルマ?」

「はい、皆さんの治療ですね。」

はやての言葉に対して、シャルマは笑顔で答え、そしてクラールヴィントを構える。

「クラールヴィント、本領発揮よ。静かなる風よ…癒しの恵みを運んで!」

シャルマの足下に魔法陣が展開し、なのはやフェイト、バレル達を光で包んでいく。

すると皆の傷をたちまち癒していった。

「湖の騎士シャルマと、風のリング、クラールヴィント…癒しと補助が本領です。」

「凄い…あつという間にほとんど万全の状態に…」

「はは、シャルマはこれにかけては超一流だからな。」

驚いた感じでバレルが呟き、タツクが感心したように言った。

「凄いです!」

「ありがとうございます、シャルマさん!」

フェイトとなのはがシャルマに対して礼を言った。

そして、遂に防衛プログラムの暴走の時間がやって来た。
蛇のような生物が黒い球体の周りを暴れ回り、禍々しい黒い柱が立つていく。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム…闇の書の闇…」

固い表情ではやてがそう呟いたと同時に、黒い球体が割れる。

巨大な黒い翼を生やし、鋭いつめを生やした何本もの足、下半身に牙の生えた巨大な口

機械的な合成動物・キメラの様なおぞましいとしか言いようのない怪物が姿を現す。

その怪物の頭部には毒々しい紫の肌をした女性の上半身がついており、不気味な呻きを上げる。

「チエーン・バインド!!」

「ストラグル・バインド!!」

「ステイルワイヤー・デュミニス!!」

アルフ、ユーノ、フェイがそれぞれのバインドを放ち

怪物の周辺で蠢く蛇のような生物を多数の鎖と鋏で捕らえていく。

「縛れ!鋼のくびき!」

ザフィーラが長く白い魔力刃を出現させ、それを振るって蛇を切り裂いていく。

「よし…まずは僕達からだ…」

バレルが真剣な表情で呟く。

「ちゃんと合わせるよ！高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータがなのはの名前を呼び、なのはがそれに答える。

「バレル・オランダ、イクスブラウM、行きます！」

バレルはHフォームの火器を纏い、更に周辺にディスパーションを浮かばせる。

「出し惜しみは無しだ！フルファイヤーキャノン！！」

そして、バレルからいくつもの魔力弾と閃光が放たれ、敵の防壁を破壊する。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーファイゼン！！」

ヴィータはカートリッジロードを行い、グラーファイゼンを巨大なハンマーへと変形させる。

「轟天爆砕！！ギガントシュラアアアク！！」

巨大化したハンマーを思い切り振り下ろし、怪物を攻撃する。

その一撃は敵に凄まじい衝撃を与え、防壁の1つを破壊する。

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン、行きます！」

なのはは魔法陣を展開し、大量のカートリッジロードを行う。

「エクセリオン・バスター！！」

光の翼の生えたレイジングハートから、螺旋を伴った桃色の閃光が放たれ、敵の防壁を打ち砕く。

「剣の騎士、シグナムが魂…炎の魔剣、レヴァンティン…」

そう呟きながらシグナムは剣を高く掲げる。

「刃と連結錠に続く、もう一つの姿…」

剣の柄に鞘をくつつける。すると、レヴァンティンは巨大な弓へと

姿を変えた。

そして、シグナムは魔力で矢を作り出し、それを構える。

「駆けよ、隼——」

放たれた矢は、一直線に敵の防御壁に直撃し爆発、それを破壊する。

「フェイト・テストロツサ、バルディッシュ・ザンバー、行きます！」

フェイトはザンバーフォームのバルディッシュを高く掲げカートリッジロードを行い、魔力刃を更に大きくさせる。

「撃ち抜け、雷神——」

巨大な刃を振り下ろし、防御壁を破壊しながら怪物を切り裂く。

「ベルクト……グレイブアーク……行く……」

ベルクトは長身砲を構え、魔法陣を展開する。

（俺は……俺はもう迷わない……この世界と、大切な仲間を守るために……）

目を閉じて魔力を集中していく

（俺は……戦う——）

長身砲に光が収束していく。

「グレイブキャノン・マキシマム——」

そして長身砲から巨大な紫の閃光が放たれ、防御壁を撃ち抜きながら怪物に直撃した。

「彼方に来たれ、宿り木の枝……銀月の槍となりて撃ち貫け——」
はやてが魔導書を開き、魔法陣を展開して呪文を唱えていく。

「石化の槍、ミストルティン——」

はやてが杖を振り下ろし、いくつもの白い光が怪物に降り注ぎ、怪物を石化させていく。

しかし、それでも怪物は止まる事なく抵抗し、体中から顔やら尻尾やらを出現させる。

「うわっ…」

それを見たアルフが引き気味に声を漏らす。

「真ドラゴンが可愛く思えてくるわね…」

フェイが険しい表情でそう呟いた。

「やっぱり並の攻撃じゃ通じない…ダメージを入れた側から再生されちゃう…!」

「だが、攻撃は通っている…プラン変更はなしだ!!」

エイミイに対してクロノが強い口調で答える。

「行くぞ、デュランダル…」

そしてデュランダルを構え、魔法陣を展開する。

「悠久なる凍土…凍てつく枢の地にて…永遠の眠りを与えよ…」

クロノが呪文を唱える、すると海上が急速な勢いで凍りついていく。

「凍てつけ!!」

そしてそれは怪物をも飲み込み、凍らせた。

しかし、それでも怪物は抵抗し暴れる。

そして怪物の真上に、はやて、タツク、マリナの3人が降り立つ。

「行くで…タツク、マリナ!!」

「ああ!」

「ええ…!」

真剣な表情で名を呼ぶはやてに、タツクとマリナは力強く頷き答える。

タツクとマリナは両腕を下ろし、胸の前に光球を出現させ、魔力を集中していく。

はやても杖を高く掲げて魔力を集中する。

「ごめんな…おやすみな…」

辛い表情で怪物を見下ろしながらはやては呟く。そして

「「ガーディアン…!!」」

「ラグナロク…!!」

3つの巨大な閃光が怪物に向かって降り注ぎ、爆発を起こした。

「本体コア露出…捕まえた…!!」

離れた位置でクラールヴィントを構えたシャマルが、防衛プログラムのコアを捕らえる。

「長距離転送…!!」

「目標軌道上…!!」

すかさずユーノとアルフが転送の準備を行う。

「「転送…!!」」

ユーノ、アルフ、シャマルの3人によって、コアが軌道上に向かって送られる。

「アルカンシエル、バレル展開！」

パネルを操作しながらエイミィが叫ぶ。

アースラの先端に光のリングが展開し、そこに光が収束していく。

「ファイアリングロックシステム、オープン…」

リンディが呟くと、アルカンシエルの起動キーが現れる。

そこにキーを差し込みながらリンディは指令をとばす。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

「了解！」

局員達がそれに答える。そして、軌道上にコアが転送されてきた。それを確認してリンディはキーを回す。

「アルカンシエル…発射！！」

そしてアースラの先端で収束していた光が

巨大な一条の閃光となって放たれ、コアに直撃して爆発を起こした。

爆発の光景を、真剣な表情でリンディは見つめる

「空間内の物体は完全消滅、再生反応…ありません！！」

エイミイの報告を聞いて、表情を崩さぬままリンディが答える。

「…準警戒態勢を維持…もうしばらくは様子を見ましょう…」

「…りよ、了解…」

それを聞いてエイミイは、安心したように椅子にグッタリ座り込んだ。

なのは達の下に、エイミーからの通信が響く。

「というわけで、現場のみんな、お疲れ様でした！全部無事に終了しました！」

それを聞いて、皆は笑顔になりそれぞれ喜びを浮かべた。

長きに渡った闇の書との戦いに、遂に決着がついた瞬間だった。

フェイトがベルクトの方に近づいて言葉をかける

「ベルクト…お疲れ様…」

「ああ…お前も、他のみんなも…今回は本当に…」

穏やかな表情でベルクトはそう言う、しかしその後

フェイトの顔を見ている内に、何やら不思議な感じがしてきた。

（何だ……このもやもやした…感じは…）

目の前には笑顔を浮かべたフェイトが立っている

が、彼女の顔を見ていると、妙に落ち着かないというか胸が熱くなるというか…

そんな感じがしていたのだ。

（これは……俺は、一体……）

自分にとって最も大切な人間であるフェイトに

今まで感じた事のない感情が出てきてベルクトは困惑し

彼にしてみれば極めて珍しく、顔を赤らめフェイトから視線をそらす。

「ベルクト…？」

フェイトもまた、今まで見た事ないベルクトのリアクションに首を傾げ、キョトンとする。

「はやて!!」

「はやてちゃん!!」

が、直後ヴィータとシャルの声が聞こえてくる

皆がそちらに一斉に顔を向けると、はやてが気絶して
シグナムに抱きかかえられているのが見えた。

「はやて! はやてっ!!」

「おい、どうしたんだよはやて!!」

「はやて! しっかりして!!」

周りの者達が必死に呼びかける。しかし、はやてがそれに答える事はなかった…

第26話（前書き）

リインフォースが告げる新たな事実、そして別れ

第26話

・その後、気絶したはやてをアースラに運び込んだ後
皆はアースラと共に、軌道上にあった黒い渦を通過し、なのは側の地球に帰還。

直後に、バルドナ・ドライブ周辺とアースラ周辺を覆っていた
闇の書の防衛プログラムによる結界と、軌道上にあった黒い渦が消滅。

だが、海鳴市上空とバルドナ・ドライブ上空に現れた渦は残ったままだった。

リンディは臨時の策として、両者の地球に局員を数人派遣し、
2つの世界を繋ぐ黒い渦を一般人に感知されないように、結界を張るのであった。

・アースラ、はやてが運び込まれた病室にて
はやてを取り囲むようにしてタツク、マリナ、守護騎士達とリン
フォースが会話をしていた。

「やはり…破損は致命的な部分にまで至っている…
防衛プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ…
私は…遠からず新たな防衛プログラムを再生し、暴走するだろう…」
リンフォースがそう語り、それを聞いて皆が悲痛な面持ちをする。

「…修復は出来ないのか？」

「無理だ…管制プログラムである、私の中からも…本来の姿は消されてしまっている…」

タツクの質問に、首を横に振ってリインフォースは答える。

「主はやては大丈夫なのか…？」

「問題ない…侵食は完全に停止し、リンカーコアも正常作動している。」

不自由な足も時間が経てば元通りになるだろう…」

そこだけが気がかりである、みたいな雰囲気でシグナムは尋ね、リインフォースが再び答える。

「そう、それならまあ…よしとしましょうか…」

「ああ…心残りは無いな…」

シヤマルとシグナムが寂しげな表情でそんな事を呟く。

それを聞いたマリナが表情を歪め、2人に詰め寄った。

「…聞き捨てならないわね、何を考えてるの2人共？」

マリナの言葉に対して、2人は俯いたまま答えない。それが何を意味するかを悟り

マリナは声を荒げて怒鳴る。

「ここまで来といてふざけないで！！シグナム、あの時言ったはずじゃない！」

6人全員が無事なままではやてを救おうって！…なのにあなた達はこんな形で終わりにしようと言うの！？」

怒りの形相を浮かべてマリナはシグナムに掴みかかる。

「ッ……やめろー！」

それを見たヴィータが2人を引き離し、マリナに向かって強い口で訴える。

「あたしらだってわかってんだ！！はやてやお前達とずっと一緒にいたい！」

「だけど…今度は本当にもう…どうにもしようが…」

喋っている内にどんどん声のトーンが下がり、遂には泣き始めて

しまうヴィータ。

「ヴィータ…」

タツクはヴィータの肩に手を置き、彼女を引き寄せる。

「う…うぐっ…あたしだって…もっと…えぐっ…はやてや…タツク達と…」

タツクの体に顔を埋め、ヴィータはすすり泣く。

そんな彼女の様子を見て、他の者たちは俯いたまま黙り込む。

修復のしようが無いと言うなら…夜天の書を破壊するしか方法が無い…

そしてそれは、防御プログラムが無い今しかチャンスが無い…

このまま放っておけば、防御プログラムが再び生まれ

またはやてを取り込み、今度こそ取り返しのつかない事態になってしまうのだ。

（何でだ…最後の最後でこんな…！）

拳を握り締め、タツクは内心でそう呟く。

はやてを救う為に共に戦ってきた大切な仲間である守護騎士達がまさか、こんな最期を迎えることになってしまふとは誰が想像したか。

しかも今までの事態とは違い、今度こそ本当に他の手段を探す時間も方法も、もう無い。

軍人の頃から作戦よりも自分よりも、常に仲間の命を第一に考えて

いたタックとしては

この目の前にある結果は、あまりにも受け入れ難いものだった。

しかし次の瞬間、リインフォースが意外な言葉を発する。

「違う…お前達は残る、逝くのは…私だけだ…」

真剣な表情でそう語るリインフォースを、他の者は驚いたように見つめていた。

一方その頃、アースラブリッジにて

メインモニター映った海鳴市上空に浮かぶ黒い渦を前にしてクロノとバレル、フェイが話し合っていた。

「…目の前に映るあれは、君達の言っていたバルドナ・ドライブによるゲートと

果たしている役割は同じなんだが…根本的な性質が違っている。」

「どういう事だい？」

バレルの質問に、クロノが真剣な表情を崩さぬまま答える。

「君達が言っていたバルドナ・ドライブによるゲートは異なる世界を繋ぐワームホール…」

簡単に言えば巨大で長距離に渡る道路を無理矢理くつつけたような物だ…

だが、今日の前にあるあれは、僕らで言うところの次元転送…

つまりは瞬間移動装置的な役割を担っていると、調査したデータから考えられる。」

「つまり…出発点から目的地までに到達する、過程をぶっ飛ばしていると…？」

バレルの問いにクロノが頷いて答え、更にその後パネルを操作すると、メインモニターの他に、様々な画像とデータの様な物が現れる。

「結界を張ったと同時に、局員に君達の地球側の調査をさせていた。それでわかった事なんだが…バルドナ・ドライブ周辺の時空は安定を保っている…」

君達がこつちに来た時のような、時空の歪みに巻き込まれるような高い数値のエラーは算出されていないんだ…」

「…私達が消えてからの間に、その歪みが修繕された…？」

「ああ…そういう事になる…あまりにも規格外すぎる話の連続で正直な話…僕もちょっとわけがわからない事になってるんだけどね…」

フェイの言葉に対して、クロノは少し肩を竦め、表情を和らげて答える。

「まあ何にせよ…今後も君達とは長い付き合いになりそうだって事だね…」

「はっ…？」

「それはどういう…」

急にそんな事を言ったクロノに対して、バレルとフェイが疑問を漏らす。

クロノは2人に背を向け、更に別のモニターを映しながら答えた。

「観測したデータによれば、あの黒い渦は時空を乱すような危険な代物じゃないとわかった。」

それと同時に、現時点では安定を保ち、それを消滅させるには極めて莫大な…それこそ君達の地球が甚大なダメージを受けるような魔力が必要だとも。

だから管理局は破壊を取りやめ、君達の側の地球の人間と交渉しつつこちら側とあちら側の渦の周辺に、一般人に感知されない様にする専用の施設を建設する事になる…いつまでも局員に結界を張らせてるわけにはいかないからね…」

そこまで言ってクロノは再び2人の方に振り向き、微笑を浮かべながら言った。

「要するに、君達となのは達の世界は今後も繋がりを持つことになる。だから、君達と別れる必要が無くなるって事さ。」

・アースラの食堂にて、なのは達を前にしてユーノも、夜天の魔導書の事を話していた。

「…夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないんだ…だから、防御プログラムが消えている今のうちに自らの破壊を申し出たんだ…」

「そんな…」

「でも、それじゃシグナム達も…！」

ユーノの話した内容に、なのはが俯きながら呟き、フェイトが立ち

上がって悲痛な声を発する。

するとその場に、シグナム、シャマル、狼形態のザフィーラ、マリナが現れる。

「いや、私達は残る。」

「防御プログラム共に、我々守護騎士プログラムも解放したそうだし……」

自分達を見つめるなのは達を見ながら、真剣な表情でシグナムとザフィーラが語る。

「それで……リインフォースから、高町さんとテストロッサさんに、頼みがあるそうよ……」

なのはとフェイトに真剣な眼差しを向けて、マリナがそう言った。

・アースラ内、ベルクトの個室にて

「……………」

自室の椅子に深く腰掛け、ベルクトは腕を組み、真剣な表情で考えていた。

（まさかとは思うが……やはりそうなのか……）

考えていたのは先程フェイトを見た時に感じた事。

胸が熱くなるようなそんな感情のことである。

フェイトは自分にとって掛け替えの無い大切な存在。

それは何度も言ってる様に、ベルクトの中では絶対に変わらない事だ。

だがベルクトは自分で考えている物とは違うフェイトに対する感情が芽生え

そのの正体は何なのか察しも大体ついていたのだ。

（これが…好きになるという事なのか…？）

フェイトに1人の女性として、恋してしまったという事だ。

恐らく切欠は闇の書の中でのやり取り、フェイトが再び自分を受け入れてくれた事。

それが正確かはわからないが、あれが影響してこの感情が生まれたのかもしれない。

（だがな……）

今ベルクトの中に芽生えたフェイトに対する自分の感情は悪くない物だ。

だがやはり、大切である事との違いというのがいまいわからない。それ故に今の自分の気持ちをどう伝えればいいか判断に困る。

というか、フェイトとの愛だの恋だのの話に関しては

今日フェイトを呼び出して、2人でじっくり話し合うつもりだったのたが

（第19話、高町家での食事風景を参照）

生憎こんな大事があった為に、そんな事を持ちかけられる状態では無い。

今現在、ベルクトの頭の中では様々な事が駆け巡っていた。

と、そんな風にベルクトが悩んでいるその時。

「ベルクト、いいか…」

バレルが部屋の中に入ってきた。

「どうしたんだバレル？」

何やら暗い感じのするバレルに対して、ベルクトが疑問を抱いて尋ねる。

「実は…闇の書のことについてなんだが…」

そしてバレルは、自分も聞いたリインフォースの決意をベルクトに語る。

・薄暗い病室、はやての布団をかけ直してやり、ヴィータは語る。

「はやての幸せが、あたし達の一番の幸せ…だから、リインフォースも笑って行くってさ…」

そこまで言って扉の前に立ち、はやての方に寂しげな表情を向けながら続ける。

「夢の中でいいから、褒めてあげてね…あの子の事…」

そう言つてヴィータは部屋を後にする、すると部屋を出てすぐの所にタツクが立っていた。

「タツク…」

「…話さなくてよかったのか…？リインフォースの事…」

「うん…あいつも言つてたから…はやてを悲しませたくないって…」互いに寂しげな表情と声色でタツクとヴィータはやり取りする。

「だが…やはりやりきれないな…あいつ一人に背負わせてしまつて…」

「…あたしだつてわかつてるよ…でも…」

そこまで言つた後、2人は俯き、しばらくの間黙り込んでその場に佇んでいた。

そして翌日、海鳴市のある場所にて、

雪が降りしきる中、眼下の街を見つめながら、リインフォース、タツク、マリナが話していた。

「…本当に良かったの…こんな形で？」

「…お前達に会えたからこそ、私は主はやての言葉を聞く事が出来た…」

だから、もう思い残すことは何も無い…」

マリナの問いに、微笑を浮かべながらリインフォースは答える。

「だがな…はやてに何も言わずに逝くのは、俺には納得できない…」

「お前達にもいずれわかる…海より深く愛し…その幸福を守りたい
と思える者と出会えればな…」

タツクの言葉にリインフォースがそう答える、それを聞いてマリナ
は少し反応を示す。

重なって見えたのだ、かつて自分がタツクを救う為に犠牲になろう
と考えた事…

今のリインフォースは大切な人の為に、自分だけ犠牲になろうとし
ていた昔の自分と同じだ。

だが…かつての自分と比べると状況が特殊すぎる。

ゼントラーディの艦隊も、勝てる可能性がほとんど無い強大な敵で
あった。

だが自分の周りには、それに立ち向かえるタツクを含めた大勢の仲
間がいた。

だからこそ、自分は最後まで戦い抜き、そして勝利を収める事が出
来たのだ。

しかし…夜天の魔導書はそれとは違った意味で、更に強大な敵とな
り得る。

いつ、どんな形で現れるかもわからず、それを抑制出来るかは
主であるはやてにしか委ねる事が出来ない。

このままいけば、はやてはいつ現れるかわからない防御プログラ
ムの復活という脅威を

常に警戒しながら生きなければならない過酷な日々を迎える事になる。

そんな過酷な運命、幾たびも戦い続けてきた自分達ならともかくまだ幼い少女であるはাতেには、あまりにも過酷すぎる運命だ。

それがわかつているからこそ、タックとマリナはリインフォースの申し出を了承したのだ。

とはいえ、やはり納得は出来なかった。彼女1人を犠牲にするという事を…

そうこうしている間になのはやフェイト、バレルやフェイ、守護騎士達がその場に姿を現す。

それを見て、リインフォースは穏やかな表情で言った。

「そろそろ始めようか…夜天の魔導書の終焉だ…」

「……ッ！リインフォース…？」

丁度その頃、はやてが自室のベッドで目を覚ましていた。

一瞬感じた嫌な予感…リインフォースに何かあったという予感がした。

とその時、部屋の扉が開いた。

「……どちらさん？」

「管理局の人間だ」

部屋の中に入ってきた人物を見て、はやては不思議そうな感じで尋ねる。

そこにいたのは、苦々しい表情を浮かべたベルクトであった。

「行くぞ、貴様の騎士が、お前に黙って勝手な事をしようとしている…」

「……やっぱり、リインフォースがか！？」

ベルクトの言葉に、はやては過剰に反応する。

「そうだ…どいつもこいつも勝手すぎるんだ…他人の気持ちを考えないでな…」

そう言っただけベルクトは待機状態のグレイブアークを起動させ、バリアジャケットを纏う。

「…行くぞ」

中央に白い巨大な魔法陣が展開し、その中央にリインフォースが立っている。

その四方に、なのは、フェイト、バレル、フェイが立ち、4人も足下に魔法陣を展開している。

そして、リインフォースに向けて魔力を集中していた。

その様子をタックとマリナ、守護騎士達が辛い表情で見守っている。

「ああ…」

そして遂に、リインフォースが消滅するというその時

「リインフォース！！みんなあ！！」

上空から悲痛な声が響く。皆が驚いてその方向に顔を向ける

すると、車椅子に乗ったはやてと、車椅子ごとはやてを抱えたベルクトが上から降りてきた。

「主はやて…」

地面に降り立ったはやて、ベルクトと相対するリインフォース。

「リインフォース！！破壊なんかせんでええ！！私がちゃんと抑える！！」

涙ながらにはやては、リインフォースに必死に訴える。

次にリインフォースはベルクトの方に顔を向ける。

「紫紺の魔導師…何故お前が…」

「貴様が勝手すぎるからだ」

困惑した表情のリインフォースに、ベルクトは一步前に出て冷たく言い放つ。

「何も言わずに勝手に居なくなつて…それが、主の為だと？」

詭弁だな…そんなもの…貴様の自己満足にすぎん…」

「なんだと…」

流石に心外だったのか、リインフォースはベルクトを睨む、だがベルクトは気にせず続ける。

「この世界の連中は誰だつてそうだ…相手の気持ちも考えずに…自分とは立場を異とする者の言葉に耳も貸さず…そして勝手に行動する。」

貴様も…守護騎士達も…かつての俺やフェイトもな…」

それを聞いてフェイトがピクリと反応する。

（勝手に決め込む…母さんに言われるがままに行動して…他の皆の気持ちを…）

自分もそうであつた、母親の言うがままに行動してアルフやベルクト、なのはの言葉を表面ではわかっていても、それを受け入れなかつた自分の事…

ベルクトは続ける。

「他に手段が無いのだろうか…だったら尚更だ…」

それを受け入れるかどうかは、自分のマスターにちゃんと行ってからにしろ…

何も言わずに黙って消え去って…その理由を本人の口から聞けずに…一生こいつの心に暗い影を落とさせるつもりか…？」

「……………」

ベルクトの言葉を聞いているうちに、リインフォースの表情がだんだんと暗いものになっていく。

「貴様がこいつの騎士だと言うなら…ちゃんと主と話してから行動しろ…」

貴様のやっている事はただの逃げだ…主を守る騎士として最も恥じ

た行為なんだよ……」

「そうや！！この人の言う通りや！！」

冷たく言葉を発し続けるベルクトに、突如はやてが声を荒げて割り込む。

「話聞かん子は嫌いや！！マスターは私や！！話聞いて！！」

私ができと何とかする！！暴走なんかさせへんで、約束したやんか！！！！」

目を閉じ、はやての言葉を黙ってリインフォースは聞いていく。そして目を開き、何かを決意したような表情で一步前に出て言った。

「その約束は……もう立派に守っていただきました……そして私は最後の最後で、綺麗な名前と心を頂きました……だからこそ……主の危険を払い、主の危険を守る……魔導の器としての務め……その為の最も優れたやり方を……私に選ばせてください……」

穏やかな口調でリインフォースはそう言う。

それを聞いたはやては、目からぼろぼろと涙を流す。

「そやけど……ずっと悲しい思いしてきて……やっと……やっと……救われたんやないか……！」

「……私の意志は……あなたの魔導と、騎士達の魂に残ります……私は何時も……あなたの側にいます……」

「そんなんちゃう！そんなんちゃうやるリインフォース……！！」

首を横に振り、涙を流し続けながらはやては必死に訴える。

だが、リインフォースの気持ちは変わらない。

「駄々っ子は、ご友人に嫌われます…聞きわけを、我が主…」

「リインフォース!!!…あっ!!!」

はやてはリインフォースに近寄ろうとするが、車椅子がバランスを崩し、転倒してしまう。

それを見たのはやバレル達のはやてを心配そうな顔で見つめる。

「何でや…！これから…やっと始まる…これからずっと幸せにしてあげなあかんのに…!!」

倒れこんだままはやては悲痛な声で訴える。

リインフォースははやてに近寄り、彼女の前にかがみ込む。

「大丈夫です…私はもう…世界で一番幸福な魔導書ですから…」

リインフォースは、はやての頬をそつと撫でてやる。

「主はやて、1つお願いがあります…私は消えて、小さく無力なかけらへと変わります…」

もしよろしければ、私の名はそのかけらではなく…あなたがいずれ手にするであろう…」

新たな魔導の器に…贈ってあげただけですか…祝福の風…リインフォース…

私の魂は…きつとその子に宿ります…」

「リインフォース…」

「はい…我が主…」

己の名を呼ぶマスターに対して、リインフォースは優しく答える。

そして立ち上がり、今度はベルクトの方に顔を向ける。

「…いいのか？はやては貴様の事を…」

「いいのだ…感謝する、紫紺の魔導師よ…お前のおかげで…」

私は、大切な事を忘れたまま…消えてしまうのを防ぐ事が出来た…」

穏やかな表情のままそう言い、そして目を閉じる。

「だが…やはり、こればかりは譲れないのだ…時間も方法も無い今…これが…主を守るための…一番優れた方法だ…だから…」

そこまで聞いて、ベルクトは真剣な表情でリインフォースを見やりながら言う。

「…それが貴様の道だと言うなら…俺はもう何も言わない…」

主と話し…貴様がちゃんと考えた上で決めた道なら…迷わず進め…」

「…ありがとう…それと、もう1つ頼みがある…」

リインフォースはそう言うて目を開き、そして続ける。

「この世界と、お前達の世界は…暴走していた時とはいえ…私の力によって

安定したまま繋がりを持った…だから、どうか支えてやって欲しい…他の戦士達と共に…主はやての事を…」

「……いいだろう…」

その言葉にリインフォースを柔らかな笑みを浮かべる。

そして、魔法陣の中央に戻り、目を閉じて上空を見上げる。

「主はやて…守護騎士達…小さな勇者達…そして、異界の戦士達…ありがとう…そして、さようなら…」

その言葉を呟き終えるのと同時に、スーッとかき消す様にリインフォースの姿は消滅していった。

リインフォースが消えた後、皆は黙って空を見つめていた。

すると、上空に何かが煌き、それがはやての目の前に落ちてくる。

「これは…」

はやてが拾った物、それは、夜天の魔導書の印を象ったペンダントであった。

「あ…ああ…うつつ…ひぐつ…」

「はやてちゃん…」

「はやて…!!」

それを握り締め、はやては涙を流す。その様子を見ていたなのはや
ヴィータ達がはやてに近寄っていった。

・管理局本局のとある一室

「そうですか…夜天の魔導書は…」

ベッドに横たわり、備え付けていたノートパソコンに映る文面を見
て、

その後の事件の一抹を知ったバルクホルツが呟く。

そしてそのパソコンを操作し、別の画面を表示させる。

そこに映っていたのははやての写真と、夜天の魔導書の写真、そし
てリインフォースの姿。

（私は…はやてちゃんの為に罪を償わなければならない……ならば
……！）

そう心内で呟いて、バルクホルツは一心不乱にキーボードを操作し
始める。

この日、バルクホルツが決意した事…
それは…遠い先の日に実りを迎えることになる…

- - - - -
- - - - -
- - - - -

○重大発表その2

黒仮面「どうも、作者の黒仮面です」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

ベルクト「ベルクトだ」

黒「いつも、ACE+リリカルなのはシリーズを見て下さっている皆さん、本当にありがとうございます」

フ「4人の騎士と2つの翼もいよいよ大詰めです」

ベ「飽き性のお前がよくまあここまで続けられものだ」

黒「言わないで…実際大変だったし…」

フ「ま、まあ…ちゃんと続けてるだけ偉いと思うよ？」

1、2話だけ書いてパツタリ更新が無くなる小説もたくさんあるし…」

黒「長くても更新早くても…それだけじゃあ面白いとは判断されんよ…」

ベ「全く…お前はそこがダメなんだよ」

黒「何が？」

べ「そのネガティブすぎる姿勢だ。後書き見る度に思うぞ。お前の発言…ほとんど愚痴みたいになってるではないか？」

黒「うつ…だって実際俺の執筆能力低いし…」

べ「自分が面白くないと感じる物を他人が面白いと思ってくれるのか？」

もう少し前向きな姿勢を取れ、このネガティブ大王め。」

黒「…ゴメンナサイ…」

フ「べ、ベルクト…作者がマジ泣きしてるからその辺で…」

黒「…さて、本題に戻ります、StrikerS編のタイトル発表です」

べ「ああ…俺も気になっているしな」

フ「今回はどんなタイトルになったのかな？」

黒「それではどうぞ、こちらです」

ACE+リリカルなのは part3 the final 3つの
欲望と3人目の鍵

ベ「これはまた…今まで以上に中二臭いタイトルだな…」

黒「否定はしない!」

フ「いや…しないの?」

ベ「しかし…今回のサブタイトル、『3つの欲望と3人目の鍵』
これは一体誰を指しているんだろっな…」

フ「『もう1人の黒い魔導師』はベルクト

『4人の騎士と2つの翼』は守護騎士と絡むタツクとマリナだ
ったよね

そう考えるとまたACE側のキャラ？」

黒「まあ、フェイトの言うことが大部分で当たりですね

…正直、ほとんどオリキャラみたいなもんだけど…」

フ「どういう事?」

黒「StrikerS編で欲望と言ったら誰が思い浮かぶ…?」

ベ「…あの男か?…だが3つというのは…」

黒「そもそも…A's編の時点でACE側はほとんどキャラを使っ
ています。

そこから考えればすぐに誰が出てくるわかるはずです…」

ベ「……ちよつと待て作者、大丈夫なのか?つまり…」

フ「…これ以上はネタバレだから言えませんが…読者の皆さんならすぐにわかると思います」

ベ「というかお前隠す気あるのか…？毎回毎回その手のヒントがわかりやすすぎるぞ」

黒「…ぶっちゃけるとあんまり無いかも…」

ベ「欲望は大体わかったが、じゃあ鍵というのは…」

黒「ぶっちゃけるとオリキャラの1人を指しています」

フ「いや、ぶっちゃけすぎだよ！本当に隠す気無いの！？」

ベ「待て、今1人と言ったか…？」

黒「はい、現時点のプロットでオリキャラは3人います。」

フ「でも…今回はACE以外の作品のキャラも出すんだよね…」

ベ「…かつてないほどカオスになりそうだな…」黒「さて本題その2です」

ACE以外の参戦作品の発表です」

フ「アンケートに答えて下さった皆さんは本当にありがとうございます」

ました」

ベ「このネガティブ大王、書いた時には1、2通来ればいい方とか超後ろ向きに考えていたらしいぞ」

フ「…いくらなんでもそれは読者の皆さんに失礼すぎない？」

黒「それでは発表ですっ！！」

ベ「オイ、無視するな」

- 機動戦士ガンダム 逆襲のシャア
- 新機動戦記ガンダムW Endless Waltz
- ブレンパワード
- 機甲戦記ドラグナー
- 機動新世紀ガンダムX
- オーバーマン キングゲイナー
- 交響詩篇エウレカセブン
- リーンの翼

ベ「合計8つか…作者の奴が処理しきれんかが心配だな…」

フ「逆襲のシャアとEndless Waltz、ブレンパワードは票数ですぐに決まったそうだよ」

黒「それ以外は正直悩みましたよ…書いてくれた方の要望は極力取り入れたかったのですが」

流石に全部というわけにはいかないし…プロットとの整合性とかもありますから…

上記の作品以外を希望していた方には本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです…」

ベ「だから、ネガティブな事を言うなと言ってるだろうが…」

黒「それともう1つ了承してもらわないといけないことが…」

フ「何なの？」

黒「作品によって出てくるキャラ数や世界要素の数が違うという事

です…」

ベ「それは仕方なからう、ACE内でもある事だ、クロス物ではしょうがない事だ。」

フ「まあでも、アンケートの際にキャラの個人名を書いてくださった方々…

その人達の意見を、主に反映していくという事だけはお伝えしておきます」

黒「というわけで発表は以上。A's編もいよいよ次回で最終回です」

ベ「もう一度、ここまで読んでくれた読者の皆さんには本当に感謝する」

フ「そしてこれからも、よろしくお願いしますね」

黒「それでは、また」

第26話（後書き）

安定したまま繋がったなのは達とバレル達の地球

果たしてバレル達は…？

そして、ベルクトとフェイトはどうなるのか？

次回、A' S編、遂に最終回です。

第27話（前書き）

A
, S 編、最終回です。

第27話

アースラススタッフの使用していたマンションにて。

「……そう…それがあなたの考えなのね。」

「はい…向こう側と繋がった以上、やはりこのまま俺だけ

のうのうとこっちで生活するのは…やはり何かが違うと思うんです

…」

マンションの一室にて、リンディとベルクトが互いに真剣な表情で話し合っていた。

「すみませんリンディ提督…あなたにはフェイトの事を含め

幾度もお世話になっているというのに…またこんな余計な事を持ち込んで…」

そう言つてベルクトは頭を下げる。

「そんな事言わないでベルクト君。あなたは前の事件の時も、今回も私達と一緒に必死に戦ってくれたわ。それで十分よ…どの道、向こうの世界の人とは

事情説明やら何やらで接触しなきゃいけないんだから、それ位は全然構わないわ。」

リンディは穏やかな表情でそう言う。

「それに…あなたに何かあったら…フェイトさんが悲しむしね…」

「……フフ、確かにそうです」

ベルクトもリンディの言葉を聞いて、笑顔を浮かべるのであった。

管理局本局、その廊下をグレアムとリーゼ達が歩いていた。因みにグレアムは管理局の制服ではなく、普段着を着ている。

「……ねえ父様、本当にこれで良かったのかな…？」

「彼1人に罪を背負わせるわけにもいくまい…これは私なりのケジメだ…」

沈んだ表情でそう言うロッテに対して、固い表情でグレアムが答える。

今回の闇の書事件、その裏で糸を引いていたのはグレアム達4人である。

だが、バルクホルツはグレアムが真実を管理局に告げる前に責任は全て自分にあり、グレアムやリーゼ達は

自分が裏から情報を操作し動かしていたなどという、とんでもない事を言い出したのだ。

しかも、ご丁寧なその為の捏造証拠を即席で用意し上でだ。

とは言っても、判明している具体的な罪状はクラッキングと操作妨害くらいだったので

課せられる罰は事件の大きさと比べると、非常に軽い物になったそうだが…

しかし、そんな事にグレアムが素直に納得するわけもなく
彼もまた、希望辞職という形で己の罪を償うことにしたのだ。

「私は1人の少女の人生を狂わせる、とてつもない大罪を犯したのだ…」

彼女には…はやて君にはこれからも一生をかけて、罪を償っていかねばな…」

そこまで言ってグレアムは立ち止まり、リーゼ達の方に振り向いて続ける。

「お前達にも今ままで本当に迷惑をかけた…これからは、皆でのんびり暮らしていこう…」

そんな事を言うグレアムに対し、リーゼ達は優しい表情を浮かべ、グレアムの手を握る。

「そんな事言わないで下さい父様…罪を償うべきなのは私達も同じですから…」

「私達は父様の使い魔…父様が望む限り、私達は一生ついていくよ…」

「……………ありがとう、2人共…」

グレアムは2人の心遣いに感動し、目にうつすら涙を浮かべてそう呟いた。

海鳴市、雪が降りしきる街中をなのは、フェイト、バレル、フェイの4人が歩いていて。

「これで、事件終了って事なのかな…」

「ええ…」

どこか浮かない表情でバレルとフェイがそうやり取りする。

「でも…やっぱりちよつと寂しい気はします…」

なのはも同様に浮かない顔でそんな事を呟く。

外面的に見れば、今回の事件はかなり平穩無事に終わったと言える。だが、その為に犠牲になった1人の女性・リインフォースの事がどうしても悔やまれる。

今ある安らかなこの時間は、彼女の犠牲の上に成り立っている物なのだ。

そう考えるとやはり、どこか納得しきれないのである。

「クロノが言ってた…ロスト・ログア関連の事件はいつもこんな感じだって…」

大きな力に惹かれて…悲しいことが連鎖していく…」

暗い表情でフェイトが呟く。すると、それを聞いてバレルが、真剣な表情で言った。

「だけど…あの人は僕達に沢山の物を残していった…それに報いるためにも」

僕はこれから、頑張っていくべきなんだと思う…

繋がりを持った、僕達の世界となのは達の世界、両方の為にな…」
それを聞いて他の三人も、表情を少し和らげ、頷いて返答をする。

「というより…これからだよ、忙しくなるのは…まさか僕達もこんな形で自分達の世界に戻る事になるとは思わなかったしね」

途中で立ち止まり、両腕を後頭部に当てて、先程とは違う軽い感じでバレルは言う。

「ですよ、バレルさん達の地球の人にも、いろいろお話しなきゃいけませんし…」

「向こうの人達にしてみれば、私達の今の状況なんて到底理解できそうになさそうだしね…」

それを聞いてなのはとフェイも、穏やかな表情でそう呟く。

「出来ることなら、これから可能な範囲で管理局には協力していきたいな…」

偶然とはいえ、折角出来た大切なつながりだしね…フェイはどう思う？」

それを聞いてフェイは、バレルの方に微笑を浮かべた表情を向けて答える。

「私もバレルと同じよ。向こうの人への説明とか、軍人との二足の草鞋は大変だけど…」

やっぱり、私にとっても大切だから…こつちの世界での出来事は…」
そう言つて、なのはの方に顔を向けて尋ねる。

「なのはさんは、何か考えてる？これからどうしたいかとか…」

「私も…方向はたぶん、バレルさんやフェイさんと一緒です。ちゃんと使いたいから…自分の魔法を…」

「…そっか…」

「ははは…こんな歳なのに、本当になのははしつかりしてるなあ」
なのはの答えを聞いて、フェイは満面の笑みを浮かべ、バレルは感心した様に言うのであった。

翌日の朝早く、なのはとフェイトははやての病院にお見舞いに来ていた。

「おはよう、なのはちゃん、フェイトちゃん！」

病室の前に現れたなのはとフェイトの姿を見て、はやては笑顔で挨拶する。

「はやてちゃん、元気そうだね」

「もう退院？」

「残念、もう少しばかりは入院患者さんなんよ」

そんな会話をしつつ、シグナムに車椅子に乘せてもらう。

そして2人の方に近づいていった。

「昨日はいろいろあったけど…最初から最後までほんまありがとう

…」

「うっん…」

「気にしないで」

お礼を言うはやてに対し、2人は笑顔で答える。

ふとなのはは、はやてが首から下げているペンダントが目に入る。

「あ、それってリインフォース？」

「うん…あの子は眠ってもうたけど…これからもずっと一緒やから

…」

ペンダントを手に取り、優しい表情ではやては言う。

「はやて、魔導師続けるの？」

「うん、あの子がくれた力やから…それに今回の件で私とシグナム

達は

管理局から保護観察受ける事になったし…」

「え…そうなの？」

その言葉に少し驚き、なのははシグナム達の方に顔を向けて尋ねる。

「まあな…」

「管理局任務への従事…という形で罪の償いも含んでいます…」

「クロノ執務官がそう取り計らってくれたのだ」

それに対して、ヴィータ、シャマル、シグナムがそれぞれ答える。

「事情が事情とはいえ…俺達がしてきた事は紛れも無い犯罪だったからな…」

「任期は結構長いんだけど…向こうの世界には、リンディ提督がきちんと説明するそうだし…」

それに…はやてやシグナム達と、離れずにいられるなら…それも悪くないしね…」

タツクが両手を広げてフーツと息を吐いて答え、マリナが笑みを浮かべながら言った。

「私も囑託扱いで働くことになるから…なのはちゃん達の後輩やねっ」

満面の笑みではやてはそう言う。それにつられてなのはとフェイトも笑顔になった。

同時刻、海鳴市のマンションにて

「……………というわけなんだが」

ベルクトはバレルとフェイに向かって真剣な表情で話をしていた。話の内容にバレルとフェイは微妙な顔をベルクトに向けていた。

「……あのなあ、何でそれをわざわざ俺達に相談するんだ？」

「身近にいる男女の恋人というのがお前達だからだ」

呆れたような口調で言うバレルに対して、いたって真剣にベルクトは答える。

「ま、まあ……あなたの今までの事を考えたら、気持ちはわからなくもないけど……」

口ではそう言いつつも、フェイもベルクトの相談した話に若干呆れていた。

「というかだな……相手の顔を見て胸が熱くなるだのドキドキするだの……」

それが『好き』以外の何だって言うんだベルクト？」

相談していたのは自分がフェイトに感じていた感情について

つまり、自分がフェイトを好きになったのでは？という話についてである。

こういう男女間での愛だの恋だのの経験が皆無であるベルクトは最も身近にいる恋人関係の人間、つまりバレルとフェイに相談をしていたのだ。

とはいえ、『フェイトの顔を見て胸が熱くなってくるのは好きということなのか？』だの

『この気持ちを伝えるにはどのような言葉を用いればいい？』だの

聞いているだけでお腹一杯になってしまいう話を延々聞かされてしまい正直バレルとフェイは若干感情が萎えてしまっていた。

（とはいえ…下手な事言ったらフェイトがどうなるやら…）

恋愛経験皆無なこの男である、下手に回りくどいアドバイスでもしようなものなら

絶対に何かへまをやらかす。そんな風に考えたバレルは、大きなため息を一回吐いた後

ベルクトに向かって真剣な表情で言った。

「あの子には変に遠まわしに言うより寧ろ…」

そうしてバレルはベルクトに向かって、アドバイスをしていく。ベルクトは終始真剣な表情でそれを聞いていた。

「…とまあ、そんな感じでいいんじゃないか？」

「成程…参考になった、感謝する」

どこか疲れた感じでアドバイスを終えたバレルに対して

やはり真剣な表情でベルクトは礼を言った。

そんな2人をフェイは、引きつった笑みを浮かべながら見ていた。

「…そうだ、もう1つ言っておかなくてはいけない事があった」

急に話を切り出したベルクトに対して、バレルとフェイはげんなりした表情を向ける。

「…そんな顔をするんじゃない…今後の身の振り方についてだ」

流石に心外だったらしく、ベルクトは少し表情を歪ませてそう言いそして、以前リンディに言った自分の今後について2人に説明する。

それを聞いた2人は、すぐに驚いたような表情になり、ベルクトの話聞いていくのであった。

その日の夜遅く、月が浮かぶ夜空の下

ベルクトは公園のベンチに腰掛けて、ある人物を待っていた。

「…ベルクト？」

「…来てくれたか」

公園にやってきたフェイトを確認して、ベルクトは立ち上がって彼女に近づいていく。

「どうしたの？大事な話って？」

「……………」

「…ベルクト？」

固い表情のまま黙り込んだベルクトに対して、フェイトは心の中に不安が生まれる。

そして、ベルクトは重い口を開いて言った。

「俺は…向こうの世界に帰ろうと思う…」

「えっ…!!」

瞬間、フェイトの目が見開く。それと同時に強い風が吹き2人の髪がそれに吹かれてなびく。

「ど、どうして…急にそんな事…」

若干震えながら、フェイトは落ち着かない口調で尋ねた。

「…俺は、罪を償わなくてはいけない…かつて自分がしてきた事に

対して…」

世界が繋がってからベルクトの心の中に生まれた1つの感情…

つまり、自分が前の世界でしてきた事に対する償い…

今まで新たな人生を歩んできて、新たな仲間達と共に戦ってきたがやはり自分は、かつて世界を破滅に導こうとした人間であるという事実は変わらない。

フェイトやなのはを始めとする管理局の魔導師達

バレルやフェイの様なこちらで再開した同じ世界の者達は

自分の事を咎めないでくれた、仲間だと呼んでくれた。

しかし、それは全てこちらの世界での出来事である。

ベルクトはバレル達の世界に対しては何にもしていない。

そう考えたとき、ベルクトはどうしても自分だけがこちらに残って平穩無事な暮らしをしていくのは間違っている、という風に考える様になっていた。

「他人を助ける為に生きていく…俺が最初に誓ったことだ…

だからこそ、互いの世界が繋がった今、俺は向こう側の多くの人達の為に

また新しい道を歩むべきだと考えている…」

そこで、ベルクトはUCEに対して自分の姿を晒す事にしたのだ。

どんな形でもいいから、自分がやってきた事を償いたい…その事を伝えるために。

しかし、それが何を意味するかわからないフェイトではない

「で、でも…そんな事したら…ベルクトが…」

何せ世界を破滅に導こうとした大悪党である。
そんな人間が自首でもしようものなら即、死罪になるのが目に見える。

だが、ベルクトは真剣な表情のまま、またフェイトに言葉をかける。
「…その事に関してはリンディ提督に頼んである。
向こうへの事情説明の際に、俺の事に関する弁明をしてくれる…
だから、俺が向こうで死ぬということは無い…大丈夫だ。」

死ぬことで償いになるなら、ベルクトとしてはそれを別に否定する
つもりは無いが

そんな事になればフェイトが悲しむくらいわかっている。

それに来ることなら死ぬよりも、生きて一生をかけて、自分の罪
を償っていきたい。

そう考えたベルクトは、迷惑承知の上でリンディに頼んでいたのだ。

しかしそれでも、そんな急な話に納得しきれず、フェイトは言う。
「でも…ベルクトは今まで私達と一緒に必死に戦ってきたんだよ…
それだけでも…」
「…それはこちらに来てから犯した罪に対する償いだ…それとこれ
とは別だ…」

「でも…！向こうに行ったらベルクトがどんな酷い事を言われるか

…」

「それが俺に対する罪の結果というなら…俺は黙って受け止めるだけだ…」

震える声で必死に言葉を紡ぐフェイトだが、ベルクトの考えは変わらない…

遂にはフェイトはぼろぼろと涙を流し始める。

「……イヤだよ……ベルクトと一緒にいたい……！ベルクトは私の大切な人なんだよ……」

別れるのなんてイヤだよ……ずっと一緒に暮らしたいよ……！！」

両手で目をこすりながらひしひしとフェイトは呟いていく。

そんな彼女を見て、ベルクトはきつく胸が締め付けられるような感じになったが

黙ってフェイトに近づき、彼女を抱きしめる。

「！！！！……」

突然のことに驚き、涙を浮かべたままフェイトは目を見開く。

フェイトを抱きしめたまま、ベルクトは目を閉じて静かに言った。

「…何も永遠の別れというわけじゃない…リインフォースが最後に残してくれた

俺とお前の世界との繋がりがある…だから、いる場所が違うだけで…お前と会えなくなるわけじゃない…」

「……………」

「俺は自分の罪を償ったら、必ずお前の所に帰ってくる…約束する…だからお前も…待っていて欲しい…俺が…ちゃんとお前の隣を歩いていける…その日まで…」

「……うん……うん……！！」

ベルクトの言葉に対し、フェイトも目を閉じ、涙を流しながら震える声で答える。

ベルクトはそんな彼女をきつく抱き続けていた。

そんな状態がしばらく続いた後、ベルクトは抱擁を解いて、再び真剣な表情になる。

「フェイト…半年前の事、覚えているか…？」

「半年前…？」

「お前が…俺に好きだと言った時の事だ…」

「えっ…」

急にそんな事を言われて、戸惑いを見せるフェイト。

そんなフェイトに対してベルクトは続けていく。

「…俺は今まで、好きになるというのがどういう事かわからなかった…」

お前の事は大切な人間だとは思っていたが…それとどういう違いがあるのかわからなかった…」

その言葉を聞いてフェイトは少し沈んだ表情になっていく。

自分でも薄々わかっていたこととはいえ、本人からそう言われるとやはりキツイ。

そんな事を思いつつ、フェイトは無理矢理笑みを浮かべて口を開く。

「いいんだよ…別に、私は今のままでも…」

「しかし…最近になって変わってきた…お前の事を真剣に考えると胸が熱くなってくる…そんな感情が芽生えてきた…」

「……………え？」

自分の言葉を途中で遮り、そんな事を言うベルクトに対して、フェイトは驚いたように顔を向ける。

段々と鼓動が早まり、顔に熱がこもってくる。何せ、今言ったベル

クトの言葉はつまり…

そんな風に考えている時、ベルクトがフェイトの両肩を強く掴む。

「それが何なのか…ようやく俺には理解できた…だからフェイト…俺は回りくどい事は言わない…素直にお前に気持ちをぶつけさせてもらっ…」

そう言った次の瞬間、ベルクトはフェイトに顔を近づけ、唇を重ねる。

そのあまりにも突然の行動に、フェイトは再び目を見開いて驚いた。

しばらくした後ベルクトは唇を離し、若干赤らんだ顔でフェイトを真っ直ぐ見据えて言った。

「フェイト…俺もお前の事が好きだ」

「……………」

その言葉にフェイトは今までに無い以上の驚きを浮かべ、一瞬ポカンとするが

すぐに笑顔になり、目に大量の涙を浮かべる。

そんなフェイトを見て、ベルクトは穏やかな笑みを浮かべつつ彼女を再び抱きしめた。

「だから…俺を信じて…ずっと待っていてくれ…」

「うん…私も、ベルクトが大好き…ずっと…ずっと待ってるよ…」

…」

フェイトは笑顔で涙を流し続けながらそう言った。

互いに穏やかな表情で抱き合う2人を、

月の光が優しく照らしていた……

そして翌日の早朝、ベルクト達が帰る事になった。
海鳴市の上空に、ベルクト達5人とリンディ、クロノが浮かび
その反対側になるのは、フェイト、ユーノ、アルフ、守護騎士達が浮
かんでいた。

（因みにはやてはシグナムに抱き抱えられている。）

「今までお世話になったね…本当にありがとう…そして、これから
もよろしく」

「なのはさん…あなたも、管理局のお仕事頑張ってね」

「はい…バレルさん、フェイさん…本当に今までありがとうござい
ました」

互いに満面の笑みを浮かべながら、なのはとバレル、フェイがそう
やり取りする。

「はやて…こうやって無事に帰れるのも…皆お前や守護騎士達のお
かげだ…」

「はやて…本当に今までありがとうね…」

「うん…タツクとマリナも、これから一緒に頑張ろうな…」

名残惜しそうに言うタツクとマリナに対して、はやてが穏やかな表情で答えた。

「シグナム…これからまた忙しくなるわね…」

「ああ…だが大丈夫だ…お前とタツクが共にいてくれればな…」
マリナとシグナムが穏やかな表情でそうやり取りする。

「タツク……………」

「そんな顔をするなヴィータ…またすぐに戻ってくるさ…」
辛そうな表情のヴィータをタツクは優しく撫でてやる。

すると、ヴィータは途端に強い表情に変わり、タツクに向かって言った。

「じゃあ…………お昼までには帰ってこいよな!!」

「無茶を言つな無茶を…」

ヴィータの言葉に対して、ザフィーラが即座にツッコミを入れる
そんな2人のやり取りをタツクは笑いながら見ていた。

「ベルクト…」

「……………」

少し寂しげな表情でフェイトは呟く、ベルクトは黙ったまま答えない。

そんな彼に近寄っていき、フェイトはベルクトに抱きつく。

「…………ずっと待ってるから…」

「…………ああ」

フェイトは穏やかな表情で静かに言う。ベルクトもそれに対して静かに答えた。

（どうやら…上手い感じに事が運んだようだな…）

（そうね…フフ…後でからかってやるのかしら…）

そんな2人の様子を見て、バレルとフェイが念話でそんなやり取りをした。

「…時間だ、皆そろそろ行こう」

クロノが真剣な表情でそう呟いた。そして、ベルクト達とクロノ、リンディが黒い渦に向かっていく。

なのは達は5人に対して大きく手を振っていた。

それに対してベルクト達5人も手を振って答える。

（ありがとう…フェイト…俺はこの世界に来て…失った多くの物を取り戻せた…）

それを無駄にしない為に俺は行ってくる…だから…暫くの間だけ…待っていてくれ…）

ベルクトは笑みを浮かべながら手を振り、内心でそんな事を呟いていた。

そしてベルクト達5人は、渦の向こうへと消えていった。

(……待ってるからね……ベルクト……私の大好きな……大切な人……)
ベルクト達が消え去った後、フェイトは穏やかな表情を浮かべながら心の中でそう呟くのであった……

第27話（後書き）

というわけでA's編はこれにて終了…

最終的にこんな形でおさめました。

実を言うと、ベルクトが1人だけ残るルートもあったんですがやはり彼の事を考えるとこういう形の方がいいかなと思い、帰還させました。

そしてベルクトがフェイトに告白。

ただ…ここに至るまでの描写の積み重ねが薄かったかなと今更ながら思っています。

それでも、この2人は最終的にこうする予定だったので自分としては後悔はしておりません。

さて、次回からStrikers編というわけですが第1話の掲載はそんなに時間はかからないと思います。

問題はその後からで、年末年始に死ぬほど忙しくなるので更新は今まで以上に遅くなる可能性があります。すみません…それでもいいって方がいてくれたら幸いです。

Strikers編も全力でやらせてもらうので

読者の皆さん、これからもよろしく願います

ここまで読んでくれて本当にありがとうございました！
Strikers編でまたお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1199i/>

ACE + リリカルなのはpart 2 ~ 4人の騎士と2つの翼 ~

2010年10月11日04時02分発行